

ウルトラ怪獣擬人化計画 怪獣王

超高校級の切望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪獣娘くウルトラ怪獣擬人化計画くに男の擬人化怪獣を付け足した話

目次

特別企画	BLACK STARSの破壊神	1
番外編	『楽しいMとG一家』	40
番外編	『楽しいMとG一家2』	46
番外編	『楽しいMとG一家3』	50
番外編	『楽しいMとG一家4』	54
番外編	『楽しいMとG一家5』	59
番外編	『楽しいMとG一家6』	62
番外編	『楽しいMとG一家7』	65
番外編	『楽しいMとG一家8』	69
番外編	『楽しいMとG一家9』	72
番外編	『楽しいMとG一家10』	76
番外編	『楽しいMとG一家11』	79
番外編	『楽しいMとG一家12』	82
番外編	『楽しいMとG一家13』	85
番外編	『楽しいMとG一家14』	87
番外編	『楽しいMとG一家15』	90
番外編	『楽しいMとG一家16』	93
番外編	『楽しいMとG一家17』	97
暴れる！怪獣王!?		100
圧倒！怪獣王!?		103
俺？怪獣王!?		107
遭遇？怪獣王!?		112
変身？怪獣王!?		115
観賞？怪獣王!?		120

試験? 怪獣王!?

再開? 怪獣王!?

説明? 怪獣蛾!?

子供? 怪獣王!?

遊園地? 怪獣王!?

母親? 怪翼竜!?

歩み寄る? 怪獣王!?

沖繩? 怪獣王!?

水族館? 怪獣王!?

仕返し? 怪獣王!?

指導? 怪獣娘!?

捜査? 怪獣王!?

再戦? 怪獣泥!?

指導? 怪獣王!?

大食い? 怪獣王!?

称号? 怪獣王!?

調整? 怪獣王!?

相談? 怪獣王!?

悩め? 怪獣娘!?

異変? 怪獣王!?

怨霊? 怪獣王!?

成仏? 怪獣王!?

謹慎? 怪獣王!?

復帰? 怪獣王!?

再開? 怪獣花!?

紹介？ 怪獣花!?

232

蜻蛉？ 怪獣王!?

236

敗北？ 怪獣王!?

240

怪獣王

246

無事？ 怪獣王!?

253

兄妹？ 怪獣王!?

259

UMA？ 怪獣娘!?

263

同族？ 怪獣王!?

270

姉妹？ 怪獣王!?

275

家族？ 怪獣王!?

279

風聞？ 怪獣王!?

284

料理？ 怪獣蛾!?

291

体調不良？ 怪獣王!?

295

恋人？ 怪獣王!?

300

姉？ 怪獣王!?

306

トラウマ？ 暴竜娘!?

310

機械？ 怪獣王!?

313

要望？ 機械娘!?

317

クリスマス？ 怪獣王!?

321

雪？ 怪獣王!?

325

冬コミ？ 怪獣王!?

328

初詣？ 怪獣王!?

331

再会？ 超能力少女!?

334

猫と？ 怪獣娘!?

337

握手会？ 怪獣娘!?

340

衝撃！怪獣王!?

カフェ？怪獣王!?

節分？怪獣王!?

特訓？怪獣王!?

バレンタイン？怪獣王!?

ははおや？怪獣蛾!?

家族の絆？怪獣王!?
(前編)

家族の絆？怪獣王!?
(中編)

家族の絆？怪獣王!?
(後編)

女子会？怪獣蛾!?

お見舞？怪獣王!?

膝枕？怪獣王!?

ちちおや？怪獣王!?

考察？怪獣王!?

衝突？怪獣王!?

作戦？怪獣娘!?

登場☆怪獣娘!?

復活？怪獣王!?

決着☆怪獣娘!?

みんなで！怪獣娘！

母親？怪獣王!?

入隊？怪獣母!?

集合？G一家!?

料理？怪獣蛾!?

再開？怪獣蜘蛛!?

344

349

354

358

363

368

373

378

383

388

392

396

400

403

405

410

414

418

423

427

430

434

438

442

445

対決？ 怪獣王!?	448
接触？ 怪獣王!?	453
超化？ 怪獣王!?	459
責任？ 怪獣娘!?	465
新入り？ G一家!?	469
自覚？ 怪獣娘!?	473
原点？ 怪獣娘!?	478
女子会？ 怪獣娘!?	482
親友？ 守護亀!?	487
過去談？ 守護亀!?	491
名前？ 三首竜!?	495
温もり？ 機械娘!?	499
特訓？ 怪獣娘!?	503
デート？ 放浪宇宙人!?	507
温泉？ 怪獣王!?	514
再会？ 宇宙超魔獣!?	519
決着？ 宇宙超魔獣!?	528
退化？ 怪獣王!?	537
過去？ 怪獣王!?	541
スカウト？ 怪獣王!?	549
撮影？ 怪獣王!?	553
秋葉原？ 怪獣王!?	561
散髪？ 怪獣王!?	566
二人の？ 怪獣王!?	570

特別企画 BLACK STARSの破壊神

「最近人気だよな〜『GIRLS』」

「かわいい〜」「いけてるよねえ」

国際怪獣救助指導組織、通称『GIRLS』の広告CMを見て笑顔で話し合う人々。そんな人々を見下ろす四つの影。

新宿駅の出口の上に立っていた一人、黒い髪に黒い服、天使の輪のような物が頭の近くに存在する女性が町の人々の言葉に、嘲るような笑みを浮かべた。

「ふん、あの程度でいけているだど？笑わせるな……見ていろ。『GIRLS』の時代はもうすぐ終わる。世界は我々、『BLACK STARS』のモノだ！」

その両隣にたつのは赤いボロボロのマントを羽織りこれまた赤い仮面で顔の左上半分を隠し、鎌を持った少女。臍の部分が丸く切り取られた萌え袖と言われる袖のジャージを着た少女。そして、背後からガシリと黒神の女性の頭を鷲掴みにする黒い服に黒い髪、金の瞳を持った、何やら計算機を使っている男。

『GIRLS』の時代も『BLACK STARS』の時代もどうでも良いから、働け。せつかく稼いだ家賃無駄に使いやがって……臓器売り飛ばすぞ」

「え？あ、ちよ!?ま、待って!ごめんなさい!」

「クソが、何度計算しても今月も自由に出来る金が……つか何で俺此奴等の面倒見てやってんだ?いつそ俺も『GIRLS』にでも所属するか」

「!?!」

男の言葉に残りの2人はバツ!と振り返る。

「ほえ!?ま、待って待って!貴方に辞められたらご飯代が〜!」

「私は貴方について行く。だからお小遣い減らさないでください」

「た、頼む!捨てないでくれ!何でもする、働く意外なら何でもするからあ!」

「人が今一番して欲しいことをしねえと宣言して何でもするなんてほ

ざいてんじやねえええ！」

駅を利用していた者達がその叫び声に何だ何だと周囲を見回す。男がちつと舌打ちするとその場から立ち去った。

嘗ての時代、科学特捜隊と呼ばれていた組織の制服っぽい制服を着た女子高生平賀サツキ。

学級委員長である彼女は『GIRLS』のイベントに行きたがったクラスメートに掃除当番を押しつけられ帰りが少し遅くなった。断れない自分の性格が恨めしい。

『今話題の『GIRLS』！彼女達のイベントが本日此処、新宿で行われまーす！』

やけに巻き舌な声に引かれビルの大型ディスプレイを見つめるサツキ。どうやらクラスメート達が言っていたイベントの宣伝のようだ。新宿都庁展望台で行われるらしい。

「……………」

——人は、今の自分から離れることを望む。それまでの自分とは違う姿に変わることを夢見る。でも、私が望んだのは…………。

「…………『GIRLS』か…………」

と、何処か疲れたようなため息を吐くサツキ。と、そんなサツキの気分を表すように黒いオーラが身体を覆う。

「……………!?な、何これ!」

気分的にではなく、物理的に。

髪がまるで意志を持ったように蠢き、身体の奥から何かの力が溢れてくる。周りの人に注目されるなかスカートまでめくれあがる。

「何これ!?どうなってるの!」

異変は彼女だけでは終わらない。突如空中に黒い穴が出現して周囲のものを飲み込み始めた。

「——ッ！」

と、洗濯機と冷蔵庫を同時にエレベーターのないマンションの最上階に運んでいた青年がはっと顔を上げる。

「……………昼飯買い忘れた」

取り敢えずバイトの先輩に奢ってもらおう。そう考えながら、今頃あの三馬鹿娘共が遊びほうけていると考えるとムカムカしてきた。

「やっぱ辞めるか?」

「ええ!?こゝ、このタイミングで!?ごゝ、ごめんね…………一人に任せすぎちゃったよね」

「ああ、すみません。副業ではなく本業の」

「ああ、君たくさんバイトしてるもんね。本業なんだっけ?」

「馬鹿三人の保護者」

「あはは。大変だね、おじさんに出来ることがあつたら手伝うよ」

「……………じゃあ、つい殺っちまた時に車貸してください。山に埋めるんで」

「任せて!」

不思議現象に襲われたサツキはあの後飛んできた看板にぶつかりそうになるも謎の液体で溶かす人物と赤い触手を操る人物に助けられ、スマホのような物から発する光に触れると不思議現象が終わった。取り敢えず礼を言おうとしたら紙袋をかぶせられ連行された。

(……………私、これからどうなっちゃうんだろう)

もしやこのまま売られたりはしないだろうか、などと考えている内に目的地に着いたのか立ち止まる。

「着いたぞ。此処が我々のアジトだ」

「……………え?」

紙袋が取られるとボロボロのアパートが姿を現す。ここがアジト? 実は中にUFOとかでもあるのだろうか?

「おう、お前等も帰ってきたか……………ん? 何だそのガキ」

と、その声に振り向くとキーホルダーのリングを指にかけクルクル回す煙草を加えた黒いジャケットを来た青年の姿。

(うわあ、背え高い……………髭全然無い、格好いい……………)

父のような無精髭を持たず、しかし同年代にはない大人な雰囲気
の男性。顔も整っており思わず頬が染まる。と、サツキの視線に気づき
何を思ったのか煙草を携帯灰皿にしまう。

「高校生か?悪いな」

「え?あ、お、お気になさらず……………」

「何かイライラすることでもあったの?すぐ禁煙解いちやうんだ
から♪」

「……………埋まるなら山と森、どつちが良い?」

「ひえー!」

「で、このガキは何だ?売るのか?パーツ分けるなら安上がり腕の
良い医者紹介するが」

「ひい!?!」

「冗談だ。俺に借金もしてねー奴を殺したりはしねーよ」

それってつまりこの人からお金を借りたら、きちんと返さないと臓
器を売られるってことなんじゃ……………と、顔を青くするサツキ。そのま
まアパートの中を移動した。

「……………」

ジャージ姿の女性はポテチを食べ赤い仮面の少女はレトロなテレ
ビでゲームを始める。唯一の男は何やら家計簿を見ながら計算機を
使い、カレンダーを見て印を付けている。

そして目の前にはたぶんリーダーらしき黒い格好の女性。

「少女よ、何も怯えることはない。我々は君の仲間だ。我々が出会っ
たのは全て過去より繋がる定めなのだ」

などと詩的というか、中二的な言葉を紡ぐ女性。

「あの、あなた方は?」

サツキがもつともな疑問を言うとも男からとても面倒くさそうな雰
囲気が醸し出される。

怒られた!?臓器売られる!?などと恐怖する中目の前の女性が立ち
上がる。

「申し遅れてすまない。私はブラック指令だ！」

「シルバーブルームで〜す♪」

と、ジャージ姿の女性。

「ノーバだ」

こっちは赤い仮面の少女。最後に残った黒衣の青年もはあ、とため息を吐くと「ゴジラ……」と呟いてから立ち上がりサツキの前に集まる三人同様前に立つ。

「四人揃って！」

「生活苦の……」

「地球の支配者」

カッコカリ
「(仮)！」

「二「我等、『BLACK STARS』！」」

「っておいゴジラ！生活苦はいらんだろ！」

「……………はあ、それでえっと…私に何のようでしょうか……」

ブラックと名乗った女性の言葉によると、人類と怪獣の長い戦いの歴史が終結した後現れ始めた怪獣の力と姿を受け継いだ少女達怪獣娘達が現れ、先程駅で起こった不思議現象も怪獣娘であるサツキが行ったことらしい。

「……………少女？」

「俺は男だぞ」

そういつて造花をもの凄いスピードで作るゴジラ。見た目普通の人だし、普通の人間なのだろうか？

ちなみに彼女達の主な活動は地球侵略らしい。だけどチラリとゴジラを見ると今度はティッシュを箱に詰め始めていた。

「取り敢えず、君の……名は？」

「あ、平賀サ——」

「待て。此处に名前を書くのだ」

名乗ろうとしたサツキに対しブラックは待ったをかけ『名前をここへ書いてネ♡』という文字と矢印を書いた紙を渡してくる。素直に名前を書くサツキ。

書かれた名前を確認したブラックは名を読み上げニヤリと笑い、紙をめくる。ちようどサツキが名前を書いた位置に穴が開いていた。

「これで、今日から君は我々『BLACK STARS』の準メンバーだ！」

「ほえ……えい?!」

差し出された紙を見ると悪徳商法よろしく二重になっていた紙の下は契約書だった。しっかりと名前が書かれている。自分の筆跡で……。

「というわけで早速、我々とレッツ侵略してみな——」

ガシリとブラックの頭をゴジラが掴む。額に青筋が浮かんでいる。もしかして、助けてくれるのだろうか？

「この契約書に「活動資金は地球侵略のために大切に使うこと」って書かれてんだが、お前等何時大切に使った？」

全然違った。

「シルバー、てめえは自分の金で菓子買え。ノーバ、電気代考えてゲムしろ。ブラック………死ね」

「私だけ酷い!？」

「………ちつ。やっぱもう少し稼げるバイトするか。侵略活動に参加出来ねーし」

「稼げるバイト?」

「ちよつと警察が手を出したくてもだせねえ指定暴力団を抗争に見せかけて潰す。これが結構儲かるんだわ」

「………」

さつき背後に立った時に触手の先端を喉元に当て背後に立つな、消すぞと言ってきたノーバは特殊部隊出身らしい。だけど、こっちの人の方が怖い。

「大丈夫だよー。ゴジラはなんだかんだいって悪人しかぶち殺さないから」

「基本人間嫌いだけどその辺はちゃんとしてる。お金だされればキチンと働くし」

でも真面目な人らしい。さつき冗談で臓器売られそうになったけ

ど……………冗談だよね？

と、その時ブラックがハッ！と表情を変える。

「……………来る。よりによってこんな時に」

「へ、何がですか？」

「敵襲だ！全員退避せよ！」

「て、敵襲?!」

まさか、そんな、本当に悪の組織みたいなことが本当に起こるの!?!と、割と失礼なことを考えるサツキ。

ちなみに起きなかった。

ブラックの持つ超能力である予知能力、催眠術、ノーハンドでのブラのホック外しのうち一つである予知能力で予知したのは大家さんの取り立てだった。

「毎度すまん。あの馬鹿、次やったら身体で払わせるんで……………肝臓でもいるか？」

「い、いや……………ゴジラさんこそ何時もありがとうございます。で、ではこれで……………」

マシユマロが好きそうな大家さんはゴジラの過激な言葉に顔を青くして逃げるように立ち去った。

「おいゴジラー！活動資金は大切に——」

「ああ?」

「ア、スイマセンユルシテクダシイ」

「てめえはマジでいい加減にしろよ。てめえに渡してる金は小遣いだけじゃなくて家賃も含めてるって言っただろうが」

「ぎゃあああああっ!!」

アイアンクローを食らい逃れようと必死に暴れるブラック。が、抜け出さずとうとう気絶した。

気絶したブラックをシルバーが背負い町中を移動する。起こさなくて良いのかとサツキが尋ねるところ言うときはお告げがあるから

それを待つと返された。ブラックの持つ予知能力は普段は単なる勘程度だが予知夢は本人曰く絶対当たらしい。だからそれを下に作戦を立てるのだ。

ちなみにサツキもこの予知夢で見つけた。と、その時タイミングよくブラックが目を開く。

「良く来た、勇者ブラックよ」

「ゆ、勇者ブラック!？」

「ブラックが次のレベルに上がるには、218の経験値が必要だ。シルバールームが次のレベルに上がるには——」

（こ、これはお告げというよりもロールイングプレイゲームの——）

と、サツキがドン引きする中ブラックは両手を広げる。

「そなたに侵略の呪文を授けよう。『サイズ ヨウカ イトチ ヨウ ヲ ツカエ』。ではまた会おう……カー」

「起きろ」

「ぶへー！」

予言が終わると再び眠ろうとしたブラックだったがノーバの触手に叩かれ起こされた。

一同は移動してファミレスの席を取る。話す内容は先程のお告げについて。

「それでは侵略作戦会議を行う。先程のお告げ、我が主ブラックスターは我々に何を伝えようとしているのか」

「いっつも訳わかんないよね……はむ」

と、注文したグラタンを食べるシルバー。

（へえ、暗号を読み解く必要があるんだ……）

「サツキ、食わねえのか？一応お前の歓迎もかねてるつもりだが……今日は給料日だ、多少の贅沢なら——」

「本当!?!じゃあ私もどんどん食べ——」

「シルバー、死にたいならそう言え」

「……………すいませんでした」

まずは意見交換と言うことで新人のサツキがどう思うか尋ねられた。

サツキはまずサイズをデパートなどの催事、それに続くようにシルバーがヨウカを『今日の日付』と読み解く。

その情報を元にノーバが調べると新宿のデパートで今日まで北海道物産展という催事を行っているらしい。

「成る程。ツカエは普通に使いだろう。問題はここのイトチとヨウヲをどう読み解くかな……」

「あ、すいませーん！ミラノ風ドリアもひと——ひい！何でもありません！」

追加注文しようとしたシルバーだったがゴジラにギロリと睨まれ顔を青くして注文を取り消す。

「シルバーさん、たくさん食べますね。苦しくならないんですか？」

「うん、私大食い怪獣だから胃腸は強いんだ……あ、でもゴジラも実は結構食べるよ？家計だつてゴジラの食費減らせばかなり余裕が——」

「てめえが言うな……ん、どうしたブラック」

「そうか！イトチ、ヨウヲ、ツカエ……胃と腸を使いだ！」

「……………はあ？」

ブラック曰く『サイズ ヨウカ イトチ ヨウヲ ツカエ』はデ

パートの催事で食って喰って食いまくれというお告げなのだとか。人気の催事の商品を食い尽くせば人々が空腹に喘ぎ楽しい催事が終わり精神的苦痛を与えられるというお告げなのだとか。

「これで世界侵略は成功したも当然！」

「何処が？」

「ナーツハツハツハツ！」

「ブラックちゃん格好いい♪」

「行くぞ！『BLACK STARS』！レッツ侵略だ！」

そして一同は移動して新宿デパートへ。ゴジラは宝くじ売場から

今回の当選番号の発表日を改めて聞いてから各に軍資金を渡す。

「良いかお前等。活動資金は大切に……………もし金払って買つといて残しやがったら、差額分の内臓売り払う。まあ、サツキは初だから大目に見てやる。それと、アレルギーだけでなくどうしても食えない物があつたら俺のところを持ってこい」

「任せろ！」

「私好き嫌い無いから平気」

「了解した」

「あ、えつと……………ご馳走様です」

結果。サツキとゴジラ以外全員腹をパンパンに膨らませていた。ブラックもノーバも苦しそうだ。シルバーは良い笑顔だが。

「軍資金はもちろん今月の小遣いが無くなってしまった」

「……………もう食べれない」

「そもそも買い占められるほどお金持っていないし、やっぱ違ってたね」

「お前等って、本当馬鹿だな……………」

「でも奢るんですね……………というか悪の組織なら強盗とかするのは？」

「お前は働いたことねえからそう言えるんだよ。汗水垂らして働いた金を奪われるなんて……………俺ならそいつぶち殺すぞ」

「ゴジラは良く強盗団とか、麻薬の売人とか人攫い捕まえてボツコボコにして警察に届けるんだよね」

「……………」

それって侵略者というよりヒーローなのでは？

「たまくに埋めるけど」

「……………」

でも法律は犯しているらしい。

「というかこんな侵略作戦で成功した事あるのだろうか？と疑問を抱き質問するとブラックから「あるわけ無いだろう！出来ていたら地

球は今頃我々の物だ」とどう反応すれば困る発言をされた。

「まあ、まだ本気を出していないからな。本気を出した私はマジで凄
いぞー!」

「流っ石ブラックちゃん!根拠のない自信持たたら祖師ヶ谷一だね」
（……………ああ……………まあ、この調子なら侵略って言っても大丈夫そうか
な……）

「そもそも俺等は人間よりよほど強いんだ。本気というかその気にな
りや、まあ暴力に訴えてこの町を壊滅させることだって出来る…………シ
ルバーなら下水道に消化液を流して町を沈めたりノーバなら赤ガス
で町の連中を発狂させたりブラックなら催眠術で」

「ゴジラさんは?」

「俺等此奴等みてえに何か特殊な感じの力は特に持ってねえよ。単純
に強い、それだけだ」

「じゃあ、何でしないんですか?」

「馬鹿みてえに力を振るうより、此奴等と馬鹿やってる方が……………まあ、
楽しいんだよ。此奴等以外に馬鹿やれる友達も居ねえしな……」

なんか寂しいことを言われた。というかこの人もこの人で、こんな
馬鹿騒ぎは嫌いではないのか……………基本お金この人持ちみたいだけど。

と、サツキは不意に先程のお告げを思い出す。

「!あの、ここってデパートの最上階ですよね?」

「もちろん、屋上だからな」

「あの手帳貸してもらえますか?」

そういつて先程のお告げがメモされた手帳を受け取る。サツキは
その手帳をみて確信する。先程ブラック達は『サイジ ヨウカ』『イト
チ ヨウヲ ツカエ』で句切っていたが、サツキは『サイジ ヨウカ
イ』『トチ ヨウヲ ツカエ』で区切る。つまり最上階、都庁を使え。
「都庁というと……………何かこう、本能的にぶち壊したくなるあれか
……………」

「彼処の最上階、つまり展望室から私の念をテレパシーで送れば、この
首都、東京住の人間を支配下における。それはつまり、地球侵略の大
いなる足がかりになると言うことだ!」

「流っ石ブラックちゃん。話が急に壮大になったねえ」

「いや、流星なのはサツキ君だ」

「ふえ？」

「我等『BLACK STARS』期待の新人、私の目に狂いはなかった！」

「仲間になってくれてありがとう」

「グツジョブだ！」

と、抱きついてくるシルバーに親指を立てるノーバ。ゴジラも無言で飴（ヌカ・コーラ味：放射性物質抜き）を渡してくる。

誉められ、何処か照れくさいサツキ。

「よし、皆あれをやるぞー！」

「ラジャー」

「へいへい」

二人はノリノリで、ゴジラは何処か面倒くさそうな顔をする。あれとは何だろうかと首を傾げるサツキ。

「銀色のレイダー、シルバーブルーメ！」

「赤きスナイパー、ノーバ！」

「黒い破壊神、ゴジラ……」

「漆黒のリーダー、ブラック指令！」

と、順番に名乗り上げシルバーが何やらカンペを見せてくる。書かれていることを飲めと言う事らしい。

「ふえ……ふええ!？」

驚きながらも、四人の視線にさらされ意を決して読み上げる。

「ご、5人目の新人……^{ニューカメラ}……平賀、サツキ！」

「5人！」

「揃って」

「地球の！」

「支配者」

「(仮)^{カッコガリ}……」

「……我等！『BLACK STARS』！……」

ちなみにゴジラは急ぎのバイトが入ったので先に帰った。

「ただいま。って、またゲームしてんのか。何時だと思ってやがる」
一仕事終えて返り血だらけのゴジラがアジトに戻るとすでに布団で眠りジャミラ抱き枕を抱きしめるブラックと暗い部屋でゲームをするノーバ。

ゴジラは荷物をポイと部屋に放る。

「ちつと銭湯行ってくる」

「こんな時間に?」

「こんな時間だからこそ俺等みてえのが利用する銭湯があるんだよ」

と、垢すりとバスタオル、を持って行こうとするゴジラ。その時、ブラックが目を開ける。

「良く来た、勇者ブラックよ」

「……!」

「お、お告げか……頻度が上がったか?」

「ブラックが次のレベルに上がるには、経験——ぶっ!」

「そこは飛ばせ」

経験値を伝えようとしたブラック——この場合ブラックスターだろうか?——だったが聞く気のないノーバに触手で頬を叩かれた。

学級日誌の仕事を押し付けられ帰るのがほんの少し遅れたサツキは校門の前に来るとやたら人が集まっているのが見える。何だろ? 猫か子犬でも迷い込んだのだろうか? ちよつとみてみたい、と背伸びするサツキ。

そこには黒塗りのSSバイクに腰をかけるゴジラの姿が。

「……お……ようサツキ、迎えに来たぞ」

「ゴ、ゴジラさん!」

名を呼ばれ反応してしまい、視線が集まる。人垣が割れゴジラとサツキの間に一本道が出来る。ゴジラはヘルメットを投げてくる。

「乗れ」

「……えつと、はい」

取り敢えずこの視線の集中砲火から逃げ出したかったサツキはヘルメットをかぶり後部座席に腰を下ろすとゴジラの腰に抱きつく。ブルンとエンジンの音を立てドドドドと振動が伝わってきた後、バイクは発進した。

「ゴジラさんバイク持ってるんですね」

「バイクや車の免許持ったりや出来る仕事も増えるしな。小型船舶免許も持つてる。いざとなったら鮪釣って金にする」

「そんなに就職先選び放題なのに侵略者なんですねゴジラさん……でもバイクって高いんじゃない」

「まあ侵略活動行いう前に勝った奴だからな。旧式だが愛着もある……宝くじで一等と二等と三等が当たって十八億手に入れたし……」

「——へ？」

「つーわけで暫く贅沢できる。そういや、参謀長になったんだってな。昇進祝いだ、何か買ってやるよ」

「あ、じゃあその……本屋に……」

金が入っても相変わらずボロいアジトで集合した『BLACK S TARS』だったが侵略作戦会議を行う前にサツキの提案で侵略者診断をするためにパンダ公園に集まる。

「どうやら古今東西の侵略者達のデータを調べたところ皆さん失敗しているケースが殆どのようです」

「そりゃ成功したら物語終わるもんな」

「そこで、なぜ失敗したか分析してみました！」

「分析だって、サツキちゃん頭良いんだ」

「待て、我々に失敗など無い！」

感心するシルバーに対してブラックがその言葉を否定する。曰く、全て勝利への布石だと。が、サツキに黙るように言われた。かなりの迫力だ。

「では、敵に攻められた際、正しい侵略者として行動できるか診断します！」

持っていたスケッチブックをめくると「シチュエーション①『敵の行く手を阻む』と書かれていた。

「最初はシルバーさんからで……」

「はい♪頑張りま〜す」

「ブラックさん達は正義のヒーロー役をお願いします」

「わ、解った」

「おう……」

「正義のヒーロー、ねえ……」

situation 1 敵の行く手を阻む！

「皆の笑顔は！」

「私が、守る！」

「えーつと……悪を殺す」

「ふっはっはっはっはー」

「お、お前は……!?!」

「………何だこの茶番……」

ひつどい演技のやりとりにゴジラが呆れながら木の形をした遊具の上に立つシルバーへと振り向く。

「私の名はシルバーブルー——ぷぎゃん!?!」

名乗り上げる途中飛んできた小石が額に当たるシルバー。

「隙だらけた」

「………えつと、取り敢えず多勢に無勢で勝利した侵略者は居ないので逃げましょう。でも敵に背中を見せると95%の確率で倒されます……後ゴジラさん、口上を少しは待って上げてください」

「何で?」

situation 2 必殺技を出すタイミング!

「ノーバさん、ヒーロー役のゴジラさんと戦ってください」
「ん」

サツキの言葉に向き合うゴジラとノーバ。ゴジラは首をゴキリと鳴らす。

「きな」

「食らえ……ブラツデイー・デスサイズ！」

と、普段持っている鎌を巨大化させて切りかかるノーバ。それを指でつまんで受け止めたゴジラは反撃に腹を殴りつける。

「ヒーローより先に必殺技を出すと97%の確立で対策をとられ、反撃されます！というかノーバさん大丈夫ですか!？」

「も、問題ない……♡……はあ、あ……っ！く、くふ……内臓に響く、この一撃……たまらん」

(何でこの人ちよつと嬉しそうなんだろ……)

褐色肌を紅潮させ腹を押さえてビクビク痙攣するノーバ。苦しがつていると言うより、気持ちよさそうな顔に見えるのはきつと気のせいでは無いのだろう。

「ちなみにヒーロー側が先に必殺技使ってきたらどーすんだ？」

「取り敢えず耐えてください。3分耐えれば勝率が45%程上昇します」

「そうか。じゃあ耐える練習だ……」

「流石にそれは死ぬ……」

ゴキバキと指を鳴らすゴジラにダメージを受け喜んでいたノーバも顔を青くして首を振る。

situation 3 敵を前にしての勝負の預け方！

「観念しろく、ブラック指令！」

「ふっ。今日のところは見逃してやる。だが、次に会った時がお前たちの最後だ！ナーツハツハツハツ！ナーツハツハツハツハ——へぶう!？」

「だからゴジラさん！口上の途中で攻撃してはいけません！」

「すまん、なんかムカついた」

「それは解りますけど……」

「わかっちゃうの!？」

「それと、高台から宣戦布告して勝利した侵略者は、居ません

situation 4 ヒーローが一人でいる時に出会い対決した時！

「久しいなブラック指令。今日こそ貴様等の最期だ！」

「アウトです！」

「え、何で？」

「この場合ある程度追い込むと結局仲間が駆けつけて負ける可能性が72%。最期ではなく、ある程度痛めつけたら興味を失ったように去りましょう」

「はあ？ノーバとシルバーが加勢したところで俺が負けるわきゃねーだろ」

「……そうなんですか？」

「うむ。ゴジラは我々『BLACK STARS』の筆頭稼ぎ頭にして最強戦力だからな。前にうっかりノーバが幻覚作用の煙を浴びせて、死にかけた」

「山で修行してた時だよね。あの時は危なかったよお」

「……………（ガクガクブルブル）」

「取り敢えずサツキ……………お前、真面目だな」

「ちよーマジメだねえ！」

「クソマジメだ」

そして今回の成績を整理し、サツキがスケッチブックを見せてくる。

「と、言うわけで皆さんの侵略者診断の結果、十段階評価で最低の1となりました」

『危機感』『我慢強さ』『やる気』『慎重さ』『向上心』『計画性』とかかれた六角形のグラフ。

「ノーバは比較的に有能だな。これが特に低いというのがない」

「全部低評価だけど……………ゴジラは全部低い」

「金以外で細けーこと考えんのは苦手だ」

サツキは低い結果をみてため息を吐きそうになる。やる気を上げるために行ったことなのにこんな低いとむしろやる気がなくなるじゃ、と心配になったが、ブラックが笑う。

「良いじゃないか」

「へ？」

「1という数字、私は好きだ！ナンバーワンでもオンリーワンでもあると言うことだろう！」

「この場合ワーストワンだろ」

「流石ブラックちゃん！無駄にポジティブだねえ」

「よし！このまま侵略作戦決行だ！」

落ち込むどころか謎の理論でテンション爆上がりのブラック。

「ノーバ、例のやつを！」

「ほい……」

ブラックの言葉にノーバが手帳を全員に見えるように広げる。

「これは……」

「昨日降りてきたお告げを私がメモしたものだ」

手帳に書かれていたのは『テキノ キチニ ムカウ ハキチ』。

「普通に読んだら『敵の基地に向かうは吉』だな」

「敵の基地に向かえば良いことがあるってことですか？」

「ふっ。そうか、ついに時は満ちたか」

「ふえ？」

「我々の敵、すなわち『GIRLS』の基地に乗り込み、奴らを攻めろと言う事だな！サツキ参謀長！」

「ふええ!?そんな、そこまで言っていないですよ！」

いきなり最終決戦に向かおうとするブラックに慌てるサツキ。

「わああ、面白そう！」

「行くか」

「まあ、金入ってバイト辞めたから暇だしな」

「ふえ？」

なんか皆やる気になってる。

「行くぞ『BLACK STARS』！レッツ侵略だ！」

国際怪獣救助支援組織、通称『GIRLS』本部の近くのビルの屋上に経つ『BLACK STARS』のメンバー。

「あれが『GIRLS』の本部だ」

「あの、『GIRLS』ってどういう人達なんですか？」

「そうだな、一言で言うなら……覚醒しても人間から石を投げられたことのない怪獣娘の集まり」

「ん、正義の味方？」

「ふん、いい子ちゃんの集まりなど、反吐が出るわ！」

「だが、此奴だけは気をつけろ」

と、ノーバがスマホのような機械で黒髪ロングの二本の角を持った少女の写真を見せてくる。

写真の少女の名はゼットン。最強の怪獣娘であり、彼女の手に掛かった侵略は数知れず。数多の侵略者を消し去った怪獣娘だ。

「消せるものなら消してみるが良い。どんな洗剤でも落ちないしここさを見せてやる！ ナーツハツハツハツ！」

「俺達頑固な汚れかよ……まあ潜入するのは良いが、面倒事を起こすなよ。ん？ 面倒事を起こしに来たんだから正面から突っ込むべきか？」

「あ、あの。取り敢えず今回は敵情視察と言うことで……騒ぎは起こさないでくださいね」

騒ぎは起きた。

通気口から進入し、戦闘を進んでいたブラックがキッチンらしき場所に落下してお菓子を食べに来た怪獣娘ゴモラと同じく怪獣娘の改造ベムスターに見つかり多勢に無勢と判断して背中を見せぬように背を壁につけ退散した後トレーニングを終えた怪獣娘ガッツ星人、アギラと遭遇してしまった。催眠術で眠らせようとしたブラックだったが先に必殺技を使うと対策されると忠告されたのを思い出し固まってしまった。

何故かノーバが知っていた監視室の中にあるこれまた何故かノーバが知っていた各部屋に繋がる配管からシルバーの溶解液（溶解度調整）を流してガッツ星人とアギラの服を解かしている間に退散。

次にリングの上で実戦訓練をしていたレッドキングとミクロスに遭遇。これはノーバの幻覚作用のある赤いガスを放つ。

どんな幻覚をみたのか、レッドキングにプロレス技をかけられていたがヒーローが先に技を出してきたら耐えるという忠告を思い出しおとなしく喰らうブラック。

不幸はそれだけでは終わらない。エレキングの尻尾を踏んでしまい電気を浴びたり、ノイズラーの爆音を間近で聞くことになったり、幼い怪獣娘達に噛まれたりしていた。というか何で噛まれたんだろう？

シルバーが一通り笑うとブラックと合流するために監視室から外に出て、不意にサツキがノーバとシルバーに何故ブラックと行動をともにするか尋ねる。

「ん〜、やっぱいい、ブラックちゃん的笑ったり泣きわめいたりする姿インスタに上げたいしね。でもお、なんだかんだ一緒にいると楽しいからかなあ。えへへ」

「右に同じ」

「……………」

ゴジラも似たようなことを言っていた。

「サツキちゃんのお、何でも一生懸命なところも楽しいよお」

「あ……………ありがとうございます……………」

「……………ふー」

「あべ!？」

「あ、何だ……………お前か」

ノーバが曲がり角から飛び出してきたブラックをひっぱたいて合流する。そして脱出することになった。

「結局俺等何しに来たんだ？」

と、ゴジラが首を傾げながら4人と共に走る。出口は直ぐそこだったのだが、エントランスには複数の影。

ゴモラ、改造ベムスター、レッドキング、ミクロス、エレキング、ピグモン、キングジョー、ガッツ星人、アギラだ。

「ん？カプセルガールズが二人だけ？最後の一人は何処行った？方向性の違いで解散か？」

「違わない！」

「バンドじゃ、ないから……」

ブラックが散々敵敵言うので『GIRLS』について調べていたゴジラは同期で仲良しの三人組、カプセルガールズについて知っていたが一人居ないことに首を傾げる。

「貴方、この前都庁にいなかった？」

「え、そうなの？」

と、ガッツ星人がブラックに話しかける。その場にいなかったアギラは改めてブラックを見る。

「っ……良いだろう、教えてやる！我々は——ッ！」

——高台から宣戦布告して勝利した侵略者は、居ません！

名乗り上げようとしてサツキの言葉を思い出し固まるブラック。急に固まったブラックを不思議そうにみる『GIRLS』の面々。

「わ、我々は『BLACK STARS』……以後、お見知り置きを」と、丁寧に挨拶するブラック。戸惑う『GIRLS』、ずっこけるゴジラ。

「お前何してんの？」

「だ、だって高台から宣戦布告すると……」

「はあ……」

と、ため息をはいたゴジラが一步前が出る。

「俺達は『BLACK STARS』、自身が持つ力を国に縛られることなく使うお前等の同胞」

「同胞？まさか、怪獣娘!？」

「でも男の人も混じってるよ？」

「貴方が彼女達を煽動しているの？」

ゴジラの言葉にピグモンが目を見開きゴモラが首を傾げ改造ベムスターがゴジラに尋ねると、ゴジラは疲れたようなため息を吐く。

「家のボスはこの馬鹿だ。本当に馬鹿なんだよ、今日も何の考えもなしにここに侵入しようとか言うしよお……」

「そ、そうなんですか……と、とにかく部外者が勝手にここに入っては困りますうー!」

「どうやって入り込んだのか聞かせて貰おう!」

「言うわけねえだろ」

「だったらとっつかまえて聞くまでだ!」

「やってみろ!」

と、ゴジラが階段から飛び降りる。まさか人間であるはずの男が向かってくるとは思わなかったのか戸惑う『GIRLS』のメンバー。
「待てゴジラ!多勢に無勢で勝てた侵略者は居ない!」

と、ブラックがどこかズレた忠告をする中レッドキングが迎え撃とうと拳を握る。

「ゴジラさん!」

「レッド!駄目です、相手は一般人ですよ——!」

「しま——!」

「心配するなら自分の心配をしろ」

ピグモンの忠告に慌てて拳を止めようとしたレッドキングだったが間に合わず、しかしゴジラは吹っ飛ぶことなく手首を掴み拳を止める。

「うそ!レッドキング先輩のパンチを止めた!」

「言ったろ?俺達はお前等の同胞だってな……」

と、ゴジラの体を青白い光が覆う。そして現れたのは黒い服に黒いズボンと、さつきまでとさほど変わらない格好をしたゴジラ。が、背中には炎を象ったような模様が現れ恐竜のような太い尻尾が生えていた。

「ええ!?へ、変身した!?!ゴジラさん怪獣娘じゃなかったんじゃ……!」

「ああ。俺男だからな。娘じゃねえよつと!」

そのまま驚き固まっているレッドキングをぶん投げる。

「ぐあー!」

もの凄い速さで壁にぶつかるレッド。そのまま気絶し、ゴジラはすぐさま次の標的を見る。標的はガッツだ。理由は攻撃してきたから。ガッツの放った光線を後ろに飛び退き交わし、背後にあった柱を蹴り前に飛ぶ。と、その首に太い鞭のような物が巻き付いてくる。

「喰らいなさい！」

バチチチ！と音を立て電気が流される。が、ゴジラは首に巻き付いた物——エレキングの尻尾の鞭に噛みつく逆にと逆にエネルギーを流し込む。

「きやあ!？」

バチン！と鞭の取ってから手に伝わるエネルギーに思わず鞭を手放す。ゴジラは背後にテレポートして殴りかかってきたガッツの腕を掴むと引き寄せ首筋に肘を打ちつけ気絶させる。

「おお！良いぞゴジラ！これはいけるんじゃないか!?!でもやりすぎ何じゃ……」

「安心しろよ。加減してる。きちんと痛くないように出来るだけ一発で気絶させてるだろ?」

「そうか。ならばもつと我等『BLACK STARS』の恐ろしさを思い知らせてやれえい！」

そういう問題なんだろうか?と思ったがブラックが納得しているので取り合えず問題ないという事にしておこう。

と、その時だった。

「何の騒ぎ?」

サツキ達の背後から聞こえた声に振り返る。

「貴方達、見ない顔だけど、何をしているの?」

人形のような無表情。流れる炭の川のような艶やかな長い黒髪。頭に生えた二本の角に、黒いドレス。それは写真で見た姿にそっくりだった。

「あれ、あの人って確か……」

「ゼットン……!」

「ふえ?ゼットンって、あの!?!」

「あわわわ……!」

ノーバが呟いた言葉に振り向いたサツキが驚いていると顔を青くして冷や汗をたらだら流すブラックが目にはいる。

「——ぎいやああああ!!」

恐怖からか、とうとう叫びだしたブラック。

「ゴ、ゴジラー! やつてしまえ! ほら、彼奴倒せば最強だから!」

「いや、流石におれでも一兆度の炎喰らい続けるとそのうち体温が上がりすぎて炉心が溶けて熱暴走起こして付近一帯溶かしちまうから、町中でゼットンとその他大勢との戦闘するのは無理だ。被害考えなきややれんこともないが」

「ふええ!」

と、まさかの最強戦力からの戦闘拒否。というか被害気にしなれば最強の怪獣娘にも勝てるのかこの人……。

でもこの人が戦えないとなると、もう打つ手ないんじや……と、ネガティブな発想をするサツキ。そんなサツキを、薄紫の光が包む。

「へ? え……——ツ!!」

そのまま光に包まれ、アイドルのような服が現れる。さらに髪型もセットされ頭の両端に目のような装飾品が現れ、彼女達の頭上に黒い穴が現れ周囲の空気を吸い子でいく。

「あれは——!?!」

「サツキちゃんの能力だ!」

「ふえ? 私の……? ていうか私、何でこんな格好に!?! へ、ふわあああ!?!」

戸惑うサツキも吸い込まれ、ブラック達も吸い込まれていく。ゴジラは床を蹴り空に開いた穴へと飛ぶ。

「じゃあな『GIRLS』! 人間に愛想つきたら、いつでも好きなように力を振るえ。スツとするぞ?」

「サツキちゃんありがと〜! お陰で助かったよ〜!」

「グツジョブだ」

「おかげで東京が死の街にならずにすんだ」

と、シルバー、ノーバ、ゴジラに礼と賞賛をされる中ブラックがサツキをスマホのような機械で撮る。それは怪獣娘がどんな怪獣の力を引き継いでいるか知ることの出来る機械らしく、サツキの継いだ力はペガツサ星人らしい。

『GIRLS』にも別個体のペガツサ星人の魂を持つ者が居るのだとか。

「やったねサツキちゃん！怪獣娘になれたね〜」

「これで君も一人前だな」

「今夜は赤飯にしよう」

「おお。良いねえ〜」

「作るか？買うか？それとも店のにするか？」

どうやら『BLACK STARS』の全員が自分の覚醒を喜んでくれているらしい。何だから嬉しくて思わず笑みがこぼれる。

「それにしてもゼットンが出て来てゴジラが戦えないなんて焦ったね〜」

「戦えない訳じゃねーよ。1対1ならともかくあの状況じゃ手間取って時間がかかると思っただけだ」

「ふん！あの程度のことでも狼狽えてどうする」

「流っ石ブラックちゃん！こーんな顔してたけど大丈夫だったんだねえー！」

と、涙目になって狼狽えているブラックの写真を見せるシルバー。どうもこの人は意外と余裕があったらしい。

「ぶっ。泣いてる」

「な、泣いてない！泣いてなんてないぞ！消せ、その写真を今すぐ消せー！」

「うふふ」

吹き出すノーバに顔を赤くして否定し写真を消すように叫ぶブラック。そんな光景を見て笑うサツキはチラリとゴジラを見る。ゴジラもその光景に笑っていた。

それにしても、普通(?)の人ではなく怪獣の力を使える人だっなんて。本当に謎が多い人だ。

「ゴジラさんって、本当に何で『BLACK STARS』に？ 怪獣の力を……それもあんなに強い力を使えるならもつとこわーい組織に入ってもおかしくないのに。馬鹿騒ぎが好きだとしてもそれって入るまで解りませんよね？ それまで他の組織からスカウトとか無かったんですか？」

何気に闇医者とか警察の影の部分とか知ってる人だ。そういった場所から引く手数多だろうし、そういう組織に入らなかったのだろうか？ あるいはノーバみたいには元は別の場所に居たとか？

「ん？ まあ、腐れ縁ってのもあるな。俺とブラックは幼馴染だからな、最初に誘われたのもそこ……小学生ぐらいの頃、一緒に世界を侵略しようとか言いだして……高校から俺がそこらの不良と喧嘩売られ始めてぶちのめしてたらヤクザとかにも誘われたが人間如きに従うのなんてごめんだしな。その点ブラックは人間じゃねーし」

「人間じゃ、ないんでしようか？」

「少なくとも人間は空間に穴開けたりしねーよ。けど、ま……お前が人間だろうと怪獣だろうと仲間なのはかわんねえよ。俺は仲間まで人間だからって嫌う気はねーよ？ 人間にも良い奴が居るのは知ってるからな」

サツキが来るまでの間ペガッサ星人について調べることにした一同。スマホのような機械を見ていると、ちょうど良いタイミングで扉が開く。

「こんにちは〜」

「待っていたぞペガッサ参謀長」

「ペガちゃんヤッホー♪」

「よう」

『BLACK STARS』ではお互い怪獣名で呼び合うのが常識。なので何の怪獣か判明したサツキも今後はペガッサと呼ばれるようになるのだ。

「早速だが、今日はペガッサ参謀長の能力を把握するところから始め

たい」

「わ、私の能力……?」

「ペガツサ星人、能力はダークゾーンと呼ばれる何でも吸い込んでしまう異空間を出現させることが出来る」

「この間のあれだな。吸い込んだところと別の場所からも出れるみてえだし防御のみならず移動にも使えるな。後敵の攻撃を飲み込んで返すとかも出来そうだ」

「おおーそこまで利便性が!」

「とはいえ、異空間に存在したまま此方に攻撃、なんてのは出来ないみたいだな。まあ矛盾してるからな……その矛盾を破って触れられない敵になるくせに紙装甲とかだったら笑えるな」

(な、なんかゴジラさんの顔がちよつと怖い……)

嫌なことでも思い出した、とでも言うようなゴジラの笑みにペガツサが若干引いた。

「というわけで、早速検証しに行くぞ!」

そして一同がやってきたのはお馴染みのパンダ公園。

「ではまずこれを使って変身して貰おう」

そういつてブラックが渡してきたのはスマホのような機械。しかしこれはスマホではなくソウルライザーとって怪獣娘達のために造られた機械らしい。これを使い怪獣娘に変身したり逆にその変身を解くことも可能らしい。

「俺はなくても出来るがな……あんまりお勧めしねえぞ?それになれちまうとそれが無いと変身できない。出来たとしても暴走つてなるからな」

「とまあ、ゴジラが言うので我々も初期の頃のように頼るようになっていた。まあ少なくとも、これを使えば暴走の危険が減るから最初は使うと良い」

「使わなくても変身できるんですか?」

「その辺が『GIRLS』との違いだねえ。向こうと違って風聞気にしない悪の組織だから暴走なんて恐れないし」

「ん。暴走してもゴジラに殴ってもらえる。ある時は、縛って……もらえる」

(何で嬉しそうに言ってるだろう……)

殴るとか縛るとか痛そうなのにとても嬉しそうな顔をするノーバ。何も知らない方がペガツサの為だろう。

『GIRLS』の皆さんも持つてるんですね」

「まあ元々あっちが開発したものだからな。ノーバが闇ルートで持ってきた」

「闇ルートって……」

この人本当に何者なんだろう？とノーバを見るペガツサ。しかしこんなものを誰が買うのだろうか？『BLACK STARS』以外にも野良の怪獣娘組織でもあるのだろうか？

「まあ取り敢えず変身してみろ」

「で、では……やってみます！」

「ペガちゃんファイト♪」

ペガツサは早速ソウルライザーを起動させる。

「ソウルライド、ペガツサ星人！」

と、ソウルライザーから光が溢れペガツサの身体を包んでいく。光が晴れるとこの間の姿をしたペガツサが居た。

「ふわぁ、本当に変身できましたぁ」

「やっぱかわういね〜！アイドルみたい！」

「あ、アイドルだなんてそんな……！烏澁がましいです！」

「では、早速ダークゾーンを出現させるのだ」

シルバーの言葉にペガツサが慌てているとブラックが提案してくる。とはいえ意識して出す方法など解らない。

取り敢えずブラック達が必殺技の使い方を教えると腕を交差してデュア！と叫んだり頭にある平らな何かを飛ばすような動作をした。り気をためて放つような動作をする。

「ご、ゴジラさんはどうやって必殺技を放つんですか？」

「俺は基本的に通常攻撃しか使わねえよ。まあ強力な技あったら炉心を暴走させて放つ赤色熱線だ……ただ周囲が燃えるし暴走状態

続けると炉心溶けて熱暴走するし……その時はソウルライザーねえと俺死ぬ」

「た、大変なんですね」

「まあそういうわけで俺はゼットンみてえな1200度以上の炎を使う奴と戦う際は短期で決めなきやならねえわけだ。色々制限あるんだよな俺」

「ゼットンさん一兆度の炎が放てるんですけど……想像つきませんか」

「太陽の表面温度はたった8000度……一兆度つてのは太陽系なんて一瞬で蒸発するレベルだ」

多分自分も燃えるからまた別の力で炎を包んでいるのではないかとゴジラは推測している。しかし昔の人間はそんな存在にどうやって勝てたのだろうか？

「まあ俺もゼットンも言っちゃまえば戦闘特化の怪獣……ノーバヤシルバーは広域殲滅、ブラックは役立たずと怪獣娘にやその特性が様々だ。ペガッサ星人つてのは戦闘系じゃねえから……必殺技を出し方じゃ出来ねえじゃねえ？」

「え、じゃあさっきまでの練習は……？」

「全くの無意味だな」

「む、無意味……」

ゴジラの言葉にズーンと落ち込むペガッサ。その顔の前に何やら黒い穴が現れる。

「おお！今、ダークゾーン発生の兆候があつたぞ！」

「ほえ？」

「もしかして、ペガッサがネガティブになると出現するのかもしれない」

「わ、私がネガティブに……」

「使いどころが限られる能力だな」

「よし、ならば。ペガッサの悪いところを指摘してネガティブにさせるぞー！」

「ふええ!?!」

新手のいじめだろうか？

悪いところを指摘して嫌な気持ちにさせるなど嫌がらせ以外の何者でもない提案をするブラックに、シルバーは呆れたようにえー、と呟く。

「そりゃブラックちゃんならならしくいところとか、学習能力のな〜いところとか、大して有名でもないのに〜エゴサーチしてるとことか〜……いっぱい言えるけどさあ」

「うむ。よく観察しているな」

うんうん、と頷くブラック。全く応えていない。ある意味超ポジティブシッキングだ。

「ペガツサの悪いところねえ……クソ真面目なことか？」

「ええ〜、そこは普通に良いところだよ〜。ペガちゃんは普通に可愛いし、普通に真面目だし、それ以外特に普通だもん♪」

キラキラ光る笑顔を浮かべるシルバー。ペガツサは「普通、ですよね。これといって特徴ないですよね」と落ち込む。

「あれえ!?何で!?えつと……なんか、ごめん」

「ん?待て、なんか——」

と、落ち込んだペガツサの身体から紫のオーラが溢れる。そして、上空に巨大な穴が開き周囲の空気を吸い込み始める。

「おお!」

「ペガちゃん、出たよ〜!」

「へ?」

ビュウビュウと穴に向かって突風が吹き荒れる。公園にいた一般人達が慌てる中ペガツサ達は街頭に捕まる。

「でかしたぞ、ペガツサ参謀長!これでまた地球侵略に一步近づいた

——うおお!」

と、仁王立ちして高笑いしていたブラックがダークゾーンに向かって吸い込まれ始めた。

「流っ石ブラックちゃん!自らダークゾーンの中に入って調査しようとするなんて!」

「どうみたって違うだろ〜!止めろ〜!」

「あれって縁掴めるのか……」

「ダークゾーンの縁に捕まり吸い込まれるのを必死に耐えるブラックを見てゴジラがダークゾーンを観察する。」

「取り敢えずノーバ、助けてやれ。それとペガツサ、解除しろ」

「で、でも消し方が解りません!」

「ソウルライザーで変身を解除して強制終了させろ!」

「あ、そうか!」

「は、はい!ええつと……」

「早くしろおおお!ひいい!……ん?」

「ブラックはなんとか抵抗していると、ダークゾーンの中に何かがあるのに気がつく。」

「何だ、あれは?」

「よし……変身解除!」

「ブラックが手を伸ばすのとほぼ同時にペガツサがソウルライザーで変身を解除して、ダークゾーンが消える。吸引力が無くなり地面に向かって落下するブラック。ゴジラが激突する前に受け止める。」

「だ、大丈夫ですか?わ、お姫様抱っこ……」

「ナイス、トラブルメイキング!」

「ん?なんだそのガキは……」

「と、ゴジラは己の腕の中にいるブラックの胸で眠る幼い少女を見て首を傾げるゴジラ。」

「アンモナイトの貝殻を三つ合わせたような帽子、先端に向かうにつれ紫に変色していく桃色の髪。紫色のスクール水着に似た服に、同じ色の蟹の鋏のような手袋。」

「取り敢えずアジトに持って帰ることにした。」

「んふく、可愛い寝顔だねえ」

「というか、この子誰なんですか?」

「ダークゾーンの中から連れてきた」

「ふえ?」

「ということはダークゾーンに吸い込んでしまっていた子供なのだろうか？」

「調べてみたが、付近で子供の捜索願は出てないな……まだ気付かれてないのか、単純に怪獣娘だから捨てられたのか」

「え、この子怪獣娘なんですか？」

「……っ！間違いない……ソウルライザーで撮ってみろ」

ゴジラの言葉にペガツサが振り向きノーバのアホ毛がピンと立ちソウルライザーを持っていたペガツサに命じる。言われたとおりソウルライザーで撮ると情報が出て来た。

ガタノゾーアと言うらしい。その名に驚くブラック。ノーバによるとガタノゾーアとは邪神と詠われた怪獣。嘗て地球を滅ぼしかけた伝説の邪神らしい。その力はゼットンに匹敵、あるいは凌駕すると言っても過言ではない。

「つつても炎じゃなくて闇だからな。相性的には楽に勝てそうだ」

「ゴジラさんも有名な怪獣なんですか？」

「有名ではないな。いわゆる平行世界の怪獣だ……それも、所謂きっかけ……我が主ブラックスター曰……ツブラヤワールドなる単語で一括り出来る幾つもの世界において初めて生まれた怪獣……怪獣という存在の切っ掛け。つまり怪獣の始祖だそうだ」

「な、なんかすごそう」

「まあその個体は溶けて消えたらしいがな。ゴジラはあくまでその同族だ……」

「ただ、同族は同族でも進化の切っ掛けが二度の俺の方が強いだろうがな」

「あれ？でも平行世界？この世界の事じゃないんですよね？何で知ってるんですか？」

「俺、力だけじゃなくて記憶も引き継いでるから。んで、このガキどうする？警察に届けりゃ怪獣娘だからそのまま『GIRLS』に持ってかれるぞ」

そうなると『GIRLS』の戦力がまた強化される。いや、正義の組織が精神的不安定な子供を戦わせるとは思わないが……。それで

もいざという時はあり得るかもしれない。

「それにしても、何でダークゾーンの中に居たんだろう？」

「それは恐らく、ペガッサ参謀長が闇の世界から最強の怪獣娘を召喚したんだろう」

「ふええ、わ、私が!？」

「すごいペガちゃん、そんな力まで持つてるんだねえ」

「やるな」

「素晴らしい働きだ、ペガッサ参謀長！」

「いや、普通に最初にダークゾーンを開いた時に吸い込んだとかじゃねーの？」

何故か闇の世界から連れてきた前提で話す一同に呆れるゴジラチュツパチャプス（ヌカ・コーラ味：放射性物質入り）を食べようとして、薄目をあけたガタノゾーアがジツと此方をみているのに気付く。

「……………食べ、たい……………」

「いや、これは俺の……………」

「食べたい」

「……………今抜きのがねえんだ。我慢しろ」

「……………」

「まあ、怪獣娘だし大丈夫か。ほらよ」

「はぷ」

悲しそうな顔で見上げてくるガタノゾーアにゴジラが折れチュツパチャプスを差し出す。パクリと口に含んだガタノゾーアはそのままジツとゴジラを見つめ、胡座をかいていたゴジラの足の上に座る。

「おお、ゴジラ懐かれたねえ」

「お菓子で釣るとは、犯罪者め」

「ふむ。取り敢えず『GIRLS』に連れて行かれることはなさそう
だ。このガタノゾーアがいれば、『GIRLS』の連中にも勝つことが
出来る！」

「ペガちゃん頼りになる〜」

「グツジョブだ」

「……は……はい！」

「ガリガリ………おかわり」

「飴は噛み砕くな。歯について虫歯になるだろ」

と、新しい飴を渡すゴジラ。ガタノゾーアがあー、と口を開けてきたので包みを取り口に放り込む。

「そういうえばノーバちゃん、昨日お告げ聞いたんだって？」

「ん……」

「なにになに〜」

シルバーの言葉に頷いたノーバが早速昨日のお告げをメモしたであらう手帳を差し出してくる。

『リアジユウ バクハツ シロ』

「リアジユウ？」

「リアルが充実している奴の略だ。最近じゃスマホの予測変換にも『リア充』と出て来るほどの造語だな」

コテン、首を傾げ帽子の重みで倒れそうになるガタノゾーアを支えながらゴジラがガタノゾーアの疑問に応える。

「は、なんだか今までのお告げと雰囲気が違うような」

「ただの寝言じゃねーのこれ」

「いや、これはお告げだ。世の中のカップル共を恐怖のズンドコに叩き落とせと言う意味に違いない！よし、このままガタノゾーアを連れて作戦開始だ！」

(………幼馴染が引く手数多の勧誘蹴って自分が立ち上げた組織(?)に入って同居までしてるブラックさんも十分リア充だと思っただけどなあ………)

「ラジャー！」

「あ、ら、ラジャー！」

ノーバとシルバーもやる気なのでペガッサも慌てて敬礼する。ゴジラは呆れたように肩をすくめた。

「銀色のレイダー！シルバーブルーメ！」

「赤きスナイパー、ノーバ」

「黒い破壊神、ゴジラ」

「漆黒のリーダー、ブラックラ指令！」

「五人目の新人、ニユーカマーペガツサ」

「五人！」

「揃って！」

「地球の」

「支配者！」

「カッココカリ
(仮)！」

「「我等、『BLACK STARS』!!」」

「行くぞ！レッツ、侵略だ！」

「あーむ。もむもむもむ………」

「ガタちゃん俺の頭が食べ滓だらけなんだが」

ゴジラに肩車されながら買って貰ったお菓子を食べるガタノゾーア含める『BLACK STARS』は変身姿のまま池袋に来ていた。

「なんか、この格好で外を歩くの緊張しますね」

「大丈夫、すぐなれるよ」

「よし、この辺で良いだろう。この先を曲がったところにデートスポットの大きな通りがある。そこに集まるカップル達を邪神ガタノゾーアで驚かせて楽しいデートを悪夢に買えてやるのだ。リア充爆発しろお！」

なんかただの嫌がらせにしか見えないのだが。そんなペガツサの心境に気づかないブラックはゴジラの方からガタノゾーアを引き剥がす。

「長き封印から解き放たれ、今こそその力を示す時。さあ、暴れよガタノゾーア！」

「……………やだ」

「な!?!」

「ぷっ」

ブラックの言葉を拒絶したガタノゾーア。シルバーが思わず吹き出す中ガタノゾーアはゴジラの背中に隠れる。

「本当に最強最悪の怪獣なの〜?」

「ソウルライザーのデータがそう言っているのだ!間違いないまい」

「あ、菓子がつきた。ガタちゃん、俺はちよつと菓子を買ってくる。お姉ちゃん達の言うことを良く聞いておくんだぞ」

「解った。待つてる……」

と、ゴジラがガタノゾーアの頭を撫でてからその場から去った。ブラックはふむ、とその背中をみる。

「ゴジラの言うことは聞くんだな……」

「お菓子上げてたからでしょうか?」

「なるほど。お菓子か!」

「あ、私チョコ持つてるよ。ほら……」

と、袖口から10円チョコを取り出すシルバー。ゴジラが去った方向をみていたガタノゾーアが反応して振り返る。

「おお、反応した!」

「……食べ、たい」

「良いぞ。お前の力でこの辺の奴らを驚かしてくれたらな」

「解った……やる」

「いよおし。いい子だ」

「はい、これ食べて頑張つて〜」

と、シルバーが渡してきたチョコを食べるガタノゾーア。帽子が巨大化して、二匹の蛇が出て来て石像をパクリと飲み込む。

「おお〜!」

「あの小さなチョコ一つであれだけのパワーとは」

「あれたったの10円だよ」

「何!?よし、ならば高級チョコを与えまくるぞ!」

この場合金額より量が重要なのでは?と思っただが口に出さないペガッサであった。

「——フツ!」

「はっ。しやらくせえ!」

ピポポポと音を立てか球を放つ美少女に対して、青白い熱線を吐く黒衣の青年。

「私とは、相性が悪いんじゃないや無かったの?」

「直接喰らえば嫌でも炉心に響くからな。お前やジャミラの攻撃は、当たれば天敵だ……が、1対1の状況じゃそんなとろくせえ球あたるかよ」

昔ある人が言った。当たらなければどうという事は無い、と。少なくともゴジラに取ってゼットンのはその温度しか注意すべき点が無い。

最強の怪獣娘、ゼットン。『GIRLS』最強戦力ではあるが、タイマンなら『BLACK STARS』最強のゴジラに分がある。

偶然であつた彼らは戦闘になり、今に至るわけだが戦いはゴジラが優勢。

「取り敢えずお前がいなけりやあの馬鹿の侵略活動も捗——りはしないだろが、まあ……敵だし、暫く寝てもらおうぞ」

「貴方こそ、大人しく捕まってもらおう」

と、お互い再び戦闘を再開しようとした時だった。

『ギョオオオオオオオ!!』

何処から聞こえてくる叫び声。振り向くと巨大な二匹の蛇と数本の触手が天に向かって伸びるのが見えた。

「……ガタちゃん?」

「あれは、何?」

「悪いな。急用が出来た……お前と遊ぶのは、また今度だ!」

「——ッ!」

ゴジラが放ったけりをバリアーで防ごうとするゼットンだったがそのバリアーごと蹴り飛ばされる。直ぐに体勢を立て直そうとすると、目の前いっぱいを青白い光が包む。バリアーが一瞬で砕かれた。

「……よし、と……」

気絶し人間体に戻ったゼットンをベンチに寝かせたゴジラは池袋に向かって走る。

「うわ、何だこの状況……」

現場にたどり着くと触手に縛られた『GIRLS』のミクロス、レツドキング、ガッツ星人、アギラ、改造ベムスター、ゴモラと、締め付けられて嬉しそうなノーバに擦られているシルバー。そして触手の持ち主である帽子が途轍もない大きさになったガタノゾーア。

「ガタノゾーア！そんな変なのポイしろ！お菓子抜きだぞ！」
「変なのとは何だー！」

ゴジラの言葉に変なの扱いされた一人、ゴモラが叫ぶ。何故か味方のはずのノーバ達を締め付けたり擦ったりする割に『GIRLS』の面々は捕まえているだけのようなのだ。

「お菓子抜き、やだー……」

と、ゴジラに従い捕まえていた怪獣娘達をポイと放り捨てるガタノゾーア。

「い、今ですー！」

「んう……眩しい……」

ゴジラの背後でペガツサが叫びソウルライザーを向ける。眩い光が放たれガタノゾーアの怪獣の力が抑えられ帽子が見る見る縮小していく。そして、動き疲れたのか路面に横になって眠るガタノゾーア。

「良くやったなペガツサ」

「ペガツサ、グツジョブだ！」

「ペガちゃんお疲れ様。ブラックちゃん何にもしてないね」

ゴジラはガタノゾーアを肩に担ぐととっさの機転を働かせたペガツサを労う。ノーバとシルバーもペガツサを労いつつブラックをデイスった。

「指揮官が不甲斐ないと部下に逃げられるぞ」

「な、何だど!?ペガツサが逃げるなど——！」

「ありえないですよ」

ノーバの言葉に慌てるブラックだが、ペガツサ本人から否定される。

「皆さんだけで侵略なんて、あぶなかつしいですから……私がちゃん

と、面倒見ていきます！」

満面の笑みを浮かべるペガツサに、『BLACK STARS』達も笑みを浮かべる。

「よく言ったぞペガツサー！これからも私について来たまえ、ナーツハツハツハツ！」

「楽しそうなところ悪いんだけど」

「悪いと思うならまず謝れ」

「え？あ、ご……ごめんなさい……」

「いや謝らないですよアギちゃん。んで、貴方達……ちよーつとお話聞かせてもらおうかな」

「嫌でも着いてきてもらうがな……」

と、その声に振り返ると此方を睨んでくる『GIRLS』の面々。さらにはピポポポと音がしてゼットンもやってきた。

「リベンジマッチ……」

「や、やばくない？」

「こうなったら仕方ない………戦略的撤退だー！」

一同わき目もふらず逃げ出した。当然追ってくる『GIRLS』のメンバー。流石に町中で逃げるもの相手には遠距離攻撃が使えないのかビームなどは飛んでこない。

ペガツサは、人知れず笑みを浮かべる。大変なことになったが、やっと新しい自分が見つかりそうだと……。

番外編 『楽しいMとG一家』

大きな公園の広い砂場でリトルはペタペタと砂山の形を整えていた。

既にリトルの身長を超えた砂山を見て満足そうに微笑むと更に大きくする為に周りの砂を掘り――

「……あれ？」

不意に砂に埋めた手が堅い何かに触れる。掘り起こしてみると赤い玉が出てきた。

何だろうこれは？随分綺麗だ。

「パパに見せてこよう！」

と、元気に立ち上がり駆け出すリトル。途中池で水浴びをしているシン・ゴジラも見付け二人で父親の下に向かう事にした。

ゴジラは自分の尻尾を枕に眠っていたが娘達の気配にのそりと起き上がる。

リトルが満面の笑みを浮かべながら赤い球を片手にやってくる所だった。シンも濡らした髪から湯気を発生させながら歩いてくる。

「見てパパ！綺麗な石見付けた！」

「ん？おお、確かに綺麗だな………水晶玉か？」

と、リトルが見せてきた赤い球を眺める。誰かの落とし物だろうか？

「すいしよーだま？」

「私知ってる！願いを叶えてくれるんだよ！」

「うん？」

「未来を教えてくださいって頼むと教えてくれるの」

ああ、成る程。テレビで占い師等を見たのか。確かに教えて欲しいという願いを叶えている様に見えなくもない。

「パパは何かお願いしないの？」

「ん？んー、そうだな………リトルやシン達に友達が出来ますように、とかかな……」

何せ彼女達は力が強い。普通の怪獣娘だって人間の姿でドアノブを破壊してしまうのだ、怪獣王たるゴジラの同族たる彼女達が全力で遊べる相手など、同世代で見た事がない。願いが叶うと言うのなら彼女達と遊べる同世代に会わせてやりたい。と、その時赤い球が光り輝く――

「……………あん？」

気が付くと何処かの町並みに居た。ここは何処だろうか？ いや、それより……………

「リトル？ シン？ 何処行った二人共!？」

先程まで近くに居たリトル達の姿が消えている。赤い球が海栗の様になっているのも気にせず慌てるゴジラ。

すぐさまG細胞同士の共鳴を使い反応を探す。すぐに見つけた。どうやらお互い別の場所にいるがそこまで離れてはいないようだ。

ゴジラは周りも確認せずに走り出し、不注意故に人にぶつかった。

「きゃっ!？」

「つと、わりい。立てるか？」

「あ、はい……………」

「……………ゼットン？」

「へ？」

思わぬハプニングで冷静になったゴジラはぶつかった相手に手を差し伸べ、固まる。見知った顔だった。

が、直ぐにいや……………と首を振る。

「すまん、人違いだった。余りに似てるもので」

確かに相手はゼットンに似ているが、気配が少し異なる。

それに見た目も少し違う。ゼットンは額の発光体が黄色なのに対し彼女は赤色だ。それに胸の部分も色が青く髪も一部が青い。先端をリボンで纏めているしモミアゲだって長い。マフラーだってゴジラが知っているゼットンは付けていなかった。

「いえ大丈夫です……………あ……………」

「ん？」

不意にゼットン似の少女はゴジラを凝視する。何故かゴジラはその目が獲物を狙う肉食獣に見えた。

「あ、すいません。私はマガゼットンと言います。それで、何か慌てていた様ですけど」

「名前まで似てんな……って、そうだ！はぐれた子供達を探してるんだった！」

「……………あ」

ゴジラが慌てて走り去り残されたマガゼットンは名残惜しそうな声を漏らし手は空を切った。

「……………あれ？」

リトルは周囲を見回し首を傾げる。父親と妹が消えた。と言うかここは何処だろうか？

「おーい！パーパー！シンちゃん！」

気配は感じるのでそちらに向かいながら走る。と、不意に一人の少女が目にと留まる。

タコの足の様な尻尾を持った自分と同じぐらいの少女だ。

「……………？」

涙目でスケッチブックを持ってトボトボ歩いている。

「どうしたの？」

「……………誰も抱き締めてくれない……………」

『ふりーはぐ』と書かれたスケッチブックを持ってエグエグ泣き始める少女に、リトルは抱き付いた。

「えへへ、ぎゅー」

「……………ジャッパ、臭くない？」

「んー…………ヘドラお姉ちゃんて馴れちゃった♪」

リトルはそう言ってニパーと笑った。

「…………♪」

シン・ゴジラは家族とはぐれたが気配は近くに感じるので慌てる事なく水浴びをしていた。

満足したので池から上がると視線を感じた。見ると深蒼色の髪をしたダボダボの服を着た少女が見ていた。

「……………」

が、別段興味も無いので無視して去ろうとするシン・ゴジラ。が――

「――!?!」

突如尻尾の先端に激痛を感じ目を見開き振り返る。見ると先ほどの少女がシン・ゴジラの尻尾に噛み付いていた。

「ぐるぐる!?!」

「んー……噛めば噛むほど歯応えも味も変化する不思議なお肉。まるで食べた肉が生きてて常に変化し続けてるみたい」

「グオオオオオオオオエエエエツ!!」

シン・ゴジラは尻尾を振り少女を地面に叩き付ける。ぐぺー!と少女が尻尾を放した瞬間尻尾で引っ叩く。

「いたたた……………」

「グルウウー!」

頬を押さえ立ち上がった少女に向かってシン・ゴジラは警戒心を露わに吠える。少女もシン・ゴジラの敵意を感じ取ったのか臨戦態勢に入る。

シン・ゴジラはエネルギーを尾の先端に溜め、少女も口内にエネルギーを溜める。

一触即発と思われたまさにその瞬間――

「余所の子に迷惑掛けてんじゃねえ!」

シン・ゴジラの頭にゴジラの、少女は赤い髪の色肌の女性に頭を殴られた。

「痛い……………」

「何するのママー!」

「放射熱線撃つたら相手は痛いじゃ済まねーんだぞ? 怪獣娘でもない相手にそれは使うな…………お前は良い子だから、分かってくれるな?」

「……………うん」

「普通の子は体が直ぐに治ったりしねーんだよ！噛み付くな食べんな分かったなー！」

「うう、はい……………」

「分かればいいんだ」

と、二人は同時にそれぞれの頭を撫でた。

「悪いなうちの子が。この子食いしん坊で……………」

「いやいやうちの子の方こそ済まねー。この子は大抵の怪我から直ぐ治るから医療費は気にしないでくれ」

「そうか？こつちもある程度の熱には耐えられるから気にしないでくれ」

「ははは。まるで人間とは思えないな」

「まあ怪獣だしな」

「……………ん？」

二人は漸くお互いの遣り取りに違和感を覚えた。

「……………あんたの子もしかして、怪獣娘か？」

「怪獣……………？いや、うちの子は魔王獣……………」

「ん？」

魔王？怪獣？何言ってるんだ此奴、とお互いを不審がる二人。と、そ

こへ……………

「パパー！」

「ママー！」

「新しい友達出来たよー！」

と、二人の幼い子供が肩を組みながら走ってきた。

「リトル！」

「ジャッパ！」

「……………!?!？」

同時にそれぞれの相手がお互いの娘だと察した二人は、取り敢えず警戒を残したまま敵意を納める。

「あ、良く見るとイケメン」

「あん？」

「い、いやなんでもない……ああ！そ、その球！」
「ん？」

と、不意に赤毛の女性はゴジラの持つている赤い球を見付けた。

「これはお前のか？」

「いや、パイセンのだ……良かった、これで殺されないで済む」

「良く分からんが良かったな……でだ、すまないがGIRLSの場所を教えてくださいか？支部でも良いんだが」

「GIRLS？何それ？」

「ん？いや、国際怪獣救助指導組織……え、知らねーの？」

「知らん。つか、怪獣だらけのこの場所で何でわざわざそんな組織が必要なんだ？」

「……………マジか」

番外編 『楽しいMとG一家2』

「検索結果0つと……それにソウルライザーも繋がらない」

ゴジラははあ、と溜め息を吐く。

自分達が既に異世界の知識を持っているのだから、他の異世界がある可能性も考えてはいたが生きてたまま異世界に行く事になるとは……。

「しかし電波は通じるのか……」

それだけは助かった。ネットで大体の情報は集められる。

ここはどうやらゴジラの世界やGIRLSの世界と酷似した地球らしい。そこに擬人化した怪獣や、擬人化してない宇宙人、更に普通に人間も住んでいたりする世界らしい。

もうここ訳わかんねーな、と頭を掻くゴジラ。

「パパ、元気ない?」

「元気、出して……?」

「ああ、うん。ありがとな……」

空間を歪める程の重力の渦に対して莫大なエネルギーをねじ込み中和した事は有るが空間を歪めた事など無い。

また空間が歪みさえすれば歪みを広げ異世界に通ずる道を造る事も可能かもしれないがそこがアギラやモスラ達が居る世界に戻れるとは限らないし、そもそも空間を歪められる奴に知り合いが居ない。

「うーん、空間操る奴と戦ってりゃそのうち適応出来ると思うけど」

何せゴジラの本質は破壊だ。相手を確実に破壊する為に、適応する進化速度は伊達ではない。

「バーニングモード使ってみるか? あれなら空間が歪むほどのエネルギー出せるだろうし」

と、文字通り無限のエネルギーを扱う状態になろうか迷うゴジラ。しかしあれはエネルギーを上昇させるのに時間が掛かる。熱線として放つなら別だが……自身の温度を上昇させ続けていたら先にこの地球が蒸発する。∞度というのはそこまで上がる過程ですらヤバいのだ。

そう考えるとゴジラの生まれ故郷の地球は有り得ないほど頑丈だ。それはゼットンの一兆度の火球に耐えられる第二の世界でも言える事だが……。

「まあそんな事より衣食住だな……衣は変身し続けてりや良いだろうし食も手持ちの金が使えろみたいだし、問題は住か……さっきのマガオロチとか言う奴にホテルの場所教えてもらえば良かったか？……ん？」

「幼女と美少女を連れホテルを探す変態現る、と……」

何やら男がスマホを片手に呟いていたが次の瞬間シン・ゴジラの熱線がスマホを溶かした。

「ひい!？」

男は命が惜しいのか逃げていった。

「……アイツ、やな……感じ、する」

「そうか、父さんもそんな感じがした。良くやったな」

「……………♪」

ゴジラに頭を撫でられシン・ゴジラは気持ち良さそうに目を細める。

取り敢えず金は有る。銀行は使えないが手持ちは大分残っているのだ。国から金が貰える公務員みたいなモノだったし。

「取り敢えずネカフエ民にでもなつて仕事探すか？いや、そもそもネカフエ何処だよ……………」

「あ、あの…………」

「あ？」

と、不意に声を掛けられ振り返る。そこには先程のゼットン似の少女、マガゼットンが居た。

「何か有ったんですか？困ってるみたいですけど」

「ああ、実はどう帰ればいいのかさっぱりでね」

「道に迷ったと言う事ですか？」

「道に迷ったと言うか、未知に迷ったと言うか…………」

返答に困りポリポリ頬を掻くゴジラ。

流星に異世界に迷い込んだ等と言っても病院に連れて行かれるだ

けだろう。

「その、良かったら家に来ませんか？」

「ん？」

「家、広くはありませんがお客様を泊めるぐらいなら」

「いや、でも……良いのか？ホテルの場所だけでも教えてくれりや良いんだが……」

「困った時はお互い様です。それに、ここが何処か解らないなら仕事だつてないんでしょう？何時までもホテルに泊まれるとは限りませんよ」

「うっ……」

それは確かにそうだ。手持ちは現在30万程。3人が泊まり続ければ直ぐに無くなるだろう。

「ここで会ったのも何かの縁です。ね……？」

「ううむ……じゃあせめて金を払わせてくれ。ホテルより安くしてもらえると助かるが」

「はい。そう言う事なら……」

マガゼットンはそう言うのとニッコリ笑った。

「ふいー、パイセンも何とか許してくれたな」

額の汗を拭き取りやりきった顔をするマガオロチ。見付けてくれたあの黒髪 of イケメンには感謝してもしきれない。

「今度会ったら何かお礼しねーとな。これを機に縁を作るのも良いかも、なかなかイケメンだったし……」

と、その時マガゼットンの「ただいま」と言え声が聞こえてきた。

「おうお帰り！」

「あの、母さん……実は頼みが有るの」

「頼み？」

「うん。泊めて欲しい人達が居るの……」

泊めて欲しい人達？北欧の逆ハーレムメンバーの一部だろうか？

そんな泊めるなら一人ぐらい摘まみ食いしてもバレないだろうか？

(いやいや何考えてんだ私、仮にも娘の恋人を……でもたくさん居るしな……)

などと考えているとマガゼットンがジツと見てきているのに気付いた。

「あ、ああそうだな……うん。良いんじゃないか？」

「良かった。じゃ、呼んでくるね」

しかし誰を連れてきたのだろうか？あのバットとかいう奴だと嬉しいのだが……

「紹介するね。こちら、ゴジラさんとその子供達のシン・ゴジラちゃん
とリトルちゃんです」

「どうも、よろし………あ」

「……あ」

番外編 『楽しいMとG一家3』

「はあ、帰る場所が解らない、ねえ……大変だな」

「検索しても出て来ないしな」

「ふーん。ブルトン使われて異世界にでも迷い込んだか？」

「……………」

そんな簡単に異世界に来れるのなら先程難しく考える必要は無かったな、と頭を押さえるゴジラ。

「じゃあそのブルトンって奴を使えば帰れるのか？」

「ああ、以前ブルトン使った別世界のアタシの同族も居たしな。でも在庫少ないし結構高いぞ？」

「ネット通販かよ……どれどれ？」

ゴジラは0の数を数えていき、はあ、と頭を抱えた。手持ちでは全然足りない。仕事探すか。

「なあ、仕事行ってる間子供達の世話頼んで良いか？」

「ん、仕事？異世界に来て働くのか？」

「元の世界に帰って銀行に行けば金は有るがまた此処に来れるとも限らねーしな。返せねーかもしれないのに借りるわけにやいかんだろ」

「ふーん、何処ぞの風来坊とは大違いだな。良いぜ、気に入った。金が貯まるまでここに住めよ」

「ああ、助かる。金が貯まればホテルなんか……」

「ん？いや、別に住んでくれても構わんど。金は払ってくれるんだろ？ブルトンは高いし、余計な事に金使えんの？」

「う、それは……すまん、何から何まで世話になる」

「と言うわけで今日から家にホームステイするゴジラだ。みんな仲良くするように」

と、ゴジラ達を娘達に紹介するねオロチ。女ばかりだな、とゴジラ。普通の男なら肩身が狭い思いをする所だろうがそこはゴジラ。

怪獣娘達に囲まれた唯一の男のカイジューソウル持ちは伊達では

ない。特に気にする事なくよろしくな、と簡単な挨拶をした。

「わーい！リトルちゃん一緒に住めるの？」

「うん！いっぱい遊べるよ！」

と、マガジャツパとリトルはお互いの手を取り嬉しそうにピョンピョン跳ねる。

「うわー、背高い。髪きれー」

「大きい……と言う事はボクより重い？」

「……？」

シン・ゴジラは青い髪の毛の鳥の様な格好をした少女と硬そうな装甲に身を包んだ無表情な少女に眺められ首を傾げていた。

「あ、と……そうだ。その子、ゾーアやオロチ入れてもこの中じゃ最年少だから優しくするように」

「え、最年少……？」

装甲の少女はシン・ゴジラと自分の身長、そしてある部分を見比べる。

「………世界は不公平だ。全て土に返してやりたい」

「お、落ち着いてグラキちゃん。グラキちゃんも直ぐに成長するよ………」

と、赤毛の跳ねっ毛の少女が装甲少女を慰める。

「ほ、ほら……きつと体重はグラキちゃんより有るよ……」

「シンの体重はごじゅ……と、そう言やこっちじゃ何故か怪獣姿の時の体重になるんだったな。シンは9万2千トンだ」

「ボクより軽いのか、そうか」

と、少女はどんよりと黒いオーラを放つ。どうやら体重が重いのを気にしているらしい。済まない事をしたな、と少し反省するゴジラ。

「うわー、グラキ姉様完全にいじけてますねーwwww誰かさんのせいでwwww」

と、ニヤニヤ笑った少女が話し掛けてきた。何故だかこの少女を見ていると以前シャドウミストで暴走していたキングジョーのファンを思い出す。

「あ、どうも私、ゼツパンドンと申します」

「絶版ドン……う？そりやまた、売れそうな名だな」

「ええそりやもうなかなか人気ですからね私」

「そうなのか……所であれは俺のせいかな？」

「ですわwww」

ゴジラははあ、と頭を掻き落ち込む少女に近付く。

「あー……グラキだったか？その、元気出せよ。家の妹にはすんげー重い奴居るし、そいつより軽いって」

「……ホント？」

「ああ、何たって彼奴20万トンも有るんだぜ」

結構重いだろう？と、心の中でビオランテに謝りながら励まそうとするゴジラ。いや、あの妹なら重いと言われても喜びそうだが……

「……」

「あちやー……やっちゃったー」

と、ゴジラはグラキがプルプル震えているのに気付き戸惑っているとゼツパンドンがニヤニヤしながら肩をすくめる。

「グラキ姉様の体重はなんと……おっと、これ以上は私の口からはとてもとても……」

そう言うときススとゴジラから距離を取る。

「………に………せん………だよ」

「ん？」

「こちとら21万5千トンだよ！文句あるかあああ！」

と、胸辺りから赤いレーザーを放って来たので正面から受け止める。強靱なゴジラの体に傷こそ付けたが直ぐに治った。

「えつと………」

「ううううっ!!」

ゴジラはヒョイとグラキを持ち上げてみる。

「………!？」

「あー、確かに重いな。けど……うん、気にする程じゃないと思うぞ」
ソツと降ろそうとしたがズシューンと大きな音を立てる。確かに重いが持てない程じゃ無い。ゴジラが今まで投げ飛ばしたどの怪獣より重くとも持てない程では無かった。

「……………ボク、持てるの？」

「ん？ああ……………」

実際持ち上げた訳だが。と、続くはずだった言葉は。パアアと輝く様な少女の顔を見て喉に引っ込んだ。

「良かったねグラキちゃん」

「うん！」

「……………よ、良かったな」

取り敢えず誉めていると視線を感じた。振り向くとリトルとシン・ゴジラがジツと此方を見ていた。

「……………抱っこ」

「私も！」

「はいはい……………」

ゴジラは二人の娘もキチンと抱っこしてあげた。

番外編 『楽しいMとG一家4』

「さて、取り敢えず飯にするか。ゴジラ、お前等苦手なものあるか？」
「特にないな。手伝おう」

「お？料理出来んのか？」

「元々一人暮らしでな。GIRLSに就職する前は色んなバイト転々としてたし、多才だと自負してる」

マガオロチが台所に向かうとゴジラも続く。ここ最近ラドンに料理を任せていたから少し鈍っているかもしれないが手伝いぐらいなら出来るだろう。

「ん？そっういや飯の時間だったのにオロチ来ねえな……誰か知らねー？」

「ああ、オロチ姉様なら腹押さえて蹲ってましたよ」

「それを早く言えー！」

と、マガオロチは慌てて奥へと消えていく。

暫くして顔を青くしたオロチを連れてきた。

「どうしようゴジラ！オロチが腹痛いって！」

「!?!」

腹痛如きで大袈裟な、と思いましたが周りの反応からするにただ事では無いらしい。

「うそ!?オロチちゃんが……?あの、何時も何でも食べちゃうオロチちゃんが……そんな……」

むしろ何でも食べるからこうして腹を壊したのでは?と思いがながらゴジラはふと出会った時の事を思い出す。あの時オロチはシン・ゴジラと喧嘩していた。そして、何でも食べる……

「……………——マガオロチ、ちよつと診せてくれ」

「あ、ああ……………」

オロオロするマガオロチからオロチを受け取り腹に手を当てる。中で何かが微かに動いた。反応してる。

「……………よっつ」

「うっ!?!」

ゴジラがオロチの背を叩くとオロチは口を押さえ顔を青くする。
そして――

「うええええー！」

と黒い何かを吐き出した。

「……………何だこれ？」

「シンの一部……………」

「……………」

シン・ゴジラは黒い固まりの前に膝を突くと尻尾の先端を付ける。
すると黒い固まりは形を変えながらシン・ゴジラの尻尾と融合した。

「……………どう言う事だ？」

「そいつ何でも食うんだろ？シンと喧嘩してたのもそれが理由なら、
此奴の腹ん中にシンの一部が有ったんだ。俺らの細胞は切り離され
ても生き続けて、一つに戻ろうとする」

「……………う？」

ゴジラは跡も残さず完全に融合したシン・ゴジラの尾を撫でるとシ
ン・ゴジラは不思議そうに首を傾げるが気持ち良いのか目を細め尻尾
をゴジラの腕に巻き付けた、

「一つに戻ろうとする？」

「ああ。周囲のエネルギーを吸い込んで増殖して身体を手に入れた
り、自身を取り込んだ生物の体を乗っ取ったりして俺の元に来る。ん
で、俺を食おうとしてくる。ビオランテやオルガ見たいな例だな。逆
に進化の過程に変化を取り込むのも居る……………メガガラスやデストロ
イアがこの例だ」

と言ってもマガ一家には誰の事なのかさっぱりだろうが。

「まあ取り敢えず、もう大丈夫だと思ってくれて良い」

「そ、そうか……………なら良いんだ」

「ジャッパちゃんとおっ風呂〜♪」

「リトルちゃんとおっ風呂〜♪」

リトルとジャッパは仲良く風呂に向かって行った。ゴジラはその

間に食器を洗う事にした。

「すいません、ウチ大家族なので量が多いでしょう？手伝います」
「ん？そうか、助かる」

赤い癖っ毛の……パンドンと言う少女が手伝いを申し出てくれたので洗い終わった食器を拭いて貰う。

「よし、これで最後……ほいっと……」

ゴジラが少し体温を上げると食器に付いていた水分が蒸発していく。と、不意に視線を感じた。

「……ゴジラさんは火属性なんですか？」

「属性？まあ、熱が得意ではあるな……後は電気吸収して磁場を発生させたりエネルギーを体内で暴発させたり出来るけど……」

「た、多才ですね……私なんて炎出す事しか出来ないので羨ましいです。つて、あ……すいません私暑苦しいですよね？」

「ん？別にそんな事無いが……」

「……へ？」 ↑出現した街の気温を40℃以上にする魔王獣。

「……ん？」 ↑暴走すると地球を体温だけで焼き尽くす怪獣王。

同じ火属性でもお互いの性能は天と地ほどの差がある。最も、今まで魔王獣として最強の炎属性として君臨していたパンドンにはそんな事想像も付かないが。

「お風呂上がったよ〜！」

「上がった〜♪」

「あ、こらジャツパ！風呂は最後に入れて言ったろ！」

「……………賑やかだな」

「はい。みんな元気で仲の良い自慢の家族です」

「そうか……それは、羨ましいな……………」

パンドンの言葉にゴジラが笑みを浮かべると何かを察したのか、シン・ゴジラがやってきてゴジラに抱き付いてきた。

「……ん。大丈夫だ、お前も自慢の家族だよ」

「……………♪」

「さて、俺達も風呂入るか」

「う……………」

「え？一緒に入るんですか？」

「ん？まあシンはまだ一人じゃ体洗えないしな」

「え？あ、そっか……シンちゃんってその見た目でまだ0才なんですかね……」

一瞬ポカンとするパンドンだったが直ぐに納得する。

「早く自分でも洗えるようになれよ？」

「……………や」

「や、って……お前な」

「覚え、たら……パパ、もう入って、くれない……」

「別に洗えるようになっても入ってやるって……行くぞ」

風呂から上がりドライヤーでシン・ゴジラの髪を乾かすゴジラ。乾かすと手櫛で解し、マガ一家から借りた櫛で髪を梳かしていく。

「……………♪」

シン・ゴジラは艶々になった髪を満足そうに撫でるとゴジラから離れる。今度はリトルがやってきたので同じ様に髪を梳かす。

「……………ん？」

不意にゴジラが顔を上げると列が出来ていた。

「ジャッパも〜」

「わらわの髪も綺麗にするが良いぞ！」

「はいはい。押しずに列べ……ゼットン、お前もか」

結局全員やる事になった。だが自分で頼んでおきながらからかってきたゼツパンドンだけはめり込ませておいた。

そして最後……

「あ、あたしは別に良いって……」

「んー、ここまで来たらコンプリートしたいからなあ……俺の我が儘で悪いがやらせてくれないか？」

「お、おう……」

マガオロチの髪を梳かしていくゴジラ。

男に髪を触られるなどオロチを作った時以来で少しくすぐったい。

「若い奴らの後にあたし見たいな婆で悪いな」

「お前もまだまだ若いだろ。それに、俺は好きだぜこの髪。燃えてる火みたいで、人間達の街を燃やした時を思い出す……」

「あんま誉められてる気がしないな」

「ならお前の髪が好き、だけで良いか」

「……………でもこの髪近々また切られるんだよなあ……………」

番外編 『楽しいMとG一家5』

マガ一家の世話になる事になり一日目の朝。ゴジラは朝食を作ると仕事を探す為に街に出た。

「ん、朝か……………飯作らねーと」

マガオロチは目を覚ますと欠伸をしながらリビングに向かうと、既に料理が用意されていた。

「……………手紙？」

内容は『仕事探しに行ってくる。リトルとシンを頼む』と言うもの。仕事、一日目から探しに行ったのか。

「取り敢えずシンちゃんとリトルちゃんに伝えとくか……………」

「……………」

「そっか、パパ仕事探しにいったんだ」

「ご飯を食べながら何でもない事のように呟くリトル。元々仕事中は預かって貰っていたリトル達にとって別に驚く事でもない。

「お前等のパパはどんな仕事してたんだ？」

「んーとね、誘拐犯倒したり強盗倒したりしてたよ」

「警察官か？」

「けーさつかん？リトルちゃんのパパけーさつかんなの？かつこいねー」

「ジャッパちゃん！遊ぼ！」

「うん！良い池があるの〜」

リトルとジャッパは二人仲良く外に出て行く。シン・ゴジラは姉と父が居なくなりどうするべきかと迷う。

「この家の誰かに遊んで貰おうか？」

「……………」

「……………?」

誰に遊んで貰うか考えているとオロチを見付ける。彼女には尻尾を噛まれた恨みが有るが……

「……………食べる?」

そんな事を考えじつと見詰めていると勘違いしてのか食べていた菓子を分けてくる。

「これ食玩付いてるんだ」

と、箱から何やら取り出す。それは、片手に乗るサイズの電車の玩具。

「——!?!」

それを見たシン・ゴジラは身を固める。

「カー!」

「…………」

オロチが地面を走らせたそれがシン・ゴジラに向かっていくとシン・ゴジラは光線で電車の玩具を溶かした。

「何すんの!?!」

「……………?」

オロチは文句を言うがシン・ゴジラも涙目になり足を押さえながら自分の行動に首を傾げていた。

リトルとジャツパが池から上がりそろそろ帰ろうとするとゴジラに出会った。

「あ、リトルちゃんのパパ」

「パパ!お仕事は?」

「ああ。見付かったぞ、雑貨だ……まあ、基本的には暇だけだな」

「おお…………」

ゴジラとしては力仕事が得意だったが仕方ない。この世界にはシャドウは居ないのだ。

それに見た感じ平和だし事件等も起きなさそうだ。

「……………ん?」

ふと見るとベンチに座り煙草を吹かしている男を見付けた。ここは公共の場で、しかも禁煙で芝生の上だというのにマナーの悪い奴だ。

まあどうでも良いかと去ろうとすると

「……………ん？なんかくせえ……………あ！あの時の化け物じゃねーか！公共の場に来てんじゃねえ腐敗臭が染み込むだろうが！」

「……………」

「帰ったぞ。途中ジャツパ達も拾った」

「おうお帰り……………って、うお!?どうしたその血!?何の仕事に手え出したんだ!？」

「ん？ああ、違う違う。これ返り血だ……………」

「なら良いんだが……………」

ホッと安心するマガオロチをパンドンは戸惑いの視線で見詰めた後ゴジラを見る。

「……………良いのかな？」

番外編『楽しいMとG一家6』

マガオロチはゴジラの仕事場が見たいと言いつ出したリトルとシン・ゴジラ、リトル達と遊びたがったジャツパとオロチが付いてきた。「ここか……」

『雑貨店芦沢』という場所だ。

「いらっしやーい……と、マガオロチ達か」

「パパ！」

「とと、リトル……悪いな、今仕事なんだ」

飛びついてきたリトルの頭を優しく撫でる。するとシン・ゴジラも身を低くして頭を向けてきたので撫でてやる。

「おや、お客様かなゴジラ君」

と、その時奥から眼帯をした白衣の男性が出て来た。

「あ、すいません店長、俺の知り合いです。仕事場を見に来たようで……」

「そうか……ゆっくりしていつてくれ……」

そういうと白衣の男は店の奥に引っ込んだ。

「ねーねーリトルちゃんのパパ！これなあに？」

「それか？それは無重力弾……別名ペンシル爆弾。相手を上空に打ち上げ何故か爆発させる兵器だ」

「パパ、これは？」

「カドミウム弾。昔なら食らうと俺も少し痛い……今は平気だけだな」

「ねえねえお兄さんこれなに？食べれる？」

「それはあらゆる物体を溶かすオキシジェンデストロイヤーだ。バーニングモードで細胞を活性化させないと俺でも死ぬ」

「……………これは？」

「ファイヤーミラー。光線系の攻撃を一万倍にして跳ね返す」

「……………ここは兵器ショップか？」

「雑貨店だけど？」

マガオロチは呆れた目で売り物を眺める。大丈夫なのだろうかこ

の雑貨店は。一応、普通の商品も売っているようだが。服とかも有る。

「これは？オキシジエンデストロイヤーに似てるけど……………」

「それはオヤジジエンオオキクナルヤー、使用者を巨大化させる薬品だ。で、そっちはオヤジジエンデストロイヤー。使用者を小型化させる……………」

「……………」

それを見たシン・ゴジラは目を見開き距離を取った。何やら警戒している様だ。

「ぐるるるー！」

「ど、どうした……………シン？」

「それ、危険……………変な臭い、危険！子供、おつきくなるー！」

「……………」

ゴジラとオロチはシン・ゴジラの反応に首を傾げた。しかし理由は解らない。

「ねえねえパパ！可愛い服有った！」

「有った！」

と、そこへリトルとジャツパが可愛らしい服を持ってやってくる。

「パパ！これ着て良い!？」

と言ったのはジャツパだ。

「……………あ、リトルちゃんのパパ……………」

「別にパパでも良いぞ？」

ゴジラに頭を撫でられ恥ずかしいのかジャツパはグギョギョと鳴いて俯いていた。

「……………パ、パパ……………」

「ん？何だ、ジャツパ……………」

「……………パパ」

「何だ？」

「えへへ、パパ〜」

「うん……………」

その光景を見てマガオロチはやば、うちの子天使過ぎると胸を押さ

えていた。

「ゴジラがジャツパ姉のパパ？ならあたしのパパ……？」

「？オロチ、パパの娘？姉妹……オロチお姉ちゃん？」

「……………ふふーん！これからそう呼んでも良いよ！」

と、末っ子故に今まで一度も呼ばれた事が無い呼び名に胸を張るオロチ。それに対してシン・ゴジラは……

「……………やだ」

「なんで!？」

その日の夜。

「パパ、一緒に寝よう」

「ジャツパちゃんと一緒」

「わかったわかった……」

二人に手を引かれながら寝室に向かうゴジラ。そんなゴジラを微笑ましく見詰めるパンドン。ふと、不機嫌そうなゼットンに気付く。

「どうしたの姉さん」

「だって、あれじゃあ母さんと再婚したみたいで……………でも義父も
ありかな？」

「……………」

頬を赤くして涎を垂らす長女を見て次女は苦笑いを浮かべるのだった。

番外編 『楽しいMとG一家7』

「平和だな……」

ゴジラはバイトの帰りにふと、空を見上げ眩く。

ここにはシャドウが出ない。犯罪者も早々に遭遇したりしない。しなかった、昨日までは……

『我々はX星人とM宇宙ハンター星雲人。諸君等の子供は預かった。大人しく我等の地球侵略の駒となるが良い』

そう言つてモニターに映された映像は仲良く遊ぶ子供怪獣達。その中央には見るからに怪しいオブジェが存在してカチカチ針を回している。

画面が切り替わり変なサングラスを付けた全身タイツに加え頭からアンテナの様な物を生やした変人とデカイゴキブリが映る。

『繰り返す。我等の地球侵略のこ——』

テレビの中央に椅子の足が突き刺さりブツリと映像がと途切れる。

「……さて」

ゴジラは立ち上がり指をゴキゴキ鳴らす。

「取り敢えず……」

今日、マガオロチ繋がりてゴジラと知り合つたキングオブモンスは首をゴキリと鳴らす。

「打ちのめすか」

マガオロチは肩をグルグル回した。

「何言つてんだマガオロチ、打ちのめす訳無いだろ」

「ん？」

「打ち殺すんだよ」

「ああ、そうだったな……」

さて、何故こんな事になっているか、それは今日の朝に遡る。

「世界子供ランド？」

「ああ、この辺りに出来たアミューズメントパークだ。行ってみない

か？」

キングオブモンスが九時頃に突然マガオロチの下にやって来た。要件はそのアミューズメントパークへの誘いだっただ。

「ジャッパやオロチが丁度良い年齢だろ？友人を誘えば少し安くなるみたいだな」

「うーん……あ、じゃあ私も一人誘って良いですか？」

「構わないけど、誰かママ友が居るのか？」

と、キングオブモンスが首を傾げた時、奥から寝癖を付けたゴジラがノツソノツソと欠伸をしながら現れた。

「……ん？客か？」

「……オロチ、お前何時の間に再婚を」

「違うつすよ！ほら、例の……」

「ああ。お前が大切な球を見付けてくれた……キングオブモンスだ、改めて礼を言う」

「んあ？ああ……」

とまあこんな感じで三人が知り合いジャッパとオロチ、リトルとシン・ゴジラ、バジリスとスキューラを連れて世界子供ランドに向かったのだ。

中央に有るゴジラタワーと言うのを見てゴジラはどこかで見た様な遊園だなど首を傾げている内に、何時の間にか子供達とはぐれた。

そして先程の映像だ。

「完璧な作戦だ。これは諸君等M宇宙ハンター星雲人の協力が有ってこそ」

「いやいや、君達の計算機が有って初めて上手く行った作戦だ」

作戦は簡単。何故か人の姿で存在している怪獣達の子供を遊びに来させ、特殊なテープで爆弾が置かれている迷子センターに閉じ込める。

後は親を脅し侵略作戦に乗り出させ、そのうちそれぞれを操るテー

プを作ればいい。

「今度こそ地球をこの手に……………おお、新しい計算結果が出た」

「我らの勝利が書かれているのでしような」

「そういつて紙を取る。そこに書かれていたのは『一分後に全滅』と言うものだ。」

「……………は？」

次の瞬間彼等が居たゴジラタワーの一階付近が丸ごと吹き飛び、ゴジラタワーが倒れる。

直ぐ様、脱出したX星人達。こんな時の為に上層部を宇宙船と一つにしていたのだ。が、ズズズン！と立て続けに三度揺れ天井を一本の腕が突き破る。

メキメキ音を立て穴を広げると現れたのは三人の怪獣。そのうち一体を見た彼等は目を見開く。

「そ、その尻尾……………貴様、ゴジラか!？」

「あ？誰だてめえら……………生憎敵対した人間で覚えてんのは俺の名前を叫んできた奴だけだ」

現れたゴジラを見て彼等は焦る。ゴジラの適応能力は高い。それこそ最初は何とか操れても次第にG細胞が無効化する様になってしまいう程に。

しかしここに来た理由は何だ？そう考え、はつとする……………

「動くなゴジラ！少しでも妙な行動を取れば貴様等の子供達が……………!？」

と画面に迷子センターを映すと壁をガリガリ食べるオロチとスキューラ、オブジェ型核爆弾の燃料を食べるリトルとシン・ゴジラが映った。

「……………」

「さて」

「早速」

「殺す」

「まあ色々有ったが楽しかったな。オロチ、お前中々良い男を見付けたな」

帰り道、キングオブモンスが笑みを浮かべながらオロチにそんな事を言う。

「い、いやだからそんなんじや……」

「そうか？なら私が貰って良いか？良い男だし子供にも優しいし、何より強い」

「や、そ……それは……」

「どうだろうゴジラ、良かったら私の家に来ないか？セキューラやバジリスも、お前の子供達と仲が良いようだし」

スルリとゴジラに腕を絡ませ家に誘うキングオブモンス。オロチはオロオロ成り行きを見守る。流星にキングオブモンスに文句を言うことは出来ない様だ。

「……いや、止めておく。彼処にはもう一人、娘が居るんでね」

「……そうか、先に見付けられなくて残念だ。しかし住みたくなったら何時でも言ってくれ」

番外編 『楽しいMとG一家8』

パンドンは一人買い物に来ていた。

もう付き添いが必要な年でもないし、食料の調達に来たのだ。

「んー、これぐらいで良いかな？いや、ゴジラさん達来てから量も増えたし、もう少し……」

「俺がなんだって？」

「ひゃわ!？」

唐突に後ろから掛かった声にビクリと固まる。独り言に応えが有るとつい驚いてしまう。

振り返るとゴジラが居た。このスーパーで売っている鯛焼きを食べていた。

「ご、ゴジラさん……吃驚したあ」

「悪いな。仕事の帰りだったんだ……持つか？」

「あ、ありがとうございます。家大家族でオロチちゃんも食いしん坊なので重くって」

ゴジラの力はグラキを持ち上げている事から知っている。多少気後れはしたがゴジラも今は家の住人ではあるのでご厚意に甘える事にした。

「そういやパンドンは料理しないのか？食材の量をキッチンと計れてるし、知識は有るんだろ？」

「お母さんの手伝いをしたくて学びはしたんですけど、やった事はないですよね……私ってほら、熱いからただでさえ暑くなるキッチンには近付くなって……」

「そうなのか？」↑マントルの中を泳ぎ火山から出てくる怪獣王

「あ、そういえばゴジラさん熱いの平気でしたね」

「まあな……寒いのも嫌いなだけで苦手でもないし」

実際北極の氷の中で活動して潜水艦を破壊し事も有るし。ただ体温が著しく下がると一時的に冬眠する。

とはいえ直ぐに復活出来るがそれは怪獣なら珍しい事でもないだろう。まあ炎属性の怪獣で、というなら珍しいだろうが。

「……ゴジラさんって苦手な属性って有るんですか？」

「怨霊モードだと基本的に無敵だな。物理攻撃は一切効かん。対物シールドと違って一瞬の間もねーし……ただ、守り神みたいな存在の攻撃や体内からの攻撃は効く。まあ口の中から入れられて俺にダメージを与える必要が有るとしたら爆弾だろうからエネルギー吸収しちまえば問題ないけどな」

確かに針とか刃物とか入れて食道辺りを傷付けても即回復させられてそれらは胃の中で溶かされるだろうし、爆弾ぐらいしか有効な手はないだろう。だがゴジラは基本的にエネルギーを吸収する。

戦わなければいけない人間が哀れすぎる。

まあ並大抵の攻撃なら防げる炎の中で一方的に炎弾を撃てるパンドンも人の事を言えないが。

会計を済ませ帰路を歩くゴジラとパンドン。不意にゴジラがパンドンに一つ質問をした。

「ところでパンドンは結局、料理を覚えたいのか？」

「あ、はい……出来れば、で良いんですけどね。何時かは私も嫁に行くわけですし……」

と、少し照れながら頬を掻くパンドン。

「そうか……なら俺が見てやろうか？俺ならお前の熱に対して反応しないし」

「え、良いんですか？」

「世話になってる身だ。家の住人に返せる恩が有るなら返しておきたいしな……幸いな事に今日の食事当番は俺だ。どうせなら好きなものの作り方教えてやるよ、何が良い？」

「じゃ、じゃあ四川麻婆で……」

「………解った」

辛いのが好きなのか。リトルやジャツパ達の為にも甘口を別に作ってやらないとな、と嘆息するゴジラ。

オロチ？何でも食えるだろあの子は。

「……………う……………あ」

何やら呆れた様な顔をするゴジラに首を傾げていたパンドンはふと気付く。

自分とゴジラの身長は見上げる程有る。ゴジラは短足ではないし、歩幅には当然差が有るはずだが一度も差が出ていない。

チラリとゴジラの足を見ると少し歩き難そうだった。パンドンの歩幅に合わせてくれているのだろう。

思わずクスリと笑ってしまった。

「？何だ……………」

「何でも……………そういえばゴジラさんってジャツパちゃんにパパって呼ばれてますね」

「ああ、何か懐かれてな……………」

「ジャツパちゃんのパパなら、私もお父さんって呼んで良いですか？なーんて——」

「良いぞそのぐらい。好きにしろ……………」

「……………あ、えっと……………またの機会に」

番外編 『楽しいMとG一家9』

ゴジラは朝ご飯をパンドンと共に作る。

「朝は重い止めとけ。魚なんかを網で焼いて油を少し落としたのとかが良いかもな……」

「は、はい……あ、味噌汁は……」

「どれ……ん、出汁が取れてるな。そろそろ具を入れるぞ」

「わかりました……でも、何で一緒に入れないんですか？」

「煮込み時間によって硬さが変わるからな。小さい子なら噛み易くて良いんだろうが末妹のオロチはむしろ噛み応えが有るの好きみたいだし」

と、言いながら入れる順番を指示してくれるゴジラ。その間焼けた魚をひっくり返し反対の面を焼く。

匂いに連れられたのかオロチが目を擦りながらやってきた。

「ごはんー？」

「まだ出来てない。これで我慢しろ……」

そう言っただけでゴジラは魚と一緒に焼いていた茶色くなった骨を渡す。

ボリボリと煎餅の様に食い取り敢えず満足したのかりビングに向かった。

朝飯も終わり、更に今日はシフトも入っておらずフリーのゴジラは子供達と遊ぶ事にした。

といっても近くの川で泳ぐリトル達を見守りながら横になっていくだけだ。

冷蔵庫から持ってきた缶ジュースを飲みながら欠伸をする。

「……釣り竿でも持ってきてくりや良かった………寝るか」

危険が迫れば解るし……と、欠伸をしていると不意に歌声が聞こえてきた。やたら甲高い声で頭痛を覚えるレベルの歌だ。

リトル達も顔をしかめゾーアに至っては気絶している。と、シン・ゴジラが謎の怪音波を攻撃と判断したのか音の発生源に向かって熱

線を放った。

「あつつあ!?!」

そして轟ツ!と竜巻が発生してバツサーが出てきた。見た感じ直
接当たったわけではなさそうだがビル群を纏めて両断する高熱だ。
近くを通過した熱風にやられたのか僅かに赤くなつた顔を押さえ
てゴロゴロ転がっていたので川の水を掛けて冷やしてやった。

「あー熱かった……つてくつさあ!?!」

「騒がしい奴だな。ほら、ファ○リーズ」

「………心が痛い」

ジャツパが使っていた川の水故臭いに敏感なバツサーにはきつ
かつたらしいので川から上がった後のシン・ゴジラやリトルに使つて
やる予定だった消臭剤を吹きかけてやると何故か落ち込まれた。

「で、さっきの喧しくて不快な音は何だ? 拾い食いでもして腹を壊し
たか?」

「女性に対してなんたる発言……!」

「冗談だ。オロチの姉妹だから念の為な……」

「あー……オロチちゃん、この前辛い目に遭つたんだから拾い食いし
なくなれば良いんですけどねえ……」

と、苦笑するバツサー。

「でもオロチちゃんが食べてお腹壊すのつて初めてだったんですよ
ねー」

「こつちも俺らの細胞を取り込んで腹壊すだけつてのも初めてだな
……効かない奴は居たが」

「まあゴジラさん大分チートみたいですからね……お母さんも私より
強い、なんて言っていましたし」

「お前の歌もチートだと思うぞ? 気絶するかと思つたし……」

「………私、そんなに下手?」

「ああ」

どこかののけ者のいない島のカフェに入り浸っている鳥類レベル
の酷さだった。

「そんな事無いもん! ちゃんと聞いてて!」

「仕方ねーな。おーい、シン、リトル、ジャツパ、ゾーア、耳塞いでろ」
「むー！」

その対応に頬を膨らませたバツサーは見返してやろうと大きく息を吸う。

「わたしは〜バツサーあ〜♪オーブを探してる〜♪どこにいるの〜
んどこそ〜ブツコロ——」

「うるせえー！」

先程より間近で聴かされゴジラも耐えられなかったのか思わず叫ぶ。

何と言う酷い歌だ。怪獣ランドの島周辺で流したら怪獣が嫌う臭いだとか磁気だとか面倒な制御をする必要が無くなりそうだ。

「じゃ、じゃあゴジラさん歌ってみてくださいよ」

「俺？まあ、お前よりはましな歌を歌えると思うけど……………」

と、息を吸うゴジラ。どんな歌が出るのかとニヤリと笑うバツサー。しかし……………

「~~~~~♪」

「……………」

思いの外上手い歌が流れた。その歌声に気付いたリトルやシン・ゴジラ達が上がってきてゴジラの膝に頭を乗せて眠り始め、ジャツパも二人の頭の隙間から頭を乗せる。

ゾーアもデカイ帽子をゴジラの背中に乗せスヤスヤ寝息を立て始めた。

「……………その歌は？」

「未希から習ったんだ。リトルの好きな歌なんだとよ……………正確には歌じゃなくて植物の化石が纏っていた電磁波を音にしたものだから何だとか……………まあ詳しくは知らん」

「う、上手いですね……………」

「そうか？男の声だし、正直眠ってくれるとは思わなかったな……………」

と、リトル達の頭をに撫でてやるゴジラ。

「むにやむにや……………パパ……………」

「……………ジャツパちゃん、スツゴく懐いてますね」

「俺等は臭い平気だからな……………」

「それに比べて私は…………お姉ちゃんなのになあ……………頑張って慣れようとしたんですけど逆に敏感になっちゃって……………」

「恥ずかしげに頬を掻くバツサー。ゴジラはそんなバツサーの頭を撫でる。」

「ふあ!? な、何を……………!?!」

「ん? 良い子だからな、頭を撫でて……………」

「いや、あの……………恥ずかしいと言うか……………て言うか何で……………」

「ジャツパの臭い、苦手なのに慣れようとしたんだろ? それで敏感になっちゃまって、落ち込むのはそれでも慣れてやりたいてって思ってたろ?」

「……………うん」

「よしよし良い子だな…………♪」

「……………ッ!」

「ボフ! と赤くなるバツサー。何でこんな事になっているのだろうか? 頭が混乱してきた……………と、不意に敏感になってしまったバツサーの嗅覚がジャツパの刺激臭以外の変わった臭いを嗅ぎ取る。」

「……………この臭い、お酒……………?」

「転がっている空き缶を取るとジューズにも見えるラベルの酒の缶が落ちてた。」

「よーしよひ……………いいこらなあバツサー……………」

「ふわわ!? や、やめ……………! ってくさ! ジャツパちゃんがくつさあ!」

「抱き寄せられ頭を撫でられるバツサー。しかし現在ゴジラの脚にはジャツパ達がおおり、臭いがダイレクトに来る。やばい、意識が朦朧として……………」

「……………ん? 何やってんだバツサー」

「と、突然ゴジラが突然素面しらふに戻った。」

「アルコールに適応したのだろう。パツと離れるゴジラ。助かったような残念なような……………」

番外編 『楽しいMとG一家10』

「……………」

グラキはジツと目の前の体重計を見詰める。装甲の様な服を脱ぎ捨て素っ裸だ。

ゴクリと唾を飲み、ゆっくり体重計に乗る。

「魚は先に臭みを取る必要が有るからな、まずは切れ目を入れてお湯を掛けて、鍋に酒を——」

「ぬああああ!!」

「——!?!」

パンドンに料理を教えていると突如聞こえてきた叫び声。驚いたパンドンが熱湯を持つ鍋を振り上げてしまいゴジラに掛かる。

まあそこはマントルを泳いで富士山から出てくる怪獣王。特に気にせず叫び声の聞こえた場所に向かう。

「どうしたグラキ!?!何が有った……!?!」

「ゴキブリ!?!ゴキブリでも出たの!?!」

と、パンドンとゴジラが揃って脱衣所の扉を開ける。

先に書いたと思うがグラキは服を脱いでいて、ここは脱衣所だ。

「あ、ゴ……ごめんグラキちゃん……」

「ゴキブリ……じゃ、ねえか……なあグラキ、さっきの悲鳴何だったんだ?」

ゴジラはゴキブリの気配が無い事を察すると首を傾げながらグラキに尋ねる。しつこいようだが裸のグラキに……。

「出てけー!」

「お……お父さん、流石にその反応はどうかと……」

顔を赤くして叫ぶグラキと照れが入りながらも最近お父さんと呼べるようになったパンドンから追い出されるゴジラ。不思議そうに首を傾げている。

「そりやアレだお前。子供とは言え女の裸を見たからだろ」

と、呆れた様子のかマガオロチの言葉にゴジラはようやくああ、と納得する。

「つってもなあ、俺は前世そもそも性別気にもした事ねーんだよ」

「そうなのか？あ、性別が無いとかか？ほら、あの……単独で増える、みたいな」

「そりやジラ辺りの特徴だな……俺はほら、雌雄同体なんて特性持たない恐竜から怪獣化したから、番が居ないんじやそもそも性別なんて意味がねーだろ？だから気にした事ねーの」

「あー……そういやお前って元恐竜だっけ？」

ただ一頭、その島に住み孤独の中暮らしていた。それだけなら、ひよつとしたら世界の何処かに番となる雌が居たかもしれない。

だがゴジラは恐竜ですらなくなった。体も何倍も大きくなり、姿も変わった。怪獣になって得た感覚で見付けた仲間はミニラとトリトルを除いて自分の細胞を取り込み変異した怪獣だけ。

それ以外の気配など引掛かりもしなかった。番は何処にも存在しなかった。故に、男女のアレソレなど気にした事も無い。

「オマケにそのせいで人間嫌いだったんだ。女の裸に一々興奮する感性なんざ持ち合わせてねーよ」

「……つまり夜寝込みを襲っても失敗する可能性が高いわけか」

「あ、襲う？何を」

「いや、何でもねーよ」

ゴジラの言葉にパタパタ手を振り誤魔化すマガオロチ。ゴジラも特に気にせず八つ裂きせんべいを食う。

「……あ、あの……ゴジラさん」

「お、グラキ……さつきは裸見て悪かったな」

「うっ！いや……それは、鍵掛けてなかったボクも悪いしゴジラさんは心配してくれただけだし……ごめんなさい。その……見てないよね？」

「何がだ？ああ、ひよつとして体重か？」

「……………」

どんより落ち込むグラキ。『女子って何気に体重気にするなあ』と思うゴジラ。ぶつちやけ何故体重を気にするのかさっぱり解らない。体重が軽ければ吹き飛ばされる確率や投げられる確率、捕まったまま空を飛ばれる可能性が減ると言うのに。

「グラキはウチの中じゃ一番重いからなあ……！」

「うっさーい！」

と、ゲラゲラ笑うマガオロチ。

グラキがキレた。余りからかいすぎると反抗期に入られるんじゃないだろうか？

「まあ落ち着けグラキ。ほら、新しいの三人も居るわけだしもう一番じゃないって……」

と、言いたい所だが実際幾つもの前世を持つゴジラの最大重量は9万トンだったりする。が、正直に真実を伝えては傷付ける事になるだろう。ゴジラははあ、と頭を掻いた。

「取り敢えずグラキ、俺から計ってみて良いか？」

「え？うん……ま、どーせボクのが重いんだろうけど」

と、諦めムードなグラキ。ゴジラは体重計を前に、すう、と息を大きく吸った。

「ふん！」

ズーン！という音とともに地面が揺れ体重計が粉々に砕け散った。

「……………」

「どーやら重すぎて計れなかったみたいだな」

「……ゴジラさん、誤魔化すの下手」

「すまん。俺もぶつちやけ有り得ねーと思った」

グラキの言葉に頭を掻くゴジラ。が、グラキはクスリと笑った。

「でも、元気出たよ。ありがとう」

「おう。パンドンやジャツパーからもそう扱われてるし、居候中は父親みたいなもんだと思って悩み事が有ったら相談してくれ」

「……父親……………うん。ありがと、パパ……」

番外編 『楽しいMとG 一家11』

「ふふふ。到頭この時がやってきましたね」

全身タイトツの変な女が同じ様な格好をした女達の前で笑う。

「この地には多くの怪獣達が人の姿を得てコミュニケーションを築いている。この地の怪獣達を支配し、我らは今度こそ地球を手にするのです。今回は協力者達もいますしね」

「父上！こっちじゃー！」

「引っ張るなゾーア……………」

海の中で五つの陰が動いていた。

一つはゴジラ。悠々と海の上を泳ぐ。その後ろにはシン・ゴジラ、リトル、ジャツパ。先頭には髪をゴジラの腕に絡みつけ引っ張るなマガタノゾーア。

「この辺りにのう、海底遺跡が有ったんじゃよ。ジャツパ姉上も楽しみであろう？」

今回ゴジラが来たのはジャツパとゾーアの付き添いだ。何せゾーアは一度海に潜って暫く帰って来なかったのだ。

「それでは潜ってゆくぞー」

この辺りには海底火山でも有るのだろう。水温が上がってきた。

暖かい水温の中魚もかなりの大きさに育っている。有毒物質が出ていないのだろう。

まあ流石に海底火山の火口付近に近付く魚は居ないみたいだが。

「皆久しぶりじゃの〜♪」

ゾーアは寄ってくる魚達に笑顔を向ける。深海魚達は不気味な風貌だが海底で過ごす事も多かったゴジラは慣れてるしシン・ゴジラは何か普通に会話に混じってる。

「あー…………お前等、多分怖くないと思うぞ？」

ゴジラはブラックシーデビルに怯え背中に隠れるリトルとジャツ
パを安心させようとブラックシーデビルに頭を手を置く。噛まれた。
「……………」

ゴジラがギロリと睨むとブラックシーデビルはアンコウとは思え
ない速度で逃げ出した。

「(っ)……じゃ?」

目的地に着いたのかゾーアは満面の笑みを浮かべたが直ぐに困惑
する。何か、妙な物が有った。あれは果たして何だろうか?

「ん、あのUFO……」

それを見たゴジラは目を細める。見覚えが有る。あれは確か
……………

『おや、早速怪獣ですか。これは幸先が良い』

「喋ったのじゃ!?!」

聞こえてきた声に吃驚したのかゴジラの背に隠れるゾーアとシン・
ゴジラ。必然的にゴジラが先頭になった。

『我等はキラアク星人と海底人の同盟組織。我等の目的は——』
「死ね」

思い出した。前世でムカつく事に人間に管理されてた頃の更に自
身を操ったムカつく奴だ。それだけじゃない、此奴等が埋め込んだ装
置のせいで人間に操られたのだ。実にムカつく。

同盟とか言ってたが片方に覚えはない。が、気にせず熱線を放った
ゴジラ。UFOは破壊されその後ろに有る遺跡も一部が消し飛ぶ。

一瞬、人が居る部屋が見えたが恐らく海底人だろう。纏めて消し飛
んだ。

キラアク星人はある意味不死である。人の姿が保てなくなっても
液体金属状になり休眠出来る。その間、死ぬ事は無い。まあ……

「ほれオロチ、土産だ。石みたいに見えるが貝類みたいに中が柔らか
くて上手いぞ」

「ウエーイー！」
熊蟲見たいなものであるから、外的要因で普通に死ぬが。

番外編 『楽しいMとG一家12』

「くくく。まさかこんな所に居たとはな。呑気に風呂に入りおつて。しかし、その幸福も今日までよ……」

双眼鏡を使い一軒家を覗き見る不審者はニマニマと笑み浮かべる。

「さあ行け！我が最強の怪獣よ、ゴジラを倒すのだ！」

「いや……」

「……………へ？」

「ん？何だ？」

「どうした父上？」

「なんかあつたー？」

「んー？」

一緒に風呂を入っていたゾーア、ジャツパ、リトルは唐突に顔を上げたゴジラに疑問符を浮かべる。

「…………今爆音が聞こえたような…………気のせいか？まあ良いか…………リトル泡流すから目を閉じろ」

「うん」

ゴジラ達が風呂から上がり、風呂上がりの牛乳を飲んでしていると不意にインターホンが鳴る。

「はい？」

ゴジラがドアを開けるとそこにはゴジラの同族の気配を纏った少女が居た。その両肩からは金色の竜の首が生え胸辺りが横に避け谷間が剥き出しになっている。その辺りは緑になっており裂け目の周りに牙の様な装飾が有る。

両手の袖は長く伸び、赤い稲妻の様な模様が有る。

「どーしたゴジラ、客か？」

と、そこへマガオロチがやってくる。

「お久しぶりですお父様！貴方の愛娘キングゴジラですよお♡」

「おっ・おおっ……あ、はいはい………キングゴジラ、大きくなったな
〜」

あれ、どんな関係の子だっけ？と首を傾げるゴジラ。見た目からして母親候補はキングギドラかメカキングギドラ、バトラとビオラントだろうか？しかし全く覚えがない。

「えっと、麦茶だ……」

「どうも♪」

オロチから麦茶を受け取ったキングゴジラはニコリと微笑む。その正面にはゴジラが座り背後では子供達が眺めている。

「キングゴジラだったか？すまん、やっぱりお前みたいな子供が居たか思い出せない」

「本当にパパの子供なの〜？」

と、バツサーが疑わしげに睨む。

「ええ本当ですよ。正確にはとある科学者がお父様の細胞を元に作り出したクローンにお父様と死闘を繰り広げた怪獣達と融合させた合成怪獣なんです♪」

「………あ、居たな」

と思いつくゴジラ。そんな事も有った……確かあの頃は何度も怪獣がやってきて面倒な時期だった。

「でもお前、脳は人間じゃなかったか？」

「博士ならマグマの中で焼け死にましたよ？お陰様で私は自由を取り戻したんです。ま、その後死にしましたが。で、バラバラに転生したんですよ」

「その博士はどうした？」

「ロリコンは殺しました」

「……ロリコンだったのか？」

「はい。幼女の入浴を覗く変態でした」

とんでもねー変態だ。そんな奴に苦勞させられた過去を今すぐ焼却したい。聖杯って何処で手に入るのだろうか？

「てことは、パパのクローン？SF映画みたい……！」

「そう思っただけいいわよりトル姉様♪」

「……………」

「貴女とは似た者同士かもねシン姉様」

と、リトルやシン・ゴジラに笑顔を向けるキングゴジラ。

「へー、何か親近感が……てことはゴジラさんより強いんですかあ？」

と、ケラケラ笑うゼツパンドン。

「ええ、実はそうなんですよ」

「パパより？凄い……」

「ゴジラさんより強いんだ」

「お父さんより強い怪獣が居たなんて」

「多才そう……ねえねえ飛べるの!?パパと違って！」

「ゴジラさんよりww」

「……………」

ゴジラはその光景を見ながら青筋を浮かべる。アタシも似た様な事が有ったなー、とこの後の展開を読み「父上の方がすごいぞ！」と言っているゾーアを筆頭にゴジラを誉める子供達を連れその場から離れる。

「で、誰が誰より強いって？」

番外編 『楽しいMとG一家13』

新しい家族が増えゴジラとキングゴジラは生活用品を揃える為に買い物に向かった。

「今更ですけどお父様とマガ家の皆さんってどういう関係なんですか？」

「唐突だな」

「少し気になりました」

キングゴジラの生前は、洗脳されていた頃がほとんどだ。だがおかげで知識は存分に得れた。特に自身のオリジナルであるゴジラの情報にふんだんに与えられた。

だからこそ異様に思う。彼は本来同族以外を何とも思わない性格のはずだ。少なくとも自分の世界線ではそうだった。怪獣を発見したら即座に攻撃するほどに。

対してやけに人間に優しくかった様な気もする。いや、人が乗っているかもしれない潜水艦を壊したり工場を焼いたり、人に興味を持ってなかった、が正しいのだろう。それこそ妙な話だが。

戦闘後、疲れて人間を無視するならともかく圧倒していても放置していた。まあそれでも親しみを持たないには変わりなかったが。

が、今回ゴジラは確かな親しみを持って彼女達と接していた。それが気になる。

「……ま、きっかけはジャッパの父親呼びなんだろうな」

「？」

「俺には本来の子が居ない。リトルは養子だし、シンは厳密には分身だ……家族なんてもう増えないもんかと思ってた。だから、ま……嬉しかったのさ」

「ははあ、なる程……」

「それにマガオロチも、前世との関係がないから……リトル達の母親代わりであるラドンともまた違った距離感が新鮮で良い」

別にラドンとマガオロチの間に差が有るわけではない。どちらも親しい友人だと思し、共に子を育てる子育て仲間だとも思ってい

る。

　　というかゴジラの中には家族（リトルやシン。絶対守りたい存在）か仲間（GIRLSのメンバーや妹達。守ってやりたい）。それから他人（どうなろうと知った事じゃない、というか少し嫌い）と敵（殺す）ぐらいしか無いだろう。

　　つまり現状、ゴジラの中に家族以外の特別は居ない。いや、仲間というだけで特別なのだが……。

　　案外彼がモテるのはそれも一因であるのかもしれない。誰にも恋した事の無い彼なら、誰と比べる事も無く愛してくれる。それは惚れた男の最後の女になれる名誉にも劣らぬ幸福だろう。

「ま、それでも一因何でしょうがね」

　　家事上手、子供の面倒見が良い、長身、強い、イケメンとまあ、随分と要素が揃ったものだ。女ならほっとく者は少ないだろう。

　　まあ彼の本质、他人に興味が無くむしろ前世の影響で人間を嫌っているという事を知れば人も離れるだろうが。その点、GIRLSは彼の基準でいえば人間ではなく怪獣娘という種族だったのは僥倖なのだろう。

「まー私は従順な娘ですしい？お父様が何時か誰かと結婚するのを願ってますよ？ま、母親は一人じゃなくても良いと思いますけどねえ」

番外編 『楽しいMとG一家14』

春だというのにやけに冷える今日この頃。炬燵をしまったのは総計だったかと後悔するマガオロチ。ふと気づく。ゴジラ達がいらない。「まだ寝てんのか?こんな時間まで珍しい……………」

と、ゴジラ達の部屋に向かうマガオロチ。ドアを叩く。返事が無い。首を傾げドアを開くと布団の中で三人仲良く抱き合って眠るゴジラ達。

「おい、起きろ。朝だぞ……………おい?」

声をかける。反応はない。

揺すってみる。反応はない。

「……………」

ひんやりしたゴジラの肌に触れ違和感を覚える。ひんやりしている……………冷たい。とても……………

「んなあ!?お、おいゴジラ!?リトル!シン!しっかりしろ!!」

「んー?どうしたんですかマガオロチさん……………」

と、マガオロチの叫び声を聞いてキングゴジラが目をごすりながらやってくる。マガオロチの娘達も何事かと集まってきた。

「あら、お父様達冬眠してるんですね」

「と、冬眠……………」

その言葉にマガオロチはそつとゴジラの首に触れる。かなりゆっくりにだが脈がある。

「ゴジラって冬眠したのか……………」

「お父様なら北極間でも北極海でも活動できますよ。身体能力は格段に落ちるので氷の中に落とされると抜け出せないことが殆どですど」

「殆ど?」

「過去お父様は氷の中から出て来たこともあるそうです。その後巨大な猿と何の問題もなく戦ったそうです……………少なくともエネルギーが貯まっている状態なら深い氷の中に落とされない限り冬眠はしないかと……………」

「じゃあこれは？」

「多分ですけどリトル姉様に合わせてるのでは？最近暖かくなつたのに、急に寒くなつてリトル姉様見たいに未成熟な体だところの気温差には耐えられないでしょうし……まあようするにリトル姉様さえ起こせばお二人も目覚めるかと」

よく見ればリトルだけやけに深く眠っているように見える。

「どうする？暖房でもつけてりや起きるのか？」

「んー……パンドンさん、ちよつとこっちに……」

マガオロチがエアコンの温度を上げていく中、キングゴジラはちよいちよいととパンドンを手招きする。首を傾げながらもよつてくるパンドンは警戒心が無さすぎる。

「えい♪」

「へ……？」

トン、と背を押されゴジラ達に向かって倒れるパンドン。ゴジラとシンの瞳がうつすら開く。

「いたた……あ、ごめん！すぐ退くね……ん？」

ぬう、と四本の手が伸びてきてパンドンを捉える。

「……温い」

「ぬくぬく……」

「により！」

ゴジラとシンに左右から抱きしめられあまり乙女らしくない叫び声を上げるパンドン。ゴジラはリトルをパンドンと自分の間に入るとパンドンを逃がさぬように力強く抱きしめた。

「はわ!?はわわわ………！」

ボシユウ！

「あつっ!?皆離れろー！」

マガオロチが慌てて部屋から出ていく。一兆度の炎を放てるゼツトンは平気そうだが。

「……んみゆ、暖かい……」

と、リトルが目を開く。それにつられてゴジラとシンも体を起こす。

「ふあゝ…………よく寝た」

「ん…………」

「よし、リトルも起きたな。俺も起きるとするか……………ん？」

と、ゴジラは顔を赤くして目を回しているパンドンに気づく。

「?……………どうしたパンドン、もう朝だぞ?」

「きゆう……………」

番外編 『楽しいMとG一家15』

「……………はあ」

マガオロチはため息を吐いてどこか遠くを見つめている。

「はあ……………」

「どうしたマガオロチ？」

「あ、ゴジラか……………いや、その……………そろそろ時期が近づいてきてな。はあ……………」

ため息を吐きながら自分の髪を弄るマガオロチ。その目は逃れられぬ宿命を背負った者の目をしていた。

首を傾げるゴジラ。

「と言うわけで、なんか知らんか？」

「あー……………もうそんな時期かー」

と、グラキが机に突っ伏しながら言う。

「母さん、トラウマになってるもんねー」

と、パンドンが眉をしかめる。

「？妻は知らんが何かあったのか？」

と、ゾーアが首を傾げる。

「うーん、まああったねー。あれは怖いよ」

と、顔を青くするバツサー。

「ママ、大丈夫かなあ……………」

と、心配なのか涙目のジャツパ。

「まあまあ最初は勝てるから良いんじゃないですかｗｗｗｗ」

と、笑うゼツパンドン。

「帰ったら慰めなきや……………」

と、ゼツトン。

結局何一つ解らないのだが……………。

「まあ近々お母様が赤黒い彼奴に髪を斬られたあげくボコボコにされるんですよ。首締められたりビルに叩きつけられたりｗｗｗｗ」

「……………ほう」

その言葉にゴジラはスツと目を細める。そしてゆっくりと立ち上がる。

「少し用事が出来た……ちなみにだが、赤黒い其奴は何処にいる？」

「手、伝う……」

「おや？カチコミですか？良いですねえ。私も手伝いますよお」

「ま、まま待て！おいこら、ガイを倒すのは俺の役目なんだぞ！」

「あ？」

と、誰かが邪魔してきたので睨めばゼツパンドンだった。

「………パンドン、説明」

「あ、うん。実はゼツパンドンちゃんはお母さんを痛めつけた人のことが好きみたいで………」

「どんな男だ？」

「えつと……無職の風来坊で立ち入り禁止のテープを無断で越えたりお風呂に入れなくなってジャツパちゃんを苛めて食べようとしたアイスが食べれなくて私を苛めて女の世話になるヒモ男……かな」

「よし、塵一つ残さずこの世から消してやろう」

「ふぎけるな！ガイを倒すならまず俺から倒し——」

次の瞬間ゴジラの拳骨を食らい倒れ伏すゼツパンドン。完全に目を回していた。

「赤黒い奴……赤黒い奴……いねえ」

「いませんねえ……」

「………いない」

三人で探すも赤黒い彼奴らしき人物は見つからなかった。赤黒いおっさんなら居たが別人らしい。何でも浮気が奥さんにばれてダークグレーと言いつくすも許されず身を隠してららしい。

ヒモではないらしいので別人だろう。

「あ、その如何にも就職してなさそうなハーモニカの兄さん、この辺りで赤黒い奴見なかったか？」

「いや、見てないが」

「そうか、邪魔したな」

番外編 『楽しいMとG一家16』

結局見つけられなかった。

赤黒い彼奴というのはいったいどんな奴なのだろうか？

「すまんマガオロチ、方々探してみたんだがそれっぽいのか見つからんかった」

「い、いや気にしないでくれ。何というか、運命で決まってるようなもんだし……アタシだって最初は相手を痛めつけてた訳だし」

「そんなもん知るか。俺はお前等が気に入っている。赤黒い其奴に關しては何も知らん。鼻肩するのはそれで十分だ」

「鼻肩とかするんだな」

「俺は平等な神なんかじゃねーし」

土地神の名は与えられているが、破壊神などと呼ばれていようと、結局は一生物に過ぎないゴジラ。

当然身内には甘くなるし他人には興味も寄せない。身内を傷つける者は等しく敵だ。

「いつそその日ついてくか？」

「あ、いや……多分ゴジラじやついてこれない」

「何……クソが、ついていたらぶち殺してやるのに」

忌々しげに頭をかくゴジラ。心配されてると思うと少し胸が熱くなる。

「ちなみに私もやられました」

「妾もやられたぞ！出番すらなく」

「私もやられました」

「ボクも……」

「ジャツパも」

「わ、私も……」

「私も……」

「そうか、やっぱり殺しにいこう。どうにか会う方法ないか？」

と、立ち上がるゴジラ。ゼツパンドンが今度は先程の失敗から学んだのか死角にテレポートし不意打ちを打とうとするが尻尾で壁に叩

きつけられた。

「よしまた倒したぞ。で、会いに行く方法知ってる奴いる？」

「知らん」

「そうか……怪獣だったら気配を探れるのになあ……」

落ち込むゴジラ、ジャツパやリトルが背中を優しく叩く。

まあ聞けば猶予は後一週間ほどあるらしいし、それまでに何とかするしかないだろう。

「お父様も他人を守ろうとするんですね？意外ですよ、てつきり同族にしか興味ないかと」

「俺は身内には優しいんだよ。アンギラス虐めた偽物、メカゴジラもぶっ壊しにいったし……」

「？与えられた情報通りならお父様って恐竜に戻されたところをアンギラスにやられたのでは？」

「別の世界線の話だ。しかしあそこは妙な世界だった……メカゴジラはいるし、アンギラスだっていたはずなのに俺は動揺もせず敵と認識してたし、ビオランテが何故か栄養補給し続けてるし、キングギドラがわざわざ高所から地面に叩きつけてくれるとか説明してくれるしラドンについて忘れてたし……うん、へんな世界だった」

「そりゃ子供向け——おっと、何でもありませんよ？」

「……………」

マガオロチははあ、とため息をはいた。いよいよ来週だ。ビルを叩きつけられビルに叩きつけられ髪を切られ首を絞められ殴られる。

思い出しただけで胃がきりきりしてきた。

折角伸びてきた髪もまた斬られるのか……………。

「……………はあ」

「そんなに行きたくないなら行かなきゃ良いだろ」

「そうは言ってもなあ……………ん？」

「よ……………」

「どう——うぷ!？」

何時の間にか来ていたゴジラに思わず叫びそうになるマガオロチだったがゴジラに口を押さえられる。

「しー……子供達が起きちまうだろ」

「わ、悪い……で、何だよゴジラ……」

「いや……お前にしてやれることが、恥ずかしい事に何もなさそうなんだな……俺に出来ることがあるなら言ってくれ。俺に出来ることなら何でもする」

「ん？今何でもって……」

「？ああ、何でもだが……」

「………い、いや……すまん。えつと………ん」

「ん？」

一瞬だけ呆けたマガオロチは慌てて涎を拭くと櫛を渡してきた。

「髪……梳いてくれ。私の髪、好きなんだろ？」

「まあそのぐらいなら……」

「よし終わったぞ……——寝てるし」

マガオロチの髪を梳いてやっていると何時の間にか寝ていた。変な態勢で寝ているのは体を痛めるだろう。布団まで運んでやる。

「………っ……」

「……？」

と、不意にマガオロチが身動きをして唸った。

「……痛い……やめろ……怖い、助けて……」

「……」

「やめろ、それは……髪は、誉めてもらったのに……」

「……」

ゴジラはマガオロチの頭に手を当てる。荒い寝息だったマガオロチは安心したように規則正しい寝息をたてる。手を離す、また唸る。

「………はあ」

掛け布団を捲り中に入り、マガオロチの体を抱き締める。

「大丈夫、大丈夫だ……夢の中でくらい、守ってみせる」

「……………」

漸く完全に寝付いた。ゴジラはふあ、と欠伸をすると自分も目を閉じた。

「「あー!?!」」

「……………」

娘達の声に目を覚ますマガオロチ。目を開けると口をパクパク開ける娘達の姿が見えた。

「さ、先越された……………」

「子持ち相手に、とんだゲス野郎ですねwww」

「い、良いなあ……………お母さん」

「パンドン姉は前に抱きしめてもらってたじゃん」

「……………」

抱きしめる?と首を傾げたマガオロチはガクンと何かに引っかかる。見ればゴジラの腕が引っかかっていた。

「ふあ!?!」

「ん?おお、朝か……………」

「ご、ご、ご……………ゴジラ!?!何で同じ布団に」

「昨日抱いて寝たからな」

「だ——!?!」

この後滅茶苦茶勘違いされた。

番外編 『楽しいMとG一家17』

「ゴジラ君、そろそろ上がって良いよ」
「うす……」

雑貨店の中にあつたウルトラカプセルを整理していると芦沢店長が声をかけてきた。どうやら朝からどこか上の空だったゴジラに帰宅を促す。

「帰ったぞー」

「あ、お帰りなさい」

と、ゴジラが帰宅すると出迎えたのはキングゴジラだけ。他の気配は、一つの部屋に集まっている。

「……………」

「お、ようお帰り……………」

「……………手酷くやられたな」

その気配がする部屋、マガオロチの部屋に向かえば包帯を巻いたマガオロチが布団にくるまっておりその周りに魔王獣やシン・ゴジラ、リトル達が居た。

ジャツパーやリトルに至っては涙目だ。

「いやー、例の赤黒い彼奴にやられちまってさー……………いや、アタシも奮闘したんだけど勝てなかったわ。はっはっは……………は、はは……………」

陽気に笑いながらもやがてポロポロ涙を流すマガオロチ。

「ア、アタシ頑張ったんだ……………なのに……………彼奴、また……………髪切つてくるし……………」
「……………」

よく見ると長い髪の一部が途中乱雑な切り方をされていた。

「最初はアタシが勝ってたのに……………ビルに叩きつけられるし、ビルを投げつけられるし、髪引っ張られて切られるし……………」

「ママ頑張ったよー、強かったよー」

「オーブに一度勝ってるんだからママは凄いよ」

「ひつく……………あんなのありがよ……………」

「ん？忘れ物かいゴジラ君……………」

芦沢店長は戻ってきたゴジラに不思議そうな顔をする。基本的に忘れ物などしないゴジラが仕事後戻ってきたのは初だからだ。

「探したい奴が居る。何か良い道具はないか？」

「……………ふむ。ではこの尋ね人ス○ツキを貸そう」

「……………これ、どう見てもアレだよな？ま、いつか……………マガオロチの髪を持ってた奴」

カタン、とステッキが倒れ、指した方向を見ると赤い髪を持った黒スーツの男が居た。取り敢えずボコった。

「くそ、人違いだったか。まさか拾った髪に頬ずりする変態が居たとは……………ええつと、赤黒い彼奴……………ん？なんか反応が妙だな」

ステッキはゆらゆら迷うように揺れ、漸く倒れる。何時か見た赤黒いおっさんが居た。

「なあアンタ……………マガオロチに関して何か知ってるか？」

「?!い、いや……………知らん！仮に知ってたとしてもダークグレーだ！セーフだ」

「……………」

「彼奴も違ったか、となるともう一つの反応か……………」

赤黒い奴を捜すが見つからず、代わりにラムネを少年と飲んでる男が居た。前回あったハーモニカの男だ。

「ん？お前は……………また赤黒い奴を探してるのか？」

「ああ、見つからないがな……………ん？」

と、ステッキがなにやら震えている。地面に放れば男をピタリと指した。

「？何だ、このステッキ……………」
「……………」

「戻ったぞ」

「あ、お帰りなさいお父さん。大丈夫だった？なんか、この近くで地面が熱で解ける謎の事故が三件くらい起きたらしいけど……………」

「ああ、平気だ……………それよりマガオロチ」

「今は落ち着いて眠ってる…」

「……………そうか」

暴れる！怪獣王！

最近何か妙だ。無性に叫びたくなるし、傷の治りが早いし、ドアノブが壊れるし、この前なんて気付いたら周りに大量の不良が転がっており犬に懐かれていた。

医者に通ってみたが原因は不明。俺が女なら不思議ではないんだけど、とか言ってた。どういう意味だろうか？

後なんか人を見ていると無性にイライラし始めてきた。その頃から変な夢を見る。

俺は島に住んでいて、でっかいトカゲそっくりな生物と仲が良くてもある日、光が落ちてきて皆死ぬんだ。生き残った俺は光を放った存在、人間に対してとても怒っていて街を踏み潰す。

俺はそれぐらいデカかった。

「……………ん？」

後五感も鋭くなった。何処からか、笑い声と猫の悲鳴が聞こえてくる。そちらに迎えば公園で猫除けシートに囲まれた砂場で猫に向かって石を投げるクソガキ共がいた。

「おっしー！はっずれー」

「早く当てるよー！」

「次俺なー！ん？」

猫除けシートの一部を退かしてやると猫は一目散に逃げ出した。

「ちよちよちよ！何すんだよー！」

「人がせつかく楽しんでたのによー！」

「……………お前らさあ、恥ずかしくねーの？」

「は？何々？猫だって生きてるんですよーってあれか？」

「うわあ、クツセエ！」

「きやはははー！うっけるー！」

「ならお兄さんが責任取って私らと遊んでくださいよー、そしたらもう動物苛めませーん」

ああ、本当に……………ムカつくな。

国際怪獣救助支援組織、通称GIRLS所属の怪獣娘、アキ、ミク、レイカは暴走した怪獣娘が現れたかもしれないという報告を受けたピグモンの指令で街をパトロールしていた。

「でもさー、この前ザンドリアスが暴走してたばつかじゃん？そんなポンポン暴走した怪獣娘が居るのかねー」

「さあ……ですが一般人に被害が出ている以上放って置くわけにもいきませんわ」

「うん。早く止めなきゃ」

「つて言ってもそうそう現れるわけ……」

「ミクさん、それフラグです……」

ドガアアアアアアアンツツ！

レイカが言った瞬間爆音が響き渡る。アキとレイカがミクを無言で見た。

「え、え!?!私のせいじゃないよね!?!」

「それより、早く現場に行こ……!」

と、アキが慌てて走り出し現場に向かう。そこはどうやら公園のようだ。学生服を着た男女が複数横たわっており、公園の中央には怪獣娘と思われる人影があった。その足に怪我をした猫が擦り寄っている。

「……………」

「……え?」

アキに気付いたのか振り返った怪獣娘を見てアキは驚愕し普段眠そうに半分ほど閉じられている目を見開く。

顔の下半分を隠すようなマスクは口元を露出させ、牙のような装飾が施されている。

全身は黒くゴツゴツした皮のようなコートを羽織っている。自分も含めて露出の多い怪獣娘と違いロングコートにロングパンツと露出は少ない。ただ、コートの下には何も纏っておらず、逞しい筋肉が見えた。

「お、男の……子……?」

年は自分とそう変わらない。間違いなく男。

圧倒！怪獣王！

「アギちゃん速いく……………って、男!？」

「……………」

追い着いてきたミクも同様に少年を見て固まる。

彼女達は怪獣娘として変身出来るようになってからだが、お互い変身している時、何となく怪獣の気配とでも言うようなモノを感じるようになった。そして、今まさに目の前にいる少年からも確かに怪獣の気配があった。

コートには背鰭のような物が付いており、尾も生えておりマスクと合わせてコスプレのようだがコスプレではない。変身しているのだ。ソウルライザーを使ったソウルライドとは違う、完全なる暴走だが、変身には変わりない。カイジューソウルが存在する証拠だ。

「グルルルウウツツ!」

「はあ……………はあ……………お二人とも、やっと追い着きました……………って殿方あ!？」

「だよね!だよね!」

唸り声に視線を向けたレイカも驚きミクも同意を求める。少年は威嚇するように唸るだけで向かってこない。

「ま、まあいいや!先必勝!ソウルライド!」

「!ガアアア!」

ミクが変身し走り出すと少年も反応する。ミクに向かって駆け出し、拳を構える。生前は格闘を得意とする怪獣だったのだろうか？

だが、ミクとて五百万馬力を誇るカプセル怪獣1の怪力を誇るミクラスの生まれ変わり。格闘は得意だ。が――

ドオオオオオッ!

相手はその上を行く。野生の勘か、怪獣の本能か、咄嗟に腕を交差させ一歩下がったミクの腕に拳が掠り吹き飛ばされる。目標を失った拳はそのまま暴風を生み出しアギ達をも纏めて吹き飛ばした。

「つゝつゝ!いった!凄く痛い、なんて力!」

「パワータイプですか……………なら!」

と、レイカも変身して額からレーザーを放つ。少年に当たると同時に爆発したが少年は煙を煩わしそうに払っただけでダメージを受けた様子はない。

「グオオオオオオオオツツ！」

「——っ！アギさん、私達が相手しますから、避難を！」

「う、うん！」

ミクとレイカが少年の前に立ちはだかる。レイカがレーザーを放ち牽制しミクが一瞬動きが止まる少年を殴る。

「ぎ、ぐう……ヴウ！」

ダメージは大して与えられていないが確実に意識が二人だけに向いている。その間にアキは周囲に転がっている学生達を運ぶ。全員気絶しているが生きている。骨が折れている者もないようだ。

「よかった……」

と、アキが安心した時、背後で爆音が響く。振り返れば塀が崩れ瓦礫の中にミクが気絶していた。

「グルアアアッ！」

「きゃあ！」

視線を少年に向けると少年はレイカの足を掴み地面に叩き付けるところだった。

「ガァ！」

地面に叩き付け気絶させ、足を掴んだまま投げ飛ばす。

しかし今度は壁にぶつかることはなかった。新たに現れた影がレイカを受け止めたからだ。

「ふい、危ないところだったな」

「レッドキングさん！」

それは髪を二つのロールで纏め、堅そうなアーマーを上半身と腕に付けた女性、レッドキングだ。

少年はやはり威嚇するように唸る。

「大人しくしてもらおうぜー」

「グアアアア！」

レッドキングが走り出すと同時に少年も駆け出し、お互いの手をガ

シリと掴む。

「いけー！先輩ー！」

「ミックちゃん！起きたの？」

何時の間にか起きたミックが尊敬するレッドキングを応援する。レッドキングは生粋のパワータイプだ。そうそう力勝負で負けたりはしないはず。しかしその応援は無為に終わる。

「ぐ……うう………」

「え？嘘……」

レッドキングが膝を突いた。そのまま抑え付けられるように腕まで曲げていく。レッドキングが力負けしていた。

「——ッ！」

と、そこへ三日月状のエネルギー刃が飛んできた。少年はレッドキングから手を離し避けると飛んできた方向を睨む。そこにいたのは白く、斑模様の入った鎧と同色のランスを持った女性、エレキングがいた。

「はあー！」

「ぐう？ギアアアア！」

エレキングがランスを振るうと鞭のようにしなり伸び少年に絡みつき電気を流す。このまま気絶させる気だろう。

「……………」

だが、異変が起きる。少年の顔から苦痛が消え怒りだけが残る。そして周囲の街頭などがガタガタと震え始める。

「ガッ！」

メキメキメキ！バギン！と音を立て周囲の街頭、フェンスが歪み、千切れ少年に向かっていく。エレキングも背後から飛来してきたフェンスに巻き込まれ少年に引き寄せられていく。

「グオオ!!」

「ツガハ！」

そのまま拳を叩き付けられ、吹き飛ばされた。アギとミックはその光景に思わず膝を突く。圧倒的だ。あの二人が勝てないなんて、自分達に勝てるはずがない。

「ギャオオオオオオンッ!!」

少年は周囲を見渡し敵が居なくなつたのを確認すると勝利の雄叫びを天に向かって吠えた。

俺？・怪獣王!?

アギとミクはただ震えて少年を見る。

先輩怪獣娘をあっさり倒した少年にどう対応すればいいのかまるで思いつかないからだ。が、少年は唐突に倒れる。纏っていた黒衣も光に溶けるように消え平凡な服装へと代わった。

「……………え?」

「へ、変身疲れ?」

ミクが恐る恐る近付こうとする。少年は動かない。

ミクが少年に手を伸ばした瞬間、ミクの手には飛びかかる者がいた。

「痛!」

「シャー!」

先程の猫だ。ミクの前に立ち少年を背に毛を逆立て威嚇してきている。

まるで少年を守ろうとしているかのように。

「……………あ」

怪我こそしているものの、重傷者はいない学生達。向かってくるまで様子見だった少年。少年の足にすり寄っていた猫。アギはこれらのピースを組み立て、一つの可能性を導く。

「大丈夫。ボク達は、その人を虐めに来た訳じゃないよ」

「フー……………にや?」

「その人が暴れてたから、止めに来ただけ。この人はさっきまで暴走してたんだ。でも、重傷者はいない。その人は優しい人なんだね。だから、ボクも酷いことしないよ」

「…………………………にやう」

アキの言葉を理解したわけではないだろう。しかしアキの目を見て敵意がないと判断したのか離れてくれる。

「ありがとう」

「……………にや」

猫は短く答えると何処かに行ってしまった。後に残されたのは気絶しているエレキング、レッドキング、レイカ。

「……………ん、うう……………」

と、どうやらレイカが起きたようだ。アキはレイカとミクにそれぞれレッドキングとエレキングを抱えるようお願いして、改めて少年に向き直る。

黒く艶やかな髪。線の細い、それでいて力強さを感じる顔立ち。改めてみると野性的な美少年だ。

これから彼を抱えるのか。つまり背負い、密着するのか。

生憎アキに男性経験は殆ど……否、全くない。しかし趣味は老人臭いとはいえ年頃な女の子だ。触れあうと考えるとドキドキする。

結局背負い、耳元を擦る彼の吐息を意識しながらGIRLS本部まで戻った。

「この子が……最近不良退治をしていた怪獣娘さんですか。娘……娘？」

ツンツンと少年の頬をつつく赤い癬つ毛をツインテールにした幼い見た目のピグモン。基本的に、というか今まで女性にしか観測されなかったカイジューソウルを宿す存在。興味深そうに観察していた。「まあ何事にも前例はありませんからね。ベムベムの時も宗教が立っっちゃったぐらいですし」

「前例はない……………」
確かにその通りだ。どんな事だって初めてがあり、それが前例になる。

「でもそうすると怪獣娘という呼び方は適切ではありませんね。うん……………ま、後9人くらい見つかって10人になったら考えましよう」

「それで良いの……………？」

と、アキが呆れると不意に少年がうなる。瞼がゆっくり持ち上がり、金色の瞳が周囲を見渡す。

「……………ここは、何処だ？」

「ここは国際怪獣救助支援組織、通称GIRLSですよ」
「……………」

ピグモンの言葉を聞いた少年は顎に手を当てふむ、と考え込む。そしてああ、と手を叩いた。

「怪獣娘とかいう奴らを保護している。でも、なんで俺がここに？」
「それはですね、君もどうやら怪獣娘同様にカイジューソウルを持っていてみたいだからですよ」

「……………は？」

「俺が変身して暴れていた、か……………なる程ねえ」

「信じるの？」

「ここ最近の不可思議現象に説明が付くからな。しかし、そうなる俺はお前等を傷つけたわけか」

と、少年はレイカとミクを見て頭を下げた。

「意識が無いとはいえずまなかった。傷跡などが残ったら言ってくれ。俺にできる範囲でなら責任をとる」

「え？あ、いや！き、気にしなくて良いって！」

「そうですね……………私も、GIRLSにくる前は時折吠えなくなったりしましたし、それが抑えられなくなった状態、みたいなものでしょう？」

「わかるわかる。あたしもねー、なーんか暴れなくなることもあるんだよねー。そういう時はひたすら走ってたね」

「だが、もし傷跡を残してそれが原因で婚活に支障をきたしたら……………」

「じゃあその時は君が結婚してあげれば良いのでは？」

「ああ、解った。その時は責任を持って結婚しよう」

「へ？」

「は？」

「え？」

ピグモンが中々引き下がらない少年に冗談交じりで言う少年はあっさり返し三人が硬直する。そしてミクとレイカが瞬時に赤くなった。

「え、ええ!?!ちよ、ま……………け、けっ!?!」

「け、けけけけ、けけっこ……結婚!」

「まあ結婚出来なければの話だ。二人とも優しいみたいだから、きつと直ぐに素敵な相手が見つかるさ」

「……………」

「二人とも顔真っ赤」

「これが天然……」

「ピグモンさんには言われたくないと思う」

「改めて自己紹介だな。俺は黒慈^{こくじ}ユウラだ。よろしく」

「よろしく。えっとね、GIRLSでは基本怪獣の名前で呼び合うんだ。ボクはアギラ、アギって呼んで」

「あたしはミクラス!ミクって呼んでねー!」

「ウインダムです。ウイ——」

「ダム子!」

「ウインです!」

「私はピグモンですよ………それとですね、ユウラ君……非常に申し訳ないんですが、あなたの怪獣名が分からないんですよ」

自己紹介が終わり、後はユウラの怪獣名を知るだけだと思ったがピグモンが申し訳無さそうに言う。

「え?でもピグモンちゃん。ここには色んな怪獣の資料が残っているんですよ?」

「はい。始まりの怪獣、ウルトラマンと初めて戦った怪獣から最後の怪獣まで資料に残されているはずなんですが、特徴的な背鰭、磁場を発生させる、レッドン以上の怪力、これに該当する怪獣が見当たらないんですよ。見た目の特徴なら襟巻が余計なジラースっていう怪獣がいるんですけどね」

「ええ、じゃあ呼び方どうするのさ」

「ん?そんなの生前の記憶で人間達がつけた名を使えば良いんじゃないか?ゴジラって……」

「はい?」

「ん？」

「……………怪獣だった頃の、記憶があるんですか？」

「少しだけ」

名前は思い出せないが、人間の女が俺をそう呼んでいた記憶がある。と、ユウラが答えると四人とも哑然としていた。

「……………普通、怪獣娘に前世の記憶はありませんよ」

遭遇？・怪獣王!?

「そうだな、一言で言うと、何時も怒っていたな」

「ん？何って、人間や怪獣にだよ。人間の放った……多分水爆実験に巻き込まれたんだろうな」

「え？怪獣にもって？ああ、どうも色々な怪獣と戦ってたみたいだな」
「最期か？これも良く思い出せないな……多分怪獣と戦ったんだと思う。いや、変な薬品で溶かされた？ん、戦った怪獣達？覚えているのは少しだな」

ユウラ、いやGIRLSの規則に従うならゴジラの話を纏めると、水爆の実験による放射能により怪獣に進化した環境順応型怪獣。稀にいる人間のせいで生まれた怪獣達のようにだ。実験怪獣やたまたま偶然の要因が重なって生まれる怪獣は生まれた原因による耐性や能力を選ぶ。

しかし水爆の影響で怪力というのはどういうことだろうか？いや、怪獣は基本的に怪力なのだが。

さらに、その怪獣は多くの怪獣を葬っていたらしい。

「うーん、黄金の鱗を持った三頭の飛龍タイプの怪獣に、巨大な蛾の怪獣、巨大な頭とハエトリグサのような触手を持つ植物獣……どれもこれも確認出来ませんね」

「ふーん」

「ひよつとしたら平行世界の怪獣なのかもしれませんね。時間を移動する怪獣が居るぐらいですし、異世界とかそういうところの怪獣が居ても不思議ではありません」

「何でもありだな怪獣」

と、言うわけでユウラの怪獣名は正式にゴジラに決まった。

そしてその日、病院や精神科などで男性でもカイジューソウルを宿している可能性を考慮するように通達された。

「寮暮らしか……」

怪獣娘は怪獣の力を宿した存在。一度力が暴走すれば普通の人間では太刀打ち出来ない。よって、怪獣娘を止められるのは怪獣娘だけという法則で基本的に集まって過ごすらしい。

しかし、現在怪獣娘の雄という訳の分からん字面になる存在はゴジラだけだ。つまり女子寮。

「……風呂はせめて共同じゃなければ良かったな」

と、ユウラは時計を確認する。夜の十一時。この時間なら流石に誰も居ないだろう。念の為明かりを確認し、紙に『男子入浴中』と書いて扉に貼っておき風呂場に入る。

流石に湯船にお湯は残ってないようだが別に問題はない。髪を洗い身体の垢を落とし、脱衣場に戻る。

「……………あ」

「……………は？」

そこでバツタリと人に出会った。もう一度言おう、ここは女子寮である。当然、入ってきた者も女子である。そしてどちらも全裸だ。

アギと似た眠そうな瞳をした黒髪の美少女。お互いキョトンと相手を見詰め、少女の視線はゴジラの全体を確認するように顔から胸へ——この時点で僅かに見開いた——そして、胸から臍へ、臍から……………

「——きゆう」

ボン！と顔を赤くした美少女は気絶した。

少女、ゼットンが目を覚ますとパタパタ団扇で扇がれていた。扇いでいるのは、男。

ゼットンは先程の裸を見てしまったことを思い出し慌てて男から離れる。

「……………あー、先に言っとくぞ。今回俺に非はないはずだ。俺はちゃんと入浴中の紙を貼っておいた」

「……………あ」

そういえば貼ってあった。ピグモンからも男性がやって来たと聞

いていた。すっかり忘れて、誰かの悪戯かと思っってしまった。

「ごめんなさい。今回は私に非がある」

「ま、次から気をつけろよ。聞いた話によると、お前GIRLSで一番強いんだろ？なら俺が暴走した時止められる可能性が高いのはお前だ。変に距離を取るようなことをしたくない」

「私のこと、知ってるの？」

「ああ、アギに聞いた。流石に男の俺が服を着せるわけにも行かないしな。俺はゴジラだ」

「ゼットン……………服を着せる？」

自己紹介をした後、その言葉に疑問を覚える。そして思い出す。自分も裸だったことを……………。

「睨むな睨むな。もう十分アギに睨まれた」

「アギラに？」

「服を着せるのはアギラに頼んだ」

先ほどの言葉はそういう意味か。確かに男性の彼がやるより女性の誰かにやらせるのが適切だろう。

「意外。紳士的」

「ほう、意外か。俺はどんな風に見えた？」

「……………粗暴」

「ま、喧嘩っ早いのは否定しねーが……………とにかく、次から気を付けろよ」

「……………ん」

じスイッチでは前世の人格に吞まれる可能性があり、身体がそれを恐れているのかもしれないとのこと。

「どうすれば?」

「うーん……また別の切っ掛けによる変身をするのですかね」

やはり前例がないので確定は出来ないらしい。

しかし別の切っ掛けとは。カイジューソウルは本人の性質もそうだが中には前世の性質が影響する者も居るらしい。人間の味方だったピグモンは人間が大好き、ウルトラセブンという地球の味方は人を守る、といった具合に。

「俺の変身方法ねえ……」

アギラ達が遠征で札幌に向かっている間する事も無く暇なので町をぶらついている。

寄って来る犬猫を撫でながら肩に止まってくる鳥の頭を指で擦する。この辺りの動物は虐められていたところを助けた者達だ。

彼等を虐める者達を見て、ゴジラは怒りを覚え変身した。結果理性を失っていたわけだが。

ソウルライザーが最初からあったわけではないだろうし、ソウルライザー無しでも暴走しない変身だってきつと出来るのだろう。

「悩み事?」

「ん?なんだ、ゼットンか」

「ん……」

ピポポポと独特の音を響かせるゼットンはそのままゴジラの横に座る。

「変身の事?」

「まーな。確かに思い返せば俺って、結構力に吞まれてた節があるし」
「でも貴方は、殺そうとまではしなかった。前世の貴方に勝った証拠。きつと直ぐに操れるようになる」

「……………かねえ?」

ゴジラは背を曲げ頬杖を突きながら呟く。いざ自分の意志で変身

しようとした時、今まで変身していた時の感覚を思い出した。前世での力の使い方もだ。どういう時に使っていたのかも覚えている。

怪獣娘が戦闘を行えるのもそうやって己の力の使い方が分かるからだろう。

「俺は何時も気に入らないモノを壊すために力を振るってた」

「私だって、そう……」

「？お前、覚えてるのか？」

「前世の記憶はない。でも初めて力を振るった時にどんな事に使ったか感覚で思い出せた。私達の前世は、怪獣。凶暴な怪物。貴方は前世の記憶を覚えてるだけ。それ以外は私達と同じ」

「……………慰めてんのか？」

「そのつもり」

ゴジラも資料で見たがゼットンのは宇宙恐竜と呼ばれており、光弾を飛ばしたり火球を放ったりと結構暴れていた。レッドキングやエレキングもだ。

アギラ達三人組は人間の味方だったが。

「にゃん！」

「お？」

と、考え事をしてしているとゴジラの上になんかピョンと飛び乗ってくる。猫だ。他の猫達が不満そうな声を上げる。

「よしよし。喧嘩するな。順番な……なんなら、そっちの女に撫でてもらえ」

「え？」

「にゃー！」

ゴジラの言葉に猫達がゼットンに向かって跳ぶ。ゼットンとて女の子だ。可愛いモノは大好きだし、温い猫ともなれば尚更。はわわ……と頬を紅潮させ猫に恐る恐る手を伸ばすゼットン。

「にゃう」

「ほわぁ」

猫に頬摺りしながら破顔するゼットン。こういう一面もあるのか。意外だ。

「はっー！」

「……………」

ゴジラの視線に気付いたゼットンには猫を離し赤くなり俯く。

「良いんじゃないねーの？女の子らしくて……………」

「……………女の子、らしい？」

ゼットンはキョトンと首を傾げる。怪獣娘は変身していない時でもうっかりドアノブを破壊することもある程、人間離れしている存在だ。力に目覚めてから、女の子扱いされたことなど同じ怪獣娘内ではなく、男の子に女の子扱いされたのは何時以来だろうか。

「ん？おう、女の子だろ？」

「……………」

「あれ、もしかして照れてる？」

赤くなったゼットンにゴジラがそんなことを言うがゼットンは反応出来ない。

「ゴジラは、動物を守ってたのよね？好きなの？」

「多分前世の影響なんだろうな。俺は人間を汚い部分から見ると癖がある。逆説的に動物の方がまあ、好きだ。あと子供」

「……………」

「子供、か……………そういえば俺は、前にも何かを守っていたような……………大切な、何かを……………」

「……………ッ!?ゴジラ！」

「ん？」

ゼットンの叫び声に反応して正気に戻るとゴジラは自分の身体が青白く光っているのに気が付く。

「……………ソウルライド！」

ソウルライダーをスライドしながら叫ぶと『SOUL RIED』という文字が浮かび上がり、ゴジラの体を眩い光が包み込む。

それは徐々に形を為していき、黒いコートにロングパンツ、長い尾に顔の下半分を覆う口元が開いた牙を横したハーフマスクへと変貌した。

「……………出来た」

「おめでとう」

ゴジラが呆然と自分の姿を見詰めているとゼットンがパチパチ拍手をする。足元の動物達もお祝いするように吠えた。

観賞？・怪獣王!?

「…………試験か」

ゴジラはピグモンから聞いたGIRLSの正式入隊テストを思い出しながら呟く。

筆記の方は先輩であるゼットンから教わっていたので問題ない。

「……………ん？ウイン……………」

「え？あ、ゴジラさん……………」

というわけで町をぶらついているとオロオロしているウインダムが居た。

ゴジラがウインダムの前の建物を見るとどうやらそこは映画館だったようだ。人気の映画なのか「劇場版お前にピットイン!『ラストピット』」と書かれたポスターが幾つも貼って有った。

ゴジラがスポーツアニメだろうかと首を傾げている中ウインダムは混乱の極みにあった。正直、彼とはどう接すれば良いのか解らない。

年頃の男女でもあるし、彼に一方的に打ちのめされてもいる。

ザンドリアスの場合は彼女が酷い目にあって居るのを見て同情してしまったので仲良くなれるのに時間は掛からなかったが、彼の場合は……………」

「…………映画か、この前の詫びだ。奢る」

「へ？そ、そんな！悪いですよ……………」

「悪いことをしたのは俺の方だ。ふむ……………なら俺も観よう。確かここは毎週カップル料金で五百円引きされるらしいからな。俺も久し振りに映画が観たい。俺とカップルの振りをしてくれないか？」

「…………そ、そう言う事なら……………」

「ルールはさっぱりだけど面白い映画だったな」

「そうですね……………」

ゴジラはピットボールという初めて見る球技ながら楽しめた。ま

さかあも魅せてくるとは。前世の影響で人間の汚い部分から見るゴジラでも感動した。

「しかし、スポーツアニメなんて男子のイメージが高いのに、意外と女性客も多かったな」

「え!? あ、あははは! そうですかね? あ、おまびとのグッズが売ってます!」

「……………?」

言えない。腐った方向で女子に人気などとても言えない。

ウインダムはおまびとのグッズを早速買い漁る。先日ソウルライザーを再発行したばかりなのでかなり痛い出費だが趣味に全力なのが彼女のやり方。

「……………ん?」

ふと見ると自分と同じように多くのグッズを籠に入れていた少女を見付けた。長く波打った黒い髪をした少女だ。右目は前髪に隠れており赤い左目だけが見えている。目の下には隈が刻まれている。

「ふへ、ふへへへ……………尊いい……………」

「……………」

「!」

目が合った。そしてお互い同時に理解した。同志だ。同じ腐臭を放つ同志がそこに居た。

ガシリと無言で握手をする。

「映画観たあ? 観たよねえ、この時間に買いに来てるもんねえ……………面白かったよねえ」

「ええとても。諏訪さんの骨折のことを聞いてしまい悩んでいたんですが勇気を出して良かったです。諏訪さんのあのシーンで一卷のあのシーンがガッツで脳内に……………」

「おいウイン、知り合いか?」

「……………あ、いえ。そう言うわけでは——」

「……………」

話が盛り上がっているとゴジラがやってきた。

「あ、そうだ。よろしければ一緒に食事でも……あら？」

ウインダムが振り返ると少女が髪に隠れていない方の目でゴジラを凝視していた。

「……お知り合いですか？ゴジラさん」

「いや……？」

「……ゴジラ？貴方あ、ゴジラなのお？」

「あ、ああ……一応怪獣娘扱いでな。怪獣名がゴジラ」

「へえ……そつか……そつかあ……」

少女はニヘラと笑みを浮かべる。

「じゃあねえ、お姉さあん……また会おうねえ。ゴジラもまたねえ

……」

「……変な奴だな」

「わ、悪い人じゃないと思いますけど」

試験?・怪獣王!?

試験当日。

まずは筆記試験だ。四人は答案用紙に名前から記入していく。

「う〜ん」

ミクラスは頭を押さえながら唸る。あまり勉強が得意とは言えないミクラスには難しいようだ。

「安心しろ!・俺も殆ど分かんねー!」

「退室〜」

「ひゃほ〜♪」

茶化したレッドキングは箒を持ったピグモンに追い出された。

テスト結果は不明だがゴジラ的には手応えを感じた。

続いて面接試験。

「それはそうと、この間アタシねー」

「退室〜」

「わ〜♪」

茶化したゴモラは箒を持った(略)

ゴジラは思う。実はGIRLS最強はピグモンなのでは?と。まあ実際はそんなことはないだろうが。

「年の功とかか?」

「ゴジゴジ〜?何か言いました〜?」

「言ってますん」

訂正、やっぱり最強かもしれない。

「最後は実技です〜」

「内容は簡単。変身して俺たちとスパーリングだ」

「君達三人が、私達に一回でもクリーンヒットさせたら合格ね。ゴジゴジはスツゴい強いから後でレッドキングとタイマンね〜」

「元チャンプとタイマンかよ。容赦ねーな」

ゴモラの言葉にゴジラは面倒くさそうに頭をかく。確かに自分はレッドキングにエレキング二人を相手に勝っているらしいがその時は暴走時で覚えていない。

まあ他の三人はゴジラならそうだよねと納得しているが。

「ま、アギ達が疲れさせたところを狙うとするよ。俺はソウルライドしての戦いは今日が初めてなんで」

「せこっ！ま、まあ……アタシらも三体二で一発食らわせるだけだけどさ……じゃ、じゃあアギちゃん、ウィンちゃん、変身しよっか」

「はい」

「うん」

と、ミクの合図でアギラとウィンダムもソウルライザーを取り出す。

「二ソウルライ——」

PIPIPIPIPIPIPIPIPIPI!!

三人が同時にソウルライドと叫ぼうとした瞬間。ピグモンのソウルライザーから電子音が響く。

「はい、エレエレ？」

どうやらエレキングからの連絡のようだ。今日この時間、ピグモンが試験官の試験があるのを友人のエレキングに言っていないとは思えない。

つまり、ゴジラは嫌な予感がしていた。

「え……はい、はい……わかりました……」

ピグモンは通信を切ると一度俯き、顔を上げる。

「どーしたのピグちゃん」

「なんとなく嫌な予感はあるけど……」

「皆さん。テストは中止です。シャドウが都内で多数発生しました」

「……シャドウ？」

「シャドウ……」

聞き覚えのない単語に首を傾げるゴジラ。アギラは以前、大阪でゴモラが言っていたことを思い出し復唱する。

「GIRLS、そして人類の敵……」

「四人にはまだ早いと思って説明していませんでしたが、GIRLSにはもう一つの役目があります。それは、人類の敵シャドウを退治すると言うこと」

シャドウとは何者なのか、何故いるのか、それらは一切不明。しかしシャドウは確実に人類の脅威となり、そして何故か怪獣娘にしか倒せないらしい。

「だから、シャドウを倒すのは私達怪獣娘に課せられた大切な役目なのです！」

「そっか、じゃあ行くか……」

「ほえ？そ、そんなあっさり!?!」

ピグモンの説明が終わり、出口に歩き出したゴジラにピグモンが動揺する。

「あっさりも何も、俺にはシャドウって奴らと戦える力があるんだろ？なら戦うさ」

「ゴジゴジ……」

「で、シャドウは何処にいんの?」

「は、はい!シャドウは現在浅草に現れたようです!」

「そんな遠くないな。アギ、ミク、ウイン……どうする?」

ゴジラの問いかけに三人は顔を見合わせ、頷く。

「やるよ……」

「うん」

「ですね……」

「んじゃ……変身するか」

と、ゴジラはソウルライザーを構える。

「ソウルライド、ミクラス!」

「ソウルライド、ウインダム!」

「ソウルライド、アギラ!」

「ソウルライド、ゴジラ」

浅草でエレキングが影のような生物、シャドウを相手にしていた。攻撃を盾で弾き鞭のようにしなるランスで風払い、しかしシャドウの

数が減る気配はない。

一旦距離を取り呼吸を整えようとする、後ろから声がかかる。

「お待たせちやくん」

「確かに、少し待ったわ」

「えー、そんな、吃驚する速さで来たのに」

「…まあそう言うな。こっからこっちの番だからよ」

「……………」

レッドキングは拳を握りしめゴジラも指を曲げゴキバキと鳴らす。

「あれゴジラじゃないか？ほら、背鰭とか…………」

そんな怪獣娘達をビルの屋上から観察する二つの影。

「だとしたら、人を守っているのでしょうか。それなら一度、話してみるのも良いかもしれませんね」

「はー？ゴジラだぞ、あのゴジラ。ぜってー何か裏があるね」

「バトちゃん、前世の因縁を現世に持って来ちゃ駄目ですよ…………」

「役目を失っても人間を守ろうとしてるお前に言われても説得力ねーって」

再開？・怪獣王!?

「どおらあああ!」

ゴジラが指を爪のように曲げ振るえばシャドウ達があっさり引き千切られていく。

ゴモラはシャドウの上をピョンピョン跳ねながらマリオのように倒していき、レッドキングは一匹のシャドウを振り回しぶん投げる。エレキングはランスを振るって一気に倒していた。

「とりやとりや!」

「はああ!」

ミクラスは両手にシャドウを持ち地面に叩き付け、ウインダムは屋上からレーザーで狙撃する。アギラはフードに付いている角を使い突進して倒していく。

「弱い……けど、数が多いな」

尻尾で薙ぎ払い、背鰭で切り裂き、爪で引き裂き、蹴りで吹き飛ばしながらも、一向に減る気配の無いシャドウにゴジラが愚痴を零す。

「頑張れ頑張れ!」

ピグモンは戦わないらしい。箒持って追い掛けるだけでシャドウは逃げ出しそうだが。

「これだけ大量にいるって事は、シャドウの巣が何処かに有ると思うんだよね」

「こいつら巣を作るのか……」

ゴモラの言葉にシャドウの生態に少しばかり興味が出たゴジラ。てっきり発生する類なのかと思っていた。

「……………ん?」

と、その時ゴジラのソウルライザーが震える。通信機能も有ったがまだ登録した人数は殆ど居ないはずだがこんな時に誰だろうか?

確認するとゼットンだった。

「何々、巣は破壊した……………マ・ジ・?と……………」

ゴジラが返信すると山積みのシャドウと共に自撮りするゼットンの写真が送られてきた。

「……巢の殲滅は終わったってさ。残るはここにいる奴らだけ」
「おおそうか！わかった！」

巢が無くなっている事に気付いたのかシャドウ達が狼狽える。ゴジラは一体を引つ掴みぶん投げ一気に倒す。

と、その時ソウルライザーが震え『WAR NING P I G M O N』
と言う文字と両手を広げて慌てる絵が浮かび上がる。

『そつちに強いシャドウ反応が！シャドウビーストが、出ます！』
「シャドウビースト？」

アギラが復唱すると同時に路面に亀裂が走る。そして、そこから巨大な影が飛び出して来た。

恐竜と機械が融合したような個体、百足のような個体、そして……
「よりによつてこのタイプかよ……」

蜻蛉のような個体。ゴジラは生前の記憶を思い出し顔をひきつらせる。勿論生前覚えていた個体に比べれば形も大分違うし、大きさも小さい。顔だって普通の蜻蛉だ。本当にただ偶然このような形になっただけだろう。

しかし蜻蛉にはあまり良い思い出はない。

「というわけでさっさとくたばれ！」

『キシユイイイイッ!!』

「!?速！」

ゴジラが拳を振りかぶるがトンボシャドウは高速でゴジラの背後に周り、尾の先端に付いている針を突き出してきた。

「——つーこういう攻撃方は同じかよ！」

すんでの所で身を反らして躲すと仕返しとばかりに身体を回転させながら尾を振るう。

ドン！とゴムタイヤをぶつけ合ったような鈍い音が響きトンボシャドウが吹き飛んでいく。

『キシアアアアアアッ!!』

「はっ！確かにはえーが、彼奴ほどじゃねえ！」

吹き飛ばされながら方向を変え襲い掛かって来るトンボシャドウの攻撃を避けて殴る。中々の硬度だがゴジラの腕力なら問題ない。

『ギヤアアアアア!!キシヤシヤシヤアアアア!!』

トンボシヤドウは悲鳴を上げ、自分を殴り付けたゴジラに向かって針を伸ばす。が、ガキーン!と音を立てゴジラの歯で止められる。

「出直へなおしてこいー!」

そのまま首の力のみでぶん投げる。そして、ゴジラの背鰭が発光し、熱を放つ。しかしそれ自体が攻撃ではない。余分な熱を排出しているだけだ。

必要な熱は口内に集められ、口内が青白く光る。

「があー!」

『――!』

ゴジラから放たれた巨大な熱線に飲み込まれ消え去った。

「……お疲れ」

「うお?」

フシユウと口内から白煙を吐き捨てているとアギラが後ろから声を掛けて来た。気付かなかった。

「凄いね、ボクたちは3人掛かりでも勝てなかったのに……」

「ん?でも残りの二匹は……」

「片方はゼットンさん」

「私がやった」

と、何時の間にか現れたゼットンが無表情ながら何処か誇らしげに言う。

「ま、ともあれ……お疲れ」

「うん。ゴジラも……」

「……お疲れ」

と、お互いに軽く慰労し合う。その時だ――

「お時間よろしいでしょうか?」

ふわりと空から着物姿の美少女が現れる。動きやすそうに改造された振り袖を着た、優しそうな顔の少女だ。オレンジの髪を靡かせ微笑むその顔は男なら誰でも見蕩れそうだが、ゴジラは顔より彼女の振り袖に目を奪われていた。

「そ、その模様は……お前、まさか……」

「お久しぶりですね。その様子では、前世の記憶もお持ちのようで」「ゴジラ、知り合い?」

「知り合いというか、何というか……」「生前の自分を負かした相手だよな?」

何と言おうかと迷っている。今度は黒い着物を着た美少女が現れる。髪は短く切り揃えられ、跳ねている。黄色いメッシュが幾つか有り、額には角が生えている。

少女の着物は先の少女よりさらに動きやすいように改造されくびれた腰がよく見える。そしてその少女の振り袖の模様にも見覚えがあった。

「お前まで……って、待てやこら。前世の俺は負けてねーぞ。生き残ったのは俺だ」

「はあ?どの道負けてんだろうが」

「二体一で苦戦しただけだったの。また喉笛噛み千切ってやろうか? ああん?」

「おーやってみろ黒トカゲ」

ゴジラ自身前世の記憶は記録を見ているようなモノだが、前世であるという自覚はある。罵倒されればイラつくし、何よりこの女は敵意を持って絡んで来ている。苛立たないわけが無い。

「ゴジゴジ、めー!」

「バトちゃん、落ち着いて……」

「うるせえ!黙ってる!」

「はい?」

睨み合う二人を諫めようとした少女とピグモンだったが苛立っていた二人は思わず叫ぶ。

「……あ」

「はい?」

二人を顔を青くして、ピグモンと少女が影を作りニッコリ笑う。

「ご、ごめんなさい……」

「全くもう。ところでお二人は……?ゴジゴジのお知り合いのようですが……」

ピグモンは嘆息しながら隣に立つ少女に問い掛ける。すると少女はニコリと微笑む。

「私の名はモスラ。もちろん人としての名もありますが、GIRLSの流儀では怪獣だった頃の名で名乗ると聞いたので……」

「おや、てことはモスランは怪獣娘なのですか？」

「はい。そちらはバトランことバトちゃんです」

「合わせなくて良いから……バトラだ。生前、その黒トカゲと戦った怪獣だ」

説明?・怪獣蛾!?

前世の記憶を持つ怪獣娘は、ピグモンの知る限りゴジラだけだった。しかし彼女達はゴジラとは前世の知り合いだと言う。

「前世からの縁、ですか……」

「そ、前世じゃコイツに殺されてね」

「まあ断片的にしか覚えてないがな。前世の記憶はあるが他人の記憶を見ている感じだし……実際に見れば思い出せるんだが」

「は?」

「へ?」

「あん?」

ゴジラの発言にバトラとモスラがキョトンと目を見開き、その反応にゴジラも首を傾げる。

「断片的に……?あなたは、全てを覚えているわけではないんですか?」

「いや。そもそも記憶自体最近取り戻したしな……」

「……………最近?」

モスラは最近と言う言葉に首を傾げ、バトラも同様に訝しんでいた。

「お前等は違うのか?」

「あ、はい。私達姉妹は物心付く頃……凡そ二歳位の頃、前世を思い出しました」

「だから直ぐにアタシはアタシだ、って思えたな。しかしなるほどなあ……お前が前世と違って大人しいのは人間として過ごした記憶が有るからか……」

バトラは前世でのゴジラの凶暴性を思い出し納得する。テリトリーを侵した者、邪魔をした者、例外なく敵意を持ち執拗に追っていた彼が大人しいのは、見た目からして10数年の時を人の社会で過ごしたからなのだろう。親しみを持つ者を殺そうと考える者はまづいない。

「そうですか。あなたが人に歩み寄ってくれて、何よりです」

「歩み寄るも何も思い出したばかりなんだって……それに、完全に記憶を思い出したらどうなるか俺にも分かんねーぞ?」

「その時は私が止めます」

モスラはニコリと微笑む。実際、黒星続きのゴジラはチツと舌打ちしただけで文句は言えなかった。

「でもでもモスラちゃん、ゴジラはめっちゃ強いよ?」

「大丈夫だって、モスラはゴジラに百回は勝ってるもんなあ?」

「そんなに負けてねーよ嘘ぶっこくな虫けら」

「……………」

ゴジラの言葉にバトラが顎をクイツと引き、ゴジラが頷くと肩を回しながら歩き出す。

「二人とも、喧嘩しない」

「チツ!」

「けっ……………」

モスラの言葉に二人は舌打ちをして立ち止まる。

「しかし確かに。あなたが前世の記憶に目覚めたばかりなら、何れ前世の記憶に飲み込まれる可能性は十分にありますね……………」

「へえ、ならどうする?」

「近くで見守ります。どうせ、何時かはGIRLSには入るつもりでした。現状、世界の敵であるシャドウと戦うには私とバトちゃんだけでは力不足ですから」

「……………」

バトラは不満そうだが否定はしない。彼女自身、自分で出来ることは弁えているようだ。

「如何でしょう?」

モスラの提案にピグモンはにっこりと微笑んだ。

「新しい仲間が出来るのは大歓迎ですよ。戦闘能力もゴジゴジのお墨付きなら問題なさそうですし、筆記テストは受けてもらいますけどね」

「はい。よろしくお願いします」

モスラも笑顔を返し、右手を差し出す。ピグモンも同様に手を差し

伸べお互い握り合うと微笑み合った。

「ほえ、するとそちらの世界ではウルトラマンもいないのに怪獣の脅威に曝されていたのですか？」

ピグモンはモスラの話に興味深そうに聞きながらメモを取る。異世界から此方の世界にやってきた怪獣はいる。正確には異次元から怪獣として、だが。しかし前世の記憶として異世界の怪獣として過ごした者はゴジラやモスラ達が初めてなのだ。

「ゴジラから聞いてないのですか？と、そういえば彼は断片的にしか覚えていないのでしたね」

「はいなのです。それにしてもゴジゴジは暴れん坊さんだったですね」

「住処である海を汚された、喧嘩を売られた、エネルギーを欲した……まあいろいろありますが、確かに暴れん坊でしたね」

「モスランも大変でしたねえ。でもでも、今のゴジゴジは良い子ですよ」

「ええ、私も信じています。彼は時に人間の敵と戦っていたのですから……まあ、敵の敵は味方、という考え方を出来ない子でしたが……でも、大切な者の為には頑張る子でもありました」

「フエックシー！」

破壊された車や道路の瓦礫を運ぶ作業をしていたゴジラはくしゃみをして鼻を吸る。何処かで誰かが噂でもしているのだろうか？

そして翌日、入隊の合否が発表された。全員問題なく合格。正規の職員になったわけだ。アギラ、ミクラス、ウインダムは手を取り合い喜び、モスラもバトラを抱き締め、やったー！と叫ぶ。ゴジラは余った。

「ゴジゴジ、少し屈んでももらえますか？」

「……………」

言われた通り屈むとピグモンはゴジラの頭に手を乗せる。

「良くできました。偉い偉いですよ〜♪」

「……………」

「……………つぷ」

頭を撫でられ微妙な表情をしたゴジラをバトラが笑った瞬間ギリと睨む。

「むう……………これは……………」

ピグモンはGIRLSの前に置かれていた大きなダンボールを見て眉間に皺を寄せる。

「ふあ〜、おはようピグちゃん。ん、どったの？」

と、そこへ寝起きのミクラス達がやってくる。

「い、いえ実は……………」

「……………これは」

ピグモンが言い辛そうにしているとモスラはダンボールの中を覗き込み、ピグモン同様顔をしかめた。

「……………来たばかりなので解りませんが、よく有る事なのですか？」

「有りませんでした。が、世間では私達を疎む者がいるのも事実です……………」

「……………あ」

アギラも中身を覗き、声を漏らす。中には四歳ほどの子供が寝ていた。黒い髪の女の子だ。

『「この子はあなた達と同じ怪物です。怪物同士で育ててください……………?…?…何これ!？」

「怪獣娘を良く思わない人は少なからず居ますからね。怪獣娘がその気になれば人間なんて簡単に殺せちゃいますから……………」

ミクラスがダンボールに入っていた手紙を見て叫び、ピグモンが悲しそうに言う。

「まあ、だとしてもこの子の親にはそれなりの罰を受けてもらいますけどね〜」

ピグモンはそう言うのとダンボールの中の少女を揺する。

「……んみゆ……………ふみや?」

少女は目をゴシゴシ擦ると寝惚け眼で周囲を見渡す。

「……………お姉さん達、だあれ?」

「私はピグモン。貴方と同じ怪獣娘ですよ……………貴方のお名前を教えてくださいませんか?」

「……………パパは?」

「……………お父さんは、今はここには居ません」

少女は寝惚けてピグモンの言葉がまだはつきり聞けないのかボツと虚空を見てゆらゆら揺れる。

「貴方のお父さんとお母さんはどんな人なんですか?探しますから、教えてください」

「……………パパはゴジラ」

「そうですか。パパはゴジゴジ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「?」

少女が発した言葉に一同が固まる。と、そこへ丁度寝起きのゴジラが欠伸しながら現れる。

「ふああ……………ん?何だそのガキ」

「」「ゴジラあ!」「」

「ゴジラさん!」

「ゴジゴジ!」

「え?なに?」

子供？・怪獣王!?

「ゴジラ、どう言うこと……?」

「ゴジラさん！アナタという人は……」

「認知してあげなよ！」

アギラ、ウインダム、ミクラスの言葉に目を白黒させるゴジラ。何故起き抜けに詰め寄られ認知云々言われるのだろう。というか何を認知しろというのか。

「ゴ〜ジ〜ゴ〜ジ〜……」

「ピ、ピグモン？」

戸惑うゴジラにピグモンが笑顔で近付いてくる。ただし額に青筋が浮かび顔には影が差しているが。

「これはいったいどう言うことですか？」

「何の話だ？」

「惚けないでくださいー！子供が居たなんて聞いてませんよー！」

「……………は？」

ますます意味が分からない。子供？と、ゴジラが混乱していると少女がゴジラの胸に飛び込んできた。

「パ〜♪」

「……………ふあ？」

ゴジラが突然の父親発言に固まっていると少女の全身を緑の光が包み込んだ。この光景は見覚えが有る。怪獣娘の変身する時の光景だ。

やがて光が収まるとそこには変身した少女がいた。

緑の革製のパーカー。フードの縁には牙のような物が幾つも付いており、頭の横に位置する場所にギョロギョロした目のような飾りがあつた。

パーカーの背には背鰭が付いており、同様の背鰭がスカートとパーカーの隙間から覗いた尻尾にも付いていた。

その姿は、ゴジラの変身姿に酷似している。

「……………お前、リトルなのか？」

ゴジラはその姿に目を見開き、思わずといった風に呟く。すると少女はニパーと微笑む。

リトル……三枝未希と言う少女が呼んでいた名前。まあベビーだったりもするが。

兎に角そう呼ばれていた、前世の自分にとって我が子同然だった存在。

「いやでも待て、おかしいだろ！お前、前世の記憶有るんだよな!？」

「……ゼンセ?」

リトルはコテリと首を傾げた。

「?ひよつとしてこの子は、ゴジゴジの前世のお子さんなんですか?」

「あ、ああ……」

「「ああ」」

ピグモンの言葉とゴジラの肯定に納得する一同。しかしゴジラは納得しない。出来ないことが一つあった。

「イヤだとしても精神年齢おかしくないか?お前、人間に換算すると中学生ぐらいにはなってたろうが。もう放射火炎だつてきちんと吐けてた筈だ。何で変身した姿も精神も巻き戻ってんだよ……」

「……?」
ゴジラの記憶が正しければ、リトルはゴジラの二周りほど小さなゴジラそっくりな姿まで成長していたはずだ。しかし今の変身した姿はその前の、人間にリトルと呼ばれていた時代の物だ。

「……お前、どの程度まで記憶が有る?」

「ん?記憶……?」

「……あー……その姿になる前はどんな時だった?」

「えっと……蟹みたいなの、奴らが虐めてきて、でもパパが敵を倒してくれて、その後パパが消えちゃって……私がおつきくなつて……んー、後は忘れた」

蟹みたいなの……十中八九幾つも存在するゴジラの記憶の中に存在する死の記憶の一つで、死ぬ直前に戦っていた相手だろう。

つまりこの少女にミニラとしての記憶は無く、自分と違い、あくま

で一つの歴史から来ているのだろうか？

「パパ抱っこ〜」

「ん、後でな……」

しかしそうなるはこの精神の幼さはどう言う事なのだろうか？

ゴジラと共にいたリトルである事は間違いない。そういう記憶を持っているのだから。なのに精神が見た目相応。チラリとバトラ達を見る。

その視線に込めたのはお前達もこうだったのか？という質問。この質問に二人は首を左右に振る。

前世の記憶を思い出した時点で精神は過去の、成熟した頃のモノに戻っていた。決して精神が肉体年齢に影響されたことはない。

「んー……でも考えてみればゴジゴジと同じなのは？ゴジゴジも前世の記憶は有りますが精神は引き継いでませんよね？」

「俺やリトルだけの特徴って事か？だとしたら俺達の種族にしかない特徴？」

思いつくのは核エネルギー。しかし資料によると原子力で動くロボットの怪獣娘もいるらしい。ていうかロボットの怪獣娘ってどうなのだろうか？機械なのに魂とかあるのだろうか？

「……………しかしゴジラの特徴なあ……ああ、人間に、世界に拒絶されてるとかなんてどうだ？」

ゴジラがふっ、と笑うとモスラ悲しそうな顔をする。

破壊神などと呼ばれ、人間は自分を倒すために未来から使者がやってきたりその未来の機械を使った兵器がやってきたりその改良型に自分とよく似た奴と戦おうとしている時に襲われたり……。

後は最も古い死の記憶だと溶かされたし、その死した自分の亡骸を使った機械とも戦ったりした。

「……………ん？」

不意に組んでいた腕の袖をクイクイと引っ張られる。目線を下に下げれば泣きそうな顔のリトルがいた。

「抱っこお……………」

「……………はあ、これで良いか？」

ゴジラが両脇を抱えて持ち上げてやるとリトルはキヤツキヤツ！と笑う。

「高いー！」

「そうかそうか、ここうすりやもつと高いぞー」

「きやあああ♪」

「……………」

「——ッ！」

ニヤニヤとミクラス達が見ているのに気づき固まるゴジラ。普段無表情のアギラも微笑ましそうに見てくる。

「ゴジゴジは良いお父さんですねぇ」

「うん。きつと子供も良い子に育つ」

「……………」

ピグモンとアギラの言葉に居心地が悪そうな顔をするゴジラ。ピグモンはよし、と頷くとゴジラに向かってビシツと指を指した。

「上官命令です！ゴジゴジは今日からリトルちゃんとお過ごしなう。まあ勿論仕事で一緒には居れない時もあるでしょうが、その時は私達で面倒を見るのでご安心を！それで良いですか、リトルちゃん」
「うんー！」

「…………拒否権は？」

「ありますよ。でもでも、拒否するんですか？」

「……………」

「…………？」

ゴジラが視線をピグモンからリトルに向けるとリトルはニツコリ微笑み返してきた。

「断らないけど」

「でしょうね。ではでは、私はこれからちよーつとやることがあるのです」

次の日、大手会社の社長が怪獣娘化した子供を捨てたことがネットで曝されニュースになった。情報提供者はネットアイドル『PIGUMIN』という仮面を付けた謎の少女らしい。

「……………やっぱ敵に回さない方が良いな、あの人」
「てか、少女？と首を傾げたゴジラは次の瞬間寒気を覚えた。

遊園地？ 怪獣王!?

「大当たり〜！二等賞の遊園地チケット五枚です！」
「……………」

さて、誰を誘おうか。ゴジラは手元のチケットを見て考える。

「パパ、遊園地つてなあに？」

ゴジラの肩に上ったリトルが頭越しにチケットを覗きながら尋ねてくる。最近の定位置だ。

「んー、遊ぶ園……かな………いろいろな乗り物に乗ったり、あるいは入って楽しんだりする所だな」

「!?行きたい行きたい！」

リトルは上半身を前後に揺らす。ゴジラの首がガクガク動き鬱陶しさに目を細める。

勿論連れて行くつもりだが、残りの三人分はどうするか。期限もそこまで長い訳じゃないし、短期間で二回も行くつもりはないし、残りが三枚では中途半端だ。

一枚だけ残しても一人にしか届けられない。三人だと……アギラ達が丁度良いかもしれない。

「やー、悪いねゴジラ」

「わざわざありがとうございます」

「ありがと、ゴジラ……」

ミク、ウインダム、アギラはゴジラにお礼を言う。その目は入場ゲートに向けられキラキラしていた。それはリトルも同様だが。

「遊園地、初めて」

「マジでアギちゃん!？」

「マジ……」

「アギさん本当に今時の若者ですか？」

アギラの言葉に驚くミクラスとウインダム。二人の反応にゴジラも首を傾げる。

「そんなに変か？俺だって来たことねーぞ。人が多いから」

「うん。人の多い所ってなんか緊張しちゃうよね」

アギラは趣味がまるで老人なので、話が合う相手が少なく今時の若者が行くような場所に来た事がない。ゴジラも人は苦手なので人気の多い所になど進んで向かったりはしない。

「ん？人が苦手と言う事はアギさんはともかくゴジラさんは本当は来たくなかったんじゃない？」

「人を嫌っている理由が前世って解ってからはそうでもねーよ。確かに好ましくは思えないが……」

前世の記憶が今の自分と別のモノだという自覚は確かにある有るだが、少なからず影響は有る。特にゴジラの記憶の内一つは怨霊の塊だったし。

「ま、兎に角行こうぜ……」

「おう！目一杯楽しんじゃおう！」

「はい！」

「うん」

「おー♪」

「おう……」

そして五人は遊園地のゲートを潜った。

「リトルは身長制限で乗れる物が限られるのか……」

ジェットコースターに乗りたがっていたリトルをジェットコースター近くまで連れて行き『この線より上の子だけ』とか書かれた看板を見て落ち込むリトルを励ますゴジラ。アイスをやったら元気になったが。

「って、あれ……ミクとウインは何処だ？」

「ウインちゃんはミクちゃんに引っ張られて絶叫巡りに……」

「……………ウイン、哀れな奴……」

「リトルちゃんは、落ち着いた？」

「アイス買ってやったらな……今は」

「ねこー！」

ゴジラが指さす方向をみるとリトルが遊園地に良くある動物を模した乗り物を背に乗せてやってきた。

「コラー！」

係員に謝罪しその場から逃げるように立ち去るゴジラとアギラ。ドツと疲れた。

閉園時間にはまだあるが日も傾いてきたのでミクラスとウインダムを探すゴジラとアギラ。夜のパレードなどない普通の遊園地だから、人も疎らになってきた。

リトルははぐれないようにゴジラの手を取り反対の手でアギラの手を掴み時折ぶら下がっていた。

「いないな、何処までほつき歩いてんだあいつら……」

「ウインちゃんは被害者だと思う」

と、ゴジラの愚痴を周囲を見回しながら答えるアギラ。ライトアップを見る為か、カップルは多い。逆に子供の為だろう、幼い子供を連れた家族連れはゲートに向かっている。

……………家族連れ？

「——！！」

今気付いたが、自分達は端から見れば家族に見えなくないか？子供がリトルで、母親と父親が自分とゴジラ。

その事に気付いたアギラは顔をみるみる真っ赤にさせる。父親と母親ということは、つまりあれだ。二人の関係は——

「あ、居た……」

「ふひゃい!?!」

「ふひゃい?」

そこまで思考が進みかけて唐突にゴジラに声を掛けられたアギラは何とも珍妙な悲鳴を上げる。首を傾げるゴジラに何でもないと返し、ゴジラが見付けたミクラス達の下へと向かった。

先程想像した家族という構図を思い出し、アギラはチラリとゴジラとリトルを見る。彼等は親子のような関係であって、本当の親子ではなかったそうだ。

ゴジラはリトルと会うまで、ずっと一人の種族だと思っていたらしい。

リトルもまた前世の記憶を思い出しているからか、ゴジラを父と呼ぶ。しかし一度も母を求めたことはない。やはり、母親代わりは居なかったという事なのだろうか？

と、その時だった。リトルがピクリと顔を上げゴジラの肩から飛び降りると走り出す。

「あ、おい！」

慌てて追うゴジラ、アギラ達も続く。

リトルは意外とすばしっこく、小さな身体を生かして人ごみをすり抜けていくのでなかなか追い付けない。やがてリトルの前に赤い髪の女性が現る。しかしリトルは、今度は避けようともせず逆に女性に向かって飛んだ。満面の笑みで――

「ママ！」

母親？・怪翼竜!?

リトルがママと呼んだ女性を見て、ゴジラは前世の記憶を探る。赤い髪……リトルが親扱いする……………。

「……………ラドンか？」

「——ッ!? 貴様……………何者だ？」

ラドンと呼ばれた女性は警戒した様子でゴジラを睨む。この反応から察するに彼女は前世の記憶を持っているのだろう。

「……………ゴジラだ」

「……………ゴジラ……………? ゴジラ!? ゴジラか!」

ゴジラの言葉に首を傾げた女性だったが次の瞬間には満面の笑みを浮かべる。そして次に腰に飛び付いてきたリトルを抱き上げる。

「じゃあお前は……………えっと……………そういえばこの子に名前を付けているのか?」

「リトルだ。未希がそう呼んでいた……………」

「リトル……………リトルか……………そうかそうか」

キャツキャツと笑うリトルに優しい笑みを向ける女性。なるほど確かに母親に見える。リトルも良く懐いている。彼女もまた前世からの因縁なのだろう。

「ラドン、お前怪獣娘なのか？」

「怪獣娘……………? ああ、まあ世間一般にそう呼ばれている存在ではあるな……………しかし、お前も来ていたとはな。念のため聞くが、あの後死んだ訳じゃないだろうな」

「俺にや色々な世界の記憶があるが、あれに殺された記憶はないな……………」

「そうか。ちゃんとかこの子を守れたのか……………」

「俺の唯一の同族だからな」

「ん。そして私の家族だ……………」

ゴジラ、正確にはゴジラザウルスは托卵というカツコウのような生態を取る。ラドンは卵を託された存在。彼女に取ってリトルは育てるべき、守るべき仲間であり、家族だ。

「俺は今GIRLSに所属して、リトルとそこの寮に住んでる。お前は どうする?」

「むう……GIRLSか。別段人間を守りたいという意識はないが、世話になっていた両親に恩返しはしたいからな……」

「へえ、そんな風に考えられるのか」

「生前私は天涯孤独だったのだぞ、家族と言ってくれる者達に、思い入れが出来ないはずがない」

「へえ、そりゃ……家族に恵まれたな。こちとら捨て子だったのに……」

と何でもないことのように自身の過去を一つ教えるゴジラに、四人は目を見開く。確かに、彼が家族と連絡を取った所を見た事がないが、まさか家族が居なかったとは。

「おまけに人嫌いだ。施設でも友人なんて出来るはずもない」

「……そうか。まあ、安心しろ。今日から私が貴様の今世初めての友人になってやる」

「いや、友人ならもうアギラ達が居る。今世では十分恵まれてるさ」

と、打算も裏もない素直な感想にアギラ達が照れ臭そうに頬を掻く。

「そうか。それは何より。で、私はそのGIRLSにはどう所属すればいい?」

「怪獣娘なら入隊条件は満たしてる。しばらくは実習、んで試験を受けて正職員って流れだ」

「話は分かりましたよ。よろしくお願いしますねラドラド」

「ら、ラドラド?ま、まあよろしく……」

ピグモンの名付けた名に困惑しながらも手を握るラドン。

やはり彼の世界の出身の怪獣娘には前世の記憶があるようだ。

「ゴジゴジは世界が嫌って追い出した代わり、此方の世界の侘びとしてゴジゴジと嘗て戦った、抵抗出来る戦力を送ってくれた、と推理してましたが」

「なら違うな。確かに私はゴジラと敵対した事もあるが、基本的には奴と共闘していた事の方が多い。奴と争えばリトルが悲しむし、何より私個人、奴を嫌ってはいない」

その言葉にピグモンを気付かず笑みを浮かべていた。前世の自分は世界に嫌われ、拒絶されるような奴と言いなからモスラは彼の行く末を案じていたし、リトルは彼を慕い、そして目の前の女性も彼を快く思っていた。何だ、彼にもきちんと、向こうに居場所があったのだ。その事に、何より安堵した。

「まあ強いて言うなら、彼奴への前世の怒りは合体した時か……」

「……………んん？」

「本当は私が主導権を握るつもりだったというのに、奴め中々どうして強すぎて、逆にな……………」

恥ずかしいのかはたまた別の理由か、ラドンは頬を赤く染める。

「いやまあ、嫌ではなかった。むしろ、その……………あの暴力的な力に振り回されるのは中々心地良かったのだが……………」

「そ、そそそ、そうですか……………」

カタカタと紙コップを持つ手が震え中身がチャプチャプ掻き混ぜられる。

何という生々しい感想なのだろうか。いや、そもそも前世ではお互い種が違っていたはずでは？そういうのも越えた関係だとも言うのか。

「まあ、その後すぐに意識を失ってしまったのだが」

「は、激しかったんですね……………」

「全くだ。彼奴は加減と言うもの知らん……………」

と、その時、背後からピポポポという音が聞こえてきた。振り返ればそこには顔を赤くしたゼットンとアギラ、ミクラス、ウインダムの三人。

「……………」

後日ゴジラが女性陣に謎の説教があつたとかなかったとか。

歩み寄る？・怪獣王!?

「おんや〜？家族と居なくて良いんですかねゴジラさんよ……」
「ああ？」

GIRLS本部の最寄りの駅でバトラとゴジラが睨み合う。

バトラは前世で戦い、殺されている。しかも彼女が本来果たすべきだった役目も全う出来ずに、モスラに任せる事になってしまった。その原因は間違いなくゴジラだ。

「てめえだつてモスラと戦つてたろうが……其の癖危なくなつたら協力しやがってツンデレ女め」

「な、だ、誰がツンデレだ!？」

「てめえだよ……」

ぐぬぬと唸るバトラにはん、と鼻を鳴らすゴジラ。今回はリトルと離れている。ラドンのおかげで四六時中一緒に居なくても済み、仕事に集中出来る。

「しかし……リトルを置いていつて大丈夫だったか……」

訂正。居ても居なくてもあんまり集中出来ていない。

「つーかモスラは？遅刻か？」

今回は、本来はモスラ、バトラ、ゴジラの三人で遠征するのだがまだモスラの姿はない。

「朝、『後五分だけ……』と言ってそのまま……」

「置いてきたわけか。珍しい」

てつきりモスラはバトラと一緒に来るのだとばかり思っていた。しかし来たのはバトラ一人。大方モスラならきちんと五分後に起きると思つて放つて置いたのだろう。

モスラに対して甘いというか。

「……………暇だ」

「知るか」

ゴジラの言葉をばつさり切り捨てるバトラ。しかし、暇だというのは自分も同意見だ。

バトラとて前世の因縁を持ち出すのは、モスラの言葉が無くても良

くはないと解っている。何よりこのゴジラは前世の記憶を最近思い出した別人。前世の因縁をぶつけるのは……。

「しりとりでもするか?」

「しりとり? 何で……」

「やる事無いし……しりとり」

バトラの提案にゴジラは首を傾げながら、しかし提案に乗る事にした。

「お前に考えられるまともな頭があると良いな。陸」

「……………くたばれ爬虫類」

「……………」

二人の間にビキリと空気が軋むような音が聞こえた気がした。

「今のは俺も悪いとこがあったのを認めるが。くたばれは言い過ぎだろクソ蛾」

「我慢出来なかったんだ。悪いな、謝ってやるよ。許せ」

と、悪びれる様子もなく言うバトラの対応にゴジラの額に青筋が浮かぶ。

「誠意つてのが感じられねーな」

「何でお前相手に誠意見せなきゃならねーんだおい」

ビリビリと元怒りの破壊神と断罪の破壊神の覇気がその場を包む。周囲に居た野次馬は二人の覇気に当てられ距離を取る。駅員や警察も、覇気に当てられ近付けない。

そして、その覇気を先に解いたのはゴジラだ。

「いい加減に止めねーか、もう。お前が俺を嫌ってるのは知ってる。だから俺もお前が好きになれない。けど何も、嫌ってるわけじゃねーんだ。出来るなら、きちんと仲良くしたいと思ってる。お前も少しは歩み寄って来い……」

その言葉に、バトラも覇気を消す。

「言われなくても、アタシだって解ってるよ。ちゃんと謝る。悪かったな……………」

「何だ? やけに素直だな。可愛らしいと思うけどな」

「な!?! き、気持ち悪い事言うな……お前に可愛らしいとか言われても

嬉しくない！」

「いや、気持ち悪いは酷くね？」

バトラの発言に若干傷付いたような反応をするゴジラ。と、その時……

「寝過ごしましたー！す、すいません……」

と、寝癖も直していないモスラがやってきた。

「あ」

「……？」

「(ん)がついたな」

「モスラの負け」

「え？え？何ですか二人共……」

二人の反応に首を傾げるモスラ。しかし答えは返ってこなかった。

さて、今回の任務は沖縄へ遠征。飛行機の中で三人はトランプをしながら到着を待つ。

しかし数分もすればゴジラとバトラも飽きてきた。

「あ、ならしりとりでもします？」

と言うモスラの提案に、二人は苦笑するのだった。

沖繩?・怪獣王!?

沖繩のとある場所で、一人の少女がピクリと顔を上げる。次の瞬間、周囲から影のような謎の生物達が現れた。

少女はふあ、と一つ欠伸をした。

「そういえば今回の遠征の目的ってなんだ?」

「あ、はい。確かシャドウの反応を感知して向かって来ても既に倒し終えていて、しかし報告がない。現場の怪獣娘の報告もない。もしかしたら新たな怪獣娘かもしれないとの事ですが……」

「ん?そんなの現場の奴等の仕事だろ?何でわざわざアタシ等が?」

「ゴジラは別の記憶として認識しているので抜きますが。基本的に前世の記憶を完全に持つ私達はまず暴走しません。前世の凶暴性に飲まれるという事がありませんから。一度や二度なら偶々暴走した怪獣娘の可能性も考えましたが立て続けに起こるとなると……」

と、そこでゴジラがああ、と納得した。要するに、暴走しない怪獣娘が現れた可能性が高いのだ。別に探せばいなくはないだろう。しかし、こうしてモスラやバトラ、ゴジラ達のような前例が現れた今、記憶持ち、ゴジラの世界の怪獣の可能性もあるわけだ。それでこのメンツ。

「理解したけど、どうせならリトルも連れてきたかったな……」

海は好きだ。前世ではゴジラは元々海に住んでいたからだろう。それはリトルだって同じはずだ。

どうせなら前世以来、二人で泳いでみたかった。

「ゴジラゴジラ、これは何ですか?」

「ん?ああ、シーサーだな」

モスラは初めてきた沖繩に興味津々なのか、目をキラキラさせながらシーサーの像を見詰める。

「確か沖繩の守護神だったかな……」

「守護神……成る程。私と同じですね」

と、モスラはシーサーに向かって手を合わせる。守護神が守護神に

祈るとは何とも妙な光景だ。

「……ん？ゴジラ、違うぞ。シーサーは厄除けの獣。守り神じゃないぞ」

「ん？そうなのか？彼奴がそうだったからてつきり………」

ゴジラの言葉に首を傾げるバトラ。まるでシーサー本人に会ったような言い方だ。

「会ったんだよ。シーサーキングだったかガイザーシーサーだか言う奴に……俺の偽物と戦う時にな……ん、ライオンキングだったか？」
名前が出てこないが、まあ気にする必要もないだろう。会うとは限らないのだ。

「苦ー」

ゴーヤチャンプルを口にしたバトラは顔をしかめるバトラ。どうやら苦手な味付けのようだ。ゴジラとモスラは普通に食べているが。

「良く食えんなお前ら」

「この実は本来種を作り、子を残すためのモノ。それを頂き、糧にするのです。無駄には出来ませんよ」

「本来俺は雑食性で、島にや人間が戦争始めるまで植物しか無かったからな。野菜は好きだ。今は肉も好きだが」

「元ベジタリアンかよ。似合わねー……」

と、バトラが呆れた時、ソウルライザーが鳴る。

「……シャドウか、まだ観光もしてねーってのに」

「そんな場合では無いでしょう。行きますよー！」

と、モスラが駆け出す。そのままソウルライドして空に飛び立つモスラ。バトラも慌てて追う。ゴジラは地図を確認すると、近くの川に飛び込む。

ソウルライドし尾を器用に動かし川を泳いでいく。

モスラがたどり着くと既に戦闘が始まっていた。モーニングスターを駆使してシャドウを倒している。しかし、戦っている怪獣娘は沖縄の怪獣娘ではない。

「まさか、彼女が？」

「今はそれよりシャドウだろ。ゴジラは何処行つた？」

と、バトラが周囲を見渡した瞬間、川の水が弾けゴジラが出てくる。前世ならその巨体故に行えなかったが、今のサイズなら川を泳ぐことも容易い。

「よお、手伝うぜ！」

と、ゴジラは少女の背後に迫っていたシャドウを蹴り飛ばす。

「助かる！」

そう言った少女の格好は、棘付きの手甲と肩パット。腰からは同じように棘の生えた尻尾が伸びている。おまけに背中にも棘の生えた甲羅のようなモノを付けている。

「……………おいアンギラス」

「なんだいゴジラ……………ゴジラ？」

ゴジラの言葉に思わずといった風に返した少女は、自身が発した言葉に首を傾げた。

「……………ひよつとして、ゴジラ？」

「昔話は後だ。今は片づけるぞ」

「OK！」

ゴジラの言葉にアンギラスは丸くなる。ゴジラは迷うそぶりも見せずに、アンギラスを蹴り飛ばした。高速回転を加えられた棘付きの球はシャドウを何体も巻き添えにして木にぶち当たる。木がへし折れ少女を押し潰す。

少女は木をどけ立ち上がるが目を回したのかふらふらしている。

「ど、どうだ見たか……………これがゴジラと私の……………必、殺技……………きゆう」

バターンと倒れるアンギラスに無数のシャドウが迫るがゴジラがモーニングスターを拾い力任せに振るい吹き飛ばしていく。

「アンギラス！」

「ま、まかせろ……………」

ゴジラが呼ぶとアンギラスはモーニングスターを抱えるようになる。

「おらあ！」

先程より特大の棘付きのハンマーにシャドウ達が次々吹き飛んでいく。とてつもない威力だ。

「……いや、女の子振り回すってどうなんだ……」

「まあ、あの子も怪獣娘ですし……」

呆れた様子のバトラに苦笑するモスラ。

「見たかく……ご、合技……アングラスハンマー暴龍怪球烈鎚……うぷ、きぼちわるい」

「変な技名つけんな」

水族館？ 怪獣王！

「いや、まさかゴジラにこっちの世界でも会えるなんてね」

アンギラスはルードビアを飲みながらゴジラに親しげに話し掛ける。

実際、前世ではかなり親しかった。目を瞑れば、アンギラスの瞼の裏にその光景が有り有りと浮かぶ。

偵察に行くように言われ人間達に攻撃され、妙な気配を探るように言われれば偽物に顎を裂かれ、操られていた時はサッカーボールにされ……………。

「……………あれ？」

何故だろう。碌な思い出がない。

「しかしまさか沖繩の謎の怪獣娘がお前とはな……………てつきりシーサー辺りかと思ってたぜ」

「ああ、キングシーサー？ 居るよ、彼女も」

「……………マジ？」

言い方からしてキングシーサーも女になっているようだ。

「シーサーって沖繩語で獅子だよな？ 何でキングは英語なんだ？」

と、バトラが首を傾げる。

「言われてみれば……………つかお前、何でそんな知識を……………ああ」

ふと疑問に思いバトラを見ると、バトラは観光パンフレットを読んでいた。

「楽しみにしてたのか」

「……………」

ゴジラの言葉にバトラはピッツと横を向いた。如何に元文明の破壊神とは言え、人間として過ごしたのは今世が初だ。テレビなどを見るアニメはもちろんグルメ、旅行観光など興味が引かれるモノだらけで少しずつ俗世に染まってしまっても、誰も責めることなど出来まい。

「大丈夫ですバトちゃん。私もですから！」

と、モスラがお土産を両手に抱えて微笑んだ。

「何時の間にも!？」

さつきまで何も持っていなかった筈なのに気付けばお土産を抱えているモスラにゴジラは思わず目を見開いた。

「ジンベエザメです!ゴジラ、ジンベエザメですよ!」

水族館でモスラに引つ張られながらゴジラは魚を見て回る。あれは食ったな、とか、あれは旨かったなあなどと考えていると野生の勘で察したのか客の方から離れていく。

「……ゴジラ、涎垂れてるぞ」

「……………」

「ゴジラは海鮮が大好きだったもんね。なんならこの近くの海鮮丼でも買って来ようか?」

「急げよ」

「OK!」

ゴジラという言葉にアンギラスはダツシユで駆けていった。懐かしいやりとりだ。

「ゴジラ、そろそろショーですよ!急ぎましょう!」

「バラバラに行動すりや良いだろ。俺はここでアンギラスを待つ」

「モスラ、ショーの席は既に確保してる」

「……………四人分か?」

「ああ」

ゴジラという言葉にバトラが頷く。流石に金を払わせて行かないと言わうわけにも行かず、大人しくついて行く。

「持ってきた!」

「よし座れ」

「OK!」

弁当片手にやってきたアンギラスはゴジラに促されるまま隣の席に座る。

丁度開始の時刻だ。

基本的には餌の一つに見ていたが、こうしてショーの一環として観るのも中々どうして面白い。

『さあそれでは、お客さんの中で先着10名でイルカ達に餌をあげてみましょう！』

「――↓」
モスラが早速手を挙げる。モスラを挟んで向こう側に居るバトラもウズウズしている。

「バトラ、脇の下が解れてるぞ」

「ん？」

『はい！ではまずはその美人姉妹のお二人！』

「な、あ……ゴ、ゴジラ!?!」

「ほら行ってこい行ってこい。今日はテレビ局も来てるみてーだし、華やかな姉妹が居たらまず使う。良かったな」

「……………覚えてろ」

と言いながらも、バトラは何処か嬉しそうに階段を下りていった。

ショーも終わり、もう一人の怪獣娘であるキングシーサーに会いに行く為に水族館の出入り口に向かうゴジラ達。

ショーだけが目当ての客も多く居たのか込み合っている。

入り口と出口で境目が作られ、両方を人の波が流れていく。

「はぐれるなよお前等」

と、人波に押されながら言うゴジラ。実際はぐれてしまいそうなほど人が多い。

「――ツ―」

出口に差し掛かった所で、唐突にゴジラが振り返り入り口側の通路を見る。そこで、目が合った。

銀髪の少女だ。少女もまたゴジラを見ていた。が、少女は後ろからの客が、ゴジラはバトラに腕を引かれ歩き出す。

「何してんだ、はぐれんなったのお前だろ」

「あ、ああ……」

振り返るが少女の姿は人波に飲まれ消えていた。

「ここにキングシーサーがいるんだ」

「……………祠？」

「守り神の生まれ変わりですし、崇められているんでしょうか？」

「いや、廃神社に勝手に住み着いているだけ」

モスラの言葉にアンギラスが返すとモスラは何とも言えない顔をする。と、その時……

「——つまたシャドウか!？」

ソウルライザーが震えシャドウの発生を告げる。運が良いのか悪いのか、この近くだ。

「キングシーサーは？」

「ちよつと待って」

アンギラスがそう言つてラジカセのスイッチを押すと音楽が流れ始める。

『暗い夜のくとぼりが消える』

「……………なんだこりゃ？」

「目覚まし。この歌が終わるまでキングシーサーはまず起きない。時間は約二分」

「先に行くぞ」

ゴジラはドン!と地面が陥没するほどの踏み込みで跳ぶとあつと言う間に見えなくなった。モスラも変身し飛んでいき、バトラはモスラ達と祠を見た後ゴジラの後を追った。

「……………じゃ、後でねキングシーサー!」

アンギラスも祠に向かって片手を上げ走り出した。ちなみに歌はまだ二番目にも入っていない。

仕返し? 怪獣王!?

ゴジラ達はシャドウを相手にするが中々減る様子がない。発生率の高さと言い、巢でも近くに有るのだろう。GIRLS沖縄支部の職員は搜索に向かった。

そして数分後にシャドウの巢を殲滅したという報告が来た。

「よーやくか……………」

と、ゴジラ達が肩の力を抜いたその時――

「おまたせー! わんが来たからもう安心さー! シャドウなんてたつぴらかすヨ!」

と、褐色肌の少女が現れた。

額には王冠のような物が有り、動き易そうなエイサーを改造したような服を着ており足は裸足。ふわふわとしていそうな金髪が茂った頭には大きな犬のような耳が二つ揃っている。

「お前がキングシーサーか?」

「むん? 誰だ? わんはなーみたいなの奴は知らないぞ。それよりシャドウは?」

「遅刻だバカが。たく、前回と言い中々起きねーし、役に立たねーし、使えねー守り神だな」

「な!? 誰が使えないか! わんはここ最近ずっとシャドウを……………アングラスにたつぴらかせてたさー!」

「おい待て、アングラスはお前のパシリじゃねー。俺のパシリだ」
「え?」

ゴジラの言葉にアングラスがゴジラを見る。しかし思い返せば否定出来ない気もする。

「で、シャドウは何処ダ?」

「もう終わ――」

った、と言おうとした瞬間ソウルライザーが震える。またシャドウ反応。しかも、シャドウビーストだ。

「あー!?!」

そして地面から現れたシャドウビーストに吹き飛ばされるキング

シーサー。今回のシャドウビーストは二本の角が前方に突き出した牛の顔を持つミノタウロスのようなシャドウビーストだ。

見た目完全にパワータイプのシャドウビーストは、角の先端から雷を放つ。

「効くか!」

しかしゴジラは前世に於て落雷を吸収し体質改変をした過去を持つ怪獣。この程度の電気なら逆に吸収してしまう。そして今のゴジラには、人の知恵も存在する。

周囲の砂鉄を磁力で引き寄せると拳に纏いより堅く、より重く拳を作り変えていく。嘗ての皮膚にも重さにも到底及ばぬ、しかし強力な一撃はシャドウビーストの腹部を文字通り吹き飛ばした。

記憶持ちの怪獣娘は一度本部で保護すると言う事らしいので、アンギラスと気絶したままのキングシーサーを連れ飛行機に乗ったゴジラ。未だ体質は変わっているままだ。変身していないからか、ネットに載る磁石人間程度だが。

「なあ、なんかピリピリすんだが……」

「我慢してくれ。もうちょいこのままにしておきたい」

と、ゴジラが言うとバトラは不服そうに席に座り直す。

「……お前、何を警戒している?」

バトラの言葉にモスラとアンギラスもゴジラを見る。バレていたようなので、ゴジラは肩をすくめて口を開こうとした時、周囲が騒がしくなったのに気が付く。

どうやら窓の外を見ているようだ。

「やっぱ来たか……彼奴が最後に受けた命令、間違いなく俺と役立たずの打倒だもんな」

と、ゴジラはキングシーサーの首根っこを掴むと引き摺りながら歩き出す。

「アンギラス、ちょっとドア開けるがすぐ閉めろ。お前の力なら余裕だろ?」

「え？あ、OK」

戸惑いながらも頷くアンギラス。ゴジラは客を落ち着かせようとしている職員の間をすり抜け電子機器を磁力で狂わせ扉を開ける。轟々と吹き荒れる風に吹き飛ばされるように外に投げ出されるゴジラ。アンギラスは急いで扉を閉めレバーを引く。

さて外で何が起きているのだろうか？席に戻り窓の外を見たアンギラス。モスラとバトラも外を見て、銀髪の少女が飛んでいるのを見付ける。

金属製の、ゴジラの背鰭に似た背鰭を持ち金属製の尻尾を持ち、金属製のグローブを嵌め金属製のブーツから炎を吹きだし空飛ぶ少女。アンギラスは頭と頬を押さえて気絶した。

「よお、久し振り？」

変身し、磁力を使い飛行機の側面に張り付くゴジラに、銀髪の少女は感情を感じさせない瞳を向けてくる。

その目はゴジラ、キングシーサーを一別すると口を開く。

「ゴジラ、キングシーサー、エネルギーパターンから同個体と確定。任務を遂行する」

「やって見る鉄くず」

と、ゴジラが言った瞬間少女の口からレーザーが放たれる。

「出番だ、いい加減起きろ」

「うぐ!?!」

ゴジラのチョップに目を覚ましたキングシーサーは迫ってくるレーザーを見て慌てて右手を突き出す。そこには眼のような模様があり、レーザーを吸い込むと左手の目の模様から倍にして跳ね返した。

「どういう状況さ!?!ちよっ！放し——うにげえさびら！」
「やだね」

レーザーが効かないと見ると今度はグローブを突き出す。グローブの先端と、さらに身を守る装甲が開き大量のミサイルが飛んでく

る。が、磁力で全て引き寄せキングシーサーを振り回し誘爆させる。
「よしー」

前世で盾にされた借りはきっちり返した。しかしこれ以上は流石にまずいだろう。ゴジラは少女に向かって跳ぶ。

「――!?」

慌てて距離を取ろうとした少女だが不意にゴジラと少女が慣性を無視したかのような不規則な動きで引かれ合いくっ付く。

「海は俺の縄張りだ。鯨の取り方でも教えてやるよ」

「わんは関係ない！はな、放せー！」

せー！せー！せー！……せー！……せー！……せー！……

虚しい木霊も風に流され消えていき。3人分の体重を支えられないのか必死にジェットを吹かす少女と共にゴジラに連れられ落下していった。

二日後。GIRLS本部近くの川でザバリと影が現れる。その影は二つの人影を引き摺りながらGIRLS本部に向かう。

「戻ったぞ」

「戻ったぞじゃありません！」

それは果たして、ゴジラであった。本部に入った瞬間ピグモンが叫んできた。

「皆に心配かけて於て、ついさつきすぐ戻るって連絡して！何考えてるんですか！ピグモン怒っちゃいますよ！もー！もー！」

ピヨンピヨン跳ねながら両手振り回すピグモン。ぶつちやけ全然怖くない。

「悪い。実は近くの島で半日ほど戦って、無力化した後に説得したんだが時間が掛かって……」

「……………とにかく、無事で何よりです。後でリトルちゃん達に顔を見せてあげてくださいね」

ピグモンははあ、と溜め息を吐くと気絶している二人を見る。

「取り敢えずちゃんと持って医務室に運んでください」

「ああ……」

二人は多少水を飲んでしまっていたが大事にはならなかったようだ。早速リトルに顔を見せに行こうとしたゴジラだったがガシリとピグモンに腕を掴まれる。

「ピグモン？」

「後ではまだなのですよ。まずは、説教と反省文のお時間で。今夜は寝れると思わないでくださいね」

ニツコリと笑顔で言うピグモンに、ゴジラは怒らせないように気を付けたつもりだった人を怒らせてしまったことに気付く。解放されたのは翌日の午後五時。しかしその後、モスラからも説教をいただいたのだった。

指導？・怪獣娘!?

「……………」

「……………」

アギラ達三人組は、今日から数日教育係になった。

教育相手は先日ゴジラが連れてきた怪獣娘の一人メカゴジラ。前世に於てゴジラを徹底解明した宇宙人がゴジラを倒す為に造ったらしい。

前世の記憶を思い出したのは物心付いた時。その日から、ずっと前世最後の命令であるゴジラとキングシーサーの殲滅を目的にしていたらしい。

「……………」

「ね、ねえアギちゃん、ウインちゃん、あの子さつきから何も言わないんだけど……………」

「ま、まずはコミュニケーションからです。頑張りましょう」

前世の記憶持ちは今までゴジラとモスラ、バトラ、リトルとラドンだけだった。彼等は最近記憶を思い出したゴジラは勿論、人間寄りの思考をしていた。

しかしこのメカゴジラと言う子は、前世が機械だった為か人に触れ合おうとしてみななかった。結果、あまりに人間らしくない。

そんなメカゴジラに、アギラは手を差し出す。

「今日からよろしく」

「……………了解」

無口だが悪い子ではない。話してみた結果、アギラはメカゴジラをそう評価した。

そもそも今まで感情を持っていなかった機械だったのにいきなり感情を持たされ、きつと混乱していたのだろう。そして抛り所として、最後の命令を選んだ。

「質問が有る」

「何？」

「お前達は、嘗て怪獣だった。が、記憶は無いのだろうか？何の為に力を使う？」

怪獣の大半は目的なくその力を振るう。名前の通り獣なのだから当然だろう。しかし今は理性を持ち、道徳を持つ。自分で善悪を判断し力を使えるはずだ。

「……人の為、かな。ボクは、ボク達は人の役に立ちたい」

「まあね」

「ですね」

アギラの言葉にミクラスとウインダムが頷く。その表情を、メカゴジラは観察する。

「……………私は、命令を聞くように造られた。命令に従うだけで、何かを考える事は無かった。いきなり意志を与えられても、恐ろしいだけだ。だから、前世最後の命令を生きる意味にした」

そしてゴジラと戦い。敗れた。後一人居た気がするがまあ関係ないだろう。ゴジラとしか戦闘行為を行った記憶は無いし。

そして敗れた後、こう言われた。

『既に命令してくる奴も居ねーのに、何で挑んでくる』

それが生きる意味だと応えたら、あつそと興味無さそうに返された。

たぶん、むつとしたのだと思う。お前は何の為に生きる？そう聞いた。嘗ては怒りの化身で。人の為でなく、あくまでも自分の為。

友を傷付けた自分を倒しに来た彼が、今更人の命に興味を持つとは思えなかった。言葉に詰まると、そう思った。

『さあ、知らねー。ま、今はそれを探すために生きてるかな』

何だそれは、見付からなかったらどうする気だと聞くとゴジラはやはり笑った。

『何時かは見付かるさ。だって今の俺達は、独りじゃねー。前よりもっとたくさんの仲間が居る。たくさんの縁が有る。繋がりが有る。だからきつと見付かると信じてる』

根拠も無いのに、そいつは確信してそう言った。

人間に住処を奪われ、生物として穢され、最後の生き残りは新たな、別の生物にされ、人間を蹂躪し、怒りを収めても人に対して一切の感慨を示さなかったと言う情報を与えられていた。しかし、彼はそんな事は無かった。

彼は前世とは違う。今を生きている。

自分は、過去を生きていた。

「……」指導お願いします、アギラ先輩」

「うん！任せて、新しい怪獣娘さん！」

「にや〜にや〜♪君はどうしてそんなに可愛いのか〜♪」

波打った黒髪の少女は猫を抱き抱えながらそんな歌を歌う。その周りには皿が置かれ、皿の上にはキャットフードが入っており、猫が群がっていた。

「にや〜」

「ん〜何々？餌の量を増やせってえ？だあめえ。毎日あげてたら君達が駄目になっちゃうもおん」

と、膝の上に乗ってきた猫を撫でる少女。不健康そうな見た目で薄ら寒く笑うその光景は何処か不気味で、時間が時間なら目撃した子供は一目散に逃げ出すだろう。そして絶対悪夢を見る。

都市伝説に『猫少女』なんて増えるかもしれない。

「聞いてよ聞いてよお。彼奴等ったら酷いんだあ。まあたボクを虐めてくる。酷いよねえ？」

「にや〜」

「だよね〜。今日もゴミ箱を三階から落とされてさあ、教師は見て見ぬ振りだよお？しかもボクが抗議しても絶対に『お前に問題が有るんだろ』とか言うに決まってるよお……」

本当、酷いよねえとやはり笑みを浮かべ虐められている現状を話す少女。

「全くボクが犯罪者の娘っただけで大した扱いだよねえ。死ねばいいのになあ……ていうかさあ、彼奴等自分達は正義のつもりなんだよお

？変わってるよねえ？ボク見たいな身長の低い少女に寄って集ってゴミ押し付けて、物投げて、悪人を追い出そうとしている自分たちは正義、何だから笑えるよねえ。笑える笑える」

猫がにやあ、と一声鳴くと手を離す。猫は降り、別の猫がやってきた。

「でもさあ、一度だけ、本気で殺してやろうと睨んだ事が有ったんだあ。そしたらねえ、しばらく何もしてこなくなったのお。彼奴等ったら仕返してこない奴にしか何にも出来ないんだねえ。変わった正義だよねえ……………本当、ボクより彼奴等の中身の方がよっぽどグズに腐ってんじゃないのかなあ？」

少女の問いに答える者は居ない。猫は居るが猫はそもそも少女の言葉など理解していない。常人なら聞くだけで顔を背けるような内容だが少女は怒りも悲しみも狂気も無くただその日あった事、その日思った事を語るだけなので、猫達は野生の勘が働こうと少女に警戒心を寄せない。

「ま。いつか……………また明日ねえ」

さて、次の日も少女は猫達との秘密の遊び場にやってくる。血の匂いがした。慌てる事も無く歩き、茂みの奥に向かうと沢山の猫が殺されていた。爪に血が付いている者もいる。

「……………うん」

少女は周囲を見渡し、はあ、と溜め息を吐く。

「殺しは駄目だよお。殺しはいけないよねえ。殺される覚悟を持たなきゃ、魚を、鳥を、獣を、山を、人以外の何かを殺そうが自分も何時か何かに殺される覚悟も無い癖にさあ……………」

少女はゆらりと体を揺らし踵を返す。と、そこへ警官が数名やって来る。その目には警戒や敵意が浮かんでいた。

「すいません。ここで、猫を殺して遊んでいる女子高生が居ると通報が有ったのですが」

「……………悪戯じゃないですかあ？ここは、猫の死体を捨てる場所ら

しくてえ、猫の白骨死体なら大量に有りますけどねえ……」

警官の何名かが茂みの奥に向かうとなるほど、確かに猫の白骨死体が大量にあった。1日2日は勿論、数刻で白骨化などするはずもない。

「1日一匹埋めてあげることにしたんですけどお、犯罪ですかあ？」

「あ、ああ……まあ、公園は公有地だからね。でも、今回は見逃すよ。君みたいな子が増えてくれれば嬉しいんだけどね」

「やだなあ、私みたいな奴なんか増えたら大変ですよお」

少女はケタケタ笑いながら去っていく。後日、公園には勝手にペットの死体を捨てないでくださいという看板が立て掛けられた。

捜査？・怪獣王!?

「猫の死体の不法投棄ねえ……」

ゴジラ新聞読みながら朝飯のハムを口に含む。死体が腐るのは時間が掛かるはずだ。ましてや白骨化など。相当臭いもしただろう。つまり有り得ない事だが、一日以内に白骨化した事になる。

「……白骨化、ねえ」

ゴジラは片手で片目を押さえ呟く。嫌な思い出が有る。

だが放つては置けないだろう。アレはあくまで、自身の身となる原料を集めていただけで、結果としてゴジラが焼き尽くしたが、海を汚すヘドロの塊になった為に敵対しただけだ。進んで人を襲うとも戦う事になるとも思えない。前世なら。いや、そういえば笑われた記憶も……。

まあしかし、あれに明確な意志は無いはずだ。種族目的である自身の強化を目的にしていた……と、思う。

しかし今は人間として生まれ、自我を明確に持つはずだ。善意を持つこともあれば、当然悪意を持つこともある。

「ゴジラは私の相棒だ。離れるコウモリ擬き……」

「ふん。私には子も居るのだ、お前こそ離れる針鼠」

ゴジラはそれぞれ両腕に引付く二人の女、ゴジラが教育係を任せられたラドンとアンギラスを見る。

リトルはまだ幼いため正式な職員にはなれないのでピグモンが面倒を見ている。

「私なんてゴジラに何時も頼りにされていたんだぞ！」

「私とてゴジラと一つになった事も有る」

しかし先程から周囲の視線がキツイような気がする。何だろうか？とゴジラが首を傾げていると前から人影が近付いてきた。避ける気は無さそうなので道の端に逸れたのだが向こうからわざわざぶつかってきて、いてーいてーと肩を押さえる。

「おうこら兄ちゃん、骨折れちまったじゃねーか。詫びとして金払え……何なら、そっちのどっちか貸し——」

ゴジラをつま先が男の腹を捉え、打ち上げる。街路樹の上に落ちた男はそのままバキバキと枝を折りながら茂みに落ちる。

「女は物じゃねーんだ。此奴等の意志を無視しててめーに渡すわけねーだろ。次此奴等を物扱いしたらぶち殺すぞ」

「す、すみませんでしたー!」

男は大慌てで逃げていく。骨は折れてないようだが元気な奴だと、ゴジラが感心しているとゴジラの両腕を掴んでいた二人が離れる。

「?もういいのか?」

「あ、ああ……」

「大丈夫……」

顔を赤くして俯く二人に首を傾げながらゴジラは再び歩き出した。

さて、ある少女は下駄箱に何時ものように入っていた罵詈雑言手紙に紛れていた便箋の中身を確認しながら廃工場に向かっていた。

伝えたい事が有るとの事で待ち合わせ時間もそろそろだが。と、建物の中に入りキョロキョロ周囲を見渡して居るとギイイと音を立て扉が閉まる。

「うわ、本当に来たよ。気持ち悪!」

「告白されるとでも思ったのかよ!」

「……………」

ゲラゲラ下品な笑い声と共に複数の男女が現れる。少女と同じ学校の制服を着た、少女の同級生達だ。

「お前さあ、今日も学校来ていい加減にしろよ。お前に来られて安心出来ない俺達の気持ち分かってんの?」

「あんたのせいであ、私の友達毎日不安で寝れないとか言ってるのよね。っーかどうやって警察を誤魔化したの?あ、ひよっとしてその身体売った?」

再び下品な笑い声が響く。少女は赤い左目をスツと細め周囲を見渡す。その目には戸惑いも恐怖も無い。その反応に、顔をしかめる男女達。

「まあでもさあ、そんな胡散臭いラブレターに呼ばれるぐらいだし、男に餌えてんでしょ？あたし等が紹介してやんよ」

と、ギャル風の女子が言うと言見覚えのない男達が現れる。中年から、少し年下まで選り取り見取りだ。

「わー、さすがクラス一の援交上手だねえ。男の知り合いが沢山いて羨ましいよお……あ、でもお、そんな気持ち悪い目をした男とは知り合いにすらなりたくないなあ」

ようやく口を開いたと思っただけ出たのは懇願でも謝罪でもなく、嘲るような笑み。

男達の表情が憤怒に歪むが少女は全く気にしない。

「っ……この、社会のゴミの分際で………!」

「ところどころで、さつきから………」

「？」

「息苦しいと思わないい？」

「「——!?!」」

次の瞬間、少女に近付いていた男達が倒れる。男達だけではない、少女に近い順に、次々と喉を押さえ倒れていく。

「かひゅ……!?!か、はあ………!?!」

喉を鏝で擦るような激痛が襲い、更に目も開けていられないほどの痛みが走る。

「あ、あんだ……なに、じだ………」

「これからするんだよ。でも大丈夫だよお、殺すまではしないからあ。ちよつと耳の穴を溶接して、眼球を溶かして、喋れないように舌も溶かすだけだからさあ。なあに、安心してよおショック死しないように気を使ってあげるよお……嬉しいい？嬉しいよねえ……猫を殺しても自分達は殺されないんだからあ。ただこの痛みは絶対にトラウマになつちやうねえ、ひよつとしたら音も光も無い世界で何時ボクの気が変わって君達を殺しに来るのかと、残った触覚に何かが触れる度に

怯えるようになるかもねえ……」

ケタケタ笑う少女の顔に、ゾグリと背筋が凍るような怖気が走る。

「ち、ちが……わだじじゃ……な、ほがのやづが……」

「そうなの？でも何で知ってるのお？やる事を知ってたんでしょお？止めなかつたんでしょお？」

「……………」

顔を青くしていく少女に、少女は躊躇う素振りも見せずに近づく。

「そういえば何時だったかボクが何の反応も示さなくてつまらないなんて陰口言ってたねえ？喜んでよお、今日がその反応を示す日だ……」

と、少女の手が眼前に迫った瞬間、重たい鉄の扉が吹き飛ぶ。少女が振り返るとそこには三人の人影が有り、その内一つの人物には見覚えが有った。

「……………ゴジラ」

「よお、お前は……ヘドラか？」

「……………そうだよお」

人の犯した罪により生まれた二匹の怪獣、放射能と毒ガスという、人が行ってきた罪をそっくりそのまま返していた二匹の怪獣の生まれ変わりが、その場にて再会した。

再戦？・怪獣泥!?

「でもどうやって解ったのお？ボクを富士まで追い掛けて来た時みたいに、気配でも追って来たあ？」

「ああ、そういや俺そんな特技も持ってたな……」

「……？」

ゴジラの言葉にヘドラは首を傾げる。まるでつい最近まで忘れていたような言い方だ。まあ、見た目からしてこの世界で10数年は過ごしているようだし、一つぐらい忘れていても可笑しくない。

「だ、だすげ……だじゅげで……」

「……ん？」

不意にゴジラの足下に居た男が縋り付いてくる。

ゴジラはニコリと笑う。ゴジラを知る者が見れば不安になるほど優しい笑みで。事実アンギラスとラドンは不気味がっていた。

「離せ」

「——!?!」

ズドン!とゴジラの足が男の顔の横に突き刺さる。

「……どうやってボクを見付けたのお？」

「GIRLSは怪獣娘の搜索なら、色々出来てな。ニュースになってた公園周辺の監視カメラ調べてお前を見付けた。で、制服から高校割り出して調べた」

「監視カメラ何ていろんな奴が映ってると思うけどなあ」

「だが目は違う。基本的に記憶持ちの怪獣娘は俺の世界の怪獣だけで、その目は大体人間を下に見てる。守ってやらなきゃ、何てのは上から目線じゃなきゃまず出来ないしな」

上から目線。なるほど、とヘドラは納得する。自分が今まで耐えられたのも、案外上から目線で、その気になられたら何時でも殺されるのに調子に乗ってバカみたいだと思っていたのかもしれない。

「で、私の学校を調べた後どうやってここに辿り着いたの？」

「ああ。最近機械に強い奴が入ってな、ネットを調べてたら裏サイトでこんなの見付けてな」

と、スマホを見せると違法の復讐代行サイトの依頼の一つが見えた。そこにはヘドラが写っている。

「ふむふむ、『この女に虐められました、復讐してください』い？あははあ、酷い言いようだねえ……」

「ま、スマホをハッキングさせりやあどつちが悪いか何て丸分かりだな。おまけに随分自信家らしいな。自分達がやってる器物破損罪を功績と思ってるらしい」

と、ゴジラがスマホを操作し写真を見せるとヘドラに今まさに耳や眼球を溶かされそうになっていた少女の顔が青くなる。

ゴミを撒かれ、カッターや彫刻刀で文字を掘られた机、そしてその机の前でポーズを決める男女。

「功績は皆に伝えるべきだろ？だから、そいつのアカウント使って『犯罪者の娘に鉄槌なう』って投稿させといたぜ。他の奴らも似たような感じだ。ま、後数分もしないうちにいろんなサイトで話題になるだろうな」

「……な、あ……なんで、わだし……そんな目に……」

「やってきたことが返ってきただけだろ？」

と、ゴジラは興味無さそうに言う。

「ついでにこのサイトも警察に話してあるし、今回の件は未覚醒の怪獣娘に暴行しようとした結果怪獣娘が暴走したって放送されるだろうな。そうなりや、悪人はどつちか直ぐ世間は決める」

終わったなお前等、と周囲に転がる男女を見て言うゴジラ。そのままヘドラに近づく。

「で？お前今何処にいる……？」

「あ、バレたあ？教えてああげない♪」

次の瞬間ヘドラの肉体がドロリと溶ける。分身体だろう。元々が集合体のヘドラの転生者ならその程度出来ても可笑しくない。

「じゃ、探しに行くか」

「この人達は？」

「ほっとけほっとけ。俺達は何も見てない。此奴等が何を喚いたところで、もう世間は信じねーよ」

「ありやく、バレたかあ」

学校の屋上で、戻ってきた分身を取り込みヘドラーはケラケラ笑う。そして、自分の分身が連れてきた客人を見る為に振り返る。右目を隠す前髪には縦に避けた赤い瞳を模した髪飾りが有り、フリルが宛がわれしかし薄汚れボロボロの服は固形の何か溶けているような錯覚を覚える。

「目的はボクの保護かなあ？それが仕事だもんねえ……良いよお保護されてあげてもお。ただちよつと、ボクと遊んでよお、ゴジラ……」
「あ？」

「前世での君との決着はさあ、人間の知恵が有ったり、地表の汚れが減ったせいでボクが弱体化したりと色々有ったじゃないかあ……だからあ、ちゃんと決着を付けようよお。GIRLSに入ったらそれも出来そうにないしさあ」

「……………本音は？」

「……………人間になって苛立ちを知ったんだあ。ボクは負けてない」

と、その言葉と同時にヘドラーは床を蹴り駆け出す。ゴジラはヘドラーの突き出してきた手のひらを躲すとヘドラーは地面に手を着ける。途端に、グジュグジュと音を立てコンクリートで舗装された床が溶ける。

「酸の力、上がってるな」

「こんな小さな身体でもお、前回と同じぐらいの強酸が生めるんだよお、媒介も無しにねえ……凄いでしょお、ねえ、凄いやねえ？」

と、ヘドラーが腕を振るうと腕を包むように現れた酸が飛んでくる。腕を交差させ顔に掛かるのを防ぐとジュウ！と音を立て服の一部と皮膚が溶ける。

「調子に乗んな！」

ゴジラは床を踏み砕きヘドラーに接近すると拳を振るう。

「あん、深いい♡」

が、その拳はズブリとヘドラーの腹に沈み込む。底なし沼のように絡み付く彼女の体は冷たいのに、腕に焼けるような痛みが走る。

「もう、お返しだよお♪」

レロリとヘドラの舌がゴジラの片目を舐める。シュウ!と白煙が上がりゴジラは力任せに腕を抜くと、その腕は白骨化していた。片目も、溶けていた。

「あの時と同じだねえ……でも今回は人間の支援は無いよお？」

「言つたら……調子に乗るなって……」

「——!？」

瞬間、ゴジラの腕を繊維状の肉が伸び皮膚が包む。右目も手を退けた頃には再生していた。

「……驚いたねえ。そんな回復力、持ってたっけえ？」

「未希曰わく、俺の細胞は永遠の植物を造れちまうらしいぜ……ま、そうでなくともお前と会つたのとは別の個体としての俺は心臓だけが残つても生きてたぐらいだしな」

「あははあ。でもお、ボクは普通の攻撃じゃまず殺せないよお？」

「試してみるか？」

と、ゴジラの背鰭が光る。ヘドラは慌てて分身体を複数生成し壁を作るが、その瞬間壁を貫き光線が空へと消えていく。

触れた部分は、乾燥など生温く、蒸発していた。

媒介無しに酸を生成できようと、ヘドロを生み出せようと、前世の本体、ヘドロを纏う核は現世において、彼女の細胞と同レベルではない。成長しなければまず増えない。何度も食らえば、消える。

「……………こうさあん。君がボクより強くなったのはもう解つたよお」

と、ヘドラは変身を解き腰を下ろした。考えてみれば、頭の中に響く妙な命令に従っていた時に全ての本体をたつた一発の光線で死滅させられていたのだ。

「あ、ちなみに今日って部活無いからこの辺の校舎は無人なんだあ」

「うん？」

「漫画とかじゃさあ、卒業式に机に文字掘る奴もいるらしいんだあ。立派な器物破損だよねえ？」

「……………てめ、まさか……………」

と、ゴジラが顔をひきつらせた瞬間、ギシリと何かが軋むような音が出る。

「これも暴走って事で、見逃してねえ？」

グジャア！と音を立て校舎が溶け崩れる。よく見れば周囲に人類が衰退した世界の某新人類みたいなサイズのヘドラそっくりな生物が其処彼処に居た。それがこの学校の校舎の一部を溶かしたのだろう。ゴジラは溶けたヘドラの海へと落ちていく。

「お帰りなさいゴジゴジ。ネットで結構騒がれてましたよお。大変だったみたいですね……」

「ああ……」

「まあ、あの学校も虐めを黙認していて、その結果怪獣娘さんの心に負荷を掛け続けたと言う事になりましたし、GIRLSはそこまで世間には責められないと思います。所で、その片手に持っている物は？」

「……………新しい怪獣娘だ」

と、ゴジラは頭に幾つものたんこぶを作り気絶しているヘドラをピグモンに投げ渡した。

「くそ、体中から変な匂いがしやがる。ピグモン、悪いけど早めにあげる。風呂入ってくる」

「あ、はい！あ、待ってください！」

と、ピグモンが何やら慌てるがその声にヘドラが気付き目を覚ましたせいでバランスを崩し倒れる。

「……………ああ」

「……………はあ、またこのパターンか。いや、今回入ったのは俺だけ……立て札ぐらい付けろよ」

脱衣場に入った瞬間、風呂上がりのアギラ、ミクラス、ウインダムと出くわした。

「まあ待て、冷静になれ。そもそもだ。価値観というのは人によって

違う。つまりだ、お前等の裸を見た事とこの後来るであろう暴力、お前等には割に合っても俺には割に合わ——」

「出てけえ！」

「ざらつと失礼です！」

アギラとミクラスが服を入れておく籠を投げつけ、ウインダムは体を隠しながら涙目で叫ぶ。ゴジラは慌てて脱衣場から逃げ出した。

指導？・怪獣王!?

「ねえねえゴジラあ、遊んでよお。仕事なんて面倒くさいよお……」

ヘドラはゴジラ以外の教育係はお断りだと言って、ゴジラの監督下に入ったヘドラは名の元となったヘドロのように毎日毎日ゴジラにベツトリと張り付く。

「むー！パパから離れろー！」

「えー？だって昔はねえ、パパの方から抱き締めてくれたんだよお？」

確かに人間の用意したヘドラを倒す装置らしき場所に連れてく際抱き締めていたがアレはカウントに含まれるのだろうか？

「パパはー！私のー！」

「娘だが何だか知らないけどね、ゴジラはボクのだよお。平気で他者を傷付けるくせに自分の時だけ被害者面する人間の醜さをよおくしてるのはボク達だけだもんねえだ」

んべ、と舌を出すヘドラ。ぐぬぬと唸るリトル。その姿は父親を取り合う姉妹のようにも見えなくはない。

「はーなーれーろー！」

「やだよお……って、あれえ……この子意外と力強お……」

小さくとも怪獣王の同種。ヘドラが驚くほどの力を持って引き剥がそうとしてくる。負けじとゴジラにしがみ付くヘドラ。結果、ゴジラの首が締まる。

「や、やめ……離れ……」

「……………離れて」

ピポポポと音がした瞬間、ゴジラの目の前に現れたゼットンがゴジラを掴む。瞬間ゴジラが消えヘドラを引っ張っていたリトルがバランスを崩し……

「おお！見事なジャーマンスープレックス！」

「あの子才能有るなあ」

綺麗に決まったプロレス技はミクラスやレッドキングが感心するほどであった。流体なのは変身している間だけのヘドラは見事に決まったプロレス技に悶絶していた。

「悪いな、助かったぞゼットン」
「……………うん」

ゴジラのお礼に顔を僅かに紅潮させるゼットン。それを見たヘッドは悶絶を止め、目を細める。

「ねえねえそれよりゴジラあ。早く行こうよ、実習。早く早く……………」
「ん？おお、どうした？急にやる気だな……………」
「まあねえ……………」

と、ヘッドはゴジラの腕を抱き寄せゼットンを見る。そして、ベエ、と舌を突き出した。

GIRLSの仕事は何も暴走した怪獣娘やシャドウとの戦闘だけではない。そもそもその二つは表向きには隠されているのだ。

基本的には広告活動、他には、災害救助。場合によってはテロリストの殲滅など。

例えばの話だが異世界に通じる門が現れた日には何名かが捜査に派遣されるだろう。例えばそこに空を飛び火を噴く怪物が居たとしても、ロケットランチャー程度で傷付けられる相手なら、まあキングシーサーでもきつと、たぶん勝てる。

「まあつまりだ、基本的に人外の域にある俺らはその力を社会の為に使う。こんな社会守る価値があるのか甚だ疑問だが、まあ守っていれば何時かまともな奴も生まれるだろうしな」

と、パトロールをしながら歩くゴジラの話を聞くラドン、アンギラス、ヘッドラの三人。

「まあそうそう事件なんて起きねーよ。エレキングなんて仕事中に同人誌とか読んでるらしいし」

「へえ、ねえどんなのお？それどんな同人誌なのお？モノによっては仲良く出来るかもお……………」

『おまピト』だ。スポーツ漫画の……………同人誌ってのは要するにキャラを使ったオリジナルの話を作る奴だろ？俺も興味有ったんだがウイナムもエレキングも見せてくれねーんだよ」

「……………そりゃ、まあ……………仕方ないかなあ」

と、ヘドラが微妙そうな顔をする。彼女にしては珍しい。

「そ、それよりパトロールに集中しようよお……………」

「まあそうそう犯罪なんて起き……………」

「銀行強盗だー!」

「……………たとしてもまあ問題ない」

車に乗って逃げようとした強盗だがゴジラが車のリアバンパーを握り持ち上げる。後輪は空を蹴り当然車は進まない。

強盗の一人が銃を撃ってきたがあつさり弾かれてしまった。

「……………ゴアアアアアアアッ!!」

何発撃たれようと痛くも痒くもないが鬱陶しいので息を大きく吸い込み吼えるゴジラ。車のガラスが全て碎け強盗達が気絶する。

「と、まあ……………やることはこういった無力化だ。逮捕権はない……………ま、交番に連れてくぐらいはしてやっても良いがな」

しかし、銀行からサイレンの音は聞こえなかった。サイレンを鳴らされる前に金を奪い逃走したのだろう。今更のように聞こえるサイレンを聞きながらゴジラは強盗達を見る。

計画的な犯行。プロなのだろう。が、ゴジラに見付かってしまったのは運が悪かったとしか言いようがない。

成田空港のゲートで一人の少女がパスポートを見せていた。

「Tourism is the to Japan?」

「NO」

「Indid you come to see a friend in J」

「?」

「NO」

そういつて少女はニコリと笑った。僅かながら、涎を垂らしながら。

「I came to eat tuna!!」

「ん？大食い出演？」

ゴジラはポスターの貼り紙を見て眩く。一般参加有りのようだ。

参加料金は高いが上位三名は無料となり金が返される。それどころか、賞金も出るようだ。更に一位にはマグロ丸々一匹が景品として貰えるらしい。かなり太っ腹な大会だ。

「マグロ！パパ、マグロ！」

「食べたいか？」

「食べたい食べたい！」

「よし、ちよつくら申し込んでみるか……」

大食い？・怪獣王!?

「パパー! 頑張つて〜!」

「おう、任せろ」

「……………これが養殖マグロ……………これはこれで美味しいけど」

脂が多く乗ったマグロの身をペロリと平らげた少女。一回戦目は早食い。50皿の寿司を食べるというものだ。初めから米などを入れて出来るだけ食う量を抑えさせようとしているのだろう。しかし、少女はまだまだ食える。

そして、少女の視線の先に居る男も、ほぼ同時に食べ終わっていた。表情から余裕も見取れる。

間違いない、決勝で当たるのは、彼だ。

各ブロックより二名が選ばれ、5ブロック、合計十名が決まり二回戦。

二回戦目からは制限時間内にどれだけ多く食べていくかというルール。四回戦までは二名ずつ脱落していく。

普通なら落ちない程度に、しかし次に備えて腹を温存するべきだ。普通なら。しかし生憎普通じゃないのが二名も居た。

二回戦、マグロの叩き丼。一位52杯、二位50杯。

三回戦、マグロのハンバーグ。一位49皿、二位45皿。

一位と二位を争うのはゴジラと外国人の少女。ペースが落ちる様子は全くない。

市長は焦っていた。養殖マグロが成功し、町興しの為に行った行事、マグロだけなら味付けを変えても飽きるだろうと高を括っていた。このままでは、大赤字だ。

四回戦、マグロの目玉の煮付け。男の方は兎も角、女の方がこれ……………と、思ったが嬉々として食べていた。

「し、市長……………このままでは……………」

「うぬぬ……ん？おい待て、あの男が着ている服、GIRLSの制服だ。噂の男の怪獣娘だ！」

と、市長が叫ぶ。

「怪獣娘は人間じゃない……よし、それを理由に失か……」

ポンポンと肩を叩かれ振り向くが誰も居ない。しかし気配を感じたので視線を下に落とすとニツコリと笑った美少女が居た。

「今の差別発言、聞きましたよ？いけませんね」

「え、あ、い……いや、その……しかしねえ、フェアじゃ……」

「フェア、ですか……なるほど」

と、少女が頷くと市長はホツとしたように溜め息を吐く。が……

「選挙の時、いろんな所にお金出してもフェアなんですわ。初めて知りましたよ」

「……………」

「で、何でしたっけ？フェアじゃないから失格、でしたっけ？」

「は、ははは！そんなまさか、大食い選手の殆どが胃が膨らむ体質と言いますしね。怪獣娘だって体質体質！ははは！」

そうですか、と少女は微笑み去っていた。

「し、市長……………」

「こうなれば、最後の手段だ……………」

決勝戦、これまでと違う方法が取られた。

養殖マグロを捕まえ、自分で好きなように料理するというモノだ。

制限時間は一時間。マグロなど簡単に捕まえられるモノではないし、一頭丸ごと捌くのにどれだけ掛かるか。これなら赤字でもギリギリ取り返せる。普通なら、そう、普通なら。

「行くか」

「負けないヨ！」

二人同時に養殖マグロを囲っている網の中に飛び込み、それぞれ両手に一匹ずつ尾を掴んで上がってきた。そして、そのままあっさり腹を捌き内蔵を取り出し水で洗い食べる。この間10分。

「なあ……」

「は、はい!？」

「中で直接食って良いか？」

「へ？」

審判が疑問の声を上げる間もなく二人は再び飛び込み、水面がバシバシ激しく波打つ。残り五分。一匹のマグロが顔を出し、引き摺り込まれた。

「……チツ、一匹差で俺の負けだ」

「勝ったけど、私の方が泳ぎが速かっただけネ」

「そうか……なあ、負けて言うのもなんだがちよつくら分けてくねー？娘に天然マグロ食わせてやりたくて」

「OK！なんなら私が料理してあげてもイイネ」

二人はガシリと握手を交わす。拍手が起こり、市長は膝を突く。網の中は、骨も内臓も残さず綺麗に平らげられた為マグロの食べ残しは少しも無かった。精々血が漂っているぐらいだ。

「出来たヨー！マグロの兜煮、ハンバーグ、ステーキ、叩き、刺身のフルコースネー！」

「わーい！マグロ、マグロ！」

「でも、本当に私達までよろしいんですか？」

と、ピグモンはおずおずと尋ねる。

「へーキへーキ。それに、皆で食べた方がオイシイヨ」

「んじゃ、遠慮なく……いったきまーす！」

と、レッドキングが早速食べ始める。

「ん、美味しい！」

ザンドリアスも一口食べてすぐ次に箸を伸ばす。

「美味しいですね。今度、私も作ってみましようか」

「頼む、止めてくれ……」

「……？」

モスラの言葉にバトラが辟易しながら呟く。

「でもさあ、網の中一つ丸々食べちゃって苦情とか大丈夫かなあ？」

「まあ市民と話し合って決めたスケジュールを市民の同意も無く変えた市長に問題が有るでしょうからね。それに、お金はGIRLSからキチンと払っておきましたよ」

と、ミクラスの言葉に笑顔で応えるピグモン。そういえば、と優勝者の少女を見る。

「水の中でゴジゴジと互角なんて凄いですね。ゴジゴジ、前世は海に住んでた怪獣なのに」

「私も前世は海に住んでタヨ。お揃いだネー」

「……………ん？」

称号？・怪獣王!?

「……前世の記憶を持っているんですか？」

「二つ持つてるヨ……一つは人間の街にイテ卵を産んだけど全部燃やされた挙げ句ミサイルで殺さレル……二つは操られて黒い怪獣と戦ッテ尻尾で吹っ飛ばされてから光線食ラッタ記憶」

「二」……………「二」

黒い怪獣と言う単語に、全員がゴジラを見る。ゴジラは顎に手を当て考え込む。

「……………あ、そーいや居たな。思い出した」

「ん？私と会ったコトある？」

「ああ。その黒い怪獣俺。よく戦ってた三首の奴にそっくりな奴と戦うまでに挑んできた雑魚のうちの一人だろ？」

「ぎ、雑魚……………」

「まあでも、他の奴等よりは頑張ってたと思うぜ？三体同時に来たりもしたし、止めを刺す必要がないのも居たし……………」

まあ雑魚には変わりなかったが。きっとDVDにしてチャプターを見ればタイトルが瞬殺にでもなっているだろう。

「……………アナタがあの時ノ？」

「まあな」

「……………怪獣娘は名前の通り女しかいないはずじゃ」

「例外だ。つか、それ知っててGIRLSにや所属してないのか」

と、ゴジラが言うのとピグモンが説明してくれる。何でも怪獣娘は基本的に日本に多く現れるらしい。これは怪獣がそもそも日本に多く現れていたのが理由だと思われる。

外国では少ないので、そういう機関も無いのだとか。

「……………それって、大丈夫なのか？」

怪獣娘の戦闘能力は一個大隊に匹敵する者もいれば、ゴジラのように現状の科学力ではまず倒せない怪獣だっている特にゴジラなど、その力を暴走させれば大気を燃焼させ地球の地表を溶かし海を蒸発させる爆弾になるし、別の暴走方法でも地球に特大の穴を開け放射能を

撒き散らす最悪の核爆弾になる。

「俺なんて急激な変化に耐えられずに死んだ世界線こそ有るが、順当な変化なら理論上無限に温度が上昇する熱線を撃てるような奴だぞ。それにゼットンだって一兆度の火球放てるんだろ？」

「どういう理屈で制御されているのかは解らないが、太陽の何百兆倍のエネルギーの火の玉だ。本来なら地球なんて蒸発している。」

「……ゴジゴジ、今聞き逃せ無い言葉が有ったのですが……」

「ん？一兆度の火炎弾の事か？」

「いえそれは前から知ってました。そうではなく、え……無限に温度が上昇する？」

「おう。その時は島が爆発してエネルギーが一気に上昇したせいで適応する前に死んだが……」

「とは言っても一本の薔薇を怪物に、結晶を宇宙怪獣に進化させるゴジラの細胞だ。メルトダウンさえ起こさなければ耐えられるようになったかもしれない。」

「……………」

「どつたの、ピグちゃん」

「呆然と黙り込んだピグモンにミクラスが首を傾げる。ピグモンは『これは空想科学、これは空想科学……きつと世界も有り得ないぐらい丈夫なだけ』と自分に言い聞かしていた。」

「太陽を越えるエネルギーを持ったゼットンが最強の怪獣娘かと思いきや、それを越えるエネルギーを内包する存在が現れたのだ、現実逃避の一つや二つしたくなる。」

「……ゴジゴジ」

「……ん？」

「アナタに怪獣王の称号を授けちゃいます」

「?どうも……」

調整？・怪獣王!?

「……うーん、やっぱりここを弄るとここが……」

と、少女はプログラムを弄りながら呟く。

「なあ……」

「……やっぱり、私には荷が重いですよ……博士……戻ってきてくれないかなあ……」

「……なあ」

「ううん。ダメ！いい加減に切り替えなきや」

「……………」

「あいた！」

と、不意に頭に衝撃が走る。振り返ればソウルライザーを片手に此方をジト目で見える男が居た。

「ひゃわあああー！」

「うるさ!?!」

そして少女は叫び距離を取ると黒い空間を生み出し中に隠れる。

少年、ゴジラが絶叫に耳を塞ぎ、突如現れた黒い空間を見ていると暫くして少女が顔を出す。

「よお、あんたがここの研究部主任か？」

「は、はい……前の人、博士が辞めて……あんまり役に立たないかもですけど」

「まあそれを言ったら俺なんてこれに関しちや何も出来ねーよ。というわけで頼む。なんか最近調子が変わんだよ」

「……………」

少女はソウルライザーを受け取るとパソコンに繋げ中のデータを確認する。

特に妙な所は無い。強いて言うなら、暴走した事の有る怪獣娘のソウルライザーに組み込まれるリミッターが組み込まれている事だろう。

しかし最初から付いていたリミッターに今更違和感を持つだろうか？

「あ、そういえば……………えっと、ゴジラさん、ですよ。男性ですし」
「ああ」

「ゴジラさんは前世の記憶を持っているんでしたね、それが原因だと思えます。最近何か変わった事は有りますか？」

「前世からの知り合いに会って記憶を思い出し始めたことかな」
「……………なる程」

その結果、前世との力の差違を感じ始めたのだろう。こればかりはどうしようもない。リミッターを下手に解除して暴走させては目も当てられない。

「……………そうか」

「あう、すいません」

その旨を伝えるとゴジラは少し落ち込んだような顔をして少女が慌てて謝る。

「ん、ああ、気にするな。お前のせいじゃない……………ただ、記憶が戻る度に力が戻ってたろ？違和感を無くせば完全に思い出せると思ったんだが……………」

「……………思い出したいんですか？」

「……………モスラもバトラも、ラドンやリトル、アンギラスもメカゴジラもジラもヘドラも俺の事を覚えててくれた。けど、俺は会わないと、関わりがねーと、思い出してやれねー」

「……………ひよつとしたら、忘れたい記憶も有るかもしれませんよ？」

「そりや有るだろうな。そもそも初めて変身しようとした時流れた感情は憎悪だし」

憎悪……………確か、変身しただけで暴走しそうになり、しばらく本能的に変身出来なかったとか。

飲まれそうになるほどの憎悪。それを、彼は恐ろしくないのだろうか？

「恐ろしいさ。あの感覚、俺が俺でなくなる感覚……………けどな、何時か向き合わなきゃならねー事だ。思い出し続ける以上、いずれ完全に思い出す」

「……………それでも、ごめんなさい。私一人の権限では」

「そっか。仕方ねーな……………そういやお前の名前何だ？」

「え、今更ですか？ 沢な——あ、いえ……………ペガツサです」

「話に乗ってくれてサンキューなペガツサ。許可が下りた時はよろしくな」

と言い残しゴジラは部屋を出ていこうとする。

「あ、あの……………取り敢えず違和感を少なく出来ないかだけ、調整してみます」

「そうか？ 助かる……………」

「と、こんな所でしようか……………終わりました」

「サンキュー……………じゃ、ソウルライド！」

と、ゴジラが変身する。

「んー、確かに違和感が少し減ったな」

「変身にちよつと時間が掛かっちゃいますが、力の上昇を緩やかにして違和感を減らしました」

「大した腕だな……………」

「いえそんな……………私なんて博士に比べたらまだまだ……………」

「博士が誰か知らないが、俺の手助けをしてくれたのはお前だぞ？ 素直に誇って良いと思うがな」

と、変身を解除するゴジラ。

「……………誇りなんて、私……………鈍臭いですし、ヒロミさんみたいに女性らしくないですし……………」

「……………お前って大きくなったらそのヒロミって奴になんのか？」

「へ？ いえ、そんな事あるわけ無いじゃないですか……………」

「そりやそうだ。だってお前はお前だもんな、他人になれるはずがない」

「……………？？」

ペガツサは良く解らず首を傾げる。

「前世で、俺の細胞を使った奴が結局俺になれなかった……………そりやそうだ。他人になんて誰もなれない。他人は所詮他人で、本人じゃない

……他人と自分を比べても意味ねーよ」

「……そう、でしようか？」

「そうだな……俺はお前みたいに、自分でソウルライザーを調整したいな。けど、まず無理だ」

「……………」

「ほら、私は一応玄人ですし、素人と比べて差がでるのは当たり前っ
て思っただろ？」

「……………ですね」

と、苦笑するペガツサ。まだ完全に納得は出来ていなさそうだが、
価値観をそう簡単に変えられるとは思っていない。

「じゃあな、また機会があったらよろしく」

と、ゴジラは部屋から立ち去る。

「……………」

ゴジラがいなくなった後、ペガツサははあ、と緊張が解けたように
溜め息を吐いて椅子に深く腰をかける。

「……………やっちゃった……バレたら大変だよな」

実を言うと彼のソウルライザーに少し細工をした。バレたら結構
ヤバイ。

「でも、たぶん大丈夫だよな。あの人は、強いし……………」

過去をきちんと受け入れるぐらいに、と言う言葉を飲み込む。

「……………ゴジラさん、か……………」

あの強さが羨ましい。あの優しさが暖かい。

また機会があれば、か……………」

「……………また、話してみたいな」

何時までも過去に縛られている自分と違い、過去を受け入れている
強い彼と、また話してみたい、そう思った。

相談？・怪獣王!?

リトルを肩車して休日を通り過ぎてしていると、河原で土手滑りをしていると子供達の姿が見えた。肩の上でリトルが反応しているのが分かったゴジラは立ち止まり近くに落ちていた段ボールを拾ってくる。

「ひゃー♪」

土手をズザザザ！と滑り楽しそうにはしゃぐリトル。ゴジラも微笑ましそうに見ていると、不意にリトルが登っていた足を止め何処かに向かう。ゴジラは慌てて後を追った。

「……………はあ」

ザンドリアスは河原に石を投げながら溜め息を吐く。今日は師匠であるレッドキングが仕事で居ない為、暇だ。

怪獣娘として目覚めてからは、寮生活。とはいえ彼女は中学生、許可が下りれば学校にも再び通えるのだが、一度も通っていない。学校で、あの女に待ち伏せされたくないから。

「ザンドリアス！」

「うわっひゃ!?!り、リトル?」

と、考え事をしていると背後から誰かに抱き付かれる。振り向けばそこには偶に面倒を見てやっているリトルが居た。

背後に先ほどまで無かった段ボールが落ちている。土手滑りでもしてたのだろう。

「あれ、リトル……………一人?」

「パパも一緒だよ!」

「よう……………」

と、リトルの背後から現れたのは黒い髪の毛、黒い私服という黒尽くしの男、ゴジラだった。

隣に座り飲むか?と渡してきたジュースを受け取りチラリと隣を見る。彼は確か、暴走状態になっていたとはいえ師匠であるレッドキングを圧倒したのだとか。同じ暴走状態でも手も足も出なかった自分とは大違いだ。きっと前世はかなり強い怪獣だったのだろう。

「……………はあ」

また溜め息を吐きながら石に回転を掛けながら川に向かって投げる。パシャシャ！と音を立て数度跳ねた石は川の中央で沈む。

「……………すごい！ねえ今のどうやったの!? パパも出来る!?!」

と、目をキラキラさせるリトルに少し誇らしげな顔をするザンドリアス。ゴジラは河原の石を適当に掴むと川を見詰める。

ドパン！と川の中央に巨大な水柱が立ち周囲に大雨のような水滴が降る。ザンドリアスは、あ、虹だーと現実逃避をした。

まさか、まさかだが石を放つただけでダイナマイトを投げたみたいな事が起きるはずがない。クレーターに水が押し寄せているが、きつと隕石でも落ちたのだろうか。

「…………ザンドリアス、どうやりやきつきの出来るんだ?」

「あ、うん…………教えるね……………」

ザンドリアスはリトルとゴジラに水切りの方法を教授する。平たい石に回転を掛け、滑らせるように投げる。最初はリトルだ。

「えい……………あ、やった！一回跳ねた!」

「……………そうだね」

流石前世の同種。予想外は子供も同じようだ。リトルが投げた石は水を押し退け川底に当り跳ねた。水切りをやろうとして本当に川を切る者が何処に居るのだろうか?」

「どうどうパパ、すごい!?!」

「凄いな、俺も負けてられないな……………よっ」

ドパパ。パパバアン!

今度は何度か跳ねた。石が水に触れる度にきつき程ではないとはいえ人の身長を超える水柱が連続して発生していき向こう岸の土手の一部が爆ぜた。

「よっしー成功!」

「……………うん、取り敢えず二人は二度と水切りするな」

「「え?」」

付き合ってくれたお礼にカレー屋で昼飯を奢って貰ったザンドリアス。一口食べ、顔をしかめる。

「……辛い」

「は？そりゃ甘口だろ？見ろ、リトルは普通に食ってるぞ」

「……………」

念の為リトルのカレーも一口食べてみる。同じぐらいの辛さだ。首を傾げながらも食べれないほどではないので残りを平らげた。

「そっぴやお前、今家出中何だよな？街中彷徨ってて平気なのか？」

「……………」それが何よ」

と、つい敵意を込めてゴジラを睨んでしまった。ゴジラは気にする様子もなく肩をすくめただけだが。

「アイツが私の事心配しているわけ無いじゃない。ママなんて、居ても不幸なだけよ。いっつも怒ってくるし、小うるさいし、人のやること一々突っ掛かって来るし…………」

「ふーん、そうなのか。前世じゃ生まれて直ぐに親居なくなってたし、今世じゃ普通に捨て子だからその辺良く知らねーけど、母親つてのはそういうもんか」

「あ、ご、ごめんなさい…………」

慌ててザンドリアスが謝罪するとゴジラはニヤリと笑った。

「何だ、解ってんじやねーか」

「え？」

「家族は居ないより居る方が幸せだって事だよ」

と、そう言ったゴジラはリトルを引き寄せ頭を撫でる。うにゅ、と呻いたリトルはしかし気持ち良さそうに目を細めた。

「それとも何か？家族が居ないなんて羨ましいですね？っー皮肉のごめんなさいか？」

「……………」違う…………」

「なら帰って、謝って、仲直りしな」

「……………」出来るかな。私、出てく時酷い事言っちゃった…………」

「親の心子知らずって言うしなあ…………その逆もまたしかり。母親が怒ってるかもしれなくて怖いかな？」

「……………」うん」

「そりやまあ、怒ってるだろうよ。でも直ぐ許してくれると思うぜ?」
「何でそんなこと解んのよ……」

ジロリとゴジラは横目で睨むとゴジラは苦笑しながらザンドリアスの頭をワシヤワシヤと乱暴に撫でる。

「俺は子ではないけど親だからな。親の気持ちは解るつもりだ。確かに虐待したりする屑な親も居るけど、親の居ない俺に謝っちまうぐらいには、幸福だと感じる家庭なんだろう?なら大丈夫だ……」

「ま、もし駄目だったら俺の所に来いよ。一児の父として親らしく振る舞ってやるからさ」

「……………」

「……………この年の差だと、父親って言うよりお兄ちゃんって感じが……………」

「そうか?まあ兄貴でも良いか」

「……………」

ザンドリアスはゴジラの手から逃れると立ち上がる。

「……………帰る」

「付いてってやろうか?同じ寮だし……………」

「そっちじゃないよ……………」

「……………そうか」

と、ゴジラとリトルはザンドリアスに背を向けて歩き出す。リトルがゴジラと繋いでない方の手をパタパタ振り、笑顔を向けてきた。ザンドリアスは微笑み手を振り返す。

「……………ただいま」

「……………おかえり。晩御飯、食べる?」

家に帰ると母親が出迎えてくれた。ザンドリアスはなるべく視線を合わせないように下を向きながら席に着く。

メニューは、カレーだ。食べる。甘い。

「……………最近、大丈夫?風邪は引いてない?GIRLSで虐められたりしてない?」

「……………別に」

「そう、良かった……………」

カレーを食べ終わる。ザンドリアスは、漸く顔を上げ、目が合った。泣きそうな、心配そうな顔をしている母親の顔を見て、一瞬言葉に詰まる。が、その言葉を絞り出した。

「ごめん、なさい……………」

「私こそ、あの時言い過ぎたわ。ごめんなさいね……………」

「……………うん」

「悩め？・怪獣娘!？」

今回はアギラ、ミクラス、ウインダムの三人と組む事になった。この面子も久し振りに組んだねゴジラ。

「やー久し振りに組んだねゴジラ」

「今日もガンバロー」

「ですね」

「おう、よろしくな」

軽く挨拶を交わしパトロールに向かう四人。

「そうそうゴジラ、知ってる？この前この近くの川で謎の爆発事故が有ったんだって」

「爆発事故？」

「はい、何でも川の水が突然吹っ飛んだんだって、その川にとんでもない速度で小さな何か突き抜けたように割れて、断続的な水柱が立ったりもしたとか……」

「へえ、妙な事も有ったもんだ」

「調べてみたけど下流に火薬とか爆弾の欠片は見付からなかったって……」

ミクラス、ウインダム、アギラの言葉に川ねえ、と最近有ったことを思い出す。

「……この前川で水切りやったけど、まさかあの川でなあ」

「恐ろしい奴も居たもんだ、とゴジラが呟くとだよねえ、ミクラスも同意する。」

「爆弾使用の予行練習じゃないと良いけど……」

「人目の付く河原で爆破の予行練習する馬鹿が居るとは思えねーけどな……」

とはいえ目的が分からない以上楽観視も出来ない。爆発テロが起きなければ良いが。

と、その時……

「あ、おーい！お兄ちゃん♪」

と、その時誰かがゴジラの背中に背鰭を避けながら飛び付く。ザン

ドリアスだ。

「ようザンドリアス、何だそのお兄ちゃんつてのは」

「だって甘えて良いんでしょ？お兄ちゃん♪」

「母親と仲直り出来なかつたら親のように接してやるとは言ったがな……ああ、兄の方が良いんだっけ？」

「うん。ママとは仲直り出来たけど、私って昔からお兄ちゃんとか欲しかったんだ。ね、良いでしょ？」

「……………好きにしろ」

「やったー！」

ザンドリアスは満面の笑みを浮かべゴジラは苦笑する。

仕事中の為ザンドリアスと別れるとアギラ達から何が有ったのか聞かれたので母親と仲直りするように言った事を説明する。

「へー、ザンドリアスが親御さんと仲直り出来たのにそんな理由が……………」

「私達も何度か説得したりはしましたが……………」

「凄いな、ゴジラ……………」

「ん？」

「ボク達より後に怪獣娘になったのに、ボク達じゃ倒せなかったシャドウビーストを倒したり、ザンドリアスを説得したり……………ボク達に出来なかつた事を簡単にやれるんだから」

と、どこか暗い雰囲気と言うアギラ。何も出来ないというのが嫌なようだ。

ここでアギラは頑張っていると言うのは簡単だが、果たしてそれは正しいのだろうか？少し考え、ゴジラは口を開いた。

「確かに俺はお前等より強いな」

「ちよ、ゴジラー！」

「でもお前等が強くなれないのと、俺が強いのは関係ない」

落ち込むアギラを励まそうとしていたミクラスは文句を言おうとしたがその言葉に止まる。

「そもそも俺だって前世は弱かつたんだぜ？吐き出す熱線も最初は、戦車を燃やすことは出来ても消し飛ばす事は出来なかつたし、電気

にや一々ビビってたし、変なゴリラに投げられるし成虫との戦闘の後
の二対一とはいえ幼虫のモスラにやられるし………熱線が十分な
威力を得ても人間の作った兵器で跳ね返されたりした事も有るしな
………つーかあの世界の人間の戦力どうなってんだ、ミサイルも大して
効果が無い俺の皮膚を貫いて電気流してくる武器有ったし何故か知
らんがドリルの口持った機械の攻撃は普通に効いたし………氷結系の
兵器何てどこぞの死神漫画の隊長クラスなんじゃね？」

おまけにブラックホール放ってくるし。あの世界の科学力は可笑
しいね。確実に。

「でも俺は生き残り続けた。俺の細胞が変異し易く、強くなり易いの
は認めるが、最初っから無敵でもなかったんだぜ？いろんな怪獣に追
い詰められたりしてた。ま、記憶に有る最も新しい戦いでは一斉に来
た奴らを瞬殺してやったがな」

「……………」

「まあ、何だ。要するにだ、これから強くなってきや良いんだよ……」

「……………ボクに、なれるかな？」

「なれるさ。なんなら修行に付き合ってやるよ………んで、何時か……」

『頼むぞ、アギラ』って言わせてくれや」

そんな日来るかな、と自信なさげに言うアギラにゴジラはさあな、
と肩をすくめる。

「けどそれぐらいの気概を見せて見ろよ。俺は強いぜ？その俺に頼ら
れるようなら、十分強いだろうからな」

「……………うん。頑張ってみる」

アギラはそういつて微笑んだ。

「うつぶ、気持ち悪い…………」

両目を細めた少女は口を押さえ呟く。

「食べ過ぎですね。何で突然回転寿司でしかもマグロだけ食いまくっ
たんですか？」

左目のみを開けた少女は呆れたように言う。

「王たる我は如何なる敗北も認めるわけには行かぬ！特に、この前テレビに出てた彼奴には……！う！」

右目を開けた少女は傲慢に振る舞いしかし口を押さえる。

「貴方だけの体ではないのですよ宇宙の王よ」

「千年竜王、しかしお前とて最強の守護神の名を冠するのだ、負けたままでは終われぬだろ？」

「まあ、あの後国がどうなったのかは気掛かりではありますが……」

「ていうか二人とも、街中で話すなら声に出さないで、周囲の視線が痛い……」

異変？・怪獣王!?

「はああー!」

ミクラスは地面を踏み込みゴジラに向かって駆ける。ゴジラの手が獲物を狙う蛇のようにミクラスへと伸びて来たが身を屈め躲すと懐に入り込んだ。

「たあー!」

「甘い」

ゴジラはミクラスの手首を掴むと身体を半身に逸らすように回転させる。殴った勢いを止められず巻き込まれるミクラスは足を掛けられバランスを崩した瞬間、天地がひっくり返った。

「うげー!」

背中から落下し肺の中の空気を吐き出すミクラス。ゴジラの足がミクラスの腹に迫るがゴジラに迫る影が有った。アギラだ。

ゴジラはアギラの突進を躲すと尻尾を叩き付けようとする。が、その尻尾にレーザーが当たる。

「えい」

「とりやあー!」

「チツ……」

ゴジラは舌打ちをしながら二人の拳を受け止める。と、ビー!と言う音が鳴り響いた。

「そこまでです。ゴジゴジのハンデ無視によりかぶせるがーるずの勝利です♪」

「……………勝てた気がしない」

「ですね」

「だね……」

アギラの言葉に腰を下ろしながら息を整えて同意するウインダムとミクラス。今回、アギラ達は模擬戦をしていた。結果は勝利。しかし三対一でゴジラは攻撃を防御するのと熱線を禁止というハンデを付けていた。

結果として防御行動に移せたがゴジラは余裕綽々でアギラ達は肩

で息をしている。これが模擬戦だから勝ちなのであって、本当に戦うとなったら相手はハンデを付けないのは当たり前前、疲れているアギラ達にだって容赦しないだろう。

「まあでも、ハンデ戦初白星だ。元気出せって」

「……………何時かハンデ無しで勝ってやる」

「おう、楽しみにしてる」

「……………」

馬鹿にするでもなく、素直に期待していると言ったゴジラの顔にアギラはハンデで漸く勝てたという苛立ちも忘れて赤くなつた顔をフードで隠すのだった。

場所は変わり広島。遠征でゴジラ、かぶせるがーるず、モスラの五人が来ていた。バトラは別の場所に遠征だ。

「ここが広島かあ、広島焼き有るかな？」

「まず飯かよ…………それとモスラ、パンフレット持って何処行く気だ？」

「うっ…………」

フラフラ光に誘われる蛾の様に何処かに行こうとしたモスラの首根っこを掴むゴジラ。腕時計の時間を確認する。

「お前等、今回の目的は覚えてるか？」

「えっと、ここ最近シャドウが増えてきているので巣を作っている可能性が有る。早急に索敵、発見し次第殲滅……………でしたよね？」

「そうだな…………とはいえだ、場所は未だ不明。っーわけで…………」

「？」

「散開。何処を探そうと勝手だけど、キッチンと探せよ？」

「……………」

ペア、と全員の顔が明るくなる。シャドウが増えているとはいえ、今の所は人的被害は出ていない。巣の作りかけの場合は巣作りに専念しており、たまに群からはぐれる者が出るからだそうだ。

巣の完成に近づけばもつと目撃証言が多くなるとの事らしい。

ゴジラは一人で探索することに決めた。幸い、前世から敵を探すの

は得意だった。が……

「……………あ」

「え？」

気配を追っていくとモスラと同じ場所に着いた。

モスラは恐る恐る、ある建物を指差す。ゴジラは無言で頷く。シャドウの巣が有ったのは、原爆ドームの中だった。

「しかし何だあの壊れかけの建物」

「原爆ドームです。日本に落とされた原爆の恐ろしさを忘れない為の廃墟ですよ」

「原爆……………つーと、核爆弾か。その恐ろしさを忘れない何て言いながら原子力で成り立ってるってのは笑える話だな」

と、ゴジラが笑いながら原爆ドームに近付いてく。

しかし、とゴジラは一旦足を止める。

平和記念博物館や、原爆ドーム等を残していく必要は有るのだろうか？戦争を知らない殆どの若者からすればそう言う事が有ったなあ、程度にしか見られないのではないだろうか？

いや、戦争を経験した者達だって、数十年という人生の大半以上を平和に過ごした今、戦争の事など殆ど忘れているかも知れない。そこに有った、犠牲と共に……………。

「……………あ？」

グラリと地面が傾く。いや、違う、ゴジラが倒れているのだ。

「ゴ、ゴジラ!？」

モスラが揺するが反応しない。気絶している。

一体何が有ったというのだろうか？

「ゴジラが!?!はい……………はい、解りました……………」

通話を切るとアギラの様子を見て不安そうな顔をするミクラスとウインダムと目が合った。

「ゴジラが……………どうしたの?まさか……………」

「ううん。やられたわけじゃない。シャドウの巣を見付けて……………突然、倒れたって……………シャドウの巣はモスラさんが壊して……………今、宿泊

先のホテルに居る」

シャドウにやられたわけじゃない事に安堵すべきか、それとも突然の体調不良を心配すべきか、とにかく三人はホテルに向かう事にした。と、その時

「すみません」

「はい？」

振り返るとそこには右目を閉じた少女が居た。随分と大人びた雰囲気を持ち、どこか神聖な気配を放っているが恐らく同い年だろう。

「今、ゴジラという単語が聞こえたのですが……」

「え？う、うん……」

「よろしければ、案内してもらえないでしょうか？ひよつとすると、私の探している人かもしれないのです……」

「……………」

三人は顔を見合わせる。ゴジラ、という名に反応した。前世の記憶持ちの怪獣娘だろうか？いや、今はそれは置いておこう。

「解った。でも、急いでるから詳しい事は後で……………」

「はい……………」

ホテルに向かう途中、何やら騒がしくなってきた。人が慌てて逃げていき、シャドウが出現した。

「こんな時に……………」

恐らく壊された巢の生き残りだろう。と、そこへ家の影から大きな影が現れる。

「シャドウビースト!？」

三メートルは有りそうな獣型のシャドウビースト。こんな者まで彷徨って居たのか。アギラ達は一度足を止める。突進で倒せるほど弱くはないはずだ。

『グルル……………グギヤア!』

「……………へ？」

しかしそのシャドウビーストは高速で飛来した何かに粉々に砕かれる。いったい何がと見ればそれはモスラだった。しかし――

「っ……………う……………」

「も、モスラさん!? どうしたの!」

モスラは全身に怪我を負っていた。そこまで深くはないが、あのモスラがやられている所など想像も出来なかった。

何者がこんな事を、とモスラが飛んできた方向を見て、固まる。

「……………ゴ、ゴジラ?」

そこに居たのはゴジラだった。しかし、服装が違う。

顔の下半分を隠す牙付きのハーフマスクはそのままだが、服装は黒い大日本帝国軍服。着方は何時もの様に着崩しているが完全に別物だ。

前進から黒いオーラを発し、目は白目だ。なのに、その目が自分達を見たとき解り全身の細胞が逃げろと訴え掛けてくる。

「……………ヒヤハハ!」

「……………!」

眼前まで迫ったゴジラの手。しかしそれは横から延びてきた金色の竜に阻まれる。

「ああ?」

不機嫌そうに顔をしかめたゴジラが反対の手で殴り付けようとした瞬間竜の首がうねり投げ飛ばす。

「……………あ」

それは先程の少女の肩の後ろから伸びていた。反対にも同じ様な首が伸びている。

「お久しぶりです怒りの王、大怨霊^{ゴジラ}呉爾羅……………」

「……………大……………怨霊?」

少女の言葉に首を傾げるアギラ。と、ゴジラが吹き飛んだ先の瓦礫が吹き飛びゴジラが出てくる。首をゴキゴキ鳴らし、少女を見て笑う。

「誰かと思えば、コレに手も足も出なかった千年竜王……………キングギドラじゃねーか」

「私を知っていますか……………」

「知ってるさコレの中にはそれを知る記憶も有る。コレ自身が戦っ

た、宇宙の王としてのお前や二対二なのに結局退散したお前の記憶も有るがな」

頭を指差しながら自身を物の様に呼ぶゴジラ。いや、違う……………誰だ、アレは。

「その体は貴方のモノではありません。早急に返してください」

と、モスラがゴジラの肉体を使う何者かを睨みながら言う。するとやはりそいつはゴジラの体を使って笑った。

「断る。どうしてもと言うなら、力付くでやってみろ……………」

怨霊？・怪獣王!?

忘れるな。我等を忘れるな。

我等は英霊。國の為、祖国の民の為その命を散らした者共。

我等を忘れることを許さん。我等の屍の上に築かれた平和の中で、伸う伸うと我等を過去にする事は許さん。

「ガアアアアッ!!」

「っ!」

「ぐう!」

ゴジラの猛攻にギドラとモスラは押されている。元々旧日本軍人の怨霊の集合体である彼等にとつて、二足とはいえ恐竜の体より人間と大差ない今の姿の方が遙かに扱いやすいのだ。逆に、長年過ごしてきたとはいえ前世の一生とは比べるまでもない程度の期間しか人間として過ごしていないモスラとギドラは対応が遅れる。

「はは!どうしたどうした!?!こんなもんかよ護国聖獣!お前等もコレと同じで統合してるんだろ?だったら、その力を見せて見ろよ!」

『ツチイ!調子に乗りおつて、千年竜王、代われ!』

「な!?!ま、待ちなさい!」

と、不意にギドラの右肩から伸びている竜が喋りギドラが慌てる。次の瞬間全てを包み込む様な神々しい気配が霧散し、代わりに全てを平伏させる王者の気配がギドラから放たれた。

「おお、毎度毎度リンチに遭う哀れな宇宙の王じゃないか。くく、しかし今回は逆で良かったな?」

「抜かせ!」

ゴジラの言葉に叫んだギドラの口内が光る。それは両肩の竜も同様だ。

『ま、待ちなさい——くっ!』

左首の竜が慌てて叫ぶが主導権を支配されているのか三つの口から雷が放たれる。

「ぐが!?!」

「くはは！まだまだだ！」

「があああ——！！」

雷撃を浴び叫び声を上げるゴジラ。アギラ達がギドラを止めようとする。が、その前に異変が起きた……。

「ああ！ああ、あーはははは！」

「!?」

ゴジラに肉体に纏わり付く雷が一斉にある一方向に向かう。それは軍服と尾に並ぶ、背鰭だ。雷は背鰭に吸い込まれていき背鰭が金色に発光する。

「頭が三つ有ると大変だな？知識を共有出来んらしい………ガア！」

「——！」

ギドラのエネルギーを吸収し強化された熱線が放たれる。咄嗟の事で躲すことが出来ないギドラの前にモスラが現れる。

モスラの髪が白銀に染まり着物の模様が変わると熱線を空に向かって弾く。

「………ほう、それは知らんな。何だそれは？」

「形態変化とでも………私に統合されているのは、何も貴方が居た世界線だけではありませんので」

「そうか……」

ゴジラは納得するとモスラに向かって駆ける。腕を交差させゴジラの拳を防いだが焼け爛れた皮膚の表面に衝撃が走り激痛が襲う。

「硬いな……これは如何にコレとは言え砕くのに骨が折れる」

「それは貴方が使いこなせていないだけではないですか？ゴジラなら、あるいは可能かもしれませんよ……」

「………」

ピクリとゴジラの目元が僅かに引きつる。そして、直ぐに獰猛な笑みを浮かべる。

「如何なる牙城も戦艦も、中から壊せば一撃だったな。さて、貴様はどうか……」

「——ッ！」

迫ってくるゴジラの拳を今度は回避するモスラ。一々痛みを覚えていては集中力がいずれ尽きる。一瞬の油断が命取りのこの状況でそれはまずい。

「はっー!」

「くっ!」

ゴジラが足を振るうと足下のアスファルトが砕け散弾の様に飛んでくる。躲そうとしたが全て躲すのは不可能で一部が腕に当たる。

「あぐう!?!」

「そら捕まえた!」

「放しな——むぐ!?!」

腕を掴まれ、引き寄せられ唇を奪われる。接吻と呼ぶにはあまりに乱暴な口付け……………そして、ゴジラの背鰭が光り口内から熱を感じる。まずい!

が、万力の様な力で抑えられ逃げられない!と、その時ゴジラの顔目目掛けジープが飛んでくる。ゴジラは舌打ちするとモスラから手を放し両手をジープに突き刺し二つに引き裂く。

「…………ゴジラの体で、好き勝手やらないで…………」

と、全身から怒気を放つアギラ。ゴジラはアギラに向かおうとしたが横合いからミクラスが突進してくる。そのミクラスを叩き潰そうと拳を振り上げればその拳にレーザーが当たりその隙に距離を取られる。

かぶせるがーるずの連携に、ゴジラは忌々しげに表情をゆがめる。

怪獣としての記憶を持たない分、彼女達は違和感無く力を振るえる。また、彼女達はここ最近ゴジラを相手に模擬戦をして居たのだ。対応が速い。

「けど、それだけだ!」

対応してくるならそれより速く。予測してくるなら今まで見せた事の無い手を使えばいい。チョロチョロ動く奴が増えた所で敵ではない。

「我を無視するな黒蜥蜴が!」

「——!」

ゴジラの横合いからギドラが突っ込んできた。竜の顎で両手首を拘束され人の顎に首を噛まれ中に直接エネルギーを流し込まれる。

「っ！あああ！調子に乗ってんじゃねーぞ蝙蝠があああ！」

「ぐうううー！」

ゴジラもまた、傷口からエネルギーを逆流させる。負けじとギドラもエネルギーを送り込み二人を中心にエネルギーの嵐が吹き荒れる。

「皆さん、平気ですか？」

「う、うん……………ねえそれよりモスラ、ゴジラどうしちゃったの？」

「暴走……………とは違いますね。前世の記憶の一つ……………と表現するのも可笑しい気がしますが、前世の記憶の一つに飲まれています」

「前世の……………？」

「はい。思い出した結果なので、気絶させた所で戻るかどうか……………」

モスラの言葉に息を呑む三人。しかし、事実だ。モスラ自身、いざとなったら怨霊達が現世に力を振るう為の触媒である彼の身を滅ぼす覚悟だっでしている。

「……………待つて、一つ？あれはどんなゴジラなの……………？」

「戦争で亡くなった方々の怨霊が進化した恐竜の身に宿り、自身の犠牲の上に立つ平和で笑う者達への災禍を願われ神格化した存在り方です」

神格化と言うのは解らないが、ふと気になった事を尋ねる。

「それって……………リトルと仲良くやっていけたの？」

「恐らくその世界には居なかったのでしょう。私も彼も、幾つもの平行世界の記憶がありますから……………」

「……………なら——」

「ぐがー！」

アギラが思い付いた事を言おうとした時、叫び声が聞こえる。見ればギドラが口から煙を出し倒れていた。

「コレのエネルギーは腹一杯食べたか？」

ドゴーとギドラの腹を蹴り吹き飛ばすゴジラ。しかし、よく見れば肩で息をしているし、所々火傷の痕が見える。徐々に回復しているがその治りは遅い。

「……………皆、ボクに考えが有る。少し、時間を稼いで」

「……………解りました。信じましょう」

「任せて、アギちゃん！」

「頼みます！」

と、モスラ、ミクラス、ウインダムがゴジラに向かう。ゴジラは放射熱線を下に向かって吐き出そうとする。が……

「我を無視するなど言っている！」

ギドラに足を噛まれバランスを崩す。そのゴジラにミクラスがタツクルし、熱線は空へと打ち上げられる。

「ぐ、この！」

「アクア・シールド！」

ゴジラが体勢を立て直した瞬間周囲を水の壁が包む。かなりの硬度で拳で破壊出来ない。再び熱線を放とうとするが、その時……

「準備出来たよ、ゴジラを出して……………」

「ツチー！何をやる気が知らんが……………」

ゴジラは向かって来るアギラを迎え撃とうと拳を振るう。その拳は、アギラを簡単に吹き飛ばすだろう。しかし——

『パパー♪』

アギラが持っていたテレビ通話モードのソウルライザーの映像と聞こえてきた音声にゴジラの拳はピタリと止まる。

「……………な!？」

画面に映っていたのはリトルだ。満面の笑みでゴジラを画面越しに見ている。

『お仕事がんばって！速く帰って来て、また遊ぼう！』

ピツと通話が切れる。ゴジラはまだ、固まっている。

「……………つ!?!何故だ、何故動かん!?!我等の身体だろう!?!何故だ!!」

「いいや違うね俺の身体だ」

「……………!?!」

握っていた拳は、ゴジラ自身の腹を思い切り殴り付けた。

成仏?・怪獣王!?

腹を殴ったゴジラ。異変はその奇行だけでは終わらなかった。

現在ゴジラの中には二つの人格が存在する。怨念の集合体と、その怨念を知識として知っているが他にも幾つもの記憶を持つ、しかしそれはあくまで知識として捉えている人格。

二つの人格が同時に存在する。ゴジラの細胞、G細胞はその状態を良しとしなかった。

「ぐう!？」

「うお!？」

ベリベリと軍服が剥がれゴジラそっくりな男が現れる。ゴジラも何時の間にか何時ものコート姿に戻っていた。

「増えた!？」

「ブラックホールに飲まれても機能を停止させない所か進化する俺の細胞だからな。人格さえ有れば増えても可笑しくねーよ」

とは言え、やはり不完全なのかももう一人のゴジラ、怨念の身は溶ける様に崩れる。

どうも完全にゴジラの機能、永久機関と言っても差し支えない原子炉までは再現出来なかったらしい。まあそんな物が大量に作られても困るのだが。

事実ゴジラの世界線の一つでもゴジラの死後放たれた膨大なエネルギーをゴジラと同族たるリトルが死に掛けの状態で取り込む事で新しく生まれたような機関だ。怨念如きで、その力を賄える筈がない。或いは何かと融合すれば話は別だがそんな事ゴジラがさせるはずもない。

「体、寄越せえー!」

「身体!？」

「ウインちゃん、こんな時ぐらい空気読もうよ……!」

ゴジラと怨霊がぶつかり合う。拳がぶつかり怨霊の腕が潰れる。が、飛び散った腕がゴジラの腕に纏わり付く。

「——ッ!？」

頭の中に自分のではない記憶が流れ込む。

「ツチー！」

近接戦を止め熱線を放つゴジラ。怨霊も同様に放つがやはりエネルギー差で押し負ける。

「くそー！何故逆らう、恐竜！貴様とて憎いだろう、世界が、この國が！」
上半身だけになりながらもG細胞と怨讐だけでこの世にしがみ付く怨霊。

が、下半身を再生させようとしてエネルギーが尽きたのか溶け出し、ゴジラを忌々しげに睨む。

「……………ま、否定はしねーよ。知識記憶の中とは言え、あれだけ有れば思う所も有る」

「ならば——！」

「けどなあ、喚き散らして、暴れまくって、そんな俺でも家族が出来たんだ。こっちじゃ仲間だって出来た。てめーと暴れて、その大切なもんをぶち壊しちまうなら、お断りだ」

ドチャリと音を立て怨霊の腕が崩れ落ちる。

「くそー何か、生物、何でも良い！誰でも良い！嫌だ、消えるのは嫌だ……………忘れられるのは嫌だ……………！」

怨霊は周囲を見回し取り込みそうな生物を探す。しかし、先程まで戦闘が有ったのだ、この辺りの生物は皆逃げ出している。

「…………嫌だ…………何で、我等が忘却の彼方に送られなければならない、忘れられるのなら我等は何の為に…………」

「忘れないよ」

「アギラ？」

崩れていく怨霊に、アギラはそういった。

「おばあちゃんが言った。ボク達が平和に生きていけるのは、国の為に戦った兵隊さん達が居たからだって。おじいちゃんが言った。国の為に戦い、しかし国は敗北を受け入れてしまったけど、守れたんだから良かったって」

「……………」

「今の平和が有るのは、兵隊さん達のお陰です。ボク達の国を守って

くれて、ありがとうございしました。お疲れ様です」

「……………そうか……………我等は、無駄死には無かったのか」

「はい……………」

「……………そうか……………そう、か……………」

満足そうに笑った怨霊の身体は完全に崩れ落ちる。アギラはその前で手を合わせ、ミクラスとウインダムも顔を見合わせ頷くと手を合わせた。

ゴジラとモスラもそれに続いた。

「さて、じゃあ早速回収するか」

「何を？」

「俺の細胞。動物とかが摂取したら高確率でモノホンの怪獣になって本能のまま暴れまくるぞ」

と、ゴジラは怨霊の残骸を集めていく。細胞を統合させる脳が無い状態なら精々研究対象として役に立つ程度だろうが脳を持つ動物か脳は無いが思考をしていると言う植物と混じり合えば急速に遺伝子を食い荒らすだろう。

単細胞生物であるバクテリアなら核物質を食らう程度で済むが……………いや、時間が経てば進化し群体になるかもしれない。ヘドラと言う前例があり進化速度の速いG細胞なら有り得ない話ではない。そういう意味ではあそこで全部打ち込まれて良かった。

「……………」

と、ゴジラがG細胞を集めていると雷撃が飛んでくる。見ればギドラが睨んできていた。

「まだ終わっておらんぞー！」

「……………はあ、仕方ねえな……………」

ゴジラはそう言うと、ゴキゴキ首を鳴らす。そして、ゴジラの身体から黄金の光が溢れる。

「なんだそれは？」

「ラドンと合体した時の力だ。まあ、形態変化とでも思ってくれ……………」

「ふん。面白い……誰が王に相応しいか、全力を持って決めようではないか！」

ゴジラとキングギドラがぶつかり合おうとした瞬間、二人の頭上からレーザーが降ってきた。放ったのは何時の間にか空へと移動していたモスラだ。

「止めてください。ね？」

「……………りよーかい。ここで三つ巴で戦ったら被害が半端ないしな」

「ま、千年竜王が嘗て世話になったようだし。主の言葉を聞くのも借りを返すと思えば良いだろう」

「それで、お体に異常はありませんか？」

宿に戻り、モスラはゴジラにそう尋ねる。乗っ取られたり分裂したりと今日は色々あったのだ。どんな異常が起きているか……

「……………特に無いな、強いて言うなら」

「……………」

肩をグルグル回し体の調子を確認したゴジラは唇をペロリと舐める。

「口の中に妙な味が……甘酸っぱい？」

「ああ、それは恐らく原爆ドームで貴方と合流する前に食べてたはっさく大福の味ですね」

「? 何で俺の口からお前の食ってた物の味がすんだ？」

「口付けしましたもの、私達……」

「……………」

そしてゴジラは顎に手を当て、そのまま頭を抱えああ、と手を打つ。

「熱線を口の中に突っ込もうとしたのか」

「はい」

「……………はあ」

重い溜め息を吐くゴジラ。アギラ達も何と声を掛けるべきかと迷う。

「そんなお気になさらず。そう、あれは戦闘行為。攻撃です。どのような攻撃を食らおうとも乗っ取られていたあなたに責任を問うつもりはありません」

「……………そう言ってもらえると助かる。今度何か詫びさせてくれ。俺に出来る範囲なら手伝う」

「はい。ではその時に……………では、私はピグモンさんに連絡を……………
と言つてモスラは部屋から去つていった。

「……………いや、流石モスラ。同い年なのに大人の女つて感じだね」
「うん」

「お前等にも迷惑掛けたな。何か出来る事が有ったら言つてくれ」
「私は？」

と、両目を開けたギドラが尋ねてくる。
「……………まあ、迷惑は掛けたな」

モスラは部屋から出て、部屋の中にも外線に繋がる電話が有つたのを思い出す。

「いけませんね。ブーツとしてては……………」

首を左右に振り、このままロビーの電話でも借りようかと歩きだし、すぐに止まる。

「……………」

桜色の唇を撫で、次の瞬間耳まで真っ赤になる。

「あれは戦闘行為あれは戦闘行為……………そもそも口付けは人間同士の行為であつて怪獣だつた頃の記憶を持つ私やゴジラには関係ない……………はず……………うう……………」

ゴジラがラドンと合体した時、膨大なエネルギーは身から溢れオーラとなった。また、ギドラの放つ雷撃も高エネルギーの塊だ。

そしてその二つが合わされば、回収されずに残っていた僅かなG細胞の活動を再開させるには十分なエネルギーとなった。

「謹慎?・怪獣王!?

「何か弁明はありますかペガちゃん?」

ニコニコと笑みを浮かべたピグモンの前で、正座したペガツサは力タカタと身を震わせていた。

「あ、ありません……………私情です」

「ゴジゴジに何か恨みでも?」

「ち、違います!ゴジラさんが、今の力と前世の力の差違に違和感を持ち始めてるって聞いたから……………その……………」

リミッターの一つが自然に解除されるようにプログラムした。

「確かに結果としてゴジゴジは過去の怨霊……………でしたっけ?を切り離して、暴走する可能性は格段に減ったそうですが、一歩間違えたらその怨念達がゴジゴジの身体を使つて暴れるかもしれ無かったですよ?」

「ごめん、なさい……………」

「まあ…………ゴジゴジから責めないように言われてますし、ペガちゃんが失恋したばかりで誰かに甘えたり尽くしたいのは解りますが……………」

「うう……………」

失恋という言葉聞きペガツサは俯きながらダーク・ゾーンを出現させる。

「ああ、もう…………ペガちゃん、元気出してください!」

怨霊の未練が消えたからだろうか?ラドンと融合した時の強化形態や落雷を浴びた時の磁力が自在に扱えるようになった。

まあ磁力は兎も角強化形態はやはり代償無しとは行かないのか、疲労速度が速くなるが。

強化形態と言えば後一つ……………あれは使えないらしい。使えたら危ないが。

「しかしやる事が無いな」

「ご、ごめんなさい……私のせいで」

現在ゴジラとペガツサは謹慎を言い付けられていた。おまけにその間、リトルにも会えない。ピグモンは何が罰になるか良く解っているようだ。まあたった三日ではあるが。

「いや、心遣いは嬉しいよ。俺がお前の期待に応えられなかったただけだ……」

「で、でも………」

「……………そうだな。なら、詫びに何か暇潰しの方法でも教えてくれ」

「……………」

「えつと……王手」

ゴジラは頭をガシガシと乱暴に掻きながら俯く。オセロ、チェス、ペンタゴン、ウォーシユミレーション、何一つ勝てない。

「くっ！ウォーシユミレーションに俺が出れば」

「怪獣出てきた時点でそれももう別のゲームです。あ、なら次はガードゲームでもしますか？これなら運要素が強いですし……」

「……………ご、ごめんなさい上がりです」

ブラックジャック、神経衰弱、大富豪、そしてババ抜き、全てゴジラの惨敗。ゴジラは机に突っ伏す。

「謝らなくて良い……ちゃんと本気で戦ってくれたしな」

ここまで負け続きだと哀れに思えたが、手加減してやるのも何と無く嫌いそうなのでキチンと相手をした。どうやら正解だったらしい。

「……………まあ、次は負けないけどな。進化速度チートのG細胞舐めるなよ？」

「世界中がこぞって欲しがる細胞をゲームに勝つ為の知能上げに使うなんて、世界の学者が知ったら気絶しそうですね」

「やっと勝てた」

その後二時間ほど様々なゲームをして、ペガツサを長考に追い込む

事数回。漸くゴジラが勝利を手にした。

「と、こんな時間か。何か作ろう、リクエストは有るか？」

「料理出来るんですか？」

「元一人暮らしみたいなものだからな。飯はいつでも自分で作ってた」

「……………」

ゴジラの料理は、とても美味しかった。

そこは異様な部屋だった。窓には板が嵌められ、外から中を決して見れないようにされた部屋で、一面に男の写真が貼られている。

テレビのワンシーンを切り取った物から、ここ最近漸く突き止めた所在地に張り込み遠距離から撮影した盗撮写真まで選り取り見取りだ。新聞の切り抜きの横にはマグロ料理のページに葉が挟まれたレシピ本が置かれている。

「ただいま」

と、そんな異様な部屋に緑の髪の少女が入ってくる。少女はうつとりと写真を眺めると等身大の全身写真に身を擦り寄せる。

はあ、と熱い吐息を吐いた少女はハッと写真から距離を取る。

「駄目ね、私ったら。前なら兎も角、今の身体で一つになれるはずなの……………」

と、残念そうな声で溜め息を吐く少女。しかし直ぐに妖艶な、甘い香りでもしそうな笑みを浮かべる。

「それでも身体が求めるこの疼きは止められそうにないわね。ふふ、待っててね。もうすぐ会いに行くから……………ねえ、兄さん」

その部屋には花瓶があった。花瓶に咲き誇るは一本の赤い薔薇。花言葉の一つは『熱烈な恋』。

「……………ツ!？」

「どうしました？」

「……………なんか、寒気が……………」

復帰？・怪獣王!?

ゴジラの謹慎中、リトルは非番の怪獣娘達に面倒を見てもらっていた。今日はザンドリアスだ。

「ねえリトル、お兄ちゃ……ゴジラが居なくて寂しくないの?」

「うん!明日で会えるもん!」

ニコニコと笑顔で言うリトル。ザンドリアスはつられて笑う。

「良いなあ、リトルにはお父さんが居て。私はほら、母子家庭だから……」

「?ザンドリアスもお父さんの子供になる?」

「……ま、まあ……家族にはなりたい、かな?」

と、ザンドリアスが赤くなりながら答える。

因みにだが今二人が行る場所は河原だ。人の目も有る。微笑ましそうに二人を見守っていた通りすがりの大人たちは若いって良いなあ、とか、ドラマみたいねえ、とかその人が年下好きだと良いねえとか言っている。

「……………ねえ」

「はい?」

不意に聞こえてきた声に振り返るとそこには黄緑色の髪の少女が居た。年は中学ぐらいだろうか?

何と無くだが、獲物を狙うような目をしている気がする。

「一緒に遊ばない?」

「……………何して?」

「その子と……………私、子供って好きなの…………」

「……………」

何だろう、信用出来ない。これはアレだ、弱い者虐めをして楽しむタイプの目だ。

「うん、良いよ。何する?」

「ちよ、リトル……………あー、じゃあ水切り。一番向こう岸に近づけた人の勝ちでどう?」

「……………ま、良いか」

少女が納得し、ザンドリアスはニヤリと笑う。

「えい」

ドバァン！と巨大な水柱が立ち水滴が降り注ぐ。少女は笑みを浮かべたまま固まっていた。

「あ、そういえばリトル水切り苦手だったね。鬼ごっこでもする？」

「あ、私用事有ったんだあ……」

「逃がすか……虐めようとした者は、虐められる覚悟を持たなきゃね」
「ひっ！」

鬼ごっこ。タッチされれば吹き飛ぶ。

隠れん坊。力任せに隠れた場所から引き摺り出される。

高鬼。どんな高い所に逃げても追ってくる。

「こ、殺される………！」

少女はゼエゼエと肩で息をする。

リトルのスペックはいずれはゴジラに迫る。潜在能力の塊だ。人間より強いとは言えそれだけではリトルの遊び相手が務まるはずがない。

「ねえ、お姉ちゃん」

「何よ！今度は何して虐める気!?!」

「これ上げる……」

ポサ、と頭の上に花冠が乗っかる。

「ごめんね、やりすぎちゃった……」

「……自覚は有るんだ」

「また遊んでね！」

「絶対嫌！」

「かー！娑婆の空気はうめーなおい！」

「うめーなおい！」

謹慎が解け大きく伸びをするゴジラの横でリトルも真似して両手

を広げる。

「復帰おめでとうございます〜ゴジゴジ。所でゴジゴジ……」

「ん？」

「レッドンから大怪獣ファイトのお誘いが有るのですが、興味有りま
す〜」

「……………いや、無いな」

「そうですから……………まあ、出る気になったら何時でも言っ
てくださいね。はい、ここが今日のパトロール先です〜。今日の相方は何とヘド
らんですよ〜」

「えへへえ、よろしくねえ……………」

ヘドラはゴジラの背中に引っ付きながらスリスリと背中に頬擦り
する。変身して背鰭を生やしてやろうかと思っただが別段邪魔でもな
いので許す。プラインとぶら下がった根暗そうな美少女を連れてい
るとやはり目立つが気にしない。

「事件なんてあんまり起きないしい、デートみたいなものだよねえ？」

「うわー!」

「……………起きたな」

「チツ」

ゴジラの言葉にヘドラは背中から飛び降りると変身して騒ぎの有
る方向に向かった。

「や、やめろ!落ち着け!」

「落ち着け?私は落ち着いてるわ。だってこのままじゃ貴方が他の女
に取られちゃうもの……………なら、殺すしかないでしょう?」

「ひ、ひいー!」

どうやら痴情の纏れらしい。女が持っていた包丁は、ヘドラが触れ
るとあっと言う間に溶けた。

「何よ貴方!邪魔する気!?貴方もその人の女なのね!」

「……………うーん。ボク、ブサイクは好みじゃないんだあ」

と言って女性の顎を掠らせる様に殴る。女性はグルリと白目を剥

いて気絶した。

「ヤンデレってやつか、初めて見たぜ」

「怖いねえ、怖いよヤンデレはあ。他の女のモノになるのが許せないいい？あははあ、その程度どうでもいいのにねえ……」

と、ヘドラは笑う。

「お前は好きな相手が他の女と居て良いのか？俺は女じゃないから解らんが、例えば身籠ったら女の方はできなくても男は他の女とやり放題だろ？」

「まあ複数の女性と付き合っていればそうならかもねえ……でえ？」

「でって……」

「だつてさあ、愛してもらえるんでしょお？愛を分けてもらえるんでしょお？好きな人の、愛する人の愛をお……じゃあそれで良いじゃん。量も質も重さも関係ないよお……」

ケタケタと浮気を容認するヘドラ。きつとハーレムを築きたい男にとつて都合のいい女なのだろう。

「一夫多妻が認められたらさあ、ゴジラがボクを妻の一人に貰ってよお……」

「何で俺が既に結婚してる前提なんだよ。ラドンの事か？とは言つてもな……」

と、ゴジラは肩をすくめる。

「ハーレムなんざ男のエゴだろ。惚れてくれた女全てに満足して欲しい、何て言やあ耳当たりは良いが、要するに他の女を抱くのを容認しろって強要してんだろ？それは流石になあ……」

「じゃあ奥さんが良いって言えば良いのお？」

「………人を好きになつて、それがそう簡単に捨てきれない感情ならな」

「ゴモゴモ！次東京タワー！」

「はいよ、どうだ!」

ゴモラの一発芸がお気に入りの様子のリトル。ゴモラも満足そうに笑う。と、そこへ……

「ん?何、この香り……………」

不意に漂ってきた甘い香りに鼻をヒクヒクと動かすゴモラ。そこへ一人の少女が現れた。匂いの先は彼女だ。香水?

「…………あの、すみません」

「何ですか?」

「その子、兄さんの子ですよ?心配が似てますもん。貸してくれませんか?」

「……………兄さんっていうのが誰かは解らないけど、無理。この子は渡さないよ」

「あらあら困りましたね。私は兄さんに会う為にその子を借りたいだけなのに……………なら力尽くで借りさせてもらうわ」

「ゴジラに会いたいなら直接行きなよ」

「だって、私の方から兄さんに会いに行くなんて恥ずかしいじゃない。それにまるで私の方が兄さんを求めまくってるみたいじゃない?」

と、少女の体を黒がかった緑の光が包み込む。

蔓で編まれたような露出度の高い扇情的なドレス。薔薇の髪飾り、髪の中に混じる蔓。

「怪獣娘……………」

「私はビオランテ。どうぞよろしくね」

「前世の記憶持ちかあ…………でも、ゴジゴジは一人っ子って聞いたんだけどなあ…………」

再開？・怪獣花!?

ビオランテの蔓は地面に潜り襲い掛かってくる。先端にはハエトリグサの様な器官が有り、アレで攻撃してくるのだろう。

しかしゴモラは元々地中を移動する怪獣。僅かな振動でも地面の中でどの様に蔓が動いているのか手に取るように解る。

「よ、ほーはー!」

「中々すばしっこいのね、蜥蜴さん」

「ふふん! 怪獣ファイトの期待の新人を嘗めないでよね!」

ビオランテは蔓を地面から掘り起こすと今度は鞭の様に振るった。土を押し退けなくて済む分速度は上がっているが躲せないほどではない。

「でもそれじゃあ近づけないわよ?」

「近づけなくたって……………はあ!」

ゴモラの三日月状の角が光ると、額の角から衝撃波が飛んでくる。岩をも砂塵に変え地面に潜る為のゴモラの必殺技だ。しかし……

「近づけなくても、何かしら?」

「な!?!」

ビオランテはそれを片手で弾く。僅かに擦り傷の様なモノが出来ていたがそれも直ぐに再生した。

「ふふ。私って結構硬いのよ? 兄さんの熱線にも耐えられるんだから……………」

ニコリと笑顔でとんでもない事を言う。まずい、想像以上に強敵だ。

「リトルちゃん逃げて! ここは私が——ツ!?!」

「気付いたみたいね。でも遅いわよ…………」

「きゃ!?!」

ボコツ!と地面が盛り上がり無数の蔓が現れ——斬られる。

「……………誰、貴方?」

「……………友達」

ビオランテが不機嫌そうに突然現れた少女を睨む。籠手と一体化

した槍とトンファアの様な大鎌を持った少女。

「昨日のお姉ちゃん！」

「べ、別にあんたを助けようとしたわけじゃないんだからね！ただ、彼奴に恩を売っておけばあの大蜘蛛が出て来た時助けてもらえるかもしれないし……」

「大蜘蛛？」

「まあ流石にこの姿で食べられる事はないでしょうけど」

「じゃあ何できたの？」

「ね、念の為よ——っ！」

と顔を逸らす少女に再び蔓が迫る。

「何度来たって！」

「さっきのが最高硬度だとも思っているの？」

「——え？」

迎え撃とうとしたが、次の瞬間鎌が弾き飛ばされる。少女は直ぐに反撃を止めリトルを抱えるとその姿が消えていく。

「……へえ……面白いい力を持つてるの……ね!？」

ビオランテが感心していると腹に衝撃が走る。ゴモラだ。

「0距離なら、どうだ！」

「——！」

腹部から全身の内臓を揺らす衝撃にビオランテは目を見開く。効いている。やはり内部は——

「こ、のーがあー！」

ビオランテは口から液体を吐き出す。内臓を揺さぶられたのだ、別段不思議ではない。ゴモラは距離を取らず振動を送り続け、全身に激しい熱が走る。

「あぐ!あ、ああ……!」

「油断したわね。それは兄さんの強固な皮膚すら僅かに溶かせる消化液よ……さして……」

ビオランテがツイツと指を動かすと蔓の一本が空に絡み付く。

「残念ね。その子、私の親戚みたいなものだから、居場所が分かるの。さ、渡して……?」

「い、いやだ……」

「そう。じゃあ仕方ないわね……」

ビオランテがゆっくり近付いて、リトルに手を伸ばす。と、その時手がピタリと止まった。リトルの目が赤く染まっている事に気付いたからだ。

「……？何が——」

ふと耳を澄ませば、何やら地鳴りが聞こえてきた。振り向いたビオランテは、満面の笑みを浮かべる。

「うちの娘を虐めてんのはてめーかゴリア！」

「ああん！」

怒り心頭な様子でやってきたゴジラに腹を殴り付けられ吹き飛ばす。ゴジラはビオランテを放ってリトルに駆け寄る。

「リトル、無事か!?ん、お前………カマキラスか？」

「ど、ども……」

「バカといじめっ子は死んでも治らねーのか!?ああん!」

「待つてパパ！この人は私を守ろうとしてくれたの！それに、ゴモゴモも……」

リトルの視線の先を見れば全身に火傷の様な傷を負ったゴモラが居た。仮にも怪獣娘だ。傷はキチンと治るだろうが………ゴジラはギロリと土煙の中を見る。その土煙は無数の蔓に吹き飛ばされ、ビオランテが現れる。

「ああ、兄さん！兄さん！会いたかった、会いたかったわ！」

「その気配、その姿……ビオランテか」

「ええ、覚えててくれたのね。嬉しい………前世では一つになれなかったけど、今生でも一つになれそうにないけど、やっぱり会いたくて………ねえ、兄さん………私のモノになって？」

無数の蔓が伸びてきたがゴジラはそれら全てを引き千切る。

「嘗めんなよ、あん時は人間共に妙な薬飲まされてたんだ………今回は端から全力。降参するなら早めにしとけ………壊しちまうかもしれねーからな」

ゴキゴキと指を鳴らしたゴジラにビオランテはうつとりとした表

情を浮かべる。

「そんな……壊れるまで激しくなんて……素敵よ兄さん。始めましょう！」

ザワザワとビオランテの蔓が蠢き針金アートの様に何かを形造る。それは、巨大な口だった。それは鰐の様にも見え、そしてゴジラと何処か似ていた。

ゴジラを丸飲みしようとする顎、ゴジラは拳で吹き飛ばす。と、蔓が解けビオランテが向かってくる。

迎え撃とうとしたが蔓が絡み付き、ビオランテの牙がゴジラの首筋の肉を抉った。

「……のー！」

背鰭が発光し蔓を焼き切るとゴジラはビオランテを蹴り飛ばす。蔓を器用に使い衝撃を殺して降りたビオランテはゴクンと喉を鳴らした。

「……………っ……………はあ……………解る？今、兄さんの一部が私の中で溶けていったわ。これで漸く一つになれた……」

「……………上等だてめー。拳骨で済ませて貰えると思うなよ」

ゴジラが黄金のオーラを発し睨み付けると、途端にビオランテが不機嫌な顔になる。

「ちよつと兄さん！いきなり他の女の気配を放つとか何考えてるのよ！」

「……………は？」

「今は私と居るのに他の女の匂いや気配出すなんて信じられない！」

「……………」

何を言っているんだろうかコイツ。駄目だ。訳が分からない。

「フフ。まあ良いわ。兄さんと一つになる目的はこれで果たせたんだし。ああ、兄さんのお友達を傷付けたのが許せないなら、気が済むまで好きにして良いわ。出来れば噛み付きが一番嬉しいのだけど……………」

「急げ！お前等！」

丁度付近を見回っていたレッドキングはアギラ達と共にゴモラから救援信号が発信された公園に向かう。

「あれえ、アギラ達じゃないかあ、どうしたのお？」

「ヘドラー！救援信号見てないのか？」

「救援……？ああ、ゴジラが走り去った後流れたアレねえ……ゴジラが向かったから大丈夫だよお」

と、あくまで落ち着いているヘドラー。レッドキング達はそれでも急ぎ公園に向かい、見た光景は……

「何でよ!?何で何もしてくれないの！殴っても良いのに、蹴っても良いのに！昔みたいに関さんの熱いもの（熱線）を私の中にぶちまければ良いじゃない！」

「黙れ変態！近付くな！」

「そんな、変態だなんて……困っちゃう」

「……」

しばし呆然と固まる一同。が、倒れているゴモラに気付き慌てて駆け寄る。

「無事か、ゴモラ！」

「……う、レッドちゃん……私……」

「喋るな。今は安静に……」

「あんなのに負けたなんて、一生の恥……」

紹介？・怪獣花!?

「この子達が新しい怪獣娘さんですか?」

「か、カマキラスです……」

「ビオランテと言います。前世では兄さんと互いに求め合った関係です」

と、ふざけた事をのたまいながら頬を染める自称妹の背中を蹴るゴジラ。しかし当人は息を荒くするだけで応えた様子は無い。

「お前この世界で何が有った……」

「私はこの世界で家族と言うモノをずっと調べていたの。そして知ってたわ……例え相手が愛していなくても、どんなに暴力を振るい続けても、愛し続けるのが良妻の心得だって……」

「完全にDV彼氏に依存するダメ女の思考じゃねーか!どんな本読んだんだ!?!つーか夫婦ですらねー!」

ガー!と叫ぶゴジラはしかし相手をするのも疲れてきたのかはあはあと肩を揺らし頭を押さえながら部屋に帰ろうとする。

「疲れた、今日はもう上がる……」

「あ、はい……」

流石のピグモンもゴジラが哀れに見えたのか大人しく見送る事にした。何と言うか、本当に哀れだ。

前世の妹が変態になっているなんて。

「………あれ、そういえばゴジゴジって前世ではリトルンに会うまで天涯孤独って……」

「ん?ああ、世界線の幾つかでは仲間も居た。全部人間に溶かされたが」

「………溶かされたんですか」

「溶かされた」

「すいません……」

「良いさ。で、そいつは………まあ詳しくは本人に聞いてくれ」

と、ゴジラは投げやりに言うとその場から立ち去った。

「………ビオちゃん、教えてくれます?」

「やです。私、兄さんと仲の良い女は基本的に嫌いなので。ああ、別に
闇討ちとかはしないのでご安心を。ただ、嫌いなだけです」

ゴジラと話していた時とは違う他人行儀の拒絶すら感じる口調。
また厄介なのが入ったと頭を押さえるピグモン。

「ゴジゴジから貴女に聞くように言われましたよ？これは貴女が話
せ、と言う事ではないでしょうか？」

「……………それもそうね。良いわ、話してあげる」

しかし今度はあっさり承諾した。ゴジラの言葉の方が、自分の意志
より高い優先度が有るのだろう。下手したら自分達に向けている敵
意すらゴジラの言葉一つで反転させかねない。

「私は大した意思も持たない薔薇だった。人間の都合で、人間の意思
を植え付けられその意思すら潰されか掛かった……………」

「……………薔薇？」

そう言えばゴジラは以前、自分の細胞は一本の薔薇を怪物に変えた
事が有ると言っていた。彼女がそうなのだろうか？

「けどある日、人間とは別の細胞が入ってきたの。それは人間の細胞
なんかとは比べ物にならない速度で、乱暴さで、私を飲み込んでいっ
た……………無理矢理、力尽くで、包み込まれ書き換えられ作り替えられ支
配された……………あの感覚は今でも忘れた事は無いわ」

はあ、と恍惚とした表情で語るビオランテは、色つぼさよりも不気
味さが醸し出されていた。

「そして私はその細胞と混じり合って、何者にも侵されない力、何者にも
も支配されない力を手に入れたの。自分の意志で動ける身体もね。
その後はもっと力を求めて私の中の兄さんの細胞に反応してやって
きた兄さんを取り込もうとしたわ。まあ、失敗しちゃったけど……………も
し取り込んでたらもっと大きくなれたでしょうね」

「……………大きく？」

「エネルギーを生み出し続ける兄さんの細胞が有ると言っても、身体
を大きくし続ければ当然エネルギーの消費と生産が合わなくなるわ。
私の細胞は結局は混じりモノだし……………だから兄さんの力を欲したわ
けだしね」

「……………」

逆に言えばゴジラの中のエネルギー生産機関は補えるのか。何と言う機能だ。

「でもそれなら、今は？その身体でゴジゴジを取り込めるとは思いませんが」

「そうね。でももう必要ないわ。この世界の兄さんの細胞はもう取り込めたし……………私は兄さんの細胞から生まれた、あくまでも兄さんの一部。兄さんが望むなら何だつてするし、兄さんが止めろと言ったなら例え私を殺そうとしてくる奴が迫つてこようと攻撃を止める……………」

「なる程く、あくまでゴジゴジ優先と……………」

ピグモンはウンウンと頷き、満面の笑みを浮かべる。

「でもここでは貴女は私の部下ですので、その事は自覚してくださいね〜」

「自覚？貴女に従つてあげていてっていう事かしら？」

「10と少し生きた程度の子供が随分大きく出たものですね……………」

「怖！何あのピグモンさん怖!!」

普段はピグちゃんと呼んでいるミクラスですら顔を青くしてアギラの後ろに隠れる。

「ん？ああ、三人は知らなかったっけ？GIRLSで一番怒らせると怖いので、ピグちゃんなんだ……………」

あの笑みは以前見た記憶が有る。確か、ザンドリアスと会う切っ掛けになった任務を頼まれた時だ。有無を言わせぬ迫力が有った。今のはそれ以上だが。

「ふ、二人ともボクの後ろに隠れないでよお……………」

「大丈夫！アギちゃんなら行ける！」

「ご、ごめんなさい……………」

アギラは自分の後ろに隠れる二人を責めたが、ピグモンの笑みを見て責めきれないと思った。

「ふふ。怖い怖い。ああそうだ、では上司の貴女に一つ進言……………私が兄さんの存在に気付いたのはあるテレビ番組」

「……………」

そのテレビ番組には心当たりが有るので黙って聞くピグモン。

「そのテレビ番組を見たのは私だけじゃないだろうし、たった二人で網の中のマグロを食い尽くしたんだもん、結構ニュースになった。兄さんの細胞を持つ私だから言える事だけど、兄さんの本質は怒り……私以外にも、多くの怪獣を殺してるはず。きっと恨みを持つ者だっている……近いうちに来ると思うよ。ここに……」

「怪獣娘の保護が私達の仕事です。例えばどんな相手だろうと、それは変わりません」

「そう、その偽善が何時まで持つか楽しみにしてるわ」

「あはは☆その強がりが何時まで続くか楽しみですね〜♪」

蜻蛉？・怪獣王!?

「すいません。今日はアギアギとミクミク達は別行動で、ゴジゴジと行動してくれませんか？」

「は、はひー!」

「……………?どうした、アギラ?」

ビオランテとカマキラスが来た日から、アギラ達の様子が偶々に可笑しい。何かピグモンに怯えているような……………?

「しかしお前と二人きりとは珍しいな」

「そうだね……………」

アギラとゴジラは予め変身しておき街中を歩く。コスプレの様なその衣装は人目を引くが怪獣娘が認知された世界では直ぐに気にされなくなる。

「あ、そうだゴジラ。ビオランテさんが言ってたんだけど、ゴジラを狙ってくる前世からの怪獣娘が居るかもだって……………」

「ふーん?ま、大丈夫だろ。別にな変わった事と言ったら彼奴等に再会したぐらいだしな……………次あつち見て回ろうぜ」

「現在進行形で変わった事が!」

ゴジラがクルリと背を向けると、ゴジラの背に夥しい数の蜻蛉が張り付いていた。

「うお、なじやこりや、キモ!」

「き、気付いてなかったの……………」

ゴジラは直ぐ様背鰭から発熱する。蜻蛉達は半数が焼け死に残りが逃げようとするが熱線でその半数を焼き消される。

「ふう。何だったんだ今の……………」

「ゴジラって動物に懐かれ易いし、ひよつとして虫もなのかも……………」
「虫もって……………つか何でこの季節に蜻蛉?……………ん、蜻蛉?」

何か前にもこんな事が有ったような気がする。何だっけ?と首を傾げるゴジラ。足元には羽が焼けて蹴いている蜻蛉の生き残りが。

拾い上げるとそれには尾の先端に針の様なモノが付いていた。

「ん〜、やっぱりこの味よねえ……力が内から漲って来る〜！」

ビルの屋上でトンボを舌に止めながら少女はスイーツでも食べた様な反応する。蜻蛉はそのままポトリと落ち息を引き取った。

「とは言え私じゃ吸収し切れるエネルギーに限度が有るし、それに対して向こうはほぼ無限だしなあ……勝てる見込みって有るの？」

「ええ、私達五人なら、エネルギーを吸い切れるはず」

「ボク達が戦った個体よりエネルギー生産量が大きいみたいだけど、むしろ好都合だよ」

「ククク。殺しはしない。永遠に飼い殺してやるさ……幸い我を殺したあの時の力は使えんみたいだしな」

「……………(飯)」

「そう言えば皇帝さんは？ある意味あの子が居れば安心なんだけど」

「左の子は賛成してくれたんだけど真ん中の子が『我が貴様等と組む道理は無い』って言って右側の子が『止めときな……アタシはパスだ』ってさ」

「ふーん？じゃ、ま、ゴジラのエネルギーは私達だけで独占しちゃおつか……まあそもそもあの子は元から半端なく強いしね……あ！ちよつと！私の子達勝手に食べないでよ！」

「これは……怪獣因子ですね」

「それが怪獣娘だったのか？」

ゴジラが持ってきた蜻蛉を調べたペガツサはその蜻蛉を怪獣因子だと言う。まさかこの蜻蛉は雌で不幸にも前世の怪獣が文字通り蜻蛉の怪獣娘になったのだろうかと憐れみを込めた目で見る。

「いえ、怪獣因子そのものです。そうですね、この子に近いかと……『シャアアア！』」

と、ペガツサは二足歩行の肉食恐竜の様なモノを取り出す。生き

て、動いている。

「……………可愛い」

「これが？」

大きさは30センチほど。アギラは目をキラキラさせてその恐竜擬きを見る。

「これはジラさんの子供です……………」

「……………は？」

「私達怪獣娘は生前の怪獣の特性を多く引き継ぎます。私ならこの銃や頭脳ですね……………そして、ジラさんは繁殖能力。何と単為生殖が可能だそうです。まあ、生まれるのはこうして小型化した怪獣ですが……………それとこの子には生殖能力は引き継がれていません」

「……………要するにこの蜻蛉もどつかの怪獣娘の子か、ヘドラみたいな分裂体って事か？」

「は、はい……………そうかと……………」

蜻蛉、蜻蛉ねえ……………と顎に手を当てるゴジラ。そしてああ、と手を叩いた。

「心当たり有るな。これ、メガギラスだ」

「メガギラス？」

「メカじゃねえメガだ。何時から彼奴は機械になった……………まあ俺の力を食おうとした蜻蛉だよ。本体……………つーか親玉に餌を運ぶ役目を持ったのがメガニューラ、つまりこれだな……………いやあ、懐かしい懐かしい……………ちよつくらぶっ殺してくる」

「最近ゴジラ過激すぎない？」

「怨霊共が消えてから前世の記憶と段々リンクし始めてな……………」

と、肩をすくめるゴジラ。本来の記憶として定着し始めた分、様々な記憶を同時に持って逆に忘れてしまったりした事も有る。今回のメガギラスのように。まあ見れば思い出せるのだが。

「でも目的は何だろね？宣戦布告かな？」

「さてな。厄介な人間の知恵を付けたんだ。俺を捕らえて永遠の餌にする気だつたりしてな……………」

ギヤハハと冗談の様に笑うゴジラ。割と笑い事では無い気がした

アギラとペガッサは引つった笑みを浮かべた。

敗北？・怪獣王!?

「今日はお前等とか、よろしくな」

「はい！」

「ああ……」

モスラは元気良く、バトラは面倒くさそうに応える。

今回はモスラとバトラの、姉妹との任務だ。

「しかし災難だなお前も、まさかあんな妹が居るとか」
「まったくだ………そういう妹と言えば、お前等どつちが妹なんだっけ？」

クレープを三つ購入し街中を歩く三人。

「氣にした事はありませんね。双子ですし……」

「そうなのか………しかし、不味いなこの魚クレープ」

「チャレンジメニュー何て頼むからだ」

顔をしかめるゴジラにバトラは馬鹿にしたように笑う。と、モスラがイチゴクレープを差し出してくる。

「一口食べます？」

「お、悪いな」

ゴジラは一口で魚クレープを食い尽くすと口直しにモスラから差し出されたイチゴクレープをパクリと食べる。甘酸っぱいイチゴの味とクリームの濃厚な味が口の中に広がる。

「ん、美味しいな……」

「でしよう？」

と、モスラは残りを食べようとして固まる。チラリとゴジラが唇に付いたクリームを舐め取っている唇を見る。そして食い掛けのクレープを見て顔を赤くする。

「……………」

「ん？くれんの？」

そのクレープを無言でゴジラに差し出す。

「……………おい」

「ん？」

そんなモスラを見てバトラはゴジラの腕を引っ掴み引っ張る。

「モスラ、ちよつとコイツ借りるな……………」

「え？」

「お、おい何だよ……………」

「彼奴に何しやがった……………」

ゴジラを壁に押し付け腕で喉を押さえたバトラはゴジラを睨み付けながら尋ねる。

「明らかに彼奴の様子が可笑しい。お前、何した！」

「……………実はこの前の暴走の時、どうやらキスしたらしい」

「……………は？キス？」

ゴジラの発言にバトラはポカンと目を見開き、詳しく訪ねてきたので詳しく説明してやると頭を抱えた。

「いやいやキスって……………彼奴いろんな記憶統合してるから精神年齢万超えてるだろ……………いや、そもそもキスに関する知識手に入れたのは最近だけ……………」

「けどあん時は気にした様子も無かったんだがな……………」

「そんなに意識する事か？アタシにやさっぱだ……………よし、ちよつと実践してみよう」

「は？おい待て、最近前世との記憶が一体化してきたとはいえ俺は人間よりの思考だぞ。んな事出来るか……………——ツ!？」

と、ゴジラは突然バトラを抱き寄せるとその場から跳んで離れる。

「お、おい!?!いきなり何しやがる!」

バトラが抗議してゴジラを跳ね除けるが先程まで自分達が居た場所が溶け崩れたのを見て目を見開く。

そこには短いツインテールの幼女が居た。髪質が硬いのか単純に垂れず膨らみ、シルエットを見れば蝙蝠の羽のようにも見える。

胸元には黄色い装甲、着ている物は赤いドレス。腰当たりには二本

の先端が棘となっている副腕が生えている。

「ツチ！よりによつて彼奴か！」

「知り合いか？前世の……」

「ああ！だが小さい、転生したてか或いは……」

「分裂体、か？」

「!?」

ガブリとゴジラの背後から何者かが噛みついてくる。その傷口からエネルギーと細胞を取られる。

「このー！」

直ぐ様バトラがそいつに向かって攻撃するが躲される。

ゴジラに噛み付いたのは先程の幼女を中学生ぐらいに成長させたかのような少女。幼女が少女に飛び付き溶けるように消えると高校生ぐらいに成長し、翼と角と先端がハサミのようになっていた尾が生える。

「久しいな、我を覚えているか？」

「誰かと思えばいっつも群れてるデストロイアか……何だ、群れるのが好きすぎて到頭一つになったか？あの時と同じだな」

ゴジラは傷口を押さえながら挑発する。が、不味い。重要神経の一部を溶かされた。今は何とか再生能力で補っているが残ったデストロイアの扱おうオキシジェン・デストロイヤーに溶かされ続けている。

「つー訳でバトラ、悪いが救援よろしく頼む！」

「きやあ!？」

ゴジラはバトラをぶん投げる。バトラらしからぬ可愛らしい悲鳴が聞こえた気がしたが今は無視してデストロイアを睨む。あくまで標的はゴジラだけなのか飛んでいったバトラには目も向けない。

「止めねーのか？」

「救援が来る前に片を付ければ良いだけであろう?」

「は！嘗めてくれるな！」

ゴジラは体内に残るオキシジェン・デストロイヤーを超える速度で再生を始める。が――

「――!？」

唐突に再生能力に割いていたエネルギーが激減する。すぐさまオキシジェン・デストロイヤーが肉ごと神経を溶かし始める。

「な、此奴等は……………」

ゴジラは背中や身体に張り付いているトンボと、青と黒の小さな海星の様なモノを見て目を見開く。

「そう。お前のエネルギーや放射能を餌にする奴等だ。懐かしいだろ？」

「おっひゃー♪」

「……………食料」

そう言つて空から現れたのは大きな翼と針が付いた蜻蛉を思わせる尾を持った少女と、虫を思わせる兜を被りマフラーが翼になった鎧を着て鉄製のブーツを履いた少女。長い青髪先端が鎌のように湾曲した針になっている。

「メガガラスにシノムラか……………仲良く揃つて復讐にでも来たか？ぐ！」

到頭立てないほどに神経が溶かされ倒れたゴジラの頭を踏み付ける。

「勘違いするな殺すつもりはない。この世界で、この社会で生きるのに力を振るい続けては何かと面倒だからな。しかし、だ。丁度良い進化素材が目の前にある。ならそれを確保しようと言う話しになつてな……………」

「最悪の想像が現実になつたわけか……………フラグなんて建てるもんじゃねーな……………」

「ははは。我等のような美少女達の餌になれるのだぞ？世間一般ではあれだ……………えっと……………」

『我々の業界ではご褒美です？』

デストロイアが言葉に詰まっているとメガガラスが応える。

「そうそれだ。そう言うんだろ？良かったではないか、褒美だ。まあどうしても嫌というなら、お前の子で……………」

「おい」

「……………!？」

ガシリとゴジラの腕がデストロイアの足を掴む。

「!?」

「あちち……………」

背中に張り付いていた蜻蛉が焼け、海星の様なシノムラの細胞達は慌てて離れるが幾つかは焼け死んだ。

「彼奴にまた手え出して見る。骨一つ、細胞一つ残さず焼き尽くすぞ」
「ぐ!」

ジュウ!と音を立てデストロイアの足の装甲が溶ける。

「は、離せ!」

直ぐ様分裂体を作りゴジラの全身に噛み付かせ体内にオキシジェン・デストロイヤーを流し込む。熱に強いはずのデストロイアの分裂体は全て火傷を負っていた。

「終わった?所で飛んでったの逃がしちゃって良かったの?」

「取り返しに来るかもよ?ボクらはこの中じゃ特殊な能力も持たないし、戦闘になったら君達に任せきりになると思うけど……………」

と、両端を伸ばしその先端が鍵爪のようになったマフラーをして、頭の両端に赤い線のようなメッシュを入れた大きさと髪の長さ以外瓜二つな少女達が現れる。

「終わった。さっさと連れて帰るぞ……………」

「……………ご馳走」

と、シノムラは涎を垂らしながらゴジラを抱え上げる。その際自分だけキツチリエネルギーを搾取していた。

「カハハ!情けねーなアニキは……………」

「そう言うもんじゃないよ。相性が悪いもん……………」

少し離れたビルの屋上で、ゴジラの変身姿とよく似た格好の少女が鋭い歯を剥き出しに笑う。違いが有るとするなら肩に付いた結晶だろう。ゴジラのやられる様を見てゲラゲラ笑いまくっていた。

大きな帽子を被った少女が諫めるが笑うのを止める気は無さそう

だ。

「で、どうするよ？オレは別にアニキと争いに来た訳じゃねーがお前は？」

「嘗ての姿とは違うとは言え理性を取り戻せた時点で恨み言は無いよ。むしろ、現在これだけの力を手に出来るのは兄様のお陰だし……」

「助けるか？」

「……………様子見。最後のあれ、気になるし」

怪獣王

「ゴジゴジが攫われた!？」

「ああ。アタシとモスラで直ぐに現場に向かったが、痕跡は全部溶かされてた」

ピグモンが直ぐにネットを確認すると、裏路地の一部が溶け崩れた写真が載っていた。確かに怪獣娘の力は絶大だ。しかも記憶持ちは暴走の心配がない。だが、まさかここまで大それた事をする者が現れるとは。

「……ねえ」

ピグモンが思考していると不意にビオランテがバトラの肩に手を掛ける。

「つまり何？ 貴方、兄さんを見捨てたの……？」

「……好きなように捉えろ」

「——！」

「待つてください！ 今はそれよりゴジゴジの居場所を！」

「……………」

ピグモンの言葉にビオランテは手を離す。

「兄さんの居場所は解る……………」と言いたい所だけど、邪魔する何かが流れてるわね。大体の場所は解るけど居場所となると私じゃ無理……………」

可能性が有るとすれば、と、リトルを見る。

「パパ、あっち……………」

と、一方向を迷い無く指差すリトル。

「……………解りました。では救助隊を編成しましょう」

「アタシが行く。責任の一端はアタシに有るからな」

「私も騒ぎに気付けなかつた責任が有ります」

「私も行くわ」

バトラ、モスラ、ビオランテが志願しピグモンも頷く。

「向こうの狙いがゴジゴジだけとは限りません。防衛も残さなくてはなりませんので、モスらん、バトラん、ビオちゃん、ゼットンの四人

で」

「ピグモンさん、ボク達も——」

「駄目です。記憶持ちの怪獣娘の強さは知っていますでしょう？まあキンちゃんやカマキリンちゃんみたいな例外は居ますが……………」

「……………」

志願したアギラにピグモンははつきりと言い切る。確かにそうだ。モスラもバトラもキングギドラもラドンもビオランテも、そして何よりゴジラも群を抜いた強さを持っている。そんなゴジラを捕らえる様な相手だ。

「ラドちゃんやアンアンには悪いですが……………」

「気にするな。防衛は任せろ」

「ゴジラを捕らえた奴らにそれなりの制裁を頼む！」

リトルの案内の下やってきたのは廃ビル。この中にゴジラが捕らえられているのだろう。

すでに変身を済ませた四人は廃ビルを前にピグモンに連絡を取ろうとする。が——

「？ソウルライザーが、動かない？」

しかしソウルライザーが全く動かない。電源すら付かない。

「あなた達、誰？」

「——!？」

不意に聞こえた声に振り向くと、ビルの入り口の上で赤いメツシユを入れた少女が首を傾げていた。鍵爪の様になったマフラーは床に伸び、光っている。

「あれね、私から兄さんの気配を隠してたのは……………人間が使う、電磁波に似てるけど」

「……………電磁パルス」

「ああ。あなた達ゴジラを取り返しに来たのね？駄目よ、もう私達のご飯だもん」

と、少女が笑った瞬間ビオランテの蔓が少女の座っていた場所を破

壊する。

「殺す」

「あら貴方、ゴジラと似た匂いをしてるわね。どうしよつか？」

ビオランテを見た少女が笑みを浮かべる。ビオランテは目を細めると蔓で巨大な口を編む。

「やってみなさい……」

「させないよ」

「——!？」

蔓の顎で少女を飲み込もうとした瞬間空から現れた影が顎に飛びつき電磁波を流し込まれる。

見ると目の前の少女そっくりな小さな少女が翼を広げ降り立っていた。

「姉妹で怪獣？」

「ええ、前世では同族だったの」

「それも雌雄で、夫婦だった、ね……この世界じゃボクは女だけ……」

「平気よダーリン、その姿も可愛いわ」

ゼットンの言葉に肯定する姉妹。そして恐らく姉の方が名乗る。

「私達はMUTO、よろしくね」

「生憎兄さんを攫った雌共と仲良くする気は無いの」

「私達の仲間を返して」

ビオランテが無数に蔓を伸ばしゼットンが睨む。しかしMUTO達は慌てる事無く二人を見る。

「相性的にはあの子ね。残りは任せるわ」

と、MUTO達はビオランテに向かう。ビオランテは直ぐ様、蔓を伸ばし巻き付けたがMUTO達は力任せに引き千切った。

「——!？」

「力には自信が有るのよね」

「チツ……ならこれはどう？」

ビオランテが蔓の先端から消化液を吐き出すとMUTO達は一端距離を取る。ゼットンは直ぐ様MUTO達に向かって火球を飛ばそ

うとするが背中に何かが飛び付きエネルギーを吸い取られる。

「くっ！」

「おお！ゴジラ程じゃないけど良いエネルギー……」

と、ゼットンの背中から針を抜き満足そうに笑う少女。ゼットンがバリアで閉じ込めようとするがその姿が消える。

「瞬間移動!?違う、これは……高速移動！——ッ！」

背後から感じた気配にゼットンは瞬間移動を使い回避する。

少女は驚いた様子をみ開くが次の瞬間ニヤリと笑った。

「強いねお姉さん。じゃあ、これ何てどうかな？」

と、無数の蜻蛉を出現させる少女。一体一体がエネルギーを吸収する為の針を持っていた。

「モスラ、バトラ、先に行つて」

「ああ！」

「任せます！」

ゼットンの言葉に二人は駆け出す。が、不意にバトラが足を止めモスラも釣られて止まる。次の瞬間地面が溶け青白い光線が伸びてくる。

「……………お前」

「また会ったな。生憎、折角の極上の餌を返す気は無いぞ？」

「……………退いてください」

出て来たのはデストロイアだ。バトラとモスラに睨まれ、しかし慌てる事なく傲慢な笑みを浮かべている。

「二人掛かりか？良いぞ、来るが良い」

モスラとバトラが同時に迫るがデストロイアは躲し、バトラを尾で掴む。そのままエネルギーを吸い取り助けようとしたモスラに額の角を剣に変化させカウンターを食らわせようとする。

咄嗟に躲したモスラだったがその剣は通過地点に有る全てのモノを切り裂いていた。

「我がヴァリアブル・スライサーはあらゆる分子を破壊し切り裂く。貴様等では勝ち目は無いぞ？」

「……………楽しそう」

「ん、シノムラか。ゴジラはどうした？」

不意に現れた小学生ほどの少女にデストロイアが怪訝そうな顔を向ける。

「……………もう一人の私に任せた」

「ああ…それでその姿か」

と、興味を失った様に言うデストロイア。シノムラと呼ばれた少女は残っている相手を捜しているのかキョロキョロ周囲を見回しリトルを見付ける。見付けて、涎を垂らす。

「……………あれ、美味しそう」

「奴の娘だ。奴ほどの力は持ってないが…………」

「……………欲しい」

「……………ま、好きにしろ」

デストロイアが許可を出すとシノムラはリトルに向かって飛ぶ。

「不味い、リトルちゃん！」

「貴様等の相手は我だ。余所見とは嘗められたものよな」

「ぐー」

助けに行こうとしたモスラはデストロイアに地面に押しさえ付けられる。ゼットンとビオランテも気付き動こうとしたがビオランテはMUTO二匹に足止めされ、ゼットンは背を向けた隙を付かれ背中に張り付かれエネルギーを吸われていく。

「……………逃げない？」

シノムラは自分を前に逃げようとしないう獲物に首を傾げる。丁度良いのだが、何故逃げないのだろうかと疑問に思ったのだ。

「……………逃げない。だってもう直ぐ、パパ来るもん」

「?それ無理。エネルギー、常に吸い続けている」

「来るの！」

「……………来ない」

ムキになって叫ぶリトルをシノムラが捕らえようとした瞬間、地面が爆ぜる。

「……………私？」

シノムラは地面から吹き出した炎に飲まれている自分そっくりな

少女、自分の分身を見て慌てて取り込む。細胞の幾つかが死滅したのか本来の大きさには戻れなかった。

「……………おい」

デストロイアの能力とは違う、熱量によって溶けた穴からヌツとゴジラが現れる。しかし、その姿はいつもと違った。晒している胸、更にはコートやズボンの各所が赤く発光している。

全身からは圧倒的な熱が放たれており近付くだけで焼け付きそう
だ。

「言ったよなあ、俺は……………そいつに手え出したら、焼き尽くすつて」

「ツ！この力……………あの時の……………慌てるな！その力は長く続かない！」

デストロイアの叫びに突然のゴジラの出現に呆然としていた一同がハツと正気を取り戻す。長く続かないならと距離を取ろうとした瞬間、赤い熱線が大きい方のMUTOを襲う。

「あ、がは……………」

「姉さん！この、よくも！」

小さい方のMUTOが激昂し突進するが頭を掴まれ溶けた地面に押し付けられる。

「……………!!」

声にならない悲鳴を上げたMUTOを蹴り飛ばすと迫ってくるシノムラとメガギラスに目を向けた。

メガギラスを目眩ましに大量の蜻蛉を、シノムラは分裂して霧のように襲ってくる。ゴジラは爪を自身の腕に突き立て――

「鬱陶しいー！」

引き裂く。抉り取られたゴジラの肉片、細胞は小型のドラゴンに姿を変え蜻蛉やシノムラの分裂体に襲い掛かる。

「な、此奴等!？」

「……………多い」

シノムラは慌てて統合し、メガギラスは目眩ましが消え慌てて距離を取ろうとするがガシリと尾を灼熱の腕で掴まれる。悲鳴を上げる

間も無く、シノムラに向かって振り下ろされた。

「……………あと一人」

「ツ！な、嘗めるな！我はあの時以上のエネルギーを——！！」

角を巨大な剣に変化させ斬り掛かるがゴジラは片手で止めた。高圧のオキシジェン・デストロイヤーに耐えている。否、違う。如何なる物質もそれが分子で構成されている以上オキシジェン・デストロイヤーの影響を受けないなんて有り得ない。ならば何故止めれるのか？簡単だ。再生している。溶かされて直ぐに。溶かされるより速く。

「こ、こいつ！前より細胞の再生速度が上がって……………!!」

ゴジラの拳が腹にめり込む。その膨大な熱量で肺の中の空気が膨張、発火し口から血と黒煙を吐きながら吹き飛ぶデストロイヤー。

ゴジラは周囲を見回すと大きく息を吸い、吼えた。

「グオオオオオオンツツ!!」

それは己の存在を世界に誇示する様に、世界よ、己を恐れよと言う様に、絶対的で絶望的な力を聞く者に理解させる咆哮だった。

無事?・怪獣王!?

「……………いやいや……………いやいや!?何だよあれ!?何だ!?

「温度は尚も上昇中……………兄様の中のエネルギー残量が減る様子も無い。理論上、無限に温度が上昇するね」

「有り得ないだろ!あの温度、オリジナルのG細胞が焼けてるぞ!?なのに再生って……………再生って言えるのかそれ……………再生って言葉で済ませられるのか……………それ……………」

結晶の少女の言葉に帽子の少女は帽子を深く被る。

「……………兄様^{あにさま}、ゴジラの英語表記では、G O D Z I L L A……………神の獣。まさしく、その通りだよ。あんなモノを取り込もうとしたのか私は……………はは、兄様^{あにさま}を食らったところで、細胞に飲み込まれて兄様そのものに成っていた未来しか浮かんでこないよ」

顔を青くして過去の愚行に恐怖する帽子の少女。と、不意に観察していたゴジラと目が——合った。

「——!?!」

「気付かれた……………どうする?」

「……………私前世じゃ兄様^{あにさま}を食べようとしてたんだけど」

「オレ何てアニキの子虐めてたんだが……………」

と、迷っているゴジラの目が僅かに細まる。その目はまるで、さっさと来いと言っている様に見えた。

「ああ、兄さん!その姿も素敵!」

と、ゴジラを蔓で引き寄せ、抱き付こうとしたビオランテだったがゴジラに触れる前に燃える。

「……………あら?」

「おっと、悪いな」

シュウウと音を立てゴジラの全身を包む熱がゆっくり下がり始める。そして、そんなゴジラにリトルが飛び付いた。

「パパ!」

「おっと……」

ゴジラはリトルを受け止める。足元は灼熱の溶けた地面、落としたら大変な事になる。

「無事で良かった……」

「……………心配掛けたな」

「……………」

リトルの頭を撫でてやるとリトルは満足そうに微笑む。そして……………

「兄さん！」

「寄るな」

「あはん♪」

リトルと同様に抱き付こうとしたビオランテはゴジラに足で顔面を受け止められそのまま灼熱の地面に押し付けられた。

ビオランテは混じり物とはいえG細胞を持っているのだ、この程度なら耐えられるだろう。焼けている間は痛みが有るかもしれないが。

「ああ！兄さん！もつと！もつと踏んで!!」

「そうかそうかじゃあマグマに上半身が埋まる程度に踏んでやる……親子の再会に水差そうとしやがって」

「あああん！」

ビオランテは嬌声を上げながらマグマに沈んでいく。モスラは止めるべきなのか、喜んでいるのだからそのままにしてやるべきなのか解らず、おろおろしているとゴジラが不意にある一点を見詰め始める。

しばらくして、二人の少女が現れた。

片方はゴジラに良く似た格好をした、紫の髪の少女。違いはコートの下に唯一着ているスポーツブラと肩の結晶、後は額の王冠の様な物だろう。

もう一人は大きな帽子を被った少女。大きな手袋をしており左肩の装甲に穴が開いていた。

「お、お久しぶりです兄様……………」

「よ、よおアニキ……………」

「御兄妹ですか？」

二人の言葉にモスラがゴジラを見るとゴジラは無言で頷く。するとビオランテがマグマの中から身を起こして二人を睨んだ。

「……………兄さんの、妹？」

「お前が上だ。仲良くしてやれ」

「これからよろしくね♪」

明らかに敵意を出していたのにゴジラの一言であっさり友好的な笑みを浮かべるビオランテに引きつった視線を向ける二人の少女。

ゴジラは妹？達のそんなやりとりを無視してリトルを降ろすと気絶しているMUTO二匹を抱える。

「お前等もそこで転がっている奴等運んでくれ」

「え、その為にな？」

「？当たり前だろ……………」

ゴジラの言葉に少女達はそれぞれシノムラとメガギラス、デストロイアを抱えたのだった。

「ゴジゴジ！大丈夫ですか？お怪我は……………」

「平気だ。それと、誘拐犯」

「誘拐犯の方が酷い怪我!?モスらん、バトらんビオちゃんやりすぎですよ。ゼツちゃんも止めてください！」

「……………やったの、ゴジラ」

「へ？」

「止める暇も無かった。と言うか、止められなかった」

ゼツトンの言葉にゴジラを見るピグモン。あのゼツトンをして止められないと言い切るなど、どんな強さだ。と言うか何で捕まっただ。

「……………ま、まあそれはこの際置いといて、そちらの子達は？また前世での妹ですかあ？」

「前世でリトルを虐めやがったスペースゴジラと、俺の事を取り込もうとして俺の細胞に逆に取り込まれてたオルガだ」

ゴジラが遠まわしに嘗て敵対していたと言うとビクリと身体を震わせる二人の少女。

「?解りました。よろしくお願いしますね、スペゴジちゃん、オルちゃん」

「え、ああ……よろしくな」

「どうも……」

「で、取り敢えずはその五人は医療施設に運ぶとして……」

と、ピグモンが言う。ゴジラが片手を挙げる。

「此奴等は簡単に治せる……」

「ほえ?」

「エネルギーや俺の細胞を与えてやれば良いわけだから………行け、ゼルヴァム」

ゴジラの言葉にゴジラの背中に止まっていたのだろう、背後から五匹の小型のドラゴンが現れ五人の口の中に入って行く。

「んぐーぐうむ!!」

「おごーごええ!!」

「うぐう、むう!!」

「むうー!んむうー!!」

「ぐおえー!おごお!!」

かなり大きめの物体が無理矢理口の中に入り込み苦しそうにジタバタ暴れる少女五人。

「ぐ、ゴジゴジ?」

「此奴等は俺のエネルギーや放射能、後は俺の細胞を取り込んだり……あれは俺の分裂体みたいなもんだからな。それら全てを補ってくれる……」

「で、でもあのサイズにした意味は………」

「無えよ」

「………」

ゼルヴァムを体内で吸収出来たのか目立った外傷が消えていく。

「……う」

「よお……」

「ッ!？」

最初に起きたのはデストロイアだ。五人の中で唯一エネルギーだけでなく細胞まで取り込んでいるからか、中々頑丈らしい。目を開けた瞬間ゴジラが覗き込んで起きて上がりうとしたがダメージが抜けきっていないのかベッドから落ちる。

「……………お前、は……………」

「そう睨むな。敗者の生殺与奪は勝者に有ると思わねーの?」

「……………我を殺す気か?それとも、人間同士の雌雄になったのを良い事に慰み者にでもするか……………」

「……………へえ、それも面白そうだな。嘗て自分を殺した男に無理矢理つてのも、中々屈辱的だろう?リトルを殺そうとしたお前にや丁度良い罰だ……………」

と、ゴジラがデストロイアの顎を持ち上げると怒りか恥辱か頬を赤く染め睨み付けてくるデストロイア。

勿論ゴジラにはそんなつもりは無いが、前世でも今世でもいろんな目に遭わされたのだ。このぐらいの意趣返しはしたくなる。

「……………ま、冗談だがな。その辺はピグモンに任せる」

そう言うゴジラはデストロイアからあっさり背を向ける。

デストロイアはピグモン?と首を傾げる。どんな怪獣娘か知らないが、ゴジラ以外に自分達を相手取れる怪獣娘が居るとも言うのか? ?

「全くゴジゴジは人任せなんですから……………」

と、言ったのは赤い髪の見た目は少女。まさか彼女が?こんな、何の威圧感も持たない者が?と思っているとピグモンはゆっくり振り返り笑顔を浮かべる。

「さて、それじゃあ怪獣娘の力の私的利用、さらにGIRLSの職員への暴行、それらについてお話しさせてもらいますね〜♪」

ニッコリと笑みを浮かべるピグモン。

力の質が上がったわけでも、感じる威圧感が増えたわけでもない。だと言うのに、もつと別の恐ろしさを感じ、デストロイアが涙目になる。

「皆さんもそろそろ寝たふりを止めてもらえると助かりますね」
ビクリと四人の身体が震えた。

兄妹？・怪獣王!？」

「で、俺がお前等の教育係か……」

「よろしく兄様^{あにさま}」

「頼むぜ、アニキ」

「よろしくね兄さん」

ゴジラは妹達三人を前に疲れた様な顔をする。

「すみません。兄様^{あにさま}……お世話になります」

「ふふふ。兄さん、手取り足取り教えてくれるんでしょ？」

「ま、オレはアニキに従うぜ」

申し訳無さそうに、と言うか少し怯えて言うのがオルガ。うっとり頬を染めるのがビオランテ。カラカラと笑って応えるのはスペースゴジラ。

全員ゴジラの細胞を取り込み、その特性を多く出した前世でゴジラの亜種とも言える存在だ。確かに妹と言う扱いは間違いではないだろう。

「けどよアニキ、パトロールってそもそも何すんだ？」

「パトロールはパトロールだ。事件が起きなきゃただの散歩だがな……」

ゴジラの言葉につまらなそうな顔をしたスペースゴジラ。と、その時キキイ!と車を急停止する音が聞こえてきた。事故かと思つて振り向けば車の扉が開き小さな女の子が中に引き摺り込まれ車が発進した。

「……………え？」

「起きたね、兄様。でも何てベタな誘拐事件……………」

「……………取り敢えず追うか」

誘拐犯達は現在浮かれていた。この辺りのカメラの位置はしっかりと調べてあつたし、後で乗り換える車も用意している。多少出費も多かったが身の代金で得られる金で十分元は取れるだろう。

「いやー、上手くいきましたねアニキ！」

「あたぼうよ！俺の作戦に不備は無い……このまま外車でも買っちゃまうかあ!？」

恐怖に震え泣き声も上げる事が出来ない少女を前に浮かれる四人の誘拐犯。と、運転していた誘拐犯がバックミラーに写った影に気付く。

「……………!?あ、アニキ!?なんか追って来ますぜ!？」

「は!?!ま、まさかも警察が!？」

「よう、停まれ」

「はあ!？」

振り返った瞬間、隣から声が聞こえた。見れば車に併走して黒髪のハーフマスクの少年が居た。

「な、何だてめー!?!バケモンか!？」

「……………」

少年は少女と目を合わせると指を右肩から左脇腹まで撫でる様に往復させる。

「…………シートベルト?」

少女が慌ててシートベルトを着けると少年の姿が消え、ドン!と車の上に何かが落ちる。

「な、何だ……………?ひい!？」

そして屋根を突き破って現れた腕がハンドルを掴み操縦を奪う。慌ててブレーキを踏み車が停まった瞬間ハンドルが引っこ抜かれた。

「あ、アニキ!車使えねーよ、どうしよう!？」

「慌てんなまだこっちにや人質が……………!」

バギン!と車の後部を貫き現れた大きな手が少女を優しく抱き抱え連れて行く。男達が慌てて外に出ると四人の人影が有った。車の上に乗った先程の少年。少年に良く似た勝ち気そうな少女、大きな帽子を被った理知的そうな少女、緑の煽情的な格好をした少女の四人。

「人質確保したよ兄様」

「よし、んじやとつとと捕まえるか」

「く、くそ!何なんだよお前等!捕まって堪つかよお!」

と、男達は懐から取り出したナイフや警棒を四人に向かって振り、全て片手で防がれ折れた。

「ありがとうお兄ちゃん！お姉ちゃん！」

会議で手が離せないと言う父親の代わりに兄が迎えに来て帰る少女を見送り、ゴジラ達も帰路に就く。

「……………」

そんな中スペースゴジラとオルガは手を繋ぎ帰って行く兄妹の背中をじっと眺める。

思い起こすのは暗く寒い、誰も居ない闇の世界。オルガもスペースゴジラも、年数に違いこそあれ、壊れ行く星から逃げ出したのと、そこで生まれたのと違いこそあれ、前世の一生の大半をあゝの闇の中で過ごした。

二人は前を歩くゴジラの手を見る。自分達の手より大きく、皮膚が硬い手を……。

「……………」

「?どうした?」

ゴジラは左右の手を掴んで来た二人に首を傾げる。が、二人は直ぐに手を離した。

「別にいい?」

「何でもないよ……………」

「……………」

ゴジラは離れていく兄妹を見て、それから妹二人を見る。

「別に良いぞ手えぐらい。繋いで帰るか?」

「……………うん」

「……………じゃあ、お願い」

と、二人はゴジラの手を繋ぎ帰る。

「……………あの、兄さん、私は?いえ、放置プレイもこれはこれで……………」

「……………」

誘拐犯から助けてもらった少女は兄が呼んでいたタクシーに乗り家に帰る。と、不意に少女が窓に張り付いた。

「お兄ちゃん鰐！」

「ははは。日本に鰐は居ないよ……」

妹の言葉に苦笑しながら窓の外を見詰める兄。今は橋の上だ。そして、見た。水面から何やら鰐の様な尻尾が突き出しゆらゆら揺れていた。

しかし可笑しい。鰐の尻尾は泳ぐ時に舵となる役目がある為、基本的に横向きに動く。あんな風に縦に伸びる事など有り得ない。何なのだろうか、あれは？

UMA? 怪獣娘!?

「ウィンちゃん!」

朝、元気良くミクラスがやってきた。

「どうしましたミクさん?」

普段から元気な彼女だが今日は一段と元気そうだ。何か有ったのだろうか?

「UGMだよ! UGMが出たんだ!」

「……………UGM?」

何だろうそれは? ウィンダムが首を傾げているとミクラスも伝わっていない事に気付いたのかあれ? と首を傾げる。

「あれ、違ったかな? UGMとか……………MATとか……………なんかそんなの!」

「全く解らない!」

「ミクちゃん、UMAだよ」

「あれ? そうだっけ……………?」

「UMA?」

ユーマとはあのUMAだろうか? 何と言うか、ツチノコだのカップだの言う胡散臭い。

「この辺りに出たんだって! 鰐みたいなUMA! ネットで話題になってた! 探そう!」

「いえ、でも……………私はあまり興味ありませんし。ねえアギさん……………」

UMA探しに夢中なミクラスと違いそう言うのにあまり興味の無いウィンダムは断ろうとアギラに同意を求める。が、アギラの目がキラキラしているのに気付く。

「UMA超見たい」

「スツゴいやる気だ!」

「この川に出たんだって!」

「ここ、ですか? 見た所普通の人工河川ですが……………」

周囲には噂を聞きつけたのかカメラを持った者やボートに乗ったテレビ局と思われる者達が居た。思いの外、信憑性の有る噂なのだろうか？

UMA目撃情報が多発している場所から離れた河原で何かが水面から現れた。

茶色い髪をした、茶色のドレスを着た少女だ。長い髪は水に濡れ張り付き口から大量の水を吐く。その様子は生まれたばかりの赤ん坊が羊水を吐き出している様にも見えた。

少女の腕は両腕を拘束する様に黒いコルセットピアスに繋ぎ止められていた。いや、よく見ればそれはコルセットピアスと違い少女の肌を貫き直接縫い付けている。

「……………ぎく……………」

少女はコルセットピアスのリボンを引き千切る。普通なら、皮膚が先に破れそうだが、そんな事は一切起こらずリボンだけが引き千切れて少女の腕に巻き付いていく。

少女は自由になった腕を使い立ち上がると銀色の瞳で周囲を見回す。銀色の瞳は白目に馴染み、傍目から見ると小さな虹彩の目を見開いている様にも見える。

「……………」

そして一点を見詰めて居ると、ズルリと影の様な何かが現れる。

シャドウだ。運の悪い事に、此処等に巣を作ろうとしていた。故に、侵入者に容赦しない。一匹が襲い掛かる、が――

「……………」

『!?!』

ズドン！と踏み潰される。周りに居たシャドウ達は仲間が踏み潰された事に驚愕し、しかし直ぐに敵性体と判断し襲い掛かる。

少女はグルリと回転すると少女に生えていた長い鰐の様にも見える爬虫類じみた尾がシャドウを薙ぎ払う。

『キシヤアアア！』

と、そこへ大きな影が現れた。シャドウビーストだ。鳥類じみた顔と翼で有りながら背筋の伸びた人間と鳥類を合わせた様なシャドウビースト。

「……………」

少女は此方を威嚇して来るシャドウビーストを一瞥して、特に興味無さそうに通り過ぎようとする。と、シャドウビーストがその巨体と嘴を使い突こうとして来る。

「!?ガア!」

それに気付いた少女は嘴を避けるとシャドウビーストの頭を掴み投げ飛ばす。しかし、シャドウビーストはそのまま落下せず宙に止まった。その姿の元である鳥類の様に。

『キエエエエエン!』

「……………!?」

シャドウビーストが翼を振るうと大量の鋼鉄の羽毛が散弾の様に降ってくる。少女は両腕を交差させ防御するがシャドウビーストの羽毛は無限に再生するのに向に攻撃が収まる気配が無い。

少女はギリツと齒軋りし、次の瞬間異変が起きた。

少女の髪が黒く染まり、一部ランダムで赤く染まっている。牙の様な髪飾りが不規則に現れドレスも形を変え、尾と共に黒く染まっていた。く。

ドレスの一部にも赤が疎らに存在し、先程とは全く別物に見える。

「がああ!」

『……………!?』

少女の赤いメツシユが紫に輝き、少女の口から炎が放たれた。慌てて距離を取るシャドウビースト。炎は噴出速度を増し、細くなっていた。く。

『……………!!?』

それはシャドウビーストの下半身をあっさり切り裂きシャドウビーストは慌てて少女の背後に移動し止めを刺そうと大量の鋼鉄の羽毛を放つ。

シャドウビーストが最期に見たのはそれらを一瞬で溶かし自分に

迫ってくる無数の光だった。

「居ないなあ……………」

「居ませんね……………て言うかここ、目撃された場所と大分離れたんじや……………」

ミクラスが川を注意深く観察し何時の間にか下流に来ていた。人の気配も殆ど無い。

「いやいやひよつとしたら人の気配を感じてこんな奥まで引つ込んでるかもしれないよ?…」

「仮にそうだとしてもそう簡単に見付かるわけ……………」

「ウインちゃん、ミクちゃん……………」

「はい?…」

「どつたの?…」

「居た……………」

アギラが指差した方向には黒い大きな爬虫類を思わせる尻尾が水面から伸びていた。

「嘘お!?!…」

「よつしやー!捕まえるぞー!…」

と、ミクラスが黒い尻尾に向かって飛び込む。バシャーン!と水柱が立ち……………」

「行き成り何しやがる……………」

「ご、ごべんなさい……………」

顔をゴジラに鷲掴みにされたミクラスがその場に居た。

「ゴジラ……………」

「お前等も一緒か。何してんだ?…」

ミクラスを離してやりアギラ達を見るゴジラ。ウインダムはゴジラの尻尾を見てああ、と気付く。

「噂のUMAの正体はゴジラさんだったんですね……………」

「あ、ユーマ?なんだそりや……………」

「はい、何でも鰐みたいな尻尾が目撃されたとか——ゴジラさん

？」

その瞬間ゴジラがウインダムの両肩を掴む。突然の行為に戸惑うウインダムだがゴジラは気にせず、或いは気に出来ないほど焦っているのか一方的に質問をした。

「何処だ、何処で目撃された？」

「え……つと……これは、多分ゴジラさんの事かと……」

「違う。俺は今日、同族の気配を追ってここに来た。噂なんかになるはずがない」

「えつと……つまりまたゴジラさんの妹さんと言う事でしょうか？」

「だと良いんだが、共鳴しすぎている……それこそ昨日までの自分の匂いに気付けないのと同じ様に気付けなかったほど……」

「つまり、どう言う事？」

アギラが首を傾げて尋ねる。

「以前俺が分裂した事が有ったろ？あの時、もし回収し損ねた細胞が残ってて、何の生物も取り込む事無く細胞だけで進化してたら？」

「……………」

「俺から分かれた奴らは、怪獣だった頃……つまりG細胞に支配されてた頃は必ずと言って良いほど俺を求めた。今は人間として転生し、理性がある。だがもし、新たに生まれた同族が理性も何も無かったら……………」

レッドキングはパトロール中に変わった人影を見て足を止める。

身長の高い女だ。それだけで目立つだろうが、何よりもその格好。

黒いドレス、赤いメッシュが疎らに混じった髪……………そして、尻尾。

怪獣娘だ。しかし登録された怪獣娘にあの様な者は居なかった。

ソウルライザーも無しに変身している。暴走している様子は無いがひよつとしたら大人しい怪獣だったのかもしれない。

ボーツと歩いていた少女が不意にガラの悪そうな少女達の一人にぶつかる。

「……………おい！」

「……………」

「オイ待てよデカ女！」

と、少女の腕を掴み叫ぶガラの悪そうな少女。

「人にぶつかつたという謝罪も無しかよ……………」

「止めなつてー」

「つーか何その格好、ウケるー」

これは、止めた方が良さそうだ。レッドキングは溜め息を吐きながら歩き出す。

「何とか言えよデカ女！」

「オイお前等！その辺……………に———!?」

ガラの悪い少女が少女の足を蹴った瞬間掴まれていた腕がガラの悪い少女ごと振れ、レッドキングの横を高速で何かが通過する。

ドゴン！と音が聞こえ振り向けば凹んだ車にもたれ掛かり口から血を吐いた少女が居た。車の下には黒いラインが有り、車がそこそこ滑ったのが解る。

「……………え？……………はっ!?て、てめー！」

呆然として居たガラの悪い少女の一人が掴み掛かろうとして、少女が腕を振り上げる。

「やりすぎだ」

「……………」

レッドキングが腕を掴むと少女の瞳がレッドキングに向く。感情をまるで感じさせない、かと言って機械の様な完全な無感情とも違う、本能で動く動物の目だ。

「ううっ…」

「なああんた等、この場からあの子連れて逃げてくれ。救急車はそこで呼んでもらえると助かる」

「は、はいー」

「さて……………おいたが過ぎるぜ未来の後輩！」

周りの人間が避難したのを確認するとレッドキングは脅しの意味も含めて少女の腕を強く握り叫ぶ。少女は腕の痛みではなく、その大

声に顔をしかめた。

同族？・怪獣王!?

レッドキングに掴まれた腕を見て少女は腕に力を入れる。が、怪力を誇るレッドキングの拘束を振り解けない。

「ううー！」

「元氣な奴だな。けど、大人しくしてもらうぜ！」

レッドキングはそう言うと言腕を引き腰を回し力いっぱい少女をぶん投げる。地面を何度かバウンドした少女は指を曲げ道路にめり込ませると爪痕のような跡を残して止まる。

少女はレッドキングを睨み付け異変が起きる。少女の赤いメツシュが紫に発光し、口内に光が溜まり始めたのだ。

「——!?!」

次の瞬間少女の口から紫色の光線が放たれる。咄嗟に避けたレッドキングだったが放たれた光線が直線上に有った鉄もコンクリートも全て溶かしているのを見て目を見開く。

しかしレッドキングが幾ら驚愕しようとして少女が待つ理由は当然無く、少女が首を横に振るのに合わせて光線がレッドキングに迫ってきた。

「しまっ——!?!」

幾らタフなレッドキングでもあの威力は耐えられない。

血の気が失せた瞬間レッドキングの目の前に半透明の壁が現れ光線を防いだ。

「……………はっ？」

「ぎゅー！」

呆然とするレッドキングに対して少女は振り返り光線を放つ。それは少女の背後に現れた少女の右手に吸い込まれ左手から倍にして返される。

「わんが来たさーー！」

「……………私も」

「ゼットン!?!キングシーサーー！」

「ふははー！ビーム使う相手にはわんは負けないサーー！わんのでえ〜

じ格好良い所見せてや……………」

「があー！」

「あー!?」

勇猛果敢に突っ込んで行ったキングシーサーはぶっ飛ばされゼツトンのバリアに受け止められるが、完全に目を回していた。

「ゼツトン気を付けろ、あの尻尾、たぶん前世じやゴジラの子族だ……………」

と、レッドキングはゼツトンに警告する。ゴジラの子を名乗る者の中で、弱かった者は一人も居ない。事実腕力なら兎も角、彼女の光線は途轍も無い威力を發揮していた。

「……………大丈夫」

「は?」

「今朝、ゴジラが言ってた。近い内に、新しい同族が現れる可能性があるって……………だから、天敵を連れて来た」

「……………(ご飯)」

「行けお前等！エネルギーを吸い尽くせえ！」

と、ビル影から現れたのはシノムラとメガギラス。メガギラスはメガニューラを放ちシノムラは長い髪先端に有る棘を突き刺そうとする。

さらに逃がさないよう、ゼツトンがバリアの檻に閉じ込める。

シノムラとメガニューラの子が逃げ場の無い少女に迫り、次の瞬間無数の光に貫かれた。

「……………!?!」

変身中は群体であるシノムラは身体が破損してもまた集まれば良いのだが焼き殺されては復活出来ない。

せつかくゴジラから与えられたセルヴァムで元のサイズまで復活したのに中学生ぐらいになってしまった。地面に降り距離を取るシノムラ。メガギラスは自分の部下達が一瞬で殺られ呆然としていた。

「……………髪、から……………だと……………」

遠目から見ていたレッドキングは少女の黒の中に紛れた赤い髪から無数の光線が放たれたのを見ていた。

「ぐあうー！」

「わ!？」

シノムラが食料扱いしていた事から、少女はやはりゴジラの近縁種なのか天敵たるシノムラとメガギラスを狙って駆ける。が、メガギラスは高速で背後に移動する。少女は振り返り再び迫るがメガギラスの速度に追いつけない。

どうやら先程のメッシュからの光線は地表を滑るように飛んでいく相手には放たないらしい。あくまでも対空武器なのだろう。

「メガギラスーそのまま翻弄してろ！」

レッドキングはメガギラスに気を取られ何度も振り返っている少女に向かって拳を振るう。力では此方が上だ。まともに入れば決まる——ハズだった。

「ぐうう……………」

「な!？」

少女はレッドキングの手首を掴み拳を止めていた。それだけではない、押そうが引こうが全く動かない。先程まで力勝負で勝っていた相手に、今度は力勝負で負けた。

少女は先程の仕返しとばかりにレッドキングを投げ飛ばす。幸いゼットンがバリアをクッションにしてくれたが。

「—————！」

「ひっ—！」

ギン！と睨まれ慌てて距離を取ろうとするメガギラス。次の瞬間少女が吼え、メッシュどころか全身から大量の光線が放たれた。

「—————!？」

ゼットンが慌てて少女をバリアの中に閉じ込める。熱線はバリアを通過出来ず少女はバリアを何度も殴り始めたが壊れる様子は無い。「……………こう言う勝ち方は好きじゃないけど、酸素を遮断して気絶させる」

「お前らしくない勝ち方だけど、その方が良いかもな……………」

と、ゼットンがこのまま拘束を継続しようとする中、少女の赤い髪が紫色に発光する。また光線を撃つ気なのだろう。しかし、何か違っ

た。

紫色の光は髪の毛の端から徐々に消えていき代わりに口内の光が段々と増していく。そして

「……………え？」

ピュイイイイツ!!という笛の音の様な音が響きバリアが貫かれ、ゼットンに向かって光線が伸びる。

「……………熱」

そしてその光線はゴジラの片手で受け止められた。

「ゴジラ!？」

「よおゼットン……………レッドキング……………」

ゴジラはゼットンに目を向け、シノムラとメガギラスを通過しレッドキングを見て笑う。

「同族が迷惑掛けたな」

「おい無視すんな。私らはどうした……………」

「……………同意」

「あん？」

「すいませんでした」

ついこの間本人に迷惑を掛けて於て凶々しくも謝罪を要求した二人はギロリと睨まれ黙り込む。

「まあ冗談だ。悪かったな……………」

「……………気持ち悪い」

「後でぶち殺す」

ゴジラはそう言うのと少女を見る。

「…………………………？」

ゴジラに見られた少女もまた、ゴジラを見返して不思議そうに首を傾げていた。

自分の手や身体を見て、それからまたゴジラを見る。

「…………………………」

「お、おい！不用意に近付くなー！」

「!?がるるるー！」

ゴジラが近付こうとすると少女の赤いメツシュが発光し始める。

威嚇であり攻撃準備。

しかしゴジラは歩みを止めず近付いていく。少女が熱線を放とうと息を吸う様な動作をした瞬間、ゴジラは少女を抱き締めた。

「……………うあ？」

「よしよし。大丈夫だ……………そうだよな、右も左も解んねー、自分が何者なのかも解んねー。怖いよな？俺だってそうだった。いきなり姿が変わって、何が起きたのかさっぱりで、仲間は一人も居なくなってる……………怖かったさ。でも、安心しろ、俺は敵じゃない」

頭を撫でられる度に、口内に灯る光が弱々しくなっていく。

「お前は生まれたばかりだもんな？攻撃されたら、敵としか判断出来ないだろ……………けど、レッドキングもゼットンも敵じゃない。だからもう、暴れるのは無しだ。良いな？」

「……………」

少女は目を細め口内の光を完全に消し去る。そのまま全身の力も抜きゴジラの肩に顎を寄せ寄り掛かるとゴジラにされた様に抱き締める。

「よし、いい子だ」

「……………♪」

姉妹？・怪獣王!？」

少女はゴジラの背に乗り頭に顎を乗せ満足そうにふんふん鼻を鳴らしている。

「……その子が新しいゴジゴジの妹さんですか？大きいですね〜」

「いや、どちらかと言うと娘だ」

と、ゴジラは手を伸ばし少女の頭を撫でてやる。それを羨ましそうに見るのはビオランテとリトル。

「娘？前世のゴジゴジにはリトルン以外にも娘さんが？」

「いや、この世界で生まれた娘だ」

「……………はい？」

この世界で生まれた娘？とピグモンはゴジラの頭の上でスースー寝息を立てる少女を見る。どう見ても十代中盤……ゴジラが仮に10歳から精通していたとしても6歳ぐらいのはず。

「ゴジゴジいったい何歳で初体験を……………!？」

「ちげえよ……ほら、以前俺が分裂したって言ったろ？多分その時回収し損ねた細胞が霸王モードの俺のエネルギーとキングギドラのエネルギーを取り込んで細胞活動を再開したんだろうな……………で、そのまま細胞分裂して、こうなった」

「……………成る程。本当に滅茶苦茶ですねゴジゴジの細胞…………」

ゴジラは起こさない様にそつと少女から離れると少女は立ったまま睡眠を続ける。

「けど兄様、何故少女の姿を？」

「知るか」

「……まあ、そもそもカイジュースウルを持つ者がどうしてゴジゴジという例外を除いて全て女性なのかも解ってませんしね。ゴジゴジの細胞が、怪獣娘として正しい形で身体を形成したのかもしれないね〜」

「て言うかコイツ、怪獣娘って括りで良いのか？カイジュースウル持った人間じゃなくて、怪獣細胞から生まれた怪獣そのものだろ？怪人？」

レッドキングの言葉に少女へと視線が集まる。

確かにそうだ。怪獣娘と言うのは、人間がカイジューソウルを持つた存在。人間なのだから、道徳や倫理を持つ。

しかし彼女は産まれたばかりの赤子。見た目こそ少女でも、その力こそ強力で、道徳も倫理も持ち合わせず本能のまま行動する姿は正しく怪獣だ。

こんな穏やかな寝息を立てて居ても、その事実が消えるわけではない。

「つて寝てる!？」

「しー！静かに、起きるだろ」

レッドキングが立ったまま、すやすや眠る少女に思わず叫ぶとゴジラが口に指を当てて非難する。

「まあ言いたい事は解る。此奴にや確かに常識も何もねえ……でもな、此奴あ俺の子だ。道徳も、倫理も、常識も……楽しい事だって、これから俺が教える。だから頼む、此奴を隔離とか、そう言うのはしないでくれ……」

と、ゴジラが頭を下げるとピグモンははあ、と溜め息を吐く。

「そんな事しないのですよ。その子も私達の仲間ですからね……上の連中がなんて言ってくるか……何分珍しい事例ですからね。人権を与えない可能性も……」

「よし、ちよつと殺してくる」

「大丈夫なのですよゴジゴジ。時代は今や情報戦の時代、知られたくない情報を知られた時点で向こうに勝ち目なんて有りませんから」
ピグモンは指に幾つものUSBメモリを構えてニコニコ笑う。メモリの中身が何なのか、詳しく聞かない方が精神衛生上良いと判断したゴジラは何も聞かない事にした。

「良かったなりトル、妹が出来たぞ」

「……………妹?」

「生後0年だからな。妹だろ……」

「じゃあ、わたしおねーちゃん?」

「そうなるな」

「!?おねーちゃん!?やったー!」

リトルはピヨンピヨンと少女の周りを跳ね回る。妹が出来たのが相当嬉しいらしい。前世では兄弟など産まれる筈も無かったのだからだろうか?

「ところでその子の名前はとうするんですか?」

「……そうだな、リトル……お前がつけてみるか?」

「うん!」

リトルは元気良く返事し少女を眺める。

名前……ビオランテなら北欧の植物の精霊、スペースゴジラはまんま宇宙で産まれたから、オルガはゴジラの細胞に含まれるゴジラ以外の生物が決して扱う事の出来ないオルガナイザーG1を取り込んだから……しかしこの少女はゴジラの細胞から分かれたゴジラのクローン。

多少進化の過程で違う所は有るだろうが新しいゴジラと言っても過言では無いだろう。

「ねーパパ、新しいって他の言い方ある?」

「ん?んー……新しんとかかな……」

「じゃあシン・ゴジラで!」

「……」

「……」

安直なネーミングに固まる一同。しかしリトルはえへんと胸を張る。

「………う?」

「あ、シンちゃん起きたの?」

リトルは笑顔で少女に近付き手を取る。少女も少女で同族の気配を持つ幼女をジツと眺める。

「私はねー、リトル・ゴジラ。でね、アナタは私の妹でシン・ゴジラ何だよ!」

「……い、おる……イン?」

少女はリトルと自分をそれぞれ指で指差しながら首を傾げる。

「そうだよ!」

リトルが満面の笑みで応える。少女は何度も同じ言葉を繰り返す。

「……………イン……………よお、しふ……………おええたん」

「よろしく。でね、こっちがパパ……………」

「……………」

「パパ」

と、少女はゴジラに抱き付く。リトルもゴジラに抱き付いて来た。

ゴジラは二人の頭を撫でてやる。

「仲良くなれて何よりだ……………」

「ん……………イン、おええたん……………あかよひ……………」

「仲良し！」

名前はどうかやらシン・ゴジラに決定してしまったようだ。まあ本人が喜んでいるのだ、それで良いだろう。

家族？・怪獣王!?

「かー……かー……」

「んん……」

「んみゆ……」

「……………ふあ」

リトルの要求の元、ゴジラと同室のラドンは毎朝この部屋で誰よりも早く起きる。

下の段でゴジラと共に寝るリトルとシン・ゴジラを見て微笑むと起こさないように音を立てず降り、冷蔵庫の中身を確認する。

「……………鮭か……………塩焼きで良いか」

冷蔵庫の中に有った鮭を人数分取り出し焼き始めるラドン。焼いている間、豆腐を切り鍋に入れていく。

GIRLSには食堂が有るが、寮の部屋にキッチンも完備されている。ラドンは元々一人暮らしなので作る事の方が多い。

「……………う〜」

「ママ〜、ご飯〜?」

と、そこへ寝ぼけ眼の子供二人が起きてくる。

「ああ。パパを起こして来てくれるか?」

「うー!」

「うん!」

と、二人はベッドに眠るゴジラの下に駆ける。

「パパー! あ〜さ〜!」

「あ〜しや〜?」

リトルがユサユサ揺すりシン・ゴジラはリトルの真似をしてゴジラを揺する。

「……………後五時間」

と、ゴジラは布団を深く被ってしまふ。リトルはムー!と頬を膨らませると掛け布団を引っ剥がす。

「……………うう……………」

「……………おいて……………パパ、おいて……………」

シン・ゴジラが揺すりリトルがカーテンを開ける。日光が部屋の中を満たしゴジラは眉根を寄せて起き上がる。

「ご飯！」

「ごあん……………」

「ああ、解った解った……………起きた起きた」

と、ゴジラがのそのそ起き上がりながらリビングに向かう。目を閉じたまま……………。

「……………」

「やーめーろー……………」

シン・ゴジラが頬を引つ張りゴジラが寝惚けたまま手を払う。と、そこへラドンが朝食を持ってきた。

「いただきます」

「いただきます」

「……………いただきます」

「……………」

ゴジラ達の言葉にシン・ゴジラが首を傾げるとゴジラがああ、と目を開けながら口を開く。

「植物にしる動物にしる、元は命だからな。命をいただくって意味でいただきますって有るんだ……………」

「……………」

「ん？まあそうだな。実際感謝してる奴はそうそう居ないだろうが」

「……………」

「まあそう言うなって……………ほら、今回はラドンが作ってくれたろ？ラドンに対してお礼を言ってやれよ」

「……………いらきます……………」

と、シン・ゴジラは両手を合わせて舌つ足らずな言葉でいただきますと言ったのだった。

「……………ん？どうした、ラドン……………」

「……………何て言っているのか、解るのか？」

「?まあな……」

何でそんな事を?と言いたげなゴジラを見て、親子なんだなあ、と感心した。

ちなみに箸を持てなかったのでゴジラが食べさせてやった。

「はい、あーん……」

「あー……」

シン・ゴジラは口をと大きく開けペガッサがライトで中を照らす。

「………声帯があんまり発達してませんね。このままでは喋れる様になるにはそこそこの日数が必要かと……」

「まあ喋れない事が直接的な死因にはならないからな。その辺は発達しなかつたんだろ」

「あくまで使われていなかったから衰えた、程度です。キチンと喋れる様になりますよ」

「う……?」

ペガッサが頭を撫でるとシン・ゴジラは首を傾げる。

「ところでこの人はどこの子ですか?」

「俺の子だ。リトルと違って、この世界で生まれたな。まだ0歳だから優しくしてくれよ?」

「………え、子供?ゴジラさんの……この世界の?で、でも年齢が……あれ、0歳?」

「俺から分裂した子だ……」

「分裂って……ゴジラさんの細胞本当に凄いですね………0歳?」

ペガッサは自分とは対照的なシン・ゴジラの一部を見て、自分の控えめな部分を見比べる。

「……あの、ちよつと立ってもらえます?」

「うっ」

シン・ゴジラが立ち上がると170センチを越えるスラリとした長身でペガッサを見下ろす。ペガッサも立ち上がるが擬音を付けるならチョーンだろうか。

「……」

髪だつてサラサラだ。何と言うか、女らしさで完璧に負けていた。
0歳児に……………」

「……………」

「お、おいペガツサ……………」どうした、急に床に手を突いて」

「……………」そう言えば、デストロイアさんもスペースゴジラさんもオルガ
さんもビオランテさんも……………」

「お、おーい、聞いてるか？」

「この人達みーんなゴジラさんの細胞を取り込んだはず……………」ゴジラさ
ん！」

「お、おう……………」

「貴方の細胞を分けてください！」

「え、ま、まあ……………」良いけど……………」気を付けないと危ないぞ」

「その辺は安心してください。仮にも研究者です。危険が無いと判断
出来るまで使用はしませんから」

「なら安心だな」

昼飯はレストランで取る事にしたゴジラ達。

リトルはお子様ランチ。ゴジラとシン・ゴジラ。ラドンは日替わり
定食だ。

「……………」あ……………」

シン・ゴジラは鉄板に触れるのも気にせず片手で肉を押さえ片手で
引っ張り、千切つて食べる。

「……………」あらシン、口も手も汚れてるぞ……………」ん？」

ゴジラはシン・ゴジラの口元を拭いてやると不意に振り向く。そこ
にはスマホを向けて笑みを浮かべる若者達が。

「ぷっ。見ろよあの女、ガキかよ」

「ガキ以下だろあれ……………」撮れ撮れ」

「おい……………」

シャッターを押した瞬間レンズの前に手が現れ真っ暗な写真が撮
られ、スマホが持ち上げられる。

「俺の娘が可愛くてつい撮っちゃまいたくなるのは解るけどよお……肖像権とか有る時代で、何ネットの晒し者にしようとしてんだ殺すぞてめえ……」

バキン！とスマホが粉々に砕ける。

「……………」

「おっと、悪かったな。弁償する、いくらだ？」

「い、いえ……お気遣いなく……あの………すいませんでした」

「その飲み方好きなのか？」

「う……」

ゴジラがちよっくら無礼な若者共に説教をしに席を立った間にドリンクバーでジュースを取りに行った三人。シン・ゴジラは複数のストローを使ってイチゴミルクを飲んでいた。

風聞？・怪獣王!?

バトラはコーラを飲みながら暇そうに空を見上げていた。

普段一緒に居るモスラは『同じ守護神として、貴女を鍛えます!』とキングシーサーと共に鍛錬に行ってしまった。

「……………ん?」

暇になったなと公園を歩いていると芝生に見知った顔を見付ける。
ゴジラだ。

その背後にはリトルと……背の高い女が居る。二人は本を読んでいるゴジラのユラユラ揺れている尻尾に合わせて右に傾いたり左に傾いたりと同じ様にユラユラ揺れている。

「うあ」

「むぎゅ!」

「あ、倒れた」

それも倒れた向きのせいで背の高い女がリトルを押し潰す感じに。

「二人共、大丈夫か?」

「へーき!」

「へいい……………」

と、ゴジラが倒れた二人を心配して振り返る。その時、バトラとも目が合った。

「お、ようバトラ」

「……………あれ?」

発音的に、多分『誰?』と言ったのだろう、随分と舌つ足らずな……………。

「バトラだ。バトラ、コイツはシン・ゴジラ。俺の新しい娘だ……………こんな姿だがまだ0歳でな、優しく接してくれ」

「0歳だあ?」

ゴジラから大体の事情を聞いたバトラは本当に滅茶苦茶な奴だと呆れ返る。

細胞の欠片から新たな命が産まれるってどんだけだ。そう言えば最近セルヴアムとか言う使い魔みたいなのも出してた。

「しかし0歳ねえ……………ふむ……………」

「……………!?!」

ムニユリとバトラの指がシン・ゴジラの胸に食い込む。そして次に自分の小さくはなく、しかし大きいとも言えない胸を見る。

「……………まあ胸の大きさを気にするなんて人間のする事だ、うん……………」

「胸?ああ、胸か……………まあデカイ方が後々産まれる子供の為にも良さそうだが……………ん?大ききさって関係あったか?まあ良いか……………:子供?」

と、ゴジラは顎に手を当てる。

「子供って事はつまりあれだよな?相手が居る……………結婚するって事だ。いやいや、何を今更……………シンもリトルも何時かは結婚するんだそりゃそうだ……………結婚……………」

何時かはリトルもシンも相手を見付け、結ばれるのだろう。しかし相手は、必ず人間だ。怪獣娘で男はゴジラしか居ない。

どんな男が二人の下に現れるのだろうか?

「シンもリトルも天使だし相手は向こうから腐肉に群がる蠅の如く寄って来るだろうし……………」

「おい、その例えだとお前の娘達は腐肉だぞ……………」

「いや待て、つまり見掛けで選んでるって事じゃねーか……………ふさげんな」

「聞いてねーし」

「よし、まずは二人の何処を好きになったか聞こう。まず最初に可愛い所とか当たり前の事を言う奴も居るだろうがやっぱり中身を最初に口に出来る奴じゃねーとな……………」

「……………駄目だ此奴。まあ、確かに見た目で寄られるのはなあ……………いや……………なあゴジラ、別に見た目を気にする奴なんて居ないんじゃないか?」

「あ?」

バトラの言葉にゴジラは漸く顔を上げた。

「モスラって身内の鼻頂目に見ても美少女だろ？でもよ、彼奴……中
学ぐらいの頃偽善ちゃんなんて呼ばれて虐められてたんだ。ま、アタ
シが黙らせたけどな……」

「……………」

「モスラはよお、あんな性格だから、誰にだって手を貸す。好意的に受
け取る奴も居れば、悪意を以て受け止める奴も居る。んで悪意っての
は感染し易い。悪者になりたくなくても、悪者を作りたがるのが人間
だからな……何時の間にかモスラは媚びを売りまくる売女扱いだ。
何人か病院送りにしてやった」

その時の事を思い出したのかケケケと笑ったバトラはしかし直ぐ
につまらなそうな顔をする。

「なあ、人間って守る価値あのかね？人間になって……そりや良い
奴が居るのも知った。けど不思議な事によ、悪意を持つてる奴等の方
が群れ易い、群ればそれだけ力を持つ……絶滅させなくても、せめ
て文明ぐらいは破壊した方が良いんじゃないかって、何度も思っ
てんだよ」

「それを人間を好ましく思っなくなって、しかも最近前世の記憶と混じ
り始めた俺に聞くか？」

「……………だな」

家族の時間を邪魔したな、と立ち上がるバトラ。リトルが手を振っ
てきてシン・ゴジラも真似をしたのを見て、片手を振るとその場から
去った。

「あ、てめえー！」

「あん？おお、噂をすれば何とやら……名前忘れたけど同級生の皆
じゃねーか。元気してたか？病院生活は楽しかったか？」

自販機で何か適当なジュースを買おうとしていると聞き覚えの有
る声に振り返る。そこには数人の男女がいた。かつてモスラの善意
に泥を塗り嘲り、貶めた連中だ。

「何でてめえがここに……」

「ここは公共の場だぜ？アタシが居て何が悪い。むしろ、公共の場でゴミを捨てるてめえ等こそ何でここにいんだ？その癖治ったのか？」
敵意を向けられても挑発を返すバトラ。一同が憎々しげに顔を歪める、しかし何かに気付いたように厭らしい笑みを浮かべる。

「そう言やお前等姉妹、化け物だったんだってな……何だっけ、怪獣娘？」

「それが？」

「怪獣娘ってのはおっそろしいよなあ……何もしてない俺らに平気で暴力振るうんだからよ」「……………ああ？」

「おっと落ち着けよ……………こう言う噂が広がり易いってのはお前が良く知ってるだろ？で、お前だけ地獄に落とすと思ってるの？」

「……………ッ!？」

その言葉にバトラが固まる。

怪獣娘を良く思っていない者は居る。それは事実だ。リトルの様に、怪獣娘と言うだけで血の繋がった両親から突き放された例だって有る。

人より強い力を持った者を人が畏れ、敵視するのは珍しい事ではない。

もし此奴等に手を出し噂を流されればそう言う連中が拳つて騒ぎ出す。その標的は自分だけじゃなく、他の怪獣娘にも、モスラにだって向くかもしれない。

「……………へ、へ……………」

バトラが固まったのを見て男は更に厭らしい笑みを浮かべた。

「なあ俺らがさあ、中学での噂流したらやばいって解るよなあ？流されたくないなら、解るよな？」

「……………ッ!?!層共が……………」

ああ、本当に苛立たしい。何で良い人間より、こういった層の方が頭が回る。

やはり人間なんて滅ぼした方が良いのかもしれない。良い人間だけ残して、こういう連中は……………。

でも、それをやったら昔以上に人間と関わったモスラを泣かせるの

だろう。説得出来たとしても、人間が大好きな彼女から、人間を突き放す事になるのだろう。間違いなく、泣く。それは、イヤだな……………。

「おい、自販機使えねーだろ。どけ…………」

「…………へ？ぶあ!?!」

ゴシヤア!とバトラに向けて手を伸ばした男の後頭部が掴まれ自販機に押し付けられる。

自販機は無事だが、自販機より丈夫でない男は大変そうだ。鼻血を流して気絶している。

「な、何よアンタ!?!」

「んだてめえ!その化け物の仲間か!?!」

「……………化け物?ああ、怪獣娘の事か……………化け物、ねえ」

ゴジラはニイ、と笑うと襟を掴んできた男の腕を掴み握り締める。

「化け物が風聞なんて気にすると思うか?周りがピーチクパーチク喚いて、黙って俯くと思ってるのかよ、なあ?」

「え?あ……………あれ?」

ズツとその場の空気をゴジラが支配する。群れて行動し、自分達が上だと思っていた其奴等は面白いほど狼狽える。

「周りがうるさきや黙らせりゃいい。俺達にやあそれだけの力が有るんだからよお……………なあ?」

「……………ま、確かにな。けど一々相手にするのも面倒だ。噂を流す奴、ぶち殺せば早くね?」

「それもそうだな。で、お前等は流したりすんのか?」

「し、しません!絶対に!」

「ご、ごめんなさい!」

「あ、おい!」

ゴジラに腕を掴まれている男以外は一目散に逃げ出す。鼻血を流していた男も鼻を押さえて逃げて行った。

「で、お前は?」

「し、しません…………」

「そりゃ良かった」

ゴジラが手を放してやるとその男もヒイヒイ呻きながら逃げ出していった。

「やり返してやりや良いんだよあんな手合い。ちよつと脅せば実行する度胸があつさり失せるんだから」

「……………」

「なんだ不安か？安心しろ、丁度そこに監視カメラ有るし、後でオルガにでも編集させて少女を脅す男女のグループとしてネットに晒してやる。信用は0になるだろうさ」

「……………」

「聞いてんのか？」

「……………助かった」

「そりやお前女だしな。守ってやるのが男の仕事だろ……その辺考える辺りは人間も評価出来るな。ほれ……」

と、ゴジラは自販機から蜂蜜ジュースを買ってバトラに渡す。

「けど、別に放って置いてくれたって……」

「そう言うわけにもいかねーだろ。あの男、明らかにお前の事、性的に見てたし。何もしてこないお前に何するか……お前は美人の部類に入るんだし、少しは気を付けろよ」

「……………」

「無視かよ……」

ゴジラは黙って立ち去るバトラに溜め息を吐きながらコーラを三つほど買う。

「核燃料どつかの自販機に売ってないもんかねえ……………」

「あ、お帰りなさい」

同室のモスラは先に帰ってきて居たようだ。バトラは何も応えず脱衣場に入ると扉を閉め、扉に寄り掛かりズルズルと腰を落とす。

——そりやお前女だしな。守ってやるのが男の仕事だろ——

——お前は美人の部類に入るんだし——

「……………」

普段なら別段気にしない様な言葉が、耳から離れない。顔が熱い。自販機の冷蔵機能によって冷やされた缶を額に押し当てても、その熱が引く事は無かった。

料理？・怪獣蛾！?

「……………」

何だか最近バトラの様子が可笑しい。

モスラは鍛錬相手のキングシーサーを押しえ付けながら見学に来ていたバトラを見る。心ここに在らずと言った様子だ。

モスラは最近のバトラの様子を振り返る。

「うぎぎぎ……も、もう……放し……………」

確かただいまも言わずに脱衣場に入り、しかし身体を洗った様子もなく出てきた日から時折こうなる。あの日から変わった事と言えばゴジラを見掛けると目で追ったり、その癖ゴジラと目が合うと慌てて逸らしたり……

「まさか、恋?！」

「ぎゃあああ!?ボクツていったー!肩が、わんの肩がー!」

「あ、ごめんなさい!」

ハツとした瞬間つい力が入りキングシーサーの肩の関節が外れる。慌てて入れ治したモスラだったが骨格はプラモデルではないのだ、新たな激痛にキングシーサーは再び叫んだ。

「それにしてもまさかバトちゃんが……」

しかも相手はゴジラ。

考え方によつては、前世の恨み辛みを完全に払拭出来たのだろう。それは喜ぶべき事だ。

「これは是非お姉ちゃんとして応援しなければ!」

と言うわけでまずは好みの女性について聞いてみよう。まずはビオランテから尋ねる事にした。

「兄さんの好みのタイプ?知らないわ……でも、最近私に対するご褒美がどんどん凄くなってるの……兄さんは間違いなくSよ……M

の私と、引かれ合う運命なの」

「何馬鹿な事言ってるんだ殺すぞお前」

「あん！」

と、偶々その場を通り掛かったゴジラに蹴り飛ばされ嬌声を上げるビオランテ。

「んで、良く聞こえなかったが何が有って俺の性癖について語ってたんだ？」

「兄さん、聞くなら私に聞いて？私は兄さんに関連する話なら一言一句漏らさず記憶出来るわ」

「てめーはその気持ち悪い記憶方法を何とか出来ねーのかよ。混じり物とは言えG細胞無駄遣いしてんじゃねー」

ゴジラが言えた話ではない気がするが、ゴジラとビオランテでは純G細胞と混G細胞の為、進化の速度が違う。記憶力アップの為にG細胞の進化を使うのは、確かにゴジラよりは無駄だろう。

「ああん！兄さん！もっと私を見下して！罵って!!」

はあはあと荒い吐息を零すビオランテにゴジラは引きつりその場から立ち去った。

「……後はそうね、兄さんの日常生活なら兄さん観察日記に10分置きに記入してるから今度そのコピー上げるわ」

「え、あ、ありがとうございます……」

モスラは取り敢えずゴジラの日頃の行いが知れると言う事でお礼を言っておく。しかし、SとかMとは何なのだろうか？

ビオランテの話は良く解らなかったので次はスペースゴジラに聞いてみる事にした。

「アニキの？ああ、そう言やオレがアニキに初めて会った時……あ、前世な？確かそこに女が居たな。人間の……そいつだけはアニキに敵意を持ってた訳じゃなさそうだったし、何かあんのかもな」

気になったのでゴジラに直接聞いてみる事にした。

「ああ、未希か……懐かしい。そうだな、確かに彼奴は好ましい人間

だった……」

と、懐かしむ様に笑うゴジラ。ゴジラが前世の事で、しかも人間を好ましいと呼ぶなんて。

「リトルも覚えてるだろ？」

「うん！もう一人のママと一緒に遊んでくれた人ー！」

と、ゴジラの膝の上に座るリトルが笑顔で応える。床を這いながらゴジラの背中を上り頭の上に顎を乗せたシン・ゴジラだけは話に付いていけない為に不機嫌そうだ。

「所謂超能力者だ……彼奴は敵対したりもしたが、俺を化け物じゃなく一匹の生物として見てくれた。ま、人間にしちや良い奴だったな……」

「う？」

「ん？いや、この世界には居ないから会えないな」

「う〜……」

「会いたって？気持ち分かるがな……」

シン・ゴジラと普通に会話を成立させているゴジラを見て、モスラはシン・ゴジラに視線を向ける。

「その子が噂のゴジラの新しい子供ですか？大きいですね……」

産まれたばかりとは思えない長身。膝を曲げている為、分かり難いので全身をよく見ているとゴジラの背で潰れた、たわわな果実を二つ見付ける。

「……お、大きいですね」

「？何故二度も言う……」

「ま、まあゴジラの好みは何となく解りました。この後空いてますか？今日はバトちゃんが仕事なので、夕飯私一人だけになって少し寂しいのですが……」

「ああ、ウチもラドンが仕事でな……お言葉に甘えさせてもらおう」

何故かバトラにキッチンに立たせてもらえずバトラの手料理ばかりだったので自分で料理を作るのは久し振りだ。

「えっと……砂糖を適量……適量？これぐらいですかね……」

「……」
「ちよつと酸味が足りないような……ええっと、確かこの前買った濃塩酸と濃硝酸がここに……」

「……」

「？青い……これ何の肉でしたっけ？まあ腐臭はしませんし食べれま
すよね」

「だ、大丈夫だ。俺にはG細胞と言う特殊細胞が有る。例えどんな料理が出て耐えられるはずだ……いざと成れば俺一人で……」

モスラの調理（？）風景を見て戦慄するゴジラ。そして、料理が運ばれてくる。

「さ、頂きましょう。時間が経つと逃げてしまいます」

早すぎた巨神の兵の様な見た目の料理は気のせいか時折ピクピク動いている。と言うか今確実に逃げると言わなかっただろうか？

「……」

「？」

不思議そうに首を傾げながらも悪意の無い満面の笑みを浮かべるモスラ。ちなみにシン・ゴジラは料理（？）に向かって思いつ切り威嚇していた。

「ええい、ままよー！」

「ただいま。今日は夕飯を用意出来なくて悪かった。何を食べたんだ？」

「放射線を放つ謎物質……味は、良くも悪くもない」

「……」

体調不良？・怪獣王!?

「……………ん、うう……………あ、暑い……………」

ミクラスは寝苦しさから目を覚ます。カーテンを開けて外を見ればまだ空が白くなり始めた時間だ。

暖房を見る。温度設定は省エネの20度。

暖房を止め窓を開ける。暑い。

「何で!?!今冬だよね!」

「ミクさん静かに……………う、暑い……………?え?」

「あ、暑い……………」

同室のウインダムが目を覚ましアギラも寝苦しそうにはあはあと頬を上気させ短い呼吸を繰り返す。

「えー、皆さん。この謎の温暖化の正体が解りました」

会議室にGIRLS中の怪獣娘達が殆ど集合しピグモンの言葉を待つ。

「ゴジゴジ、リトルン、シンちゃんが体調を崩して高熱を出したからです。現在厨房の冷凍室をフルで動かしていますが下がる兆しはありません。部屋の中もとても熱いので、変身せずに近付かないようお願いいたしますね」

「……………はい?」

「ですから、この異常な気温は全部ゴジゴジ達の熱なんですよ」

「……………えええええええ!」

「し、診察終わりました……………」

耐熱スーツを脱いだペガッサはパタパタと手で扇ぐ。暑い。スーツに冷却装置をつけておいたのに蒸し焼きになるかと思った。

「取り敢えずG細胞のみに感染するウイルスや、G細胞で変異してしまったウイルスとかではなさそうです。感染の心配はありません」

「それは何よりです」

と、安堵するピグモン。ウイルスは細胞に入り込み遺伝子を読み取り変異するモノもある。ゴジラ達が纏めて体調不良になった原因が、もしG細胞によって変異したG型ウイルスとでも名付けるようなウイルスだったらと思うと肝が冷えた。

「ゴジゴジ達の意識は？」

「……………それは、まだ」

と、首を横に振るペガッサ。どうやらゴジラ達は目を覚まさないらしい。

「だ、大丈夫なのゴジラ…………」

「大丈夫、とはとても言えませんね……………時折『きよ、巨神兵が…………』と魘されていて、悪夢も見ている様です」

「……………看病、手伝う？」

と、ゼットンが挙手した。一兆度の火炎を放てるゼットンは耐熱にはそこそこの自信がある。

「そうですね……………是非。このままだと地球が滅びてしまいますし」

「……………ペガちゃん、今、何と？」

「言葉通りの意味です。このままゴジラさんの体温が上昇していけば、やがて大地が溶け蒸気になり摂氏4000度の熱風が地球を包み込み、木々は燃え、海は干上がっていき、ゴジラさんの熱がそれでも上がっていけばいずれ地球の核に到達して…………」

「つて、そんな事になったらゴジラ死んじゃうじゃん！私達もだけど！」

「いえ、ほら。ゴジラさんにはバーニングモード……………でしたっけ？が有りますから。熱に対する耐性はシンちゃんやリトルちゃんより高いです。研究中のG細胞の適応速度から考えるに、ゴジラが死ぬ体温は宇宙全ての物質がプラズマ化した辺りですかね」

つまり地球どころか宇宙が危ない。

「ち、治療方法は!？」

「ゴジラさん達のG細胞は自分自身が発する熱すらエネルギーに変え

活発化しますから、冷やすしか。ある程度冷えれば余分な熱放出は止まり細胞自体が治癒を始めるはずです」

「直ぐにペギペギとその他氷結系能力持ちの怪獣娘の手配をします！」

と、ピグモンは慌てて会議室から出て行った。

「あ、熱いのです……もう、だめなのです……」

パタリとペギラが倒れた。冷凍光線を幾ら吐いても時間稼ぎにしかならず、エネルギー不足と溶けた氷が蒸発して発生した湿気にととう倒れた。他の怪獣娘達も次々倒れていく。

「冷凍庫の冷凍装置を出来る限り改良しました。もうこれに賭けるしかありません……」

ペガツサの言葉にピグモンは祈る様に腕を組む。今のところ被害は外に出していないがそれも時間の問題だろう。どうかこれでうまく言ってくれますように、と、もう祈るしか出来なかった。

バトラとモスラはいざという時の為、ゴジラを消し去る覚悟を決める。

「ね、ねえ……そう言えばシノムラとMUTOとか、メガギラスは？その子達にエネルギーを吸い取ってもらえば……」

「シノちゃんもムーちゃん達もエネルギーではなく正確には放射能を吸い込むのですよ。それと、メガギラスちゃんはシンちゃんの防衛本能が働いたのか放熱部から炎が吹き出してきて黒こげに……」

「……………じゃあ、スイッチ、オン！」

と、ペガツサは改良冷凍装置のスイッチを入れた。

熱い、身体が中から溶けていくみたいだ。しかも溶けた部分を治そうとする様な感覚が気持ち悪い。

腹の中で昨日食った巨神兵が暴れている様な気がする。

「……………」

額に何かが触れる。今の体温でなら例えどんなモノが触れようと冷たく感じるが、そもそも何が触れているのだろうか？

目を開けようとするがうつすらしか開かず、ボヤけた人影が見えた。銀色の髪を伸ばした、女。頬には涙の後の様にも見える赤いラインが入っている。

「…………お、まえ…………」

「ああ、起こしてしまっただか？すまない…………」

女はそう言って笑った…………様な気がした。女はゴジラの頭を慈しむ様に、優しく撫でる。

「何、安心しろ。直ぐ終わる……………」

女がそう言うと、青い光が見えた。その光が一際強く輝く前に、ゴジラの意識は再び闇に沈んだ。

「……………………ペガちゃん、やりすぎじゃあ」

「いえ、ここまでのモノになるなんて……………」

ペガツサとピグモンは内側に挟れた冷凍庫の壁を見て眩く。どうやら中の空気がすべてが液体化して、真空となり更に冷えて脆くなった壁が圧力差で壊れたようだ。

「って、ゴジゴジは!？」

「ご、ゴジラさん!」

二人はハツとして氷を発掘しようとした瞬間、氷が内側から弾け飛んだ。

「……………よし、治った。リトル、シン、冬眠してないで起きろ」

「んみゆ…………」

「あれ、大地の怒りは?」

と、寝惚けた様子でゴジラの開けた穴から出て来るリトルとシン・ゴジラ。どうやら熱が下がり体内の機能を正常に戻せたようだ。

「すまんピグモン、ペガツサ。こいつら預かっててくれ。俺はちよつくら野暮用が出来た」

「え、あ……は、はい………」

ゴジラはそう言いつとその場から去っていった。

恋人？ 怪獣王!?

「ゴジゴジ、私の恋人になってください」
「……………」

ピグモンの言葉にゴジラは顎に手を当てふむ、とピグモンの額に手を当てる。

「……………熱はないみたいだが、とりあえず病院に」

「面白がつて理由を説明しなかった私も悪いと思いますがそんな反応されると流石に傷付きますね」

何で小説の女達はこんな対応をされても平然としているのだろうか、と今まで読んできた小説の登場キャラを思い出しながら先程の唐突な発言の理由を説明する。

「見合い、ねえ……………そんなの今時あるんだな」

「両親が私を心配してくれるのは解っているんですけどねえ……………ほら、GIRLSってあんまり出会いがないし……………」

GIRLSにも男性職員は居ることには居るが、怪獣娘の生態に興味持つ研究者が殆どだ。

それに、金山シンヤという男が部下と共にシャドウビーストに向かい大怪我をした日から普通の人間はあまり寄り付かなくなった。

「人間じゃ倒しようがないシャドウの、しかも怪獣娘すら場合によっては危ない相手に挑むとかその金山って男は馬鹿なのか？足を引つ張るだけじゃねーか」

「そう言わないであげてください。シャドウビーストに会うまでは上手く行つてたんですよ」

「相手が弱いからだろう？だから足手纏いも守れた」

「足手纏いつて……………」

「シャドウと戦えないなら足手纏いだろ？突っ立ってるだけ……………指示だつて複数の敵を相手にすんなら邪魔なだけだしな」

「それは……………」

ゴジラの言葉に何も言い返せないピグモン。確かに人間がシャド

ウに何をしようとシャドウにダメージを与えられるわけではない。逆にシャドウは人間にダメージを与えられる。人間がシャドウの前に立つなど自殺行為だ。

「まあそんな奴はどうでもいい。俺はどんな設定でお前の彼氏になれればいいんだハニー？」

ケラケラと笑いながらからかってくるゴジラ。ピグモンはしかし大人の女性だ。ムツとする事も焦る事もない。

「告白は私からして、最初は友達から始めたって事にしてますよダーリン♪」

「……………」

「ふふ。まだまだ子供ですねぇ…………」

あつさり返され不機嫌そうな顔をするゴジラを見て子供らしいと笑うピグモン。その笑みが大人が子供に向ける、微笑ましい者を見る笑みだと気付いたゴジラの機嫌は更に悪くなりピグモンが更に笑いゴジラが更に……………

タクシーの運転手は、ゴジラの怒気に当てられガタガタ震えていた。

「何だ、意外と普通の家だな。てつきり財政を影から操る黒幕が住んでそうな屋敷を想像したのに」

「ゴジゴ…………ユウラが私の事をどう思ってるかよく解りました。プイッ！」

さらりと悪人の血を引いてそうと言われ不機嫌になったピグモンはそっぽを向く。

とはいえ、そこまで怒っているわけではないだろう。

「悪かった。機嫌直せトモミ」

「はい、良くできました〜」

ニコツと笑うピグモン。恋人のフリをするため、お互い名で呼び合う事にしたのだ。

「それでは、お父さん、お母さん、ただいま〜」

「お帰りなさいトモミ。その子が例の？」

「はじめまして。トモミさんとお付き合ひさせていただいている黒慈ユウラです」

と、ゴジラが挨拶すると出迎えた女性はアラアラと笑った。その奥では男性、おそらく父親がゴジラを睨んでいた。

「君がトモミの恋人だね。トモミの何処に惚れたんだね？」

と、お決まりの言葉を言ってくる父親。

「基本お人好しなのに綺麗事だけでは世界は渡っていけないと理解している所ですね。綺麗事だけほざいて何もしない人間よりずっと好感を持ってました」

質問にはアドリブで応える事にした。ピグモンが台本を作ろうかとも思ったが予め用意されていたような回答だとバレる可能性があるからだ。

「綺麗事、か……綺麗事は嫌いかね？」

「大嫌いですね。ほざくだけなら誰でも出来る。その点ピグモ——トモミは必要なら相手の弱みを握り脅す事も出来る」

「ちよーゴジゴ……ユウラ！それは——」

「いや、いいんだ。素直な感想だね……」

「嘘はどうも得意ではないので」

慌てるピグモンに対しゴジラは慌てず飄々と応える。

「この子をきちんとして見てくれて嬉しいよ。うちの娘は少し腹黒い所も有るし、怒ると怖いから、長続きしなくてね」

「そりゃ相手に見る目が無いんでしょう。トモミの内面をちゃんと見てれば惚れ続けられないなんて有り得ない」

「ブフツ！」

父親とゴジラの会話に入れずお茶を飲んでいたピグモンは思い切り吹き出した。

「そう思うかね？」

「トモミの行動理念は仲間の為、人の為……本当に人間が大好きなんだ。汚い部分をきちんとして見た上で、そう思っている。俺とは正反対。

だからこそ意識してしまうんですかね……俺は人間の汚い所ばかり見て人間があまり好きじゃない。むしろ嫌っているから」

「汚い部分を見て受け入れる事が出来る、トモミが羨ましい、と?」

「ええ。まあ……」

「しかしその……相手の弱みを付け込む事に何か思う所は無いのかね?」

「お綺麗な方法を選んで何も救えない偽善者よりどんな手を使っても救う悪人の方が俺は好きです」

「……君はトモミを良く見ているね」

「言ったでしょう?俺は人間の汚い所ばかり見ていると。トモミの行為だって汚い行為だ。人を脅すんだから……でも、それを自分の為に使わず他人の為にばかり使うトモミは、どうにも汚いと思えない」

と、目を細める父親。

そして一つ尋ねる。

「私達がトモミに、そんな事を止めて欲しいと願っていたらどうするかね?それを続けさせるなら、別れて欲しいと言ったら」

「止めさせません。確かに誉められた行為ではないかもしれない。後ろ指を指差される行為かもしれない。けど、トモミは何時だって他人の為にその行為をやっている。だから、認めろとは言わない。ただ、頭から否定しないで欲しい」

「……………」

「……そうか、これからもトモミを頼む」

「ゴジゴジって私の事汚い女と思っていたんですね」

「だってお前、上の連中脅してんじゃん。そのお陰でシンは実験材料にされずに済んでる訳だけど」

帰りのタクシーでピグモンはジトーとした目でゴジラを睨むが確かに否定出来ないのではあ、と溜め息を吐く。

「まあどうしても必要なんですよ。そういうのは………私は人間が

大好きですよ？でも、人間全員が人間の事を想ってはくれないんですからね〜」

だから汚い行為を行う奴が居て、対抗する為に汚い手を使う。それだけだ。

「別に良いだろそれぐらい。お綺麗な人間なんて此方から願ひ下げだ。それに……」

「それに？」

「さつきも言った様に、俺にはどうにも、お前のやってる事が汚いと思えない。これは本心さ……時折これで良いのかと悩んでるみたいだが、断言してやる。それで良いさ。お前が選んだお前のやり方をお前が否定するな。否定されたなら言えよ、俺はお前のやり方を肯定してやるから」

「それは心強いですね……ゴジゴジ、少し耳を貸してくれます？」

「……………」

ピグモンの言葉にゴジラがピグモンに耳を近付ける。次の瞬間、頬に柔らかい何かが触れた。それと同時にカシヤツとフラツシユが焚かれる。

「……………何だ？」

「お父さんは兎も角、お母さんは鋭いですからね〜、先程ラインで本当に付き合ってるの？と尋ねられたので証拠写真を……」

そう言っってラインで母親にキスシーンを送るピグモン。ゴジラはピグモンの勘の鋭さが母親譲りなら直ぐにバレそうだが、と思ひながら不意に視線に気付く。タクシーの運転手（独身男性）が物凄い目で睨んでいた。

『あんな写真送ってこなくても、別にお父さんにバラしたりしないわよ。お見合いが嫌なら素直にそう言っって』

「あはは〜、ごめんなさいです〜」

部屋で母親と話しながらニコニコ笑うピグモン。やはり母親にはしつかりバレていたようだ。

『でも、私もお父さんも心配しているのは本当よ？アナタは自分だけが泥を被れば良いと思う所が有るから……貴女の事を、キチンと解つてくれる人に会えれば良いのだけど……』

「この前紹介したじゃないですか」

『あれは役でしょ？今度は本物を連れて来なさい』

その後他愛ない会話をして、通話を切る。

ピグモンはギャラリーから例の写真を選択する。

「……………本物、か……………」

お気に入り登録しますか？という文字と『はい』『いいえ』の文字が現れた。

——否定されたなら言えよ、俺はお前のやり方を肯定してやるから

「まあ有力候補ではありませんね。ライバルは多そうですね♪」

『はい』を押してピグモンは楽しそうに微笑んだ。

姉？・怪獣王!?

ゴジラは休暇を使い品川に来ていた。

ゴジラの背にはシン・ゴジラが引っ付き頭に顎を乗せる様に負ぶさっていた。

「さて、シン」

「う？」

「お前は俺の細胞その物から分かれたもう一人の俺。そして彼奴も恐らく……つー訳で、探すのを手伝ってくれ」

「んー」

ゴジラが目を閉じ、シン・ゴジラもゴジラに首を回していた腕に力を込めより密着する。

同様に目を閉じ、ゴジラの心音、体温、呼吸を感じ意識を合わせていく。

感覚が広がっていき、遠くで似た感覚を掴む。

「……ん」

「見付けたか？・細胞その物のお前の方が、やっぱりこう言うのには鋭敏だな。どっちだ？」

「あ……つち……」

銀髪の女性が海沿いのベンチに座り海を眺める。時折吹く潮風に靡く髪を押さえる様は中々絵になる。

しかし女性が持つ独特な雰囲気、どこか浮き世離れた雰囲気がある。寄せ付けずナンパ目的で話し掛ける者は居ない。そんな女性に、しかし近付く者が居た。

「久しぶり、で良いのか？」

「……この前会ったろ？まあ、話してはいないか……久しぶりだな、ゴジラ」

女性は振り返り笑みを浮かべる。シン・ゴジラはゴジラと女性を交互に見詰め首を傾げ、女性に近付きペタペタ触れる。

「ふふ。くすぐつたいな……………」

「おあえ……………なに？インと、パパ……………おええたと、にてる」

「可愛いなあこの子」

「!?うゝゝ!」

と、唐突に女性はシン・ゴジラを抱き締め頭を撫で回す。先程まで凜とした表情は破顔しにやけきっている。ゴジラが呆れた様に視線を向けると何を勘違いしたのか片手を広げる。

「……………さあ!」

「何がさあ、だ何が」

「撫でてやろう抱き締めてやろう甘えさせてやろう。さあ、だから私に寄って来い」

「え、いや……………良いよ別に」

「……………え」

ゴジラの言葉に絶望した様な表情を浮かべる女性。ゴジラはその表情にくつと言葉を詰まらせ溜め息を吐きながら女性に近付くと女性は満面の笑みでゴジラも抱き締め二人の頭に頬擦りする。

「うー!」

そしてしつこきに嫌気が差したのかシン・ゴジラが女性の拘束を振り解き距離を取る。

「がるるるるる!」

「俺もそろそろ離せ」

「あ……………」

ゴジラも同様に女性の拘束から逃れると海に面した手摺の上に腰を掛ける。

「で、一つ聞きたいが、お前は俺としての……………人間に溶かされたゴジラとしての記憶は有るのか?」

「……………その言い方だとお前も有るようだな。ああ、確かに私にはゴジラとしての記憶、そして人間の生み出した3式機龍としての記憶が有る。まあ、そもそもどちらも私だがな。そうでなければおまえを人間から救おうなどしない」

確かにあの時はモスラに簀巻きにされ動けなかったが、別にその後

人間が何をしようと殺されるとは思っていない。確かに3式機龍の攻撃はゴジラにダメージを与えるが、致命傷になるのはあの冷凍攻撃だけだ。

救われたとは思っていない。が、彼女が救おうと思っていたのは本心なのだろう。

「はん。人間に懐柔されてた鉄屑が俺を救おうなんて皮肉な話だな」

「懐柔、か……否定はしない。彼女の気持ちは分からないでもなかったし、彼には世話になっていた。人間を憎んだのも私だが、人間に触れていたのもまた私だ」

「……………」

「それに今は、お前だって人に触れているのだから？」

「まあな……………」

ゴジラの言葉に女性はニコリと微笑むと立ち上がる。

「さて。ではそろそろ行こうじゃないか。GIRLSだったか？私もそこに入る……私の事はこれから3式機龍と呼ぶと良い。何ならお姉ちゃんでも良いんだぞ？」

「さつきと行くぞ機龍」

「むう…………お姉ちゃんが良いのに。まあ、仕方ない。向こうで妹達に期待しよう」

「また新しい家族ですか。今度はお姉さん……………」

「まあ正確には同族の年上。家族ではないがな…………いや、ある意味俺自身とも言えるが」

「……………？それで、そのサンちゃんはどこに？」

「さあおいで妹達。お姉ちゃんが可愛がつてやろう」

と、3式機龍はビオランテ、スペースゴジラ、オルガの前で両手を広げ満面の笑みを浮かべる。三人はそんな機龍にどう反応したものと迷っていると、リトルがやってきた。

「あれ、パ…………パ？ママ？」

「ああ、お前はリトルだったな。さあおいで、伯母さんが抱き締めてやろう」

リトルは3式機龍を見て戸惑っているところ3式機龍に抱き締められ撫で回される。一頻り堪能した3式機龍はグリーンとビオランテ達を向く。

「……………」抜け！」

「ま、待て！俺も！」

「置いてかないで！」

「……………」何やってんだ？」

「堪能した」

ゴジラが迎えに行くところぐったりした妹三人と娘、やけに艶々した姉が居た。

「取り敢えず受け入れるとよ。これからよろしくな機龍」

「ああ、よろしく頼む」

ゴジラの言葉に3式機龍を笑顔で応えた。

「ああ、それと。この前の礼がまだだったな……………助かった」

「構わんさ。可愛い弟と姪の為だからな」

「……………」そうか」

トラウマ？・暴竜娘!?

「成る程、お前がメカゴジラか……あまり似てないな」

「否定しない。そもそも私は皮膚を模した皮を被る前提の設計。また、怪獣娘として転生している為、前世の特徴は意味を成さない」

「それもそうか。私もゴジラとはあまり似てないわけだしな」

と、談話するのはメカゴジラと3式機龍。

ゴジラは自身が多くの世界のゴジラという怪獣の記憶を統合して持っている事と、前世の記憶持ちの怪獣娘達について話した。その際ゴジラの名を持つメカゴジラに興味を持ったわけだ。

「にしても前世のゴジラって本当に凄いなだねえ……真似した奴や骨格使ったサイボーグも作られるなんてえ」

「て、鉄のゴジラがふた、二人に……」

一方町ではゴジラ、ヘドラ、アンギラス、ジラが四人でパトロールをしていた。

唐突に切り出したヘドラの言葉にアンギラスがガタガタ震え始めた。

「落ち着けアンギラス。そろそろ慣れるよ……」

「うう、顎が……頬の肉が……」

「重症ですネ」

最近日本語の敬語を覚え始めたジラが震えるアンギラスを見て慰める。

「まあまあ、お二人トの因縁は忘れテ……仲良くしてくだサイ。時間が掛かるでしょうガ、今は仲間ナノですから」

「そうだぜ、今のうちに慣れとかねーと三人目がキツイ」

「……………三人目?」

「おう、後一人居た。ん、一人……だっけ?」

「……………」

ゴジラの言葉に更に増えるのかと青くなってバイブモードの携帯

の様に震えるアンギラス。ゴジラははあ、と溜め息を吐いて目の前で手を叩く。

ゴジラの方での拍手はスタングレネードの様な爆音を立ててアンギラスの意識を強制的に引き戻す。

代わりにヘドドラはゴジラの行為を見守っていた為、爆音を直に聞き気絶しジラはミ、ミサイルがと震え始めた。どうやら別のトラウマを刺激してしまっただけらしい。

「ハッ！わ、私は何を……!?!」

「よし戻ったな。此奴等運ぶの手伝え。たく、前世じや暴竜なんて呼ばれてたのによお……」

「う、ごめん……け、けど仕方ないじゃないか！痛かったんだぞ！」

「うう、子供だけは……子供だけは殺さないでえ……」

ゴジラの言葉にバツの悪そうな顔をするアンギラス。ゴジラの背に負われたジラは何やら呻いている。

アンギラスが抱えたヘドドラは相変わらず目を回しているし、アンギラスもまだ本調子ではなさそうだ。こんな時シャドウビーストでも現れたら——

『シャアアアア！』

「があー！」

——面倒だと思ったが熱線一発でカブトムシ型のシャドウビーストを消し去った。

「観測。熱線を確認。対象をゴジラと確定」

「いやいや確定したから何だよ逃げようぜ」

「拒否。自分はゴジラに会いたい」

「お前は良いよなあ！後付けされた首だから首の一つを吹き飛ばされる痛みを知らないもんなあ！おい、お前から何か言っただれ」

「ゴジラ……怖い。けど、人間、もつと怖い」

「激励。私達は現在その人間です。つまり、現状私達に怖いものなどありません」

「……………いや、その理屈はおかしい」

「確かに……もう、何も怖くない」

「あれ、可笑しいの私？つーか会ってどうすんだよ」

「解答。一緒に海の中で眠る」

「時間立てば拘束振り解かれるわ！それ以前に海に行く間に熱線食らうぞ……」

「代案。過去に行きまだ幼いゴジラを洗の——教育しておとなしい性格に」

「記憶持ってたから無理だろ」

とある屋上で、三人ほどの人数で会話がなされていたがそこに居たのは前髪の中央が銀髪で残りは金髪という変わった配色の髪を持つ少女一人だけだった。

機械？・怪獣王!?

ミクラス、ウインダム、アギラの三人が公園を歩いていると見知った影を見付けた。ゴジラとシン・ゴジラ、それとリトルが仲良く寝ていた。

冷えてきた今日この頃だがG細胞を持つ三人には関係ないのだろう。この前の体調不良の原因は未だ不明のままだが。

「仲良いなく……」

「ですね」

「羨ましいよね」

「ですね」

と、アギラとウインダムが言うとミクラスはニヤリと笑う。

「ゴジラに抱き付いてる二人が？」

「うん」

「ち、違います！家族仲が良くてと言う意味です！」

「え？」

ミクラスの言葉に赤くなって否定するウインダム。十代の小娘には同世代の男と身を寄せ合って眠るというのは想像にしても刺激が強かったらしい。

「……………今アギさんうんって言ってませんでした？」

「……………何の事？」

ウインダムの言葉にアギラは明後日の方向を見て返した。

夕方になり、また公園を通りGIRLSに帰ろうとしたアギラ達はゴジラはまだ寝ているのだろうかと思に行く。寝てた。そして……………

「……………増えてる」

見覚えのない少女がゴジラに抱き付く様に寝ていた。

金髪と、前髪の銀のメッシュを持った少女。すうすうと寝息を立て、時折ゴジラに身を擦り付けていた。

「……………えい」

アギラはその少女をゴジラから引き剥がすと放り投げる。しかし、頭を打った少女は悲鳴を上げる事なく目を覚ましアギラを睨んだ。

「質問。何者？」

「貴方こそ誰……ゴジラの知り合い？」

「……………肯定」

少女は目を逸らしながら肯定する。アギラの眠そうに細められた目が更に細まった。

「嘘……嘘でないとしても、それは前世でしょ？」

「……………」

「ん？ふあ……何だよ騒がしい」

「ふあ……………」

「うむ……………」

と、そこでゴジラが騒ぎを聞き付け目を覚ます。ゴジラは寝惚けた目で周囲を見回し、少女を見て固まった。

「……………メカキングギドラ？」

「感激。覚えていてくれた」

と、無表情ながら嬉しそうな気配を放つ少女。一瞬でゴジラに近付くと抱き付いた。

「おいこら放せ！」

ゴジラが引き剥がそうともがくが思いの外力が強く抜け出せない。考えてみれば前世はゴジラを捕らえる為に用意されたのだ。

「うー……」

が、シン・ゴジラが無理やり引つ剥がす。常時怪獣娘状態であるシン・ゴジラの方が力は上の様だ。

「邪魔。邪魔邪魔邪魔邪魔……………何奴も此奴も私とゴジラの邪魔をするな」

「おい、好き勝手言ってるがそもそもお前の目的って何なんだ……………」

何やらゴジラが共に居る事が当然と言いたげなメカキングギドラにゴジラが尋ねる。何となく嫌な予感がした。

「ゴジラ。私と眠ろう？誰も居ない深い海の底で、邪魔される事なく永遠に」

「断る……」

「よし断られたな！逃げよう、殺される前に！——拒否！断固拒否！——いやそれより人間怖い……」

「……………」

ゴジラが断った途端に突然叫び出すメカキングギドラ。ゴジラは顎に手を当て、その光景を眺める。この光景何処かで見たような……………。

と、次の瞬間彼女の身体が光り銀色の鎧が装着される。髪は全て銀色に染まり肩からは二匹の竜の首。

「ゴジラ。今度こそ共に……」

「……………まさか、お前等も三重人格？」

「肯定。私達は生前三体のドラッドと言う生物が放射能を浴び変質、進化した存在。故に複数の思考を持つ」

「……………」

二匹の内右はゴジラを恐れており左はゴジラより人間を恐れている様だ。残りの真ん中はゴジラと共に眠りたい等とほごく。

「……………それって仮に俺がお前と寝ても右が五月蠅くねーか？」

「……………提案。引っこ抜く」

「へ……………うじ、冗談だよな。前世からずっと一緒の私を引っこ抜くなんて……………」

何だろう、右の首が哀れに思えてきた。というかこのままでは本当に右の首を抜きかねない。

「……………取引をしようメカキングギドラ」

「……………」

「俺は現在GIRLSに所属している。お前もそこに所属しろ……で、俺が満足のいく成果を残せたら、一日だけ共に寝てやろう。ただしその時は首全部と話し合っただ。気分次第で我慢出来る日も有ったりするだろう」

「……………」

すると何やら三つの首を寄せ合い話し始めた。そして首が離れ、真ん中の首がゴジラを見詰める。

「了承。会談の結果、その提案を受け入れる」

メカキングゴドラが所属してから数日。ゴジラは疲れた様に一人歩いていた。

まさか前世で機械だった敵があんな妙な性格になっているなど誰が予想できようか。メカゴジラは機械的な、3式機龍は中の骨の影響でお姉ちゃん風を吹かせる程度。メカキングゴドラは何があつてあんな性格になったのだろうか？

機械と言えば後何体か心当たりがあるが……………。

「——ッ!？」

と、次の瞬間横合いから飛んできた何かが巻き付いてくる。ワイヤーが体を縛りゴジラの動きを封じ、そのまま路地裏に転がされる。犯人を睨むとこれまた銀髪、金の瞳、銀の鎧を着た少女。背中にはリュックの様に取り付けられたジェットが有り、肩越しに砲身が伸びている。

「噂をすれば影か……………何だ、メカゴジラみたいに、俺を抹殺しにでも来たか？」

瞬時に変身したゴジラは何時でも反撃出来るように準備をする。が、次の言葉にゴジラの思考が停止した。

「【要求】当機と生殖行為の実践を許容してもらいたい」

「……………は？」

要望？・機械娘!?

……………今、此奴は何と言ったのだろうか？聞き間違いだろうか？

「取り敢えず降りろ…………」

「【了承】【質問】襲われるより襲う派？」

「よし黙れポンコツ……………取り敢えず、お前今俺に生殖行為を要求したよな？」

「【肯定】」

ゴジラの言葉に取り敢えず素直に従うようだ。

「……………で、何でお前は俺と子を成そうとする？」

「【解答】当機には前世、と言っているのか不明だが、嘗てスーパーメカゴジラと呼ばれていた記憶が有る」

「……………」

やはり前世の記憶は有るようだ。だが、先程の発言の意味に何の関係が有るのだろうか？

「【追憶】当機が敗北後、当機の操縦士の一人が勝敗の要因は命あるものと、ないものの差と補足していた。【結論】機械である当機には命がないから負けた。が、命と言う物は具体的にどの様なものか不明。現在、命があると言えるこの姿でも同様」

「……………ま、生きてるからって命だのなんだの理解しろってのは難しいよな」

「【結果】当機は命を育む事にした」

「……………はっ…」

淡々と紡がれた言葉にゴジラの思考が停止しそうになる。反射的に「何言ってるんだお前は…………」と言わなかっただけでも賞賛されるべきだろう。いやマジで。

「【確認】子孫を残す事、それは生物の…………『命ある者としての義務』と判断——実際、個体名『ゴジラ』は番が居らず代わりに同種族の幼態である個体名『ベビーゴジラ』を保護しに来た」

「……………まあ、確かに本能的にはあったんだろうが……………で、何で俺なんだよ」

「【解答】子孫はより優れた存在と残り、自己の子孫はより優秀にしていくと判断。現状当機が知る最も強い遺伝子を持った雄。それはゴジラ……【結論】当機と生殖行為をしよう。子は当機だけで育てる。問題はない」

「そう言う問題じゃねーよ！っーか抱けるか！」

「……………【疑問】当機には需要……………性的魅力が有ると推測していた。誤解？」

果たして誰がこんな幼い少女にそんな無駄な、そして下手をすれば警察の厄介になりそうな知識を植え付けたのだろう。スーパーメカゴジラの見た目は、平均より背が低いと見積もっても中学に届くか届かないかだろう。

その辺のモデルも裸足で逃げ出しそうなシン・ゴジラを風呂に入れてやっている身としてはその程度の体に欲情などしない。

「……………っーかそんな作業みたいに子を残してキチンと子を愛せるのかよ」

「……………【疑問】愛？」

「親愛……………それがなきや子は育てられんだろ。特に、本能で動く獣と違い理性で動く奴らは不思議な事に子孫繁栄の本能より自己保存を優先するからな。お前はそうじゃないだろうが、それは必要な事と判断して行う作業みたいなもんだろ？果たしてそれで命を理解したなんて言えるのか？」

「……………」

ゴジラは自分の言葉に長考するスーパーメカゴジラを見て『納得してくれたか？』と安堵する。既に二児の父とは言えポンポン子供を作る気などない。というかまず相手がいない。リトルが望んだ為ラドンが母親、つまりゴジラの妻となっているがゴジラ自身にはラドンはアンギラスやモスラ、まだ生まれ変わりには会ってないが人型の奴と同じ程度にしか思っていない。

「【理解】当機はまずその愛というのを理解する事にする。当機の閲覧した父の資料によると欲望のまま蹂躪された少女が年の離れた男性に好意を抱いていた。当機を蹂躪して構わない」

「ぎげんな。それと、そのおやし大丈夫なのか？」

「【肯定】当機の母親は俗に言う合法ロリ。とても小さい」

「……………そうか」

何で俺は他人の親の性癖を聞いてるのだろう？疑問に思うゴジラだったが取り敢えず置いておく。

「取り敢えずそれは漫画の世界だとだけ言っておく。いやまあ、希有な例であるかも知れないが、お前がそれに該当するとは限らないだろう」

「【代案】母の好きな漫画。付き合ってる振りをしてからの恋に発展」

「いや俺一応妻子持ち」

「【模倣】……………私と浮気、しよ？」

「なんだその棒読み」

「【解答】当機の父と母の浮気プレイの模倣」

取り敢えず此奴の両親の頭がおかしいことだけは解った。解りたくもないが。何で人ん家の行為事情を聞いてんだ。そして何で此奴は知ってたんだ。

「つーか母親が小さいって、お前も見た目通りの年齢じゃないのか？」

「【解答】今年でー」

「……………そうか」

子供だった。完全に。というか此奴の親はそんな年の子供に行為事情を知られるほど普段からいちやついてるのか。いや、精神年齢は上だ、子供だから理解しないだろうと思っていたのかも知れない。

「【疑問】愛情とはどうやって芽生えさせる？」

「俺が知るか。まあ、普通出会って直ぐ結婚なんてのは見合いだけだろうし、そもそも見合いだって相手を知るために行うものだ。相互理解していけば何時か芽生えるんじゃないの？」

「【理解】では、当機はゴジラと愛情を芽生えさせるためにGIRLSに所属する。……………あ」

「ん？」

「【提案】愛はなくとも生殖行為を行いたくなったら何時でも当機に……………」

「ぶち壊すぞてめー」

「……まだですか」

「まただ。取り敢えず、コイツはスーパーメカゴジラ。長いからスーパーと呼ぶ事にした」

「スーちゃんですか。スーちゃんは今日再会したんですか？」

「【肯定】そのまま生殖行為に及ぼうとした」

「お前もう黙れ」

「【疑問】会話がなければ相互理解は不可能」

クリスマス？！怪獣王!?

「バトラ、今日暇か？」

「ん？まあ非番だし、何か用か？」

「なら良かった。今夜七時、駅前のクリスマスツリーに集合な」

「ああ」

取り敢えず了承したが何だったのだろうか？仕事ならその場で言えればいいし。

バトラは非番の為テレビをつけながらゴジラの用事とやらを考えろ。丁度テレビでは最寄り駅の様子が映されていた。

『やっぱりクリスマスは恋人と過ごしてこそですね』

『家族でこのまま遊園地に行く予定なんですよ』

クリスマス、外国の行事だというのに日本人は随分盛り上がる。

『俺、この後のクリスマスパーティーが終わったら告白するんだ』

「何でこいつ死亡フラグ立ててんだ。こりゃ告白もつられて終わりだな……」

……告白？

「……ないか」

そんな親しくなった覚えは無い。変な期待をして、期待が外れればそれこそ赤面物だろう。

「……」

30分ほど遅れた。着ていく服を選んでいたせいで。途中モスラが何か言っていたような気もするが集中して服を選んでいたせいでもともな返事ができたかどうか。

と、駅に近付いてきたからか人の数が増えてきた。幸い駅前のクリスマスツリーは大きな針葉樹をそのまま飾っているので迷う事はないが。

「……くそ、雪うぜえ」

しかし歩き辛い。降ってきた雪のせいだ。ホワイトクリスマス等と言うのがロマンチックと言う連中の気が知れない。

「つーか寒……ん？」

クリスマスツリーの根元が見えてきて、見知った影を見付ける。ゴジラだ。何故かサンタの格好をしている。見覚えのない少女達が写真撮らせてもらっている。

「何してんだアイツ………んなつ!？」

と、不意にゴジラが少女の一人の頬に触れた。少女の顔が赤くなり恥ずかしがる様に離れていった。

「ん？来たか、遅かったな」

「……さっきの女達は？」

「写真を撮らせてくれて頼まれてな。頬にケーキのカスが付いてたから取ってやった」

「……………そうかよ」

何となく、何となくイライラした。つーか何でこいつはこんな恰好しているんだろうか？

「その中途半端な恰好は何だよ」

「中途半端？」

「サンタなのに黒いって」

「知らねーのか？サンタのイメージカラーはコ〇・コーラ社のCMが始まりだ。それと、俺はサンタじゃなくてブラックサンタだ。悪い子供に臓物とジャガイモと石炭を届けるらしい」

「らしい？」

「全部ピグモンの受け売りだ」

成る程。て言うかサンタにそんな亜種が居たのか。悪い子にお仕置きというのも、核を弄んだ人間達に破壊をもたらしたゴジラにある意味似合っている。

「で、そのブラックサンタを撮らせたわけか。は、その女達も黒いサンタの由来知ったら何とも言えない顔になりそうだ」

「？お前、なんか不機嫌じゃね？」

「別に……」

と、不意にゴジラの肩や帽子に積った雪を見る。自分が外に出た頃には既に降っていた。何時から待っていたかは知らないが、雪の中待っていてくれたのだろう。それを思うと胸の中に有った理由不明の苛立ちが消えていくのが解る。

「……………うおっ!?!」

「おっと……………」

雪の上は滑り易く、思わずバランス崩したバトラだったがゴジラが支える。

「その靴じゃ歩き辛いだろ。もう、直ぐそこだがおぶってやろうか?」

「……………このままでいい」

と、バトラはゴジラの腕に手を回す。

「そうか」

「……………こんな事だと思ったよ」

目的地らしいファミレスに入ったバトラは集まっているGIRLSのメンツを見てはあ、と溜め息を吐く。単なるクリスマスパーティーだ。

「くそ、あの席に座ってるあの男なんだよ!」

「独占罪で逮捕されるべきだろ!」

「はあはあ、ロリっ娘……………いたた!なんだこのドラゴン!?!」

ファミレスの中で美少女集団。まあ目立つ。その中で唯一の男であるゴジラは彼女なし同士で連んだ団体の男達に睨まれていた。

「それでは皆さーん、メリークリスマス!」

「三「メリークリスマス!」三」

……………まあ、偶にはこんな夜も悪くないだろう。

「【要求】クリスマスではカップルがセツ〇スするものだと両親から聞いた。パーティーが終わったらホテルへ行こう」

「行くか」

「【疑問】青姦が好み?そういうのはスリルを楽しめるようになってからと母が……………」

「てめーの両親なんか知るか！」

「……【納得】当機はゴジラとの子が欲しいだけ。プレイはゴジラの望むままに……」

「おいこら鉄くず、ゴジラは一応、私の夫なんだが？」

「そういうのは相棒である私を通してもらおう」

「お前が言うな！」

「なら兄さん、いつそ私と！」

「お前は自重をしろ。アニキ、このまま家族水入らずで二次会しねー？」

「ゴジラ、ミクちゃんとウインちゃんの3人でゲームセンター行かない？！」

「……………また男達からの視線がゴジラに向けられた。大変だな此奴も。」

「ふふふ。残念でしたね皆さん。この後ゴジゴジは私と二人で仕事があるのですよ〜」

「荷物持ちだけだな」

「ゴジゴジは怪力ですからね〜」

何となく、今一瞬だけピグモンが嬉しそうに見えたのは気のせいだろうか？

雪？・怪獣王!?

「雪!」

「……………冷た、い……………お、ちつく……………」

クリスマスパーティーの後、ホワイトクリスマスで積もった雪にはしゃぐリトルと大分話せるようになってきたシン・ゴジラ。

リトルは公園を駆け回りシン・ゴジラは積まれた雪の中に身を沈める。シユウウと音が鳴り雪が溶けているのは、体温調整に使っている身体機能の一部を止めたからだろう。

「あ、ゴジゴジ此処にいましたか!」

「ん、ピグモンか。どうした?プレゼント渡し忘れたか?」

「いえ、ゴジゴジは今日非番でしょう?これ、どうぞ。急遽決まった町のイベントです」

「家族対抗雪合戦?」

「はいです。どうやらせっかく雪が積もったのだから、と……………まあ町内会の配りきれなかったクリスマスプレゼントの消化用イベントですよ。気が向いたらどうぞ」

ピグモンはそう言うのと去っていった。わざわざこのために探してくれたのだろう。有り難い事だ。

「ふーん、雪合戦ねえ……………」

『えー、基本はバトルロワイヤル方式。リーダーを決め、やられた時点でそのチームは敗退です。最後に残った順から景品を選ぶ事が出来ます』

リトルはワクワクしながら陣地に存在する雪壁から飛び出すのを今か今かと待ちわび、シン・ゴジラはぼーつと虚空を眺めている。ゴジラは作れるだけ雪玉を作っておく事にした。

『それでは、始め!』

「えい!」

ボガアアアアン!

リトルが投げた玉は一人一人を吹き飛ばした。幸い気絶しているだ

けだが。

「良く手加減したな。偉いぞ」

「うーん、でも強すぎた気も。えい」

ドパン！

やはり人は吹っ飛んだ。今度は気絶していないが。

「う、うわあ!?あのチームやべえ!」

「早くリタイアさせろ!あの黒服の女の子がリーダーだ!」

「う?」

集中砲火を受けたシン・ゴジラは身を低くして駆けるがどんどん飛んでくる。余程ゴジラ達に参加して欲しくないらしい。

「……………うう……………うあー!」

ピュン!と音がして空中の雪玉が溶ける。

「がああ!」

次の瞬間大量の熱線がシン・ゴジラの体中から放たれ雪玉を全て消し去った。文字通り光の速さでありながら雪玉に当たった瞬間放出は止めているようだ。

その後シン・ゴジラはふわあ、と欠伸を一つして立ったまま寝始めたがいくら雪を投げようと光に溶かされる。

「……………すまん、何か申し訳ない。俺達は棄権する」

「えー!」

ゴジラの言葉に選手達はほっと、溜め息を吐いた。

「もつとやりたかったなー」

「今度GIRLSでやろうな。人間は脆すぎる」

ゴジラはスヤスヤ眠るシン・ゴジラを背負いながら開催者達から貰ったコーラを飲む。

「ん、美味しいなこのコーラ」

「ほんとだ!おいしー!」

「……………う?」

「お、起きたかシン……………お前も飲むか?」

「……ん」

シン・ゴジラはゴジラからコーラを受け取るとコクコクと飲み始める。

「……おいし」

「だな。普通のコーラじゃねーのか？ラベル違うし……ヌカ・コーラ？」

冬コミ?・怪獣王!?

「……とうとう、とうとうこの日が来ました。うう、寒い」

ウインダムはカイロを手に当てながらはあ、と息を吐く。始発で来たというのにもう並んでいる。相変わらずここは、人が多い。いや、多くて当然だろう。ここは、戦場なのだ。

「ふふ。今回はあの伝説のネット同人作家、ドロヘドロ先生の初紙媒体による同人誌の発売。何が何でも手に入れて見せます!・ヘクチ」

しかし、と周囲を見渡すウインダム。てつきりエレキングも来るかと思ひ誘おうとしたのだが、返事はまさかの用事があるだ。用件を言う前に行ってしまった。

「そろそろ移動ですね」

ウインダムはそう言うのと前の列に続き歩き出す。多くの人が動き隙間が空き、割り込む者も何名か居るかウインダムはその様な事はしない。彼女達はこれから先、目当ての物を奪い合う好敵手であると同時に同志なのだ。

それを心得ている何名かは自分と同様に列を乱さずに歩いていた。

「ええっと、ドロヘドロ先生の販売コーナーは……あ、ここか」

既に多くの人が集まっている。しかし、何か妙だ。中々離れない。本を買えば直ぐ他の場所に回らなければ回り尽くせないというのに。

「あ、あの……写真良いですか?」

「いいよー」

「……………チツ」

「……………ん?」

今聞き覚えのある声が聞こえたような。爪先立ちになり覗こうとすると、見知った顔が見えた。ゴモラだ。とある漫画の主人公のコスプレをしている。シヨタっ子として人気の主人公だ。そして彼のライバルにして、何かと彼に気を使う言動が多い為カップリングが多いキャラの恰好をしたゴジラが居た。

「……え？」

「あれえ、ウインダムう……」

そして、ヘドラが。

「ヘドラさん!?ま、まさかドロヘドロ先生は……」

「ボクだよお☆」

用事というのは参加すると言う事だったらしい。後、エレキングも別のサークルで売り子をしていた。

「それで、何故ゴジラさんとゴモラさんが？」

「んー、私はヘドラに頼まれてねー。イメージピッタリって……で、もう一人を捜すの手伝ってって言われてゴジラを誘ったんだよ」

『先輩命令だよー!』とか、ふざけた事抜かされてな」

「でも付いて来るゴジラって優しいよね。よしよし偉い偉い」

背伸びしながらゴジラを撫でるゴモラ。主人公とライバルが迷宮に落ちた時一時協力する事になった回で、ライバルが怪我を庇いながらモンスターを倒した時のシーンにそっくりだ。周りの客が一斉にシャツターを押す。勿論ウインダムやエレキングも。

「ありがとうございます」

良い思い出が出来た。と、その時ソウルライザーが一斉に鳴り響いた。

「シャドウ反応?!この近くで!」

「こんな時に!」

エレキングとウインダムが驚愕する中悲鳴が聞こえてきた。見ればシャドウが幾つも存在する入り口から挙って入ろうとしてきていた。

「ウインダム、ヘドラ、ゴジラはこのままここで、私とゴモラは企業ブースに向かうわ」

「は、はい!」

ウインダムがエレキングの言葉に頷くとエレキングはゴモラと共に駆けていく。壁や柱を足場になっている人が多くて進み難そうだが、かく言う此方もパニックで……

「ゴジラ、ゴニヨゴニヨ……」

「ん？よく解らんが、解った」

「ヘドラさん？」

何やらヘドラがゴジラに耳打ちするとゴジラはコスプレ用の剣を持ち今まさに人を襲おうとしていたシャドウに向かって投げつけた。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

「なら、さっさと奥に隠れてろ。お前は俺の獲物だ、こんな下らん奴らのせいで、傷つく事など許さん」

「こ、このセリフはあ!？」

「そうーあの回のセリフだよお……!？」

敢えて漫画のセリフを出され、混乱より興奮が上に来た女子達。パニックが収まった。

「皆さん！中央によってください！シャドウから、離れて！」

ウインダムの言葉にシャドウから距離を取る客達。動き易くなった。ゴジラはコスプレ用の剣を構えると赤く発光していく。

「本物の鉄使ってるからねえ。ゴジラの熱にも多少なら耐えられるよお………ゴジラ、やっっちゃえ」

「燃え尽きろ下等種族共！」

必殺技の完全再現、あちらこちらで歓声が上がった。

「また来ようねえー」

「二度と行くか」

初詣？・怪獣王!?

まだ薄暗い早朝、ゴジラはリトルとシン・ゴジラの手を繋ぎ歩く。

「人が多いからな、離れるなよ」

「うん！」

「ん……」

ゴジラの言葉に握った手に力を入れる二人。リトルは緑の花が描かれた晴れ着を、シン・ゴジラは黒い晴れ着を着ている。

ゴジラも男紋服を着ていた。

「初詣は人が多いですね〜」

「だな」

「アギちゃん、起きてよ。寝惚けてちや駄目だつて」

「起きてるよ。いつも通り」

「んー……わんはまだ眠いさー」

「起きてくださいキンググシーサー。守護神として、今年一年も何の厄災が起ころぬように願いましょう」

他のGIRLSの面子も着ている。晴れ着姿で。

「ふふ、どうですかゴジゴジ、似合いますか〜?」

「こういうの、初めて着たけど、変じゃない?」

と、ピグモンとアギラが尋ねてくる。ピグモンは桃色の下地にカテレアの花、アギラは橙色の下地にピンクのグラジオラスが描かれている晴れ着姿だ。周囲を満たせば各々のイメージカラーやイメージに合った花言葉の花が描かれた晴れ着姿の面々。

しかし何故こういう服には花ばかり描かれるのだろうか?と首を傾げながら取り敢えず感想を探す。

「綺麗だぞ、花畑に迷い込んだ気分だ」

と、晴れ着の花を見回しながら言うゴジラ。何名かの顔がボツ!と赤く染まる。

「もう、ゴジゴジ!晴れ着の感想じゃなくて晴れ着を着た私達の感想を言ってくれなきゃ駄目ですよ〜」

しかしピグモンだけは言葉の意味を察したのかプンプン怒っている

た。

「全くもう全くもう」

「悪かった。こういう時どう言えば良いのかさっぱりでな……似合っているぞ」

「……皆、ですか？」

「ああ、皆似合っている」

「……………はあ」

ゴジラの言葉にピグモンは溜め息を吐くと列に従い歩き始める。ゴジラ達もそれに続いた。

金を入れ、鈴を鳴らし手を叩く。しかし何を祈ろうか、ゴジラやバトラは今更ながら悩む。

そもそもが星の怒りである破壊神と、幾多もの性質を前世より受け継ぎその中には亡霊の無念を背負い神格化した事の有る破壊神。

他にも元機械やメカゴジラ達や宇宙の怪獣でありながら國の守り神でもあるキングギドラも何を願うべきか、願った所で何が有るのかと考えていた。

まあ、ゴジラと違い大分前から毎年の事だが。

「……………」

取り敢えず、ゴジラはこの一年を思い出す。前世の記憶に目覚め始め、前世戦った相手に再会し、娘に再会し、妹達に再会し、悪霊に飲まれ、宿敵に再会し、自分を餌と見てくる奴らに再会し、新しい娘が出来、嘗て自分だった奴に再会し……まあ色々あった。冬だけだが。

今年はこれからこの調子で始まるのだろうか？だとしたら、また面倒な騒ぎが起きそうだ……。

まあ、それも良いか。

「……………」

「パパ、何を願ったの？」

「今年一年も退屈しませんように、って願ったよ」

その後、御神籤を買い、守護神ズとゴジラやバトラが大吉を引き、屋台を軽く回り帰ろうとした時だった。

「キヤ!？」

「と……」

人にぶつかってしまった。ポニーテールの、同い年ぐらいの少女だ。

「すまん、大丈夫か？」

「あ、はい……此方こそ」

少女はゴジラの差し出した手を握り顔を上げ、ゴジラと目が合う。そして、同時に固まった……………。

「……………ゴジラ？」

「…………お前……………未希、か？」

再会？・超能力少女!?

ゴジラは一人の少女と歩いていた。
少女の名は三枝未希という。

「それにしてもびっくり。ゴジラも転生してるなんて。ゴジラってこっちの世界の怪獣じゃないのよね?」

「向こうの怪獣も何体も来てたぜ?そっちこそ、実は怪獣だったのか?」

「うーん、どうだろ?ゴジラを兵器として扱おうとした人間にはゴジラを操る道具扱いされたし……………」

「……………わりい」

未希の言葉にゴジラが気まずそうな顔を見ると未希が手を伸ばすが、届かない。

「……………同じ人間になってもゴジラはおっきいね」

「186だ」

「んー、大きい」

「お前は相変わらずチビだな」

「ゴジラが大きいの!」

ゴジラの言葉に未希はむ、とむくれる。

「てかお前、前よりチビになってないか?」

「若返ってるからね。ゴジラに会った時ぐらいかな?」

「ああ、そういやこんな顔だったな。人間の顔なんてあの頃はあんま見分けがつかなかったからな」

と、ゴジラは未希の頬を指でつつく。

未希は手で払うが嫌そうな顔はしていない。

「つーかお前以外の人間なんて大嫌いだったしな」

「あれ、じゃあ私は好きなの?」

「まあな」

「……………うーん。何か改めて恥ずかしいね」

「未希姉照れてる?」

「……………この子がジュニア……………ううん。リトルか……………可愛く

なったね。うりうり」

「やーん」

未希がリトルの頬をムニムニ弄るとリトルは嬉しそうに笑みを浮かべて暴れていた。

「ま、まずい……このままではゴジラの妻という今の立場が危ぶまれる」

それを影からこっそり覗くラドンは二人の仲の良さに戦慄していた。基本的に怪獣娘以外の、普通の人間には興味を示さないゴジラがあんなに楽しそうに。リトルも懐いているし。

「ううむ。まさか人間を敵だったというゴジゴジが心を許した人間が居たなんて。これは強敵ですよ」

「……むう……」

同じく覗いていたピグモンやアギラ達もどことなく不服そうな顔をしている。

かなり目立っていたが本人達は全く気にしていない。

「ああ、兄さんがあんなに楽しそうに……」

「アニキの隣に居る女、どっかで見た気が……」

【発覚】彼女は前世において当機を操縦していた女性に間違いありません。骨格が一致します」

「スーの？て事は敵対してたの？」

スーパーメカゴジラの言葉にアングラスが反応する。かつて敵対していたと言うには随分仲がいいようだが……。

「……………」

「あーちよつとシン!？」

と、隠れて見ていたシン・ゴジラはスタスタと未希に近付いていく。

「ん？どうしたの？」

「……………」

「え？え？ゴ、ゴジラ……何この子？」

そして何を感じたのか未希にそのまま抱き付いた。

「俺の娘だ。しかし懐かれてんな……俺の分身とも言えるし、それが関係してるのかもな」

未希の膝ですやすやと寝息を立て始めたシン・ゴジラの頭をゴジラが撫でると未希も習って撫でる。

「まずい！本当に家族みたいだ！私の立場が………」

「ラドン、落ち着け……ゴジラだよ？流石に、ねえ……」

「しかし楽しそうだよ？まあお姉ちゃんだって人間の良い所は知っているけどさ」

「ところで、あそこで覗いている娘達はゴジラの友達？」

「まあな。仕事仲間だ……」

「言い方……友達なんですよ？」

「……嫌いな奴らではないな」

「……そっか、良かった」

猫と？・怪獣娘!?

アギラはゴジラの横を歩きながら時折ゴジラに振り返る。

元旦の日、ゴジラと話していた少女は未希と言うらしく、前世からの知り合いらしい。

ゴジラの前世からの知り合いは既に数多くいるが彼女は他の怪獣娘達とは違った。敵対者や相棒とも違う。リトルみたいに、守ろうとする存在、だろうか？

少なくともゴジラが彼女を特別視している。

「……いいな」

「ん？」

思わず出た言葉にゴジラが振り向き慌てて顔を逸らす。

ゴジラはアギラの知り合った男性の中で一番近い人物だと思う。小学校では男女関係なく遊ぶものだが生憎アギラは趣味が年寄り臭い。友達はそこまでの訳じゃない。

「ゴジラ……ゴジラって、友達居た？」

「いきなりなんだ？生憎いない」

「……そっか」

ゴジラは人間嫌いだし、まあそっか。

いやそうじゃないだろ。もつとこう、何か話題を……。

「にゃ……」

「わ……」

と、その時扉から一匹の猫がアギラに肩に飛び降りてくる。

「……あれ、キミは……」

「にゃん」

その猫はゴジラと出会った時に、恐らくゴジラに助けられていた猫だった。

猫はスリスリとアギラの頬に頬を擦り付けそしてゴジラの背に飛び付いた。

「お、何だこの猫？」

ゴジラは背中に引っ付いた猫の襟首を掴み、顔の前に持って行くと

猫の肉球がゴジラの顔を叩く。

「なく」

「その子、ゴジラが前に助けてた子だよ。お礼したいんじゃない?」

「……そうなのか」

「にゃん」

アギラの言葉にゴジラが猫に訪ねると言葉の意味を理解したのかは不明だが一鳴きした。

ゴジラはふと公園の入り口を見付ける。

「少し休んでいくか?」

「……うん」

そういえばこの公園は前にゴジラがメカキングギドラと寝てた場所だ。チラリと猫の両前脚を掴み二足で立たせているゴジラを見る。

猫ばかりに構っている。

良いなあ。ゴジラに構ってもらって、羨ましい。

「……あれ?」

そういえば何でそう思うんだろう。前も、ゴジラと寝ていたリトルヤシン・ゴジラを羨ましいと思った。

再びゴジラを見る。猫の腹を撫でていた。確かに猫はかわいいが、構い過ぎではないだろうか?

……猫。

「……………にゃあ」

「……………ん?」

「……………!?!」

気付けばアギラは指を曲げ猫の手を作りゴジラの背中を叩いていた。ゴジラが不思議そうに振り向いたがアギラ自身混乱して固まっていた。

「……………ね……………」

「ね?」

「猫ばかりと構ってるのは……………その……………ふあ!?!」

ポスンとゴジラの手がアギラの頭に乗る。顔が炎を吹き出しそう

なほど熱くなる。

「そうだな。そろそろ仕事に戻らねーとな。ありがとう」

「ちが……あ、いや……うん」

もう少し休んでても良かったのに、と思いながらゴジラの後が続くアギラ。

大きな背中だ。強くて、大きい背中。

男の背中だな、とアギラは思った。

「ねえ、ゴジラ」

「ん？」

「ボクってゴジラにとって、特別かな？」

「？まあ、他の人間よりは特別だな。そう言っちゃったらGIRLS全員が特別になるが」

「……そっか」

ゴジラの言葉に嬉しいような物足りないような複雑な感情を抱く。しかしまあ、悪い気はしないなとゴジラの横を歩いたのだった。

握手会？・怪獣娘!?

「キングジョー?」

「はいー。ゴジゴジはアギアギと一緒にキンキンの所に行ってもらいます」

ピグモンの言葉にゴジラはキンキンことキングジョーに就いての情報を調べた限り思い出す。

「……一つ聞いて良いか?」

「はいー?」

「……そいつ、マトモか?」

「……………」

脳内で再生されるのは事ある毎に共に寝ようとする三重人格少女や子作りを強要してくるロリッ娘、比較的マトモな方だが姉扱いさせ頭を撫でてくる銀髪。

「あ、あはは……大丈夫ですよー。キンキンはしっかりした子ですから。あ、後1人も現地で集合ですよ」

「そうか……」

というわけで現地で合流した。アギラとだけ。

「……後1人は?」

「遅刻、かな……」

ゴジラの呟きにアギラが返すとゴジラは時間を確認してはあ、と溜め息を吐いた。もう時間だ。遅刻した奴は放置しておこう。

そう決め歩き出すとアギラも慌ててついて行く。

「おー! アナタがアギラちゃんですか。眠そうな目がとってもCUTEですね」

「あ、ありがとうございます……?」

「そしてアナタがゴジラさん。本当に男の子なんですね。とってもCUTEです」

「どーも」

両手をパタパタ振り全身で喜びを露わにするキングジョー。
何と言うか、慣れない相手だ。フレンドリーさで言えばミクラスに
近いのかもしれないが。

「まあマトモそうで良かった」

「？」

「いや、何でもない」

ゴジラの言葉にキングジョーが首を傾げたので誤魔化した。

「しっかし、意外とファンが多いんだな……」

「怪獣娘を恐れる人は確かに居るけど、受け入れてくれる人の方が多
いからね」

ゴジラと共にステージの端からファンと握手しているアギラは何
処と無く嬉しそうに応えた。怪獣娘が受け入れられて悪い気はしな
いのだろう。彼女だって怪獣娘なのだから。

「まあ美人は得するって事だろ」

「……………ゴジラは、キングジョーさんのこと綺麗だと思うの？」

「ん？まあな……………写真集出すぐらいだし俺の感覚が可笑しいって事も
ないだろ。アギラも出してみたらどうだ？」

「……………う？」

前半の言葉にむっとしたアギラだったが後半の言葉に何故か頬が
熱くなり、勝手に口元が上がりそうになった。

そんな自分の反応を不思議がりムニムニと頬を弄っていると不意
にピタリと止まった。

「?どうした、アギラ……………」

「……………あの人」

ゴジラが不思議がったので指差すとそこにはホスト風の男が居た。

「好みのタイプか？」

「絶対違う……………そうじゃなくて、なんか……………変な感じ」

「……………」

アギラの言葉にゴジラもその男を見る。別段変わった所は

……………と、不意に男の身体から黒い靄が発生した。

「やっぱり、変……………」

「あ、おい！」

駆け出したアギラを慌てて追うゴジラ。と、同時に男が叫びながら机を投げ飛ばす。

「…………え」

「ツチ」

アギラに向かって飛んできた机を蹴り砕くゴジラ。そのまま男を睨む。ひっくり返すなら兎も角、あれだけ高く投げ飛ばすとなるとどう考えても人間業じゃない。自分と同じ男のカイジューソウル持ちか？しかし、そう言った気配はしない。

「取り敢えず止まれ。何なんだおまえ……………」

判断に困り男とキングジョーの間に入り込むゴジラ。キングジョーがゴジラの後ろに不安そうに隠れると血走った男の目が更に鋭くなった。

「何なんだよ……………何なんだよおお！」

「いや、それは俺の台詞なんだが……………」

取り敢えず一発殴って黙らせるか？しかし力が人間離れしていても耐久力までそうとは限らない。手加減するべきか……………」

「うおおおお！」

「はあ……………」

取り敢えず突っ込んできたので押さえ付ける事にした。腕を掴み床に押し付ける。少し力を込め過ぎたら折ってしまうので手加減したが……………」

「……………!？」

と、不意に男の身体を纏っていた黒い靄の一部が蛇の様にゴジラの腕に絡み付き向かってきた。思わず男を放り投げてしまうゴジラ。

「……………何だ、今の……………」

「う、うう……………」

右腕を見るが黒い靄は既に無い。戸惑っていると男が立ち上がる。しづとい……………」

「そこまでよ！」

「あん？」

仕方なく多少手荒で行くかとゴジラが指を曲げゴキゴキ鳴らしていると突然そんな声が聞こえた。声のする方向を見るとステージの屋根の上に二つの人影が。

「とう！」

二つの人影は同時に飛んだ。

「ソウルライド！ガッツ星人！」

「変身！」

二つの人影は光に包まれながら着地する。片方は白い髪が先端に近付くにつれ青くなり時折黄色い模様が入った長髪をたなびかせた灰色と白の身体のラインがよく見える格好、片方は赤や黄色、青などカラフルは格好に銀髪、口元を覆う笑みのようなマスクをした女性。

「来ました」

「私達が」

「ガッツ星人と」

「ジェットジャガーが」

「貴方を倒しに、ね☆」

「……………」

ゴジラは混乱している。

衝撃！怪獣王!?

銀髪の女、何処と無く見た事が有る。

そして思い出す。名乗っていた名前と前世の記憶が完全に一致した。

「ジェットジャガーか、うん……彼奴か」

共闘を誘われ共に戦った記憶が有る。確か液体窒素を口から吐く機能が有ると言っておきながら使わなかった奴だ。

まあ一対一なら使う必要がないほど強い、と言うのもあったが。後、初めて会った時は人間並みのサイズだったのに何時の間にか巨大化してた奴でもある。

後もう1人は、本来来るはずの遅刻者だろうか？

「もう、何時も何時も遅いデス」

「主役は遅れて来る？みたいな、ね♪」

「え、ええ……」

ガッツ星人と名乗った女性の言葉に流石のアギラも若干呆れていた。ゴジラはと言えば遅刻したくせにまず謝罪もなしかこの女、と指をゴキバキ鳴らしていた。

「そういう問題じゃなくて、働き過ぎなだけじゃ……」

「うあああ！じゃぐじゃあああ！」

「——って、それどころじゃないねー」

キングジョーが文句を言おうとするが男が奇声を発する。ゴジラに投げ飛ばされたというのに元気な奴だ。

「うん。さて、さてさて、さてさて早くに解決？で行きましょうか。行くよ、ジェットジャガー！」

「OK！」

ガッツ星人とジェットジャガーが拳をぶつけ合うと同時に男が駆ける。

「うおおー！」

「おっと」

「ほい」

それをガッツ星人はレポートで、ジェットジャガーは普通に避ける。

「黙れ！黙れええええ！」

「さっきから彼奴は何言ってるんだ？どつか別の世界の奴と交信でもしてるのか？」

ゴジラは叫び声をあげる男に引きながら、まあこのまま任せるかと傍観を決め込む事にした。

「あれは、何かに取り憑かれてるわね」

「うお、びつくりした。未希？何でここに……………」

不意に聞こえた声に振り返るとそこには未希がいた。今日は私服なのか、灰色のパーカーを着て髪をリボンで纏めている。

「バイトの帰り。変な気配……………」と言うのか、思念？を感じて…………あの男の人はそれに憑かれて…………」

未希の言葉にゴジラは男の体に纏わり付いた黒い霧を見詰める。アレがその思念とやらの正体だろうか？

思念…………そういえば何時だったか、未希の力が流れ込んで一時的に身体が動かなくなつた時に未希の記憶を覗いた事が有つた。ここではゴジラを操ろうと考える男に未希が襲われた記憶が有つたが…………それと似た様な事を人間相手に行っている奴が居るのだろうか？

ユラリとゴジラの右腕から黒い霧が立ち上りゆっくり移動する。

「ゴジラ？」

「ん？何だ…………」

「あれ、気のせいかな？」

しかしその霧は未希が話し掛けるとあっさり霧散した。誰に気付かれる事なく。

「はあ！」

「目が！目があああ！」

と、ジェットジャガーが行った強烈な目潰しに目を押さえのた打つ男。ガッツ星人が両手を光らせるが、不意に何かに気付くいた様に呟くと指先だけ光らせ放つ。

「ぎゃああああー！」

男はそのままパタリと倒れ黒い霧が消えていく。と、同時に未希が片手を伸ばす。霧がまるで何か感じ取れない風に煽られたかの様に不自然に揺らめき、未希がじつとりと汗をかく。しかし、数秒その場に留まっていたが霧は消えてしまった。

「ごめんゴジラ、逃がしちゃったみたい」

「そうか、あまり無理するなよ」

恐らくあの霧を捕まえようとしたのだろう。が、別段責める気はない。男を見るとキングジョーが男に歩み寄っていた。

「あ、あれ……俺は、何故」

「大丈夫ですか？」

「……あえ？」

男は手を差し伸べてきたキングジョーを見て赤くなりだらしなくニヤけるその手を掴み立ち上がり、簡単な事情説明を受けた後去っていった。

「で、久し振りだなジェットジャガー」

「久し振り！ゴジラも来てたんだね、私一人かと思っちゃってたよ！」

ゴジラの手を掴みブンブン上下に振ってくるジェットジャガー。前世でも握手はしたが今回はかなり激しい。

「つか、お前何時の間にGIRLSの職員と知り合ってたんだ？そんな報告受けてないぞ」

「ううん。さつき知り合った」

「目と目が合って気が合った」

「ねー♪」

どうやらジェットジャガーとガッツ星人は波長が合うようだ。会ったばかりとは思えない気安さを感じる。

「それにしても危機一髪でしたね。ゴジラさん、格好良かったデスよ」

「それに比べてボク、あまり役に立てずにすみません」

と、シヨンボリ落ち込むアギラ。

「何言ってるんだ。真っ先に飛び出したのはお前だろ？だから俺達も直

ぐ対応出来た」

「そう言ってもらえると、嬉しい……」

「こそ、十分十分……」

「で、ガッツ星人だったか？遅刻した事に関する言い訳は有るのか？」
「う、そういうこと言っちゃう……？」

ゴジラの顔に決まりが悪そうな顔をするガッツ星人。一応罪悪感
は有るらしい。

「あの一、ところでさっきのって？」

慌てるガッツ星人を可哀想に思ったのか、アギラが話を逸らす。と
はいえそれはゴジラも気になっていた事だ。

「シャドウミストだね」

「シャドウミスト？それがあの思念の正体？」

「思念？言い得て妙だね。そう、あれは弱った心の透き間に取り付く
精神だけのシャドウ……」

「人を凶暴化させるとってもこわーいシャドウなのデスよ」

「……怪獣娘の暴走、みたいな？」

アギラはチラリとゴジラを見る。ゴジラが暴走した時の事でも思
い出したのだろう。

「ちよつと違うけど、凶暴になって襲ってくるのは同じだね」

「シャドウミストは私みたいなファンと接する怪獣娘にはとつても迷
惑なのヨ」

「一般の人だもんねー。ちよつと強くなってるけど人間の火事場の馬
鹿力の域を出ないし」

だからあの時両手から指先だけに変えていたのか。手加減する為
に。

そう考えるとゴジラにとっては厄介な相手かもしれない。

「人の体に乗っ取るという事は力任せに倒すだけじゃない戦い方が必
要になってきますネー」

「おジョーはちよつと難しいよねー。だって、力任せにするしか能が
ない——」

「んー？ガッツく？」

「あ、いや何にも言っていないよ。ホント、ホントに……怒っちゃだめだめー!」

はあ、と頬に手を当てたキングジョーにガッツ星人がからかう様に言う。キングジョーが拳を握り締めた。

「……ん?」

と、不意にキングジョーは吹き出るオーラを収めゴジラ達の背後を見る。するとそこからシャドウが現れた。

「むがー!」

そのシャドウにキングジョーがボディプレスをかますとステージがひび割れ衝撃でアギラ達が浮いた。

「……ね」

「うんうん」

「ジェットジャガーみたいな戦闘スタイルって事か」

「飛び火した!?!」

カフェエ？ 怪獣王!？」

所変わり、ガッツ星人とゴジラ達はファミレスに移動していた。

「奢ってもらって悪いなガッツ星人」

「ジエツトジャガーさんもありがとうございます」

因みに二人の奢りだ。

「そんな丁寧にならなくていいよ。私の事もガッツで良いから」

「私はジエツトジャガーだから……ジャガーで良いよ」

「……ガッツにジャガー………女の子らしくないね」

「それは言わないで」

アギラの歯に着せぬ物言いにガクリと落ち込む二人。自覚は有るらしい。ゴジラは頼んでいたフルーツパフェを食いながら一つ質問をする事にした。

「そういえばさつきキングジョーが働き過ぎとか言ってたが、実際どうなんだ？」

「ん？……んー、おジョーのあれは少し言い過ぎかな。私は寝付きも良いしね。ベッドに入ったら直ぐ寝れるもん」

「それ寝不足の奴がなる典型例だぞ」

「……ほえ？」

ガッツはゴジラの言葉にポカンと口を半開きにして固まった。

「ん？いや、だから直ぐに寝付くのは寝不足……体が疲れてる証拠だ。睡眠時間が足りてても、深い眠りに就けてないんだろ。疲れてると逆に寝れないらしいしな」

「そ、そうなの……？いや、でも……その………」

「あまり無理はするなよ？お前が倒れたら元も子もない。少しは周りを頼れ、溜め込むと何時か抱えきれなくなるぞ」

「……ゴジラ」

「まあその時は俺も支えてやるが、出来ればその前に頼む。そっちの方が楽だからな」

ゴジラがそう言うて笑うとガッツも微笑む。

「ありがとう。私、頑張り過ぎる？所有るからさ、そういう時、頼らせてもらうよ。あ、代わりにゴジラが困った時は私が助けてあげる」

「おう、その時は頼むな……」

「……………」

アギラはお互い笑顔を浮かべ合うゴジラとガッツを交互に見る。何と無く、嫌な感じがした。これは何だろうか？

「にしてもあのシャドウミスト？だっけ……凄くやな感じがしたわ」

と、未希がシャドウミストを思い出したのか顔をしかめる。

「人の心に取り憑くような奴だしな、良い物ではないだろう」

「それはそうだけど……………っ！この感じ、また来た！」

「そうか…………」

未希の言葉にゴジラは立ち上がると店から出て行く。数秒後、外で爆音が聞こえた。

「ゴジラ!？」

「終わったぞ」

アギラ達が慌てて出るとゴジラがシャドウを握り、或いは踏み潰していた。

「新しい怪獣娘さんですか」

「ああ。何かもうガッツと仲良くなった。それと、未希も入れられないか？」

「ミキミキですか？」

ピグモンはゴジラの言葉に首を傾げる。未希は怪獣娘ではない。そこは別に問題ないのだが、理由が分からない。GIRLSの一般の職員は大歓迎ではあるのだが……………。

「未希はシャドウの気配を感じ取れる。これは有用だと思うぞ」

「……………そうなんですか？」

「はい。何と無く、ですけど」

「……………」

ピグモンは顎に手を当てうむむ、と唸る。

シャドウの気配を感じ取れる人員は喉から手が出るほど欲しいが、

それはつまり精神を乗っ取るシャドウミストに対して反応し易いと言う事ではないだろうか？

「ピグモンさん、私は……この力を役立たせる事が出来るなら使いたい。前世みたいに……」

「ミキミキ……解りました。本来怪獣娘さんではない方には試験を受けてもらう必要があるのですが、シャドウ退治に貢献出来るなら特別処置として認めます」

「ありがとな、ピグモン」

「ありがたいと思っっているならそうですね……今度美味しいスイーツのお店で美味しいスイーツを奢ってくださいね。皆さんには内緒ですよ？ 賄賂はいけない事ですからね」

「ん？ おお、わかった……」

「うまく二人だけの誘いをしましたね」

ゴジラが先に帰り、必要な書類に記入していた未希が不意にピグモンにそんな事を言う。ピグモンはしかし慌てる事なくニコニコ笑っていた。

「ゴジゴジはライバルが多いですからね」

「あー、確かにモテそう」

「ミキミキはそういうの、興味ないですか？」

「うーん、私は前世で人間だったから……恋愛経験もありますしね」
未希はそう言っただけに似合わぬ大人びた笑みを浮かべたのだった。

夜、シン・ゴジラとリトルは目を覚ます。

抱き付いていた温もりが消えた。見ると普段共に寝ているゴジラが上半身を起こしていた。

「……………」

ゴジラの目はとても冷たいモノだった。シン・ゴジラは戸惑い、リトルは既視感を覚える。

会ったばかりのゴジラがしてた目だ。ゴジラにそっくりな、スパー
スゴジラがリトルを虐めていた時にしていた目だ。

「パパ……？」

「……………ん？」

リトルの言葉にゴジラは目を何時もの物に戻りリトルを見る。

「どうした、怖い夢でも見たか？」

ゴジラはそう言ってリトルの頭を撫でた。

深い深い森の中で一人の男が木に縄を結び輪っかを作っていた。
いざ首を通そうとして、不意に視線を感じ止まる。

「……………」

振り向くとそこには少女が居た。木からヒョッコリと顔を覗かせ
た灰色の髪の毛が太い垂れ目の少女。

「……………!？」

少女は男の視線に気付くと慌てて隠れた。が、直ぐにまた覗いてく
る。

「君、何でこんな所に？」

「……………住んでる」

「ここに？ここ、富士の樹海だけど……………」

「うん。あなた達みたいの頻繁に来て迷惑。埋めるの大変…………」

ジト、と責める様に男を覗む少女。住んでる？ここに？

しかもどうやら死体を埋めているらしい。

「命は一つ。なのはどうして無駄にするの？」

「……………会社、クビになっちゃってね……………妻には逃げられるし、娘も
養ってやれない」

「娘はきつとおとーさんと居たいと思う……………」

「……………そんな事、ないよ……………」

男はそう言って笑う。人と話して少しだけ冷静になれた。しかし、
冷静になった所で現状が変わるわけでもない。

「後、そこ危ない」

「へ？」

次の瞬間地面が崩れ突如開いた穴に男は落ちていった。

「いてて……ん？」

穴は結構広い空間に繋がっていたらしい。目が慣れてくるとまた人影を見付けた。

先程の少女より年上の別の少女だ。緑の長い髪を伸ばし、この時代には珍しい煙管を加えていた。

「……………何だお主」

「——ツ!？」

ゾグリと全身の細胞が縮みあがる。あれは、駄目だ。人が目にして良い存在ではない。男は振り返り必死に穴を上り走り去った。

代わりに先程の少女が入ってくる。

「……………倒したの？」

「ああ、ここに住んでいた奇妙な奴らは残らず消してやった。で、さきの男は誰だ？」

「また自殺志願者」

「カカ! またか、相も変わらず物好きなものだ。何故こうも命を大事にしない奴らが霊長の長など気取れるのか…………」

緑髪の少女はそう言って笑うと不意に虚空を見つめる。そこから黒い靄が発生し襲い掛かってきた、が…………

「下らん。失せろ…………」

『——っ!!?』

少女の眩き一つであっさり消え去った。

「最近多いね」

「ああ……………何なのだ此奴等は……………情報が足りん、人の街に行くぞ」「ホント!? わあい! 久し振りの街だー!」

緑髪の少女の言葉に灰髪の少女は嬉しそうにピョンピョン跳ねたのだった。

節分?・怪獣王!?

「節分ですよ〜!」

ピグモンが両手を広げると背後のスクリーンに節分と言う文字がデカデカ現れた。

「節分?」

【解答】魔目、或いは摩滅……転じて豆を投げ鬼、邪気を払う行事です。また、恵方を向いて巻き寿司を完食すると縁起が良いんだかと言う恵方巻きもあります」

「いや、それは知ってるが何でいきなり……」

ゴジラの言葉にピグモンはよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに笑みを浮かべる。

「GIRLSはこういう行事をあまり行ってきませんでしたからね。リトルンやシンシンみたいに幼い子が入りましたしこれを機にと思いでいます」

「……まあ、リトルやシンが楽しめるなら俺は構わねーよ」

「やるー!」

「……やる」

「皆さんはどうですか〜?」

「やるやるー!」

「ボクも……」

まずは豆まき。

鬼役はアギラ、ミクラス、ゼットン、ザンドリアス、アンギラス、ラドン、キングギドラ、メカギドラ、デストロイア、ゴモラ等の角を持つ怪獣娘達だ。

「あ、ゴジゴジ。豆を投げる時は手加減してくださいね」

ピグモンの言葉にゴジラは握っていた豆を親指で弾く。壁に当たり豆は砕け散ったが壁にも亀裂が走った。

「確かに手加減した方が良いな」

「ですね……」

ゴジラの言葉にピグモンは呆れながら頷いた。

「ところで何だあの格好？」

「ラムちゃんですよ。知りませんか？」

「知らん」

ゴジラはトラガラビキニの一同を見てピグモンに問い掛けるが返ってきた応えに対する知識は、生憎ゴジラの中に無かった。

「うう、恥ずかしい……」

「んー、私はそうでもないかな」

「ミク先輩は何時もの格好と変わりませんしね」

恥ずかしそうに身を隠すアギラに対してミクラスは堂々としていた。それに対してザンドリアスが普段のミクラスの格好を思い出し微妙な表情をしていた。

「それじゃあ豆まきを始めますよー。鬼はー——！」

「外!!」

と、ゴジラとリトルとシン・ゴジラが高速で鬼達に迫る。

「あぶない」

「いたたた!」

アギラ達が回避しゼットンにはバリアーを張る。逃げ遅れたミクラスが集中砲火を受けた。

アギラ達もガッツやレッドキング達が投げってくる豆を避けたり防いだりしていた。

「お仕置きだっちゃ」

「ぬぎゃー！」

カマキラスはエレキングの反撃に遭い感電していた。

「言い忘れてましたけど鬼は反撃ありですよ」

「そうなのか……おっと……」

「……惜しい」

ゴジラは背後から迫ってきたアギラの棍棒を躲す。見たところプラスチック製だろう。中身は空っぽだが。

「ほい」

「あう！」

ゴジラが豆を投げると見事アギラの額に激突した。赤くなった額を涙目で押さえるアギラ。今度はゼットンに向かって豆を投げる。

弾力性の有るバリアーに跳ね返された。

「ま、やっぱり一番の強敵はお前だよな」

「負けない」

「そうかい。お前相手なら本気で良さそうだ」

と、ゴジラは全力で豆を投げる。が、音速を超えた豆が空中で粉々砕け散った。

「次は恵方巻きですよ。ピグモンの手作りです」

「へえ、大したもんだ。人数分は大変だろうに」

「とつてもGREATな出来ですね」

ピグモンから配られた恵方巻きを受け取ったゴジラとキングジョーは素直に称賛する。まるで店に売ってる様な出来だ。

「オルガ、恵方つてどっちだ？」

「あっちよ」

スペースゴジラはオルガに恵方を聞き口を大きく開けかぶりつく。彼女達も食べるのは少し大変そうで、当然幼いリトルやスーもアグアグ食べる。

「ほらほら、早くゴジラも食べなよお。その、大きくてえ、太くてえ、黒いのをさあ……………」

と、ヘドラがスケッチブックは片手にニヤニヤ笑みを浮かべてゴジラを見詰めていた。何と無く不快な視線だったが腹は減っているの
で食べる事にする。

恵方巻きを恵方に向け、口を開け……………噛み千切った。

「何で!？」

「何が?」

「それじゃあRじゃなくてGになっちゃようよお!ボクの漫画、グロは勘弁なのにい」

何やら訳の分からない事を言っていたがそのまま恵方巻きを完食した。

「に、してもそのトラガラビキニ……ラムチャンだったか？ どういうキャラなんだ？」

「萌えキャラよ」

ゴジラの問い掛けにエレキングが応えた。燃えキャラと言うからには燃えているのだろうか？

「ところでゴジラ、女の子がこういう格好をしているなら男として何か言うべき事はないのかしら？」

「ん？ そうだな、綺麗どころが揃ってるし、似合ってるぞ」

「……………男に誉められるのは慣れてるつもりだけど、着飾らない言葉も偶には良いわね」

と、エレキングは若干頬を染め俯いた。

「ねえねえ私はー？」

「可愛いぞ」

「……………なんか、その可愛いって子供とかに向ける可愛いって気がするんだけど」

「気のせいだ」

ゴジラはゴモラと目を合わせる事なく応えた。

特訓？怪獣王!?

ゴジラは夜中、目を覚ます。最近どうも寝付きが悪い。

まだ海底に住んでいた頃、突如光によって仲間が焼かれる瞬間の夢を見たり、雑食性の恐竜として島に住んでいると人間がやって来て攻撃された挙げ句やはり光で焼かれる。

様々な武器で攻撃されたりゴジラアアアア！と叫ぶ男を殺したり。

兎に角、悪夢で目が覚める。

「……………」

「ん、ゼットン?」

リトルとシン・ゴジラを起こさないようにベッドから出て歩いてみると何やら書類を整理しているゼットンが居た。

「何やってんだ?」

「訓練メニュー作り。頼まれた……………」

「……………ふーん、俺も手伝おうか?」

「良いの?」

「眠れなくて暇だしな」

「ありがとう」

次の日。怪獣娘達はピグモンに呼ばれ、ある一室に集まっていた。

「と言い訳で、シャドウミストと共にシャドウも活発化すると思われる。皆さんも特訓しましょう」

「でも、弱いんですね。別に必要ないんじゃない?」

ピグモンの言葉にウインダムが遠慮がちに言う。ピグモンが懐からソウルライザーを取り出す。

「ソウルライド、ピグモン」

変身し、そして布に包まれた何かを置く。布を取ると大量のトレーニング器具が現れた。

「変身した上にピグモンさん容赦ない!」

「皆々、頑張ってくださいね〜」

ピグモンは旗を振り皆を応援する。しかしここは何処だろうか？
何で都心から数分で広野に辿り着くのだろうか？

「本当にコレ、キツいんだけど」

と、頭に重りを乗せ両手にダンベルを持ったレッドキング。

「誰がこのカリキュラム考えたの〜？」

尻尾にダンベルを付け片手で逆立ちして片手で扇子を開きその上に水の入ったコップを置いてバランスを取るゴモラがボヤク。

「フン、フン……………ん？」

「……………ふい」

角にバーベルを引つ掛け腕立て伏せするエレキングが重りを引き摺りながら走るゼットン見ると顔を逸らされた。

「お前かー！」

「楽だと、特訓に、ならない……………それと、ゴジラも手伝ってくれた」
ゼットンの言葉にゴジラを見ると尻尾一本で体を支えて重量挙げをしていた。

「ゴジラ尻尾強いね〜」

「俺は尻尾一本で体を浮かせて移動出来る。昔それでドロップキック擬きを食らわせた」

「あー、懐かしいね」

ゴジラの言葉に足を引つ掛け逆さまで腹筋するジェットジャガーが懐かしそうに頷く。

「でもさ〜、あの子達はちよーつと可哀想じゃない？」

ゴモラが見るとベルトコンベアの上で必死に走っていた。その後ろには棘が……………。

「つらいー」

「アギさん、大丈夫ですか？」

「ウインちゃん、こそ……………」

「キツです〜、先輩キツい……………あ〜、キツいな〜♪」

必死に走るミクラス、アギラ、ウインダム。ザンドリアスだけはよ

く見ると浮いていた。そのザンドリアスの眼前を一筋の光線が通過する。

「……………」

「グルルル」

「今シンの前で如何様すると狙い撃ちされるぞ……………」

シン・ゴジラはゴジラが生み出したセルヴアムを光線で撃ち落とし
ていた。

「ちなみにお前はまだまだましだぞ？キングシーサーとカマキラスは、モ
スラと模擬戦だしデストロイアとかはバトルロワイヤルだし……」

遠くの方では戦闘音が聞こえてきた。模擬戦というのは本当なの
だろう。

「……………」

と、不意にゴジラは先程持ち上げていた岩を置き溜め息を吐いてい
るガッツを見付けた。

「どうしたガッツ……………」

「ん？あ、ゴジラ……………」

「楽だと特訓にはならないが身体を壊したら元も子もない、キツ過ぎ
たら言ってくれ」

「や、大丈夫大丈夫……………」

「……………そうか？顔色悪いが……………」

と、ガッツの額に手を当てるゴジラ。熱は無い様だ。

「……………ゴジラってさ、私のこと異性として見てる？」

「ん？そりゃガッツは女だろ？」

「……………ん……………ま、暖かくて気持ちいいからもう少し」

「じーつとしてられないんだから〜」

ピグモンはエレキングと通信しながら彼女の行動の早さに呆れる。

「どーにもならない、しね……………」

「で、何か解った？」

「シャドウミストは、あくまで副産物。奴らを生み出す、何か居るみ

たい」

「シャドウや、シャドウビーストよりも？」

「ええ、強い存在……」

エレキングの言葉にピグモンはゴクリと唾を飲む。

「後輩ちゃん達のフォローを徹底します」

「お願いね」

ゴジラは街の中を一人歩く。

中二的な言い方だが右腕が疼いていた。

「こっちか……」

ゴジラは壁を蹴り建物の屋上に向かう。

「……………」

「ツ!?チィ!」

屋上に着いた瞬間ビームが飛んできた。咄嗟に弾くゴジラ。空中でバランスを崩したが指の力で屋上の縁を掴むと腕の力で屋上に乗り出した。

「…………ガッツ?」

「……………」

そこに居たのはガッツだった。無表情でゴジラを睨み、光線を放つてくる。

「嘗めんな!」

しかし、ゴジラはその光線を片手で弾くと床を蹴りガッツに迫る。

「…………?ガッツ、じゃねえなお前……誰だ?」

「……………っ!」

ガッツと良く似た少女の首を掴み尋問するゴジラ。

「…………!」

取り敢えず一度気絶させようかと思った瞬間ゴジラの右腕から黒いオーラが吹き出し絡み付く。

反射的に腕を振るうと少女が屋上から宙に投げ出された。

「しまっ——くそ!手を伸ばせ!」

ゴジラは直ぐ様飛び出て腕を伸ばす。が、少女の姿が消える。
「うわ?! 吃驚した!」

地面に着地するとミクラスの声が聞こえてきた。見るとゴモラとアギラ達が居た。

「どうしたのゴジラ………ゴジラ?」

アギラはゴジラに近付こうとするがゴジラは右腕から感じる不快感に蹲っていた。

「ゴジラ、大丈夫……?」

「っ……ああ、もう大丈夫だ」

漸く不快感が消え立ち上がるゴジラ。

「ゴジラ、何か……あったの?」

「……………いや」

ゴジラは立ち上がり去ろうとするがアギラがゴジラの服の裾を掴む。

「……………アギラ?」

「ゴジラ、ボク達……そんなに頼りにならない? ちゃんと話してよ……………」

「……………」

どうやらアギラには何か隠し事をしているのがバレたらしい。

「……………頼りないなんて思ってない」

「なら……………」

「ちよーつと面倒な事だな。相談し難いんだ、見間違いだと困るし……………何より証言だけで証拠がない」

「それ……………誰の為?」

「お前の為でもあるよ、友達の話だからな」

と、アギラの頭を優しく撫でる。

「……………ちゃんと、落ち着いたら話してよ」

「ああ、その時は頼らせてくれ」

「……………うん」

バレンタイン?・怪獣王!?

『明日はいよいよバレンタイン!皆、どんなチョコをあげるか決まったかな?』

この季節になると何時もこんなCMが流れるな、とバトラは嘆息した。

好きな奴に好きな時に告白する勇氣も無いなら最初っから引っ込んでれば良いんだ。くだらない行事、後押しされなきゃ何も言えないなら、それは所詮その程度と言う事だろう。

『そこの街行くおねーさん、アナタはチョコをあげる人いますか?』

『取り敢えず会社の同僚達に。今は友チョコとかも流行ってますし……』

「……………」

チョコと言うのはどうしてこう、種類が多いのだろう。

砂糖の量だの隠し味だので変わる味など微々たる物だろうに、おまけに大きさや形まで変えると来たものだ。

「お客様、どの様なチョコをお探しですか?」

「え……あ……その、ゴジ……や、仕事場の同僚に。ああ、ただの同僚。友チョコです」

「ではこのハート型チョコなど如何でしょう?」

「義理だっつってんだろ!?!」

「はい。最近では義理でもハート型は珍しくくないですよ!」

そうなのか、と首を傾げるバトラ。生憎彼女は世情に疎い。店員はニコニコと微笑みを浮かべ続けている。

「じゃ、じゃあコレ——」

「あれ、バトちゃん?」

「——っ!?!」

ギクリと身を竦ませ振り返るとモスラが居た。

「あれ、バトちゃん……それ、チョコ?」

「ちちちち違う!こ、これは……そう、自分用だ!」

店員はニコニコ笑っている。

「自分用？でもバトちゃん、甘いの手手じゃ……」

「……あ？……あつ」

そういえば誕生日、クリスマス、バレンタイン、その行事になると必ず現れる謎の存在Xから逃れる為にそんな事を言った記憶が有る。

「さ、最近食べれるようになっただよ」

「そうなの？良かった、じゃあ今年はバトちゃんの分も作るわね！」

「止め——……待て、アタシの分……も？」

「うん。ピグモンさんにレッドキングさん、エレキングさんにアギラちゃん、ミクちゃん……取り敢えず今日は参考にしに……」

ああ、そうか。友チョコなんて珍しくもないもんな、と安心するバトラ。が、直ぐに固まる。

アレが大量生産されるのか？それは良くない、まずい。確実に……

「モスラー！」

「はい？」

「皆で作ろう」

「そうですね。全員でなら意識してる事がバレませんからね」

この店員は何を言っているのだろうか？取り敢えず今は無視だ。

「はいみなさくん、第一回、バレンタインのチョコ作りを始めますよ」

♪

ピグモンはにこやかに笑いホワイトボードにチョコの作り方を書く。

「良いですか皆さん、チョコに体液や媚薬等を入れてはいけませんよ？特にビオビオ。それとメカキンちゃん、自分にチョコを塗ってプレゼントするのもダメです」

「ホワイトチョコは？」

「もつと駄目です！」

ピグモンはもお、と溜め息を吐いて次にスーパーメカゴジラをじろりと見る。

「自分にリボン巻いてプレゼント、何てのも駄目ですからね」

「【心外】当機はその様な事をしない」

「目を合わせて言いましたよ〜」

アギラは溶かしたチョコに牛乳を混ぜる。ゴジラは苦い方が好きだろうか？

でもどういう形にしよう？ここはシンプルにハート型？

「アギちゃん鳩型とか変わってるね〜」

「……………」

何故かシンプルなハート型にするつもりがわざわざ削って鳩型にしてしまった。理由は不明だ。

「ククク、これさえ食べれば奴も一溜まりもあるまい…………」

デストロイアはチョコの中にオキシジエンドストロイアを混ぜる。

「後はうまそうな形に固めれば……………」

オキシジエンドストロイヤー。何でも溶かす薬品だ。つまり…………

「…………固まらない!？」

「ガアアアアアオ！」

「——!？」

ゴジラの叫び声にシャドウミストが散り散りに散っていく。

「今日はやけにシャドウミストが多いな。特に男……………」

気絶した男達を見てゴキリと首を鳴らす。

「あの、ごめんなさい。下駄箱を間違えました」

「うおおおおお！」

「またか…………」

シャドウミストは心の傷に取り憑くと言うが、今日は心に傷を負った者が多すぎる。何が原因なんだろうか？

「あー疲れた疲れた」

ゴジラはコキコキ首を鳴らしながらGIRLS本部に戻り、先程ピグモンからメールで来るように言われた部屋に向かう。

「おいピグモン、用事っていったい……………」

「HAPPY VALENTINE!!!」

ドアを開けた瞬間少女達がラッピングされた箱を渡してくる。

「ゴジラ、これ…………」

「ほーい、私達からチョコだよー」

「どうぞ受け取ってください」

と、カプセルガールズの面子がゴジラにチョコを渡す。ミクラスは笑顔で、ウィンダムは微笑を浮かべアギラは箱で顔を隠しながら渡してきた。

「ほいゴジラ、これあーげる」

「渡せる男なんてGIRLSじゃお前ぐらいだしな」

「義理よ」

ゴモラ、レッドキング、エレキングからも受け取る。

「……………食うが良い」

「飲めの間違いだろ…………」

デストロイアがチョコドリンクを渡してくる。取り敢えず持つて帰るのも大変そうなのでこの場で飲む事にする。

「…………何か舌がピリピリして激しい胸焼けがするんだが」

「ツチ、その程度か…………」

「……………何入れた」

「さあな…………」

「……………ほう？」

ゴジラとデストロイアの間に不穏な空気が流れているとモスラとバトラが寄ってくる。

「ほれ、義理だ」

「はいゴジラ。何時もお疲れさまです。早く食べてくださいね？時間が経つと溶けて逃げるので」

「……………」

「監視はしてた。してたんだ……………」

ゴジラに見られグツと悔しそうな顔をするバトラ。監視付きでマトモな料理が出来ないというのはある意味才能な気がしてきた。

その後女子達は女子達でチョコ交換をしてゴジラは貰ったチョコを抱えながら歩く。ものすごい量だ。食べきれるか？

「パパ、一緒に食べよ！」

「そう、すれば…………すぐ食べれる」

「んー、そうだな……………」

と、二人の提案に乗ろうとしたゴジラだったが不意に先程のアギラ達の顔を思い出す。

「……………いや」

「…………？」

ゴジラの言葉に二人は首を傾げた。

「これは、俺が彼奴等から貰ったものだ、あげられない……………」

「……………ふふ」

後をこっそり付けていた未希はその光景を見て満足そうに微笑んだ。

ははおや？・怪獣蛾!?

バトラが街の見回りに行き、夜のパトロールを終え少し寝過ぎたモスラが目を擦りながら起きる。

「ん〜ふぁ……そろそろお昼かぁ……………」

太陽は既に高い所に有る。時計を見ると十時半。

寝過ぎてしまった。しかし、何か熱いような……………?

基本的にモスラは涼しい格好で寝る。前世、火達磨になったり熱線で焼かれたりして熱いの少し苦手意識が有るのだ。

今はまだ冬。何が原因だろう？と、寝惚けた視界で部屋を見回すモスラは自分に引付く二つの影を見付けた。

久し振りに一人で散策。ここ最近シャドウミストの対策で二人以上で組む事が多かった。

まあゴジラの世界の怪獣達は僅かな例外を除き基本的に強いので単独でも問題ないと判断されたのだろう。

くぁ、と欠伸をして尻尾をユラユラ揺らして歩くゴジラ。と、その時――

「いてえ!？」

尻尾の先に何かか噛み付いた。

振り返る。何か小さな影が路地裏に逃げていった。犬にでも噛まれたか？

「…………あの、ゴジラ」

「ん？モスラ、お前今日非番じゃなかったか？」

犬を追おうか考えていると声が掛かる。振り返ると困った様な顔をしたモスラが居た。

「えつと…………その、少し言い難いんですけど」

「……………」

路上で男女が話しているのは嫌でも目立つ。こういう不躰な視線は苦手だ。さつさと用件を言つて欲しいと思つたゴジラだったが、次の瞬間責めて移動すれば良かったと後悔した。

「子供が出来たみたいなんです」

「「!?」」

ざわ!?と周囲がざわめき、視線が更に集まる。

ゴジラはゴジラでモスラから放たれた言葉に思考を停止していたが、直ぐに復活する。

「……何故、それを俺に言う?」

「子供達が貴方に会いたがっているんです」

「何で……—っ!?!」

また尻尾に噛み付かれた。今度は逃がさぬと尻尾を持ち上げられる高さ限界に持ち上げ振り返るゴジラ。

「……………何だ此奴等……………」

茶髪の子ららしき良く似た少女達がゴジラの尻尾の先端に噛み付いてぶら下がっていた。

「私の娘です」

「……そうか、で。何でお前の娘はさつきから俺の尻尾を噛みながら蹴ってくるんだ。地味に痛いんだが……」

「それが……………」

モスラが発言に迷っていると少女達は尻尾から口を放し着地すると同時にゴジラの脛を蹴る。

「んが!?!」

この痛み、人間の力ではない。怪獣娘だろうか?

「ママ虐めんなDV夫」

「はあ?」

「……ゴジラは刷り込みって知ってますか?」

「ん?まあ知ってるが……リトルとかもしばらく人間を親と思ってたしな。托卵性としては珍しいけど……………」

「托卵性なのに刷り込みが有るんですね……取り敢えず、私達は虫型の怪獣ですけど刷り込みが有るんです。役目を伝える必要が有りますから野生の虫と違って子育てしますから」

「ん?そうだったのか?」

てつきり直ぐに戦いに挑んでくるから母親を理解する生態なのか

と思っていたが。

「それで、この子達が前世で最初に見た大きな生物は……」

「……………俺、か？」

「……………はい。ゴジラを父親、私を母親と認識していたみたいで……………その、ゴジラは前世で私を……………」

「……………」

ほぼ毎回子供の前で焼き殺してた記憶が有る。DV夫と言うのはそれが原因か。しかもさつきからゲシゲシゴジラの足を蹴ってくるのだが。

「つまり何か？此奴等の中で俺は毎回お前を殴る蹴る燃やす最低親父って事か？」

「まあ半分は事実ですし……………」

「それは……………そうだが……………ん？」

と、何時の間にか周りに白い糸が飛んでいた。絡み付いてくるそれを一部体温を上げて焼き切っていく。

糸の出所はモスラの子供達。

「……………」

「……………」

ゴジラと睨み合う双子。どうしてくれようか此奴等、とゴジラが怒気を込めるとモスラがハッと子供達の前に出る。

「や、やらせませんよ……………！」

「……………」

「ママ虐めるな！」

「……………」

ゴジラははあ、と溜め息を吐くとモスラの頭をワシヤワシヤ撫でる。

「……………」

「大人気なかった。此奴等は母親のお前を守ろうとただただもんな……………俺だって親だし、子を守ろうとするお前の気持ち解る。悪かった……………」

そう言う今度はモスラの子供達に視線を合わせる。

「おまえ達も、何時も何時も悪かったな……許せとは言わねー
……何てのは許して欲しい奴の言い訳だからはつきり言うぞ？
もうしない、許してくれ」

「……………」

ゴジラの言葉に双子は顔を見合わせる。

「……許さない」

「そか……」

「まだ許さない」

「……ありがとな」

「所でお前、幼虫の時の記憶はどうなってんだ？」

帰り道、両手にそれぞれ子供達の手を繋いで歩いているモスラにゴジラが不意に尋ねる。今までの会話から幼虫期の記憶は有ったはずだ。

「有りますよ、一応……」

「そうか………んで、増えた原因は？昨日何か変わった事をしたのか？」

「特には……あ、何時もと違う事と言えばバレンタインのチョコの残りを食べた事でしょうか？」

「……………で、此奴等の名前どうする？」

ゴジラは深く尋ねない事にした。話を逸らされた訳だが特に気にした様子もなくモスラは二人を見詰め首を傾げる。

「何にしましょう……」

「モスとラーで良いんじゃない？」

「「ちゃんと考えろダメ親父」」

「ダメ親父だあ!？」

その頃ピグモンははー、と重い溜息を吐いていた。

「どうした？」

「あ、ラドラド……丁度良い所に……」

「……？」

「実はリトルンの祖父母さん達が、リトルンを引き取りたいって言い出したんですよ。ゴジゴジ達は確かにリトルン達を育ててますけど養子縁組の許可を取っている訳でも無いし、血縁関係的にも………けっこー面倒な事になりそうで」

家族の絆？・怪獣王!? (前編)

「デユクシデユクシ！」

「いい加減に鬱陶しいぞてめーら！」

GIRLS本部への帰り道、モスラの娘達——名前はレオとミドリにした——に時折攻撃されるゴジラは流石に鬱陶しくなったのか叫ぶ。直ぐ様母親の後ろに隠れ舌を出してくるレオとミドリ。

ゴジラが約束通りモスラに手を出さないのを上手く利用している。

「べー！」

「……なあモスラ、一発ぐらいは殴ってと良いと思わねー？」

「駄目です」

「……………ツチ……………ん？」

不意にゴジラはキョロキョロ辺りを見回す。

視線が集まるのはまあ仕方ない事だが、今一瞬不快な敵意を感じた気がしたが、気のせいかな？

「あ、ゴジゴジお帰りなさい……………」

「ただい……………ん？どうかしたのか？」

GIRLSの本部に着くとピグモンが出迎えたが様子が可笑しい。何か有ったのだろうか？

と、ピグモンが言葉に迷っていると隣のラドンが応える。

「実は、リトルの祖父母がリトルを引き取りたいと……………」

「……………あ？」

ラドンの言葉に数秒呆けたゴジラは直ぐに眉間にしわを寄せ不快気な声を出す。リトルの両親はリトルを捨てた。その両親を育てた奴が？

明らかに嫌悪感を放ち隠す気も無さそうなゴジラにピグモンがはあ、と溜め息を吐く。こうなりそうだから黙っていたのに。

「孫娘を引き取りたいと願い出るジジババがそんなに嫌いかな？」

「あん？」

振り返るとそこには六十代程の老人が二人居た。爺と婆。爺の方

はゴジラをジロリと睨んでおり、しかしゴジラが反応したのは隣の老婆。

「……あんた、さつき俺の事睨んでた奴だな。付けてたのか？」

「視線に敏感なんですね？後ろめたい事でも有るんですか？質問にははい、と応えましょう。貴方がその子供達を足蹴にする所から見えておりました。怖かったですでしょう？貴女達」

「コイツが怖いのは昔からだ」

とかゴジラの悪口を言いながらも老婆から隠れるようにゴジラの後ろに隠れる。そう言えばモスラは基本的に卵時代は人間の見せ物にされていた。苦手意識でも有るのかもしれない。

「でも此奴は理不尽な程強くても、理不尽な怒りを向けない」

「へ？」

「^{仲間}同族を殺された。その力を平然と利用して、破壊だけで見逃しても性懲りも無くまた同じ事をする。^{仲間}同族の死を汚される。復讐の邪魔をされる。された方からしたら堪ったものではないかもしれないけど、それは此奴も同じ事。堪ったものではない事された。怒って当然。邪魔をすればそいつに怒りを向けるのも当然」

味方してくれるなど思っていなかったが予想外のミドリとレオの言葉にゴジラもモスラも呆ける。

された方には堪ったものじゃない、と言うのは自分達からゴジラに向けての言葉でもあるのだろうか。

「で、でも暴力はやりすぎじゃないかしら？」

「確かにそう。でも此奴を悪と呼べるとしたら、家族も友人も皆殺しにされても復讐しないと云える奴だけ」

その言葉に固まる老婆を無視して二人はさつきと寮に向かってしまふ。モスラは老婆に頭を下げてから二人の後を追った。

「……………取り敢えず、場所を変えましょうか」

老夫婦（名前を智代と哲治と言う）は談話室に移動し、出されたお茶を飲む一同。しばらくするとパタパタ足音が聞こえ扉が勢いよく

開く。

「じいじ！ばあばー！」

リトルは満面の笑みを浮かべ老夫婦に向かって飛び込もうとする。全力で……

「アブね!？」

ゴジラとラドンが慌てて両足を掴むとビタン！と机に顔から落下するリトル。鼻を押さえ涙目で起き上がった。

「いったーい！何するの!？」

「バカかりトル！そいつらはただの人間なんだ！全力で飛び付いたら最悪背骨へし折るぞー！」

「それどころかこの老体なら死ぬ事だつて有り得る……」

「……………じいじ達、死んじやうの?」

「お前が力の使い方誤ればな……人間つてのは脆いんだ」

本気で愛でよう等と思えば直ぐに壊れる程に、人間は脆い。頭の中に侵入してきた意志に対して少しの反意を抱いただけで、嘗てゴジラは未希を傷付けた。未希としては、ゴジラが殲滅対象じゃなくなる為の行為なのに、嫌がっただけでそれだ。

「じいじ、ばあば、ごめんね?」

落ち込みながら謝罪するリトルに二人は笑顔を向けた。

「それで、本題に入りますがゴジラさん。里子ちゃんを家で引き取らせてください……」

「……………自分が何言ってるか解ってるのか?」

「ええ、今まで何の音沙汰もなく、いきなりやってきて何を言っているんだとお思いでしょう。ですが、貴方に就いて少し調べさせていただきました。黒慈ユウラ、ずいぶん警察のお世話になっているようで……先程の、理不尽な怒りは向けないとの事でしたが、過剰と言う言葉をご存じですか?」

「……………」

「それと、言い訳になるかもしれませんが我々は里子ちゃんが捨てられたのを知ったのは最近なんです。勝手に土地の一部を売り、上京した息子とほぼ絶縁状態で会社の海外旅行に行く間の夏、里子ちゃんを

預かるだけの関係でしたから………そしてこの前、とある番組の再放送を観たんです」

十中八九あの大吃いのテレビ番組だろう。心当たりはそれぐらいしか思い付かない。

「それで息子夫婦に問い合わせるところ、漸く吐きまして……」

「せめてどんな親が代わりになってるのか見て、俺だった、と……」

「そうだ……」

ここにきて漸く哲治が口を開いた。

「乱暴云々は置いておいて、それが間違った事じゃないならワシから言う事は無い。だが、血の繋がらない仮初めの親子が上手く行くとは思えない」

「………あ？」

「最初は上手く行くだろうさ。子供にとって優しい大人は安心する存在で、まともな感性を持つとりや他人の子供でも子供は可愛い。だが成長したら話は変わる。反抗期、生意気なクソガキに、偉そうな父親。実の家族でも大変なそれを乗り越えられるとは思えない……」

ギチリ、とゴジラの歯が軋む。

「何も永遠に突き放そうって訳じゃない。高校生……義務教育が終われば上京させても良い。その時また、会えば良い……」

「………けんな……」

「ゴジラ？」

「もちろんその時、里子の心境にも変化は有るだろう。その時改めて……」

「ふざけんな!! てめえらはまた、俺から何もかも奪う気か!!」

ドゴン! と音を立ててテーブルが砕け散り衝撃だけで床が一センチほど沈む。皆が驚愕する中ゴジラは黒い靄を放つ右手を伸ばそうとして――

「パパ、駄目!!」

リトルがその腕に抱き付き止まる。

「………ゴジラさん、幼い子供に親の決定権が無いのは何でだと思います?」

「……………」

「感情に流されてしまうからです。それで、人生の選択を誤ってしま
う……………」

「……俺がリトルを育てんのが、リトルの人生を歪めるって言いたい
のか?」

「少なくとも、今の行動を見る限り……………」

智代はそう言うのと姿勢を低くしてリトルと向き合う。

「里子ちゃん、里子ちゃんはばあばとゴジラさん、どっちと一緒に行き
たい?」

「え?……………えつと……………」

リトルはその言葉にゴジラと祖父母達を見比べる。

「えつと……………ね……………あの、ね……………私、ばあばとじいじのどこ行く!」

「……………ツ!!」

「決まり、ですね……………」

智代がそう言うのとゴジラは再びギチリと歯切りしして部屋から出
て行く。

「あ、おい待てゴジラ!」

ラドンが慌てて追おうとするもバン!と勢いよく扉が閉まり付近
の壁に亀裂が走った。

家族の絆？・怪獣王!？（中編）

アギラは見回りが終わると机の上に上半身を投げ出しているシン・ゴジラを見付けた。

「シンちゃん、こんには……」

「アギ姉……」

「ゴジラは？」

「まだ……元気、ない……」

リトルの祖父母が来た翌日。ゴジラは昨日の夜から元気がなく、朝、リトルが祖父母達と共に田舎に向かったが顔を出さなかった。

「ママ、の……声も、届いてない……」

「……そっか」

アギラは落ち込んでいるシン・ゴジラの頭を撫でてやるとゴジラの部屋に向かった。

「……どこ行ったんだろ……」

部屋の鍵は開いており、中には誰も居なかった。ゴジラは今日、ピグモンより特別休暇を貰っていたはずだけど……と、考えていると不意にビルがズン！と揺れた。

「……」

アギラは屋上に向かって歩き出した。

「ぐ、くそ……大人気ないぞ……」

「ああ……打ちのめされて、無視される……素敵」

「だ、ダーリン……」

「ね、姉……さん……」

死屍累々。分裂して少女達と中学生程のサイズになったデストロイアと恍惚とした表情を浮かべるビオランテ、デッドエンドで終わる映画の主人公達のように手を繋ぎ気絶したMUTO姉妹。

「……何これ」

「しよ、傷心中なら勝てると思ったのだが……」

「八つ当たり混みのバーニングモードでこの通り……………」

アギラの疑問にデストロイアとビオランテが応えてくれる。成程、状況は理解した。

つまりここにゴジラが居る。周囲を見回すとフェンスの向こう側で足を屋上から宙に投げ出して座っているゴジラが空を見上げていた。

「……………ん、しよと……………」

「……………アギラ？」

アギラはフェンスをよじ登り隣に座る。ゴジラは一瞬だけ視線を向けたが直ぐにまた空を見た。

「……………良いの？行っちゃったよ？」

「……………リトルが望んだ事だ」

「……………ねえゴジラ、そこは危ないからちよつとこつちに」

「あ？」

アギラはゴジラをグイグイ引っ張るとフェンスの中に戻す。そして、よし、と頷く。

「ゴジラ。菌、食い縛って……………」

「は？——っ!？」

アギラの言葉にポカンとした瞬間、アギラが腕を引き絞っているのを見て慌てて防御しようとするゴジラ。次の瞬間アギラの頭突きが腹に当たった。

完全な不意打ち、しかし……………

「……………痛い……………」

「だ、大丈夫か？」

頭を押さえ痛みには涙するのはアギラの方だった。

「……………ねえゴジラ」

「ん？」

「ボクね、寂しいんだ。リトルちゃんが居なくなつて……………」

「……………」

「ゴジラは、もっと寂しいよね。ボクよりリトルちゃんの事、好きだもん……………」

アギラの言葉にゴジラは唇を噛み顔を逸らした。アギラはムツと頬を膨らませ両頬を掴む。

「ゴジラ、ちゃんとボクの顔、見て……話を聞いて」

「聞く必要はない」

「……ゴジラ」

「どうせリトルの事だろ？ほっといてくれ、少しすれば頭も冷える」

「……ゴジラ、ボクと結婚しよ」

「……は？」

唐突なプロポーズにゴジラのグチャグチャしていた思考は一瞬で固まった。

「……冷静になった？」

「あ、ああ……」

「よし……」

その言葉に満足そうに頷くとゴジラから手を離さず、続ける。

「ねえゴジラ、寂しい？」

「……ああ」

「リトルちゃんが自分より別の人を選んだから？」

「いや」

「リトルちゃんが遠くに行っちゃうから？」

「それも有る……」

「じゃあ、ゴジラが暴れかけた後、リトルちゃんが離れちゃったから？」

「……ああ」

ゴジラが肯定するとアギラはゴジラの頭をそつと胸に抱き寄せ頭を撫でた。

「あの時、昔みたいに頭ん中が怒りに支配された。全部ぶち壊してやりたい、そう思った」

「うん」

「リトルと会った時は、まだ落ち着いていた。ビオランテに会って、ビオランテよりもずっと波長が合う同族の気配が現れて、怒りよりそつちを優先した」

「うん」

「でもあの時、俺は昔に戻ってた。それで、俺は……」

「そっか……怖がられたかも、って不安なんだね」

「……………ああ」

大丈夫、とアギラはゴジラの耳元で呟く。

「リトルちゃんはゴジラの事、嫌ったりしないよ」

「何で言い切れる。そんなの……解らねーだろ」

「だって、ボクはそんな事でゴジラを嫌ったりしないもん。ボクより

ゴジラが大好きなリトルちゃんが、ゴジラを嫌うわけない」

「……………」

「ゴジラはどうしたいの？このまま、離れても良いの？」

「……………良くないに決まってる………俺はもつと、彼奴の傍に居たい。彼奴が育つのを、隣で見守りたい」

その言葉にアギラはうん、と頷きゴジラから離れ肩に手を置く。

「やりたい事が決まってるなら、まずは行動。リトルちゃんが何でお爺ちゃん達に付いてったのか、その理由を聞いてからでも遅くはないはず——ん？」

不意にソウルライザーが鳴る。ゴジラの方だけ、という事は近くにシャドウが現れたわけではないのだろう。

「もしもし？」

『ゴジゴジ！大変です！』

「ピグモン？非常通話まで使って、どうし……—」

『リトルちゃん達が乗った電車がシャドウに襲われています！中にはシャドウビーストの姿も確認されて……兎に角、急いで！』

ゴジラは通話を切る。話の内容が聞こえたのだろう、アギラは心配そうにゴジラを見詰める。

「……………よし、行くか」

「……………シャドウを倒しに？」

「そっちはついだ。リトルの真意を聞きに行く」

「そっか……行ってらっしゃい。頑張ってるね」

「ああ…………」

ゴジラはアギラの言葉に頷くと屋上から飛び降りた。おそらく同じ連絡を受けたのだろう。下を覗けばシン・ゴジラも飛び出しているのが見えた。後ラドン。

ゴジラとシン・ゴジラが跳ねるとラドンがそれぞれ片手で掴み飛び去った。

「……………」

「あら、アギラ。貴女もしかして兄さんとラドンの関係に嫉妬してるの?」

「嫉妬?何で?」

「……………」

起き上がったビオランテの言葉にアギラは首を傾げた。

「自分の気持ちに早く気付けると良いわね」

「?うん、ありがとう……で、良いの?」

家族の絆？・怪獣王!?（後編）

「てえいー!」

目を赤く光らせたリトルが座席を引き千切って投げるとシャドウが巻き込まれて倒される。

が、巨大な蜘蛛の形をしたシャドウビーストは足でそれを払う。

「むっ……があー!」

体格差的に接近戦は不利と判断して、背鰭を光らせ口から光線を放つ。が、それは父は勿論妹にも及ばない、泡の様な光の固まりが複数出るだけでシャドウビーストに当たるとあっさり霧散した。

『■■■■■■!』

「あうー!」

シャドウビーストが足を振るえば小さなリトルの体はゴロゴロ転がる。おまけに近くにシャドウの巣でも有るのか数が一向に減らない。

「里子!お前だけでも逃げろ!」

と、哲治が叫ぶがリトルはその場から逃げず気丈にシャドウビーストを睨み付ける。

「……ん?」

と、その時不意にリトルが空を見上げる。そして、何かシャドウビーストに向かって落ちて一撃で頭と腹の接続部を蹴飛ばした。

『————■■■■!?!』

砂煙がまいシャドウ達が戸惑う。しかし、リトルは砂煙が晴れる前から影の中の人物達が誰か解っていた。

「パパーシンちゃん!」

二本の尻尾が蠢き砂煙を払う。そこに居たのはゴジラとシン・ゴジラ。

リトルが駆け出すとシン・ゴジラがリトルを抱き止める。

「よう、無事か?」

「うん!」

「よし、なら待ってる……直ぐにぶち殺してくるからな」

と、リトルの頭を撫でるゴジラ。リトルは気持ち良さそうに目を細めた。

「ゴジラ！私は巣を探して破壊してくる！」

「任せた」

ゴジラ達を運んできたラドンはそう言うとその場から離れた。シャドウ達はボスがやられたのと突然現れた怪獣娘達に動揺していた。

「……喧しいぞ」

『『——!?!』』

困惑する様に鳴き声を放っていたシャドウ達はゴジラの静かな、それでいて良く通る低い声に固まる。

「誰の前で喚いてる。誰を怒らせたと思っている。大人しくその命を差し出せ、大人しく死ね」

ギロリと金色の瞳が周囲のシャドウを見回す。シャドウ達は震えながら、しかし動こうとしなかった。動けなかった。

ゴジラの背鰭が光り、口内が輝いていく。

その輝きが増すのをシャドウ達は自分達に向かって来る断頭台の刃を見詰める心境で見詰め、消滅した。

「パパ！」

「おっと……」

ラドンからシャドウの巣の駆逐完了の知らせが届き一安心するとリトルが胸に飛び込んでくる。

「よしよし怖かったか？」

「ううん。パパが来てくれたもん！パパが居るなら怖くないよ」

「そうか……」

ゴジラが頭を撫でるとリトルはスリスリと頬を押し付ける。と、止まった電車の中から智代と哲治が出てくる。

「……………」

「……………」

哲治とゴジラの目が合うと何とも言えぬ空気が流れる。シン・ゴジラは静観しリトルがオロオロ二人を見詰める。

「あ、あのねパパー！じいじは魚釣るのが上手いんだよ？」

「……リトル？」

その空気はリトルが唐突に発した言葉で霧散する。

「それでね、ばあばはその魚で美味しい塩焼き作ってくれるの！それにね、じいじが偶に捕まえてくる狸は唐揚げにすると美味しいんだよ！」

「た、ため……唐揚げ？」

「うん。ザリガニとか蟋蟀も美味しいよ」

「ま、待てリトル……要するにお前はそれ食べたくて爺ちゃん家に行くって言ったのか？」

「違うよ？」

戸惑うゴジラの質問にリトルは頭に？マークを浮かべて首を傾げる。何言ってるんだ此奴、と言う目に若干傷付いた。

「あのね、じいじとばあばにパパの良い所たつくさん話すの！でも沢山有るから、じいじ達の所に泊まって話すの。そしたら今度はパパの番ー！」

「ん？」

「じいじとばあばの良い所をパパにお話しするの！そしたらね、もう喧嘩しないでしょ？」

「……リトル」

「里子……」

「里子ちゃん」

「……？？」

三人の視線が集まり再び首を傾げるリトル。そして、ゴジラがふつと笑う。

「そーだな。殆どの客が逃げ出してんのに、この二人はお前が居るから残ってた。ちゃんとお前のことを想ってる証拠だな」

「えへへ……」

「……ゴジラさん」

「ん……」

と、そこへ智代がやってきた。

「すみませんでした」

「……………」

「貴方の人となりを聞いて、一度だけ見て、解った気になっていました。アナタはこうして、この子の為に文字通り飛んできた。本気で怒ってくれていた……………この子を本当に大切してくれていた」

そして哲治もやってきて無言でゴジラを見る。

「……………」

「ゴジラさん。この子はどうも、私達と住む事になるというのを解っていないかった様です。今回は、止めにしておきます。この子をどうかお願いします……………」

「……………ああ……………いや……………はい」

ゴジラの言葉に智代は微笑むと運転を再開しようとしている電車に向かっていた。

「……………夏」

「!？」

「里子が好きな季節だ。遊びに来い……………」

「……………リトルが喜ぶなら、休暇にな」

「……………仲直りした？」

去っていく祖父母の背中とゴジラを見てリトルが尋ねてくる。

「ああ、出来た」

その言葉にリトルは嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

「帰るぞ……………ラドン」

「ああ……………」

ゴジラが呼ぶと丁度戻ってきたラドンがバサリと降りてくる。

「……………三人は流石にキツイな」

「ならタクシーでも探すか」

GIRLSの正門でアギラは段差に腰掛けていた。既に座ってか

ら数時間が経過し、今はもう日も大分落ちた。

「……………」

人影見えた。数は三つ。立ち上がり掛け、その人影に固まるも真ん中の人影の形が可笑しいのに気付く。

よく見ると子供が肩車されていた。ゴジラに、シン・ゴジラとラドン。そして、リトル……。4人仲良く帰ってきた。

「お、アギラ……………」

「お帰り」

「ああ、ただいま」

「ただ、いま……………」

「アギ姉ただいま」

「ただいま」

四者四様の返しにアギラは微笑んだ。

「でも何でここに？」

「今日の訓練が終わって暇だったから、少し待ってた……………くしゅん」
「そうか……………ありがとな」

数日後。

「リトル、爺さんから荷物来てるぞ」

「じいじ？」

「中身は……………なんだこりや？」

「イナゴの佃煮だ！」

女子会？怪獣蛾！

突然姉妹が母になった。何を言っているのか解らないと思うがバトラだってそうだ。

何で帰ってきたら姉妹のモスラをママと呼び、自分の事を叔母さんと呼んでくる少女が突然現れるんだ。

全くもって訳が解らない。しかも父親はゴジラ（と認識している）らしい。

そこだけが酷く気に入らない。

何故か？簡単だ。自分は、ゴジラを意識し始めている。いや、もう大分意識してしまっているだろう。

そして恐らくは………付き合いが長いから解る事も有る。

難儀なものだ。前世で自分達を殺した相手に想いを寄せるなど……。

「それで、此奴等はどうする？育てるのか？」

「ええ、私が責任を持って一人前にしてみせます！」

と、頑張るぞいのポーズを取るモスラ。まあ此奴なら子育て間違えないだろう、と肩をすくめる。前世じゃ基本的に子育て前に殺されたが。

「……お」

「ん？」

休憩所に来ると前世でゴジラを模したロボットだったと言う三人が屯っていた。

「……よう」

「やあ」

バトラの挨拶とも呼べぬそれに三式機龍は表情を歪める事も無く返してきた。

三人とも頬が僅かに上気し、花の香りもする。訓練の後、シャワーでも浴びたのだろう。これはシャンプーの香りだ。

「……ゴジラにガキが増えた」

「「？」」

唐突に何を言っているのだろうか自分は。見ろ、三人共すっかり驚いているじゃないか。

「子供が増えた？また前世の拾い子か？」

「新しい姪っ子が増えるのか。どんな子だ？」

「モスラの娘」

空気が固まった。

氷河の中にでも迷い込んだ気分だ。

「も、モスラとの娘……？」

「【疑問】何時の間に……s s そのよ n a カカ、かん k k……」

「落ち着けスー。バグってるぞ……」

と、冷静さを装うメカゴジラだったが手がカタカタ震え持っていた缶からバチャバチャ中身が溢れている。

「正確にはモスラの前世の幼体の頃の記憶のみが分離した子が出来たな。そいつ等が最初に見た大きな生物が大抵ゴジラだったから刷り込まれてるんだと」

「な、成る程……」

「【納得】そう言う理由が有ったと理解」

「しかし疑問。何故増えた？」

「……アタシが知るか。モスラの料理はもはや理解を超えてんだよ、守護神の癖に」

と、疲れた様に溜め息を吐くバトラ。

何せしつかり火を通したのに動くのだ。死肉と植物しか使ってないはずなのに。はず、だよな？

以前自分で焼けるお好み焼き屋に行った時、焼くだけだからと安心したらダークマターが出来上がってたし「リベンジです！」と意気込んで家で作ったお好み焼きは何処そのカエルが侵略しにくる漫画の様に動いて逃げたし。

ちなみに当時、一瞬だけ地面が揺れて残骸で発見された。近くには黒髪の少年が居たが今思えばあれはゴジラだったのだろう。

「……なあ、お前等はゴジラの事どう思ってたんだ？」

「藪から棒になんだ？まあ良いか、弟だ。大切な」

と、即答したのはやはりと言うか、三式機龍だ。まあ彼女は常日頃からそう宣っているし当然か。

「……………」【解答】ゴジラは当機の生殖行為相手」

「ああ、うん。お前はそう言うと思ったよ……………」

【補足】しかし当機は命の有無関係なしにゴジラと共に居たいと思っ
てきている」

「……………」何でだ？」

【解答】当機の操縦者をしていた三枝未希の思念と、当機の記憶。子の為に命を懸けているゴジラの姿に対する興味が変異したと思われる」

「……………」

【確定】過程や言葉で飾ろうと、端的に言えば当機はゴジラに恋している」

良くもまあ、恥ずかしげも無く言い切れるものだ。聞いているバトラの方が赤くなってしまうた。

「……………」私は……………」好きか嫌いかで言えば好きだ。ただ、それが恋だの愛だのと呼べる感情なのかは不明だ。どう思うかと聞かれれば強い奴だと思う。もう少し私に構って欲しいな。そうじゃなければこの気持ちに整理がつかん」

「そうか……………」

「そう言うお前はどうかなんだ？」

「私か……………」

メカゴジラの言葉に一瞬呆けるが、そもそもこんな質問をすれば質問を返されるに決まっているか。

いつそ、誰かに伝えてしまえば気持ちの整理もつくかもしれない。

「私は……………」

「よう、ただいま……………」ん、珍しくない組み合わせに、変わった追加だな」

「……………」!？」

言葉は続かなかった。

最悪のタイミングで現れた話題の相手の声にバトラの喉から空気だけが漏れ口をパクパク動かす。

「？バトラは結局ゴジラをどう思っているんだ？」

「ん？俺が何だつて？」

空気を読めないメカ少女をギロリと睨むが首を傾げられたただけだ。赤い顔で、タイミングが悪いゴジラを涙目で睨むがやはり首を傾げられた。

「……………」

と、その時ゴジラの肩に乗っているリトルと目が合う。

「……………良かったな」

「ああ、ありがとう」

見るからに消沈していたゴジラを、いつたい誰が励ましたのだろうか？誰かは解らないが羨ましい。

「……………」

と、不意にゴジラのソウルライザーが鳴る。

「もしもし、ゴジラだ——ミクラスが襲われた…………？」

「「「!?」」」

ゴジラの言葉にその場の全員が目を見開いた。

お見舞？・怪獣王!?

「よ、ミクラス。災難だ……な……」

病院に行きミクラスの病室に入ると涙目のミクラスと出会った。
アキラやレッドキング達とはすれ違いだがタイミングの悪い時に
入ってきてしまったらしい。

「……………あー……………まあそのぐらいの傷なら半日も経たずに治るだ
ろ」

「治らないよ!?アタシはゴジラ達みたいな回復能力ないもん!」

慌てて涙を拭こうとしていたミクラスはその言葉に反射的に突っ
込む。その目には回復能力を持つゴジラに対する嫉妬が見て取れる。

ギリツと無意識に歯ぎしりをして、その音に自分の中の感情に気付
いて布団を被る。

「……………出てって」

「ミクラス……………」

「出てけ!」

枕を投げ付け叫ぶミクラス。人型とは言え怪獣娘が投げた枕だ。
当然その威力は頭に当てれば脳震盪を起こさせるぐらいはあるだろ
う。が、ゴジラはミクラスと同じくカイジューソウル持ちでしかもス
ペックが違う。あつさり止められた。

「いたた!」

そして怪我人なのにそんな動きをしたミクラスは身体が痛みで引
きつりベッドから転がり落ちた。

「無理するな、怪我人なんだから」

「誰のせいだと思ってるのさ」

「流石に不謹慎だったな……………大怪獣ファイトには間に合いそうにない
のか?」

「……………延期だつてさ」

「そうか……………」

ミクラスの脇に手を通し持ち上げる。

「…………アタシさ、頑張ったんだ。大怪獣ファイトに出たくて」

「そうか」

「……悔しいよ……出れない事もそうだけど、負けちゃった事が……レッドキング先輩や、ザンドリアスにも練習に付き合ってた事なのに……」

ゴジラに支えられたまま顔を見せないように俯きながら声を絞り出す。

「そう思えんなら大丈夫だろ……」

「何でそう言い切れんのさ」

「俺だってそうだったからな。人間の兵器相手に為す術も無く死に掛けた恐竜か或いは陸上生物のなり損ないだった。死に掛けて、仲間が力尽きてくのを見て、悔しくて憎くて怪獣になった。怪獣になった後も他の怪獣に負け掛ける事も有った。でも、悔しいからもっと強くなれた」

「……前半は絶対要らない。後半だけで良い」

「そうか？最近、やけに前世の事を思い出す頻度が増えてついな……」

と、苦笑いするゴジラにミクラスは身体を預け服の裾をギュツと掴む。

「……ゴジラ、私強くなりたい」

「そうか……」

「なれる……かな？」

「なれるさ。悔しいって思いが有るならそれをバネにすれば良い。もしこれぐらいで良いやって妥協しそうになった時は俺に言え。もつとずつと強い奴が居るって事を教えてやる」

「えく？アタシのが強くなってたらどうするのさ……」

「そしたら俺はお前より強くなるだけだ」

「そっか……」

ミクラスはゴジラの言葉によし！と身体を離し、再び痛みを悶える。

「……ね、ねえゴジラ……」

「ん？」

「ゴジラはアタシより強くて、アタシが強くなってもアタシより強くなるうとしてくれるんだよね?」

「ああ」

「じゃあさ、キチンと証明しようよ」

と、ミクラスは悪戯っぽくニヤリと笑う。証明とは何の事だろうと首を傾げるゴジラにミクラスはその言葉を発した。

「大怪獣フアイト。ゴジラも出るの」

「……あ?」

「だってそうすればゴジラの強さも解るでしょ?」

「……マジ?」

「マジマジ。ね、良いでしょ?」

「……じゃあミクラスがレッドキングに勝てたらな。せめてそれぐらい強くなれよ」

「もちろん! やってやるよ……! ——いたた」

胸を張りドンと叩き痛みに悶えるミクラス。学習しない。

「で、お前を襲ったのは誰なんだ? シヤドウかシヤドウミストか?」

「うーん……ピグモンさんからは確認が取れるまでは話しちゃダメつて。ピグモンさんに直接聞いてみたら? 教えても大丈夫なら教えてもらえると思うし……」

と、言い難そうに顔を逸らすミクラス。確認が取れる、となるとシヤドウではないのだろう。

「……………ガッツか?」

「え!? な、なんで解ったの……………——あ……………」

「……………成る程な」

「ま、待って! 今の無し!」

ゴジラが道を歩いていると車が吹っ飛んでゼットンがキャッチするという光景を見たが気にせず帰る。

「ピグモン、居るか?」

「ゴジゴジ? ミクミクは大丈夫でし……………——ん?」

ピグモンはやってきたゴジラに書類から顔を上げるがスンスン鼻を鳴らしてゴジラに顔を近付ける。

「……………これ、ミクミクの入院してる病院のシャンプーの匂い……？何でゴジゴジからするんですかね〜？」

「慰めてやったからな。その時だろ」

「……………やっぱり強がってましたか〜。ありがとうございます。それで、何のご用ですか？」

「実は前にガッツの偽物と接触した事が有る」

「……………詳しく」

ゴジラが偽ガッツとの邂逅を詳しく離すとピグモンははあ、と溜め息を吐く。

「もつと早く言つて欲しかった、が本音ですが今回はまあ良いです。確認が取れるまで誰にでも話せる、といった内容でも無いですしね〜。で、ゴジゴジはそのガッツンを偽物と言い切るんですか？」

「ああ」

「……………そうですか。解りました。また何か解ったら連絡してくださいね」

「そつちもな」

膝枕?・怪獣王!?

ゴジラはビルからビルの上を飛んで下を見回す。今は深夜。しかし明朝が近付いてきたのか空は白みを帯びてきた。

「……………収穫無し」

『お疲れ様ですゴジゴジ。今日はもう休んでください。絶対ですよ?絶対ですからね?』

「……………それはフリか?」

『怒りますよ?』

通話相手であるピグモンの言葉にゴジラは悪い悪いと肩を竦めた。

夜通し偽ガッツを探しに町を出歩くゴジラ。眠さで閉じ掛けた目を擦りながら歩く。

幾らG細胞を持っていると言ってもゴジラは人間に転生している。前世の力を持っていても変身しなければG細胞の効力も格段に劣る。要するに疲れた。変身すれば体力は回復するだろうがそうになると気力を消費する。

今から部屋に向かうとリトル達を早い時間に起こすかもしれない、どこか適当な場所で一旦仮眠を取ろうとゴジラは休憩所に向かった。

「……………ん」

「あ、起きた?」

目を覚ますと目の前にガッツの顔が横向に存在した。

後頭部の下には何か柔らかいモノが……………恐らくはガッツの脚だろう。

「何してんだ?とか聞かないの?」

「膝枕だろ?」

「むう……………じゃあ何でこんな事を、とか聞かないの?」

「俺が最近夜遅くお前の偽物を探してるのピグモンから聞いたとか?」

「……………つまんないな〜」

ゴジラが全く照れた様子も慌てる様子も見せなくて、容姿にはそこそこ自身があつたガッツは頬を膨らませてむくれる。

まあ確かに怪獣娘は何故か綺麗揃いだし、その中では平均的になつてしまうのは自覚してるが……………。

「ゴジラって女の子に興味無いの？」

「基本人間には興味の欠片も無い」

「だよー……………」

ゴジラの少し硬い髪を撫でながらはあ、と呆れるガッツ。自分で言つといてなんだが、ゴジラが色恋にうつつを抜かす姿が想像出来ない。

「その辺の知識は無くはないが」

「そうなの？」

「自称俺の親友の中目黒がモテる奴でな、そいつから色々聞かされた」と、疲れた様に言うゴジラ。自称親友とは何者なのだろうか。

「ただの孤児院の同期だよ。人に優しくとか、兎に角反りが合わねーくせによつてくるうぜー奴」

と言う割はそれほどまでの敵意を感じない。好きではないが嫌いでもないのだろう。

珍しい。

「そいつから女性の扱いがどうのって言われて無理矢理学ばされた……………」

「……………話を聞いてあげるぐらいには仲が良いんだ」

「黙れ。しつこかっただけ……………」

顔を歪めるゴジラ。ゴジラの意外な弄りネタにガッツはニヤニヤ笑いゴジラの頭を撫で回す。

「じゃあゴジラはどんな事を学んだの？」

「傷付けたら責任取れとか、そういうの……………」

「ああ、そういえばゴジラって最初、ウィンダムやミクラスに責任取つて『俺が結婚してやんよ』とか言つたんだっけ？」

随分と懐かしい事を言う。確かにそんな事も有つた。

「後は女性の接した方とかも教えられたな」

「へえ、何でまた……」

「中目黒曰わく『知っておいて損はない』って毎日毎日……『黒慈は顔は良いし、何時かは人間を受け入れて子を残す必要も出てくるから』ってな……」

「……結果は？」

「俺はここに来るまでの友人は0」

「中目黒さんは違うの？」

「違うね」

即答である。良くその人物はゴジラの親友など名乗れたものだ。可愛気が全く無いではないか。

「可愛気が無くて悪かったな。つか、男にんなもん求めんな」

「あれ、声に出てた？」

「顔に出た」

「そんなに解り易い？」

ムムムニと自分の頬を触ってみるが、生憎それで表情が解つたりはしない。

「でもさ、何でわざわざゴジラがこんな事してくれるの？」

「困った時は助けるって約束だからな。お前、最近ちゃんと寝てないだろ？」

「う……」

「……そういや俺が困ってたら助けてくれるって約束だったな……このまま寝てたいからしばらく枕になっけてくれ。その間、ここから動かなきゃ何しても良いぞ……ふぁ」

と、ゴジラは欠伸をして目を閉じる。暫くすると寝息が聞こえてきた。

気持ち良さそうに眠るゴジラを見るとガッツも眠くなってきたのか目を擦り、背中を壁に預け眠り始めた。

「……………ん」

ガッツが目を覚ますと横になっており、ゴジラの姿はない。代わりに毛布が一枚ガッツに掛けられていた。

「……………ありがとう、ゴジラ」

ちちおや？・怪獣王!?

『ニケテ』

「……………」

ゴジラはモスラから送られてきたメールに首を傾げる。

最近ただでさえ寝不足でストレスが溜まっていると言うのにこの訳の分からない文は何なのだろうか？

取り敢えず折り返しのメールで詳細を——と、思った瞬間

「きさまくあああああ!?!」

「——!?!」

角を生やした鬼が現れた。

いや、よく見るとその角は頭に何故かネクタイ巻き付けられていた二本の包丁。さらにその両手にも包丁。

慌てて男の手首を掴み、止めようとするゴジラ。ズザザ!と数センチ下がる。

変身していないとは言え、ただの人間なら世界クラスが束になっても適わないであろう力を持ったゴジラが、だ。

「何だてめえ!?!」

「誰がお義父さんだ!?!」

「言ってねえよ!」

取り敢えず掴んでいる手首を押し返し放す。今度は普通の人間同様に吹っ飛んだ。

「で、誰なんだ結局……………」

「貴様が誑かした娘の父だ!」

「……………」

誑かした？はて、何の事だろうか？

心当たりはさっぱり無いゴジラは首を傾げるしか出来なかった。すると男は益々憤怒のオーラを放つ。

「つて、よく見たらシャドウミストに取り憑かれてるじゃねーか……仕方ねー、ちよつと痛いが我慢しろよ……」

ゴキリと指を鳴らすゴジラ。ジリツと体重を前に移動させる男。

その瞬間……

「お父さんのバカー!!」

「げぶへ!」

突如レオとミドリを連れ、モスラが男を殴り飛ばした。

明らかに人間の力じゃなく、シャドウミストに取り憑かれてかなりの力を持っていたとは言え人間相手に容赦ない。

モスラにしては珍しい。

「もうーちゃんと話を聞いてくださいよ! 誤解なんですつて!」

「う、う………誤解……?」

モスラは確かに力が無く飛行や特殊能力にこそその真価を発揮する怪獣娘だが、吹き飛ばされるほど殴られて気絶もしないこの男は果たして何者なのだろうか?

「だ、だがお前確かに電話で子供が出来たって………それに子供達も……!」

「私がGIRLSに所属したのは去年の後半ですよ? この子達は見た目4歳、計算が合わないでしょ?」

「………あ」

その会話を聞いてゴジラは現状を把握する。要するに、モスラが子供達の存在を親に報告したのだろう。多分子供が出来たので子育てを教えてくださいとかなんかそんな感じに……で、勘違いした父親が来た……。

「じゃ、じゃあこの子達は?」

とレオとミドリを見詰める。

「実はバレンタインの時、手作りチョコを食べた次の日に………」

「貴蝶の手作りか? なら不思議でもないか………」

家族にもそう言う認識なのかモスラの料理(?)は。

「ほら、二人とも挨拶しなさい。おじいちゃんですよ」

「………おじいちゃん?」

「おお、この子達が、貴蝶に似てメンコイなあ………」

「………」

頬をだらしなく緩めるモスラの父に対してモスラの後ろに隠れる

子供達。男は明らかに落ち込んでいる。

「……………と、兎に角すまない。私の勘違いで」

「いや、俺にも娘達が居るから気持ちは分かる。ある日突然どこの馬の骨とも知れない奴との間に子供もうけてた何て聞かされりや動揺もするだろ」

「そう言ってもらえると助かるよ……………つまり君は貴蝶とはその……………そう言う行為はしてないんだね？」

「ああ、モスラとはキスマでしかしてない」

ゴジラの言葉に無言でモスラを見る男。モスラは口を押さえ赤くなつて俯いている。

「くたばれええええ!!」

「うおっ!？」

考察？・怪獣王!?

モスラの父からの猛攻を何とか退けたゴジラは改めて思う。シャドウミストを嘗めて掛かるのは危険だ、と。

どうやらあのシャドウミストはモスラの父の怒りに根強く憑依していた様で、怒りが強いからこそ彼の力も並みの怪獣娘に迫ってきていた。何故彼処まで怒ったのかは不明だが感情の強さによつては驚異足りえる。

「しつかしシャドウミストってのは何が目的なんだろうな？」

「【不足】その質問は要領を得ない。つまり何が言いたい？」

ゴジラと共にパトロールをしていたスーパーメカゴジラはゴジラの唐突な発言に首を傾げた。

「シャドウミストに取り憑かれた人間は確かに人間よりは強いが怪獣娘よりは弱い。それこそ、倒す時に気を使う必要がある程」

「【同意】」

それにはスーパーメカゴジラも同意見だ。ぶつちやけるとシャドウの方が強い。わざわざシャドウミストと言う存在になり人に憑く必要性が解らない。

仮にだが、シャドウに知恵が有り怪獣娘達を人間から孤立させる為に対立させているとしたらやり方が甘過ぎる。そんな知恵が有るなら報道関係者に取り憑けば良いのだ。

マスゴミとして名の知れたヒル○ワなんかに取り憑けば有る事無い事を吹聴される事だろう。しかしやらない。と言うかやれない。シャドウミストはあくまでも人の心に取り付き暴走させるだけしか出来ない。

「ピグモンとエレキング辺りは何か知ってそうなんだよな、隠してるみたいだけど」

と肩を竦めるゴジラ。彼女達には彼女達なりに考えが有るのだろう。公になれば混乱を生む情報なのかも知れない。もとよりゴジラの本質は破壊だ。前世から人と歩んでいたピグモンや宇宙人の出す指令を忠実に実行していた兵士であるエレキングと違い考えるのは

得意ではない。そう言うのは向こうにやらせる。が、やはり気になるものは気になる。

【考察】シャドウミストは副次効果」

「……………シャドウって死ぬと死体残らねーし、その残骸とかか？」

【否定】シャドウミストとシャドウは密度の違う同一存在。よって、何か強大な存在の一部がシャドウに成り切れずシャドウミストに成ったと推測」

「だとしたらそれって、シャドウビーストより上って事にならねー？」

ゴジラが見た限り、シャドウビーストは一部が剥がれるなんて事は破壊されない限り無かった。シャドウミストを生み出すそれはつまりはシャドウビーストより濃度が濃いと言う事にならないだろうか？

確かにそれならピグモンが隠す理由も解る。シャドウビーストはゴジラにとっては雑魚だが怪獣娘達にとっては驚異だ。単独で圧倒出来るのはゴジラが知る限りにはゼットンぐらいだろう。それ以上が存在するかもしれないと言うのは余計な不安を煽る。

「つまりピグモン達も確信をしている訳じゃねーって事か…………」

存在するなら忠告する。存在する可能性だけなら余計な混乱を生まない様に情報を押さえる。つまりそう言う事だろう。

「まあピグモンにもピグモンなりの考えが有るなら仕方ねー…………暫くは様子見。俺には偽ガッツ探す任務も有るしな」

まだ確定していない可能性よりもそちらを優先しようと思いを切り替えるゴジラ。スーパーメカゴジラもそんなゴジラを見てシャドウビーストを越える何かに関する考察を取り止める。

「さてと、今夜も徹夜だ。手伝うと言ったのはお前だ、眠れると思うなよ？」

【了承】ホテルの予約は任せて」

「……………何言っただお前」

衝突？・怪獣王!?

ゴジラは最近変身をし続ける事が多くなった。確かに徹夜にはG細胞を完全に行使出来るその状態の方が向いているが明らかに可笑しい。

まるで寝るのを避けている様だ。ピグモンがそれとなく理由を尋ねても勘付かれてはぐらかされる。ピグモンは嫌な胸騒ぎがしていた。

肉体面は兎も角、精神面に限界が来たのか時折ゴジラが廊下や入り口等で寝ているのを発見し、偶々起きる瞬間を見付けたりする。

その度にゴジラが少しずつピグモンの知るゴジラからズレていく様なそんな感じがする。その身の内に炎が宿り、日に日に熱く、赤くなっている様な……。

「ねー！聞いているのお兄ちゃん！」

「……………ん、ああ……………そうだな」

「聞いて無いじゃん！」

ザンドリアスの言葉にハッと顔を上げるゴジラ。そんなゴジラの反応にプーと頬を膨らませるザンドリアス。

「ライブが中止になるなんて酷くない!? 怪獣娘は暫く活動禁止って言うし……………」

「ああ、ザンドリアス達はそうだっけ……………」

ライブだの写真撮影だのやっている怪獣娘達は上からその様な通達が来たらしい。ゴジラは相も変わらず仕事をしているが。

「犯人はガッツさん何でしょ？そんなのお兄ちゃんがちよちよいとやっちゃえば良いじゃん」

「まあガッツ程度なら楽勝だろうけどあの偽物は多分ガッツより強いだろうからな」

「偽物？」

ゴジラという言葉にザンドリアスの友人であるノイズラーが首を傾げ

る。ゴジラは『ヤベツ……』と口を押さえるがザンドリアス、ノイズラー、そしてウインダム視線が集まっていた。

「……そう言やギターってどうやって弾くんだ？」

「話を逸らしたツスね……まあギターに興味持ってくれんのは嬉しいツスけど……」

「……………すまん、やっぱり今日は帰る」

「ええー!?折角お兄ちゃんだけにでも聴いてもらおうと思ったのに！」

「悪いなザンドリアス。また今度な……」

そう言つてザンドリアスの頭をワシヤワシヤ撫でるゴジラ。髪が乱れ文句を言うザンドリアスだったが嫌そうではなく、ウインダムは微笑ましそうに見守った。

「じゃあ、またな……」

「はい……………あれ？」

「どつたの先輩？」

「いえ、何か……………？」

ノイズラーに尋ねられたがウインダムは応えられなかった。何と云うか、ゴジラの雰囲気可笑しかった。理性的に話していたはずなのに何故か初めて会った時の暴走時や怨霊事件の時のゴジラを思い出した。

「結局ゴジラ先輩が言つた偽物ってなんなんすかね？」

「うーん……ガッツさんの偽物、とか？」

「確かにアギラさんの証言によると、アリバイが有るそうですしね……………」

帰路に就いた三人は先程のゴジラの眩きを思い返しながら話の話題にする。ゴジラが思わず呟いたと言った感じの「偽物」と言う単語。

話の流れからしてガッツの偽物が居ると言う事になるだろう。

「まあそれを直接見ない限り俄には信じ難いですけど……………」

そして、その信じ難い事が目の前で起こった。

ガッツと瓜二つの何者かにガッツがやられ、その何者かが此方に向かってきていた。ガッツは怪獣娘の中でもかなりの実力者だ。そのガッツがやられた。

ウインダムは既に勝つ事を諦めたがノイズラーはソウルライドに手を掛ける。そんなノイズラーを見てガッツはやはり慌てる事無く一歩一歩近付いてくる。

「——っ」

ノイズラーが思わず一歩後ずさる。その瞬間、建物の屋上から何者かが降ってきた。

「見付けたぞ黒ガッツ！」

「——ッ!?!」

「ゴジラさん!?!」

降ってきたのはゴジラだ。黒ガッツと呼ばれた、確かにガッツより色が濃い偽物は苛立ち二割恐怖八割と言った顔でゴジラの出現に驚愕していた。

だが、ザンドリアスやノイズラー、ウインダムは別の意味で驚愕していた。纏う雰囲気、重苦しい。

燃え盛る炎も煮え滾るマグマも蠢くマントルすらも焼き滅ぼしそうな熱を、怒りをゴジラから感じ、思わず呼吸を忘れる。

「……最近の夢見の悪さ、原因はてめーか?」

憎々しげに、応えなければ殺すと語る視線を向けられ偽ガッツは数秒前己が見下していたノイズラーの様に一歩下がり、その瞬間ゴジラが動いた。

「くっ!」

咄嗟にテレポートで避ける偽ガッツ。路面が吹き飛び下を通る配管が姿を現し捻じ曲がり水を吹く。

ゴジラは身を濡らす水を無視してグルリと身体を回転させる。それは上空に逃げたが重力に引かれ落下してくる偽ガッツの腹を捕らえると『くの字』に折り曲げながら偽ガッツを吹き飛ばす。

「うぐっ!?!あ……はあああ!」

偽ガッツは両手を突き出し光線を放つ。正面から受けたゴジラだったが、無風の草原進むが如く無視して迫る。

「このっ！」

威力を底上げをするがやはり無視。再びテレポートを発動させる。今度は重力に引かれない為にゴジラの後方。一瞬だけ気を逸らせれば良い。長距離移動には僅かな集中力が居る。その数秒さえ稼げれば――

しかし、怪獣の王は待たない。

ハーフマスクが開き中から覗いた口内が青白く発光し、熱線が放たれる。

チャージを一切されていない牽制にしかない攻撃。しかしそれは怪獣王の世界基準。偽ガッツにはダメージを与える効果すら有る。

「があー！」

「――っかは!?!」

ミシミシと偽ガッツの腹にゴジラの右拳がめり込む。

地面を何度もバウンドして吹き飛ぶガッツは迫ってくるゴジラに向かって腕を交差させる。それは、本物のガッツを捕らえた技の予備動作だ。

「ゴジラさん！」

「――!?!」

横棒が斜めになった十字架が現れゴジラを閉じ込める。熱線対策か、ご丁寧にごジラの顔だけは閉じ込めずに。

元はウルトラ族の中でも格闘に優れたレッド族であるセブンを封じる為の技。如何に怪獣王であろうと数秒の時間を稼げるはず。

と、その時ゴジラの背鰭が光る。

「ツチー！」

あの状態で此方に熱線を放とうとしているのだと判断した偽ガッツは慌ててゴジラの首が向けられない位置まで移動する。次の瞬間聞こえた音は熱線が空気を切り裂く音でも着弾の爆音でもなく、ガチン！と歯が噛み合わされる音。

瞬間ゴジラの身体が光を放ち十字架を内側から破壊する。

「死ね」

「——!?……………フツ」

「!?が——!?」

ゴジラが指を曲げ鍵爪の様に偽ガッツを引き裂こうとした瞬間、偽ガッツが笑みを浮かべゴジラの右腕から顔半分にかけて黒い靄が覆う。右手を押さえ蹲るゴジラに対して偽ガッツは追撃か、或いはやられた仕返しをしようと迫る。

が——

「うっ!?」

偽ガッツは頭を押さえ苦しみ出す。そして、その場からテレポートして消えた。残されたゴジラも黒い靄から解放されたがその場に倒れた。

作戦？・怪獣娘!?

ガッツが襲われ、ゴジラが倒れた。

緊急会議の議題はその事に関してだ。

「結論から言います。襲撃犯の正体はシャドウミストに侵蝕されたガッツ星人です」

「元々ガッツ星人は分身能力を特技としているけど、今回のケースでは私達の知ってるガッツと、シャドウミストに犯されたガッツ星人の、二人が存在していたの」

ピグモンの結論に補足を加えるエレキング。一同が困惑する中、ゴモラが声を発した。

「良いがっちゃんと思いがっちゃん?」

「そう」

確かに端的に言ってしまったえばそう言う事だ。が、納得出来ない事も有る。

「シャドウミストは人間にしか取り憑かないんじゃないのかよ!?!」

「前例が無かっただけでしょ? 怪獣娘でも心に隙が出来ればシャドウミストに付け入れられる……と言う事」

皆を安心させる為か、敢えて淡々と語るエレキング。エレキングの言葉にアギラは歯噛みした。

ガッツの様子が可笑しいのを見掛けた。でも、それだけだった。キチンと気付いてあげられれば……。

「ただ、完全に乗っ取られなかったのは流石はガッツね」

今回の偽ガッツ……シャドウガッツはガッツが防衛本能で分身しそちらにシャドウミストを移し切り離れたからだと推測。

しかしシャドウミストに取り憑かれると凶暴性と共に力も上昇する。エレキングの見立てでは5割増しだ。

ガッツが100だとするなら150と言う事になる。

「止めなきやー!」

「はい。その為に私達が居ます……」

シャドウガッツはガッツからソウルライザーを奪った。それに偽のイベント告知メールを送り誘き寄せ確保すると言う作戦だ。

名付けて《絶対ガッツを助ける大作戦》（アギラ命名）。

「そしてもう一つの問題がゴジゴジです……」

「お兄ちゃんもシャドウミストに乗っ取られたんだっけ……」

「正確にはその途中、です……」

ザンドリアスの言葉にピグモンも俯きながら話す。現在ゴジラは天敵になるG細胞や放射能をある程度吸収出来るMUTTO姉妹やオルガ、デストロイアにシノムラ、メガギラス等に見張らせている。

「ゴジゴジの力が5割増しとなると、シャトウビーストよりも遙かに強敵になると思われます」

「しかし、ゴジラは体内に住み着いた異物を弾き出せるのでは？前回それで怨霊を体から追い出した訳ですし」

と、挙手する千年竜王。それにはその場に居たモスラやバトラ、アギラ達も同意だ。

「理由は不明です……怨霊達がシャドウミストと違い明確な意思があったからか、或いはシャドウミストが工夫してるのか……兎に角、現在ゴジゴジの中からシャドウミストを追い出す為の方法を調査中です。心苦しいですが、幾らか其方に人材を裂く事になります」

単体でシャドウビーストを圧倒出来るゼットンやゴジラ。もしこの二人がシャドウミストに侵蝕されたら、多くの怪獣娘に暴走時に備え見張らせる。今回はその緊急措置が行われたというわけだ。

そこは暗い海の中だった。

前すら見えず、人間ではまだ侵入出来ない特殊な地形から流れる潮に紛れたきた魚を食らい生きていた。

仲間の気配は常にしていた。何時かは自分もこの中のどれかと番になり、子を残すのだと理解していた。

「……………」

しかしそれは唐突に崩れ去った。壊された。その日の潮の流れを

覚えている。その日の水温を覚えている。その日紛れてきた魚を覚えて
いる。

「……………?」

違和感。

来ない。確かに来たはずだ。この後、否、もう来たはずだ。しかし
何も起きず、仲間の気配は健在。可笑しい、可笑しい、可笑しい。

ああ、しかし……これはこれで良いのかもしれない。

だが、何かを忘れてはいまいか……………。

懐かしい島だ。

木の実を食らいながら潮風を感じる。つい最近まで喧しかった人
間達も居ない。

あの人間達はまあ、此方を尊重してくれたから嫌いではない。小競
り合いは余所でやってほしいから好きでもないが。

「恐竜殿！」

「……………!」

と、何時の間にかあの人間達のリーダー的な奴だった男が立ってい
た。その背には大きな卵が有る。

「専門家の判定により、恐竜殿の同種の卵と思われます！我等の窮地
を救ってくれた御身に感謝を！」

そう言って一礼すると去っていった。後には卵が残されている。

この卵、誰が守っていたんだったか？いや、それ以前に確か生まれ
てなかったか？

守っていた？生まれていた？自分は何を言っているんだ？

思考が曇る。まあ良い、この卵が生まれるのを待とう。考えるのは
それからでも遅くないはずだ。

「……………」

ゴジラが目を覚まし上体を起こす。周囲を見回せば数名の怪獣娘

が居た。

「兄様……！平気？」

オルガが真っ先にゴジラに駆け寄る。ゴジラはぼんやりとした瞳でオルガを見るとその大きな帽子に手を置き……壁に向かって投げ付けた。

「かはっ!？」

「!？」

「ツチ!?!暴走したか……!？」

一同は直ぐ様構える。バーニングモードになる前に決着を付ける。ゴジラと正面切つて戦い勝つ手段はそれしか思い付かない。

同時に仕掛けるデストロイア達にゴジラは一瞥をすると床を蹴る。

「!?!——ツ!?!」

ほぼ同時刻に震度観測点がマグニチュード4.9程を観測。ゴジラは衝撃で吹き飛んだ床の穴から地下の下水道に向かって落ちていく。

瓦礫も落ち、道が完全に塞がった。追うのは困難だろう。

「……………む?。」

「おばあちゃんどうしたの?。」

地面がそこそこ揺れ『ああ、地震か』としかし何事も無い様に歩いている一般人の溢れた大通りで一人の少女が地面を見る。地面と言うよりは、その先に有る何かを見ている様だ。

「おばあちゃん?コンクリートは食べれないよ?。」

「違うわ!どうやら面倒な事になったみたいでな……其方に向かうぞ」

「え?でも良いの、せっかく一時間も並んだのに……後十分待ちだよ?僕、これ食べたい」

「……………まあ二万年も娯楽がなかったからのお。多少娯楽を優先しても許されるであろうさ」

登場☆怪獣娘!?

シャドウガッツを捕らえる為に集まったのはアギラ、ウィンダム、ノイズラー、レッドキング、ザンドリアス、ゴモラ、モスラ、キングギドラ、キングシーサー、キングジョー。

本来ならもう少し人員を回すはずが、ゴジラの脱走の連絡が有りそちらに割かれた。

「ピグちゃんさ、これって一般の人まで来ちゃったりしない?」

『嘘イベントの告知はシャドウガッツにしか連絡してないので大丈夫です♪』

「じゃあ、あの人は何故?」

と、ゴモラが指差した方向に居たのはいつぞやのシャドウミストに取り憑かれていた男性。キョロキョロ周囲を見回している。

「ここで、おジョーさんに出会える予感が……」

ゴジラもビックリな追跡性能である。

「……マジか」

「うひゃー」

ゴモラやレッドキングも思い切り引いていた。

キングジョーが今夜の秋葉原でやるイベントに整理券が有る事を伝えると並ぶ為に去っていったが……。

「パタパタ………ん?」

と、暇なのかザンドリアスが擬音を呟きながら飛んでいると突然人影が現れた。

ガッツ星人……いや、シャドウガッツだ。

「……………」

シャドウガッツが周囲を見回すと臨戦態勢になった怪獣娘達。罨だと気付いたが逃げる様子も無く、黒いオーラを放ちながら彼女もまた臨戦態勢になる。

その彼女のオーラに呼応する様にシャドウが現れた。

「今日はゼツちゃんは?」

「居ねえ！」

「じゃあ行きますか」

「おう！お前等、コイツの目を覚ましてやろうぜ！行くぞ！」

「「おう！」」

「ちよーつと待ったー！」

レッドキングの叫びに誰もが戦闘開始と意気込んだ瞬間、唐突に割って入ってくる声があった。

「ガッツ！」

アギラが叫ぶ。

そこに居たのは本物のガッツだった。確かに彼女は変身状態でやられていたのだから怪我也それほど酷くないだろう。しかしソウルライザーも無いのに何故……？危険過ぎる。

「どうしてここに!？」

「ミクラスがソウルライザーを貸してくれたんだ」

と、その時の事を思い出してか微笑むガッツ。

「本当、プライドも身体もボロボロ……でも、自分のケジメは自分で着けさせて貰うよ！いやっほう！」

そう言ってガッツは高く跳ぶ。

「ソウルライド！ガッツ星人！」

全身が光った後に変身し着地したガッツはシャドウガッツを指差した。

「さあ……さあさあさあ！来ました、私が！私に、会いに！行くぞ！」

「こいー！」

ガッツが飛び出しシャドウガッツも叫び、互いの拳がぶつかる。それを合図にシャドウ達も動き出す。

「ガッツ、露払いは任せろ！」

と、レッドキングが叫ぶ。それに対しシャドウガッツがニヤリと笑ったのを目の前のガッツだけが気付いた。

「——!？」

瞬間、地面から青白い光の柱が立つ。

咄嗟に避けたレッドキングだが余波で吹き飛ばされる。

「今の光……………」

アギラが目を見開くと同時に地面に空いた穴から黒き影が飛び出し始める。

黒いコートに黒いズボン。身長より長い黒い尻尾…………。

「ゴジラ……………」

「グル…………ギャオオオオオオオオン!!」

アギラの眩きにゴジラは着地の際曲げていた身を起こし叫ぶ。大気がビリビリ震え、アギラ達は思わず一步後退る。が、動ける者が三人。

前世のゴジラを前にした事が有る三人だ。

「うていちき……………！ギャンツ!!」

「キングシーサーさん!!」

真っ先に飛び出したキングシーサーはゴジラの尾に吹き飛ばされる。その隙にキングギドラが口内に溜めた引力光線を解き放つ。

「ごああー！」

「ガアアー！」

ゴジラも同時に放射熱戦を放ち相殺するもモスラが背後から迫る。が、目の前からゴジラが消えた。

「上よモスラー！」

「……………!?!」

ゴジラは尻尾を使い跳ねたらしく、無防備に背中を向けるモスラ的首筋に噛み付こうと口を開く。次の瞬間——

「てい……………」

「ガ——!?!」

ゴジラが蹴り飛ばされた。少女に。

少女がゴジラを蹴った衝撃を利用しクルリと回転して着地するとズン!と地面が震えた。

怪獣娘の中には、生前重さを武器にしていた怪獣の特性で体重を操作出来る怪獣娘が居るらしいがそれと同じだろうか？

だとすると目の前の少女も…………?と、モスラはその少女を見る。

緑の着物に、牙を模した顔下半分を隠す仮面。長い尾に三列の背鰭が生えている。

「……ゴジラの、同族……?」

モスラが思わず呟くと少女は悟りでも開いたかの様な優しい瞳をモスラ達に向けた後、ゴジラが吹き飛ばされた瓦礫の山を見る。

「ぐるあああつ!!」

「ふむ……主、色々混じっておるな?」

目が合った瞬間理解した。あれは、ゴジラと似ているが少し違う。本質的には自分に……自分よりバトラに近い存在。地球の意思の体現者………星霊、星獣の類だ。

「オオオオオオオオ!!」

と、瓦礫が吹き飛びゴジラが出てくる。擦り傷などは有るもののピンピンしていた。

「……………む?」

不意にゴジラを蹴った少女の足から黒い靄が噴き出す。シャドウミストだ、接触した際付いたのだろう。モスラが慌てるが少女はふう、と溜め息を吐き足下の落ち葉でも払う様な動作で足を降り、シャドウミストを消し去る。

「ふん……頭の中から壊せ殺せと喧しい。そんなもの、前世で二万年近く聞かされ続けばいい加減に飽きる……」

そう足下の瓦礫を砕きながら此方を睨むゴジラに向かって笑みを浮かべる。

「暴れ足りないと言うなら、来るが良い我が愚息よ!」

復活?・怪獣王!?

「ガアアアア!」

「む……」

ゴジラの放った蹴りを片手で受け止めるも、追撃の間も無くゴジラが離れ空を切った拳に勢いを取られバランスを崩し踏み付けられる。が、尾を振るい弾き飛ばす。

「なる程なる程、混じっていると云うのは中々厄介なものだ……猛者が多かったと見える」

ゴジラの世界の怪獣達はまず硬い。それこそゴジラの十八番である放射熱戦の一撃では倒れない者も数多く居る程に。対して少女の戦った怪獣達はただデカいだけの動物と言っても良い。苦戦など、前世では二万の年月の終わりに少し味わった程度だ。

戦闘経験では向こうが上だろう。

(……しかし、重いな(っ))

少女の前世は約300メートルの体高に10万トンの質量。対してゴジラは前世バラツキこそ有るものの大体が100メートルで5万トンと互いの大きさを比べるとそれに対し体重が重すぎ、軽すぎる。

それはつまりゴジラの密度は少女の数倍である事を意味する。が、それは前世の話。思った以上に重たかった、それだけ。その程度で負けるなら、星の文明の抹消者を語れない。

「それに、人型では関係ない!」

「!?」

ゴツ!と拳と拳がぶつかり合う。先程ガッツ達がやった再現の様な光景。しかし此方は片方だけが吹き飛ばされる。そう、ゴジラが……。

「が——ぐあ!」

ひしゃげた腕を押さえ気合いを入れる様に叫ぶと一瞬で治る。再生能力は前世と変わらず……いや、必要な細胞が少ない人型の分かなり速い。

単純に戦えば泥仕合だろう。

しかし、あの霧はどうやって愚息の体に乗っ取った？

首を傾げる少女はまず単純な疑問を覚える。シャドウミスト如きで、仮にも自身の分身であるフィリウスを乗っ取れるとは思えない。より多く、自分の知らぬ何かが混じっているのだから尚更。暴走させようにも抵抗され弾かれて終わりだろう。本人が余程殺したい何かがあるなら話は別だが明らかに目の前のものを敵と認識しており破壊したい何かが有るわけでもなさそうだ。

「……ふむ」

つまり別の方法を取っているのだろう。

ストレスを感じさせない方法で。

「があー」

「と……ふっ！」

「ギ!？」

「む?」

ゴジラの正拳突きを交わしお返しに裏拳を叩き込もうとするもやはり避けられる。が、ゴジラがバランスを崩した。

「……ふむ……せいー!」

「ぐーぐう!？」

やはりバランスを崩す。

体と中身が合っていない。反射的に動く体を、中の精神が御せていない。例え暴走だとしても、それならむしろ本能が前に出る分反射的だろうと次の動きに繋がられるはずだ……。

「ああ、なるほど……」

つまり中身は此奴ではない。暴走しているわけではなく、取り憑かれている。簡単に取り憑く方法は、大方精神が自ら寝続けるような夢でも見せているのだろう。

「よし、取り敢えず叩き起こすとしよう……」

「いあ?！」

接近し拳を振るうふりをして視線を誘導すると足を踏み付ける。反射的に片足を上げてしまったゴジラに足を掛けバランスを崩すと

肘を打ち込む。

本来己の武器となる反応も、中身が体を使いこなせてなくては単なる足枷。存分に利用し痛め付ける。そうすれば精神も身を守る為に起きるだろう。

「……………ん？」

と、ゴジラの背鰭が青く発光する。その行為は、少女にも見覚えがある。成る程、自分の子を取り込むだけあり、有り様は似ているのだろう。

「面白い……………」

少女の背鰭もまた、青白く発光しバチバチ音を立て紫電を迸らせる。

純粋な核エネルギーと細胞その物が強力なコイルという体質を利用し放つ光線。系統が異なる、用途は同じ二つの破壊の一撃がぶつかり合おうとした瞬間…………

「わあ……………!?!」

「……………!?!」

シャドウに不意を付かれてのし掛かられたアギラの悲鳴が聞こえ、ゴジラが熱線をそのシャドウに向かって放った。

当たればあるいは相殺し合ったであろう少女の熱線はそのままゴジラを吹き飛ばした。

「ゴジラ!?!」

明らかに自分を助けて、しかしそのせいで直撃を受けたゴジラにアギラが慌てて駆け寄る。そして——

「……………そろそろ行くか」

無人島で空を見上げたゴジラはそう呟く。足下の子供が不思議そうに首を傾げた。

「どこに行くの?」

そう声を掛けてきたのは、自分達と人間がコミュニケーションを築く為にやってきた此方の意思を理解してくれる少女。いや、違う。そ

ういう辻褃合わせでやってきた少女の幻影。

足下の子とてそうだ。

「仲間も、家族も、友も……全て失った」

「?何を言っているの?」

「ここでは全部揃う。夜眠れば海の底、朝起きればこの島……俺が欲しいモノが、失いたくなかったモノが全部揃っている……けどそれは俺の記憶から作られた、回り続けるだけの世界だ」

いつしかその姿は十数メートルの恐竜から100メートル近くある巨大な怪獣へと変わっていた。

「取り戻したいと思わなかったと言えば嘘になる。けど、取り戻してみせると躍起になった覚えはない」

怪獣から、人へと姿を変えたゴジラは拳を何も無い空間に叩き付ける。

『!?!』

どこからともなく悲鳴が聞こえ空間に罅が入る。

「ああ確かに幸せだった。感謝しよう……だけどなあ……失って取りこぼして零れ落として、それでも俺だけが生き残った。俺だけが他の生き残りを見付けた……俺だけが、前に進めたんだ。何時までも同じ所を回っているわけには行かぬーよ」

ミシリと亀裂に突っ込んだ指に力を込める。亀裂から黒い靄が吹き出し炎に焼かれていく。

「……………そこは、とても悲しい所かもしれないわよ?」

「悲しくないさ。今の俺には新しい家族が居る。仲間も友も居る。悲しむ理由なんてとうに失せた……」

「……………そっか」

少女の幻影は優しく微笑むとその姿を消した。子供も同様に。

ひび割れた空間が、一部海の底を写したりと絵柄を変えたパズルの様になっていく。

「感謝はするさ……おかげで、漸く全てを思い出せた。だが赦さん……俺の過去に土足で入りやがって……俺は俺らしく、怒りを以てお前等を殺してやろう」

溢れ出した炎が、偽りの夢を焼き滅ぼしていく。

「ゴジラー！」

「待てー！まだ近付くでないー！」

少女が慌てて叫ぶもアギラは土煙の中に倒れるゴジラに駆け寄ると、土煙の中から手が突き出してくる。

「ちいー！」

少女が慌てて駆け出す。が、出てきた手がやった事と言えばアギラの頭に優しく手を置くだけ……………。

「ふう……………よく寝た」

「……………寝過ぎだ寝坊助めが」

「ん？誰かと思えば懐かしい。過去の一つの母親じゃねーか」

「過去の、一つ……………のう……………聞きたい事は多々有るが、まあ……………久しいな、あの程度の人間共にやられたバカ息子」

「お前こそ転生してんならやられたって事何じゃねーのか？なあ、母さん」

決着☆怪獣娘!?

「星から生まれた生物が傲慢にも我等は星の王であると驕り、数多の生物を滅ぼした。」

「そこまでは良い。そもそも生存競争に敗れ種が絶滅するのは良くあることだ。絶滅させた種類が多いのは生存競争に勝ち続けている証でしかない。」

「しかし、王を僭称するその生物達は星を削り、星を汚し、星そのものを破壊し始めた。」

「星を生物の住めぬ死の星に変えようとしていた。故に星の怒りに触れた。」

「最初期に生み出した怪物達は、やがて敗れた。後から生み出した者達も。だが問題ない。所詮は時間稼ぎ。」

「中には己の強大さに自身を星の王と舞い上がる者もいたが、それらを含めて滅ぼす準備はとうに出来ている。」

「やがて生まれた星の意思の体現者。いずれ戻つて来るであろう傲慢なる生物達に備え環境をも書き換える破壊の王。成長のために眠る破壊の王は自らの力を模倣した分身を生み出す。」

「久し振りだな母さん。縮んだな」

「それはお前も同じ事だろう。特に、私は生まれた年代が間違いなくお前より遅い……」

と、肩をすくめる少女。

「わはは！二万年生きた婆が今さらガキかよ！マジうける！」

「ぶっ殺すぞ貴様！」

「しかし軽いな。ちゃんと食ってるか？」

「ゴジラの言葉に飛びかかる少女をゴジラは軽くないなし、足を掴んで逆さまにぶら下げる。」

「軽いが強靱な繊維で構成していたのと、そもそも物理的な攻撃に対しそれほど体を硬くする必要がなかったからな。逆にお前は重すぎ」

んか?」

「非対称透過フィールドなんて持ってない前世ばかりだったんでな。ただ単純に硬く、その分重くなっただけ支えられるだけ強くなっただけだ」

「生物の限界を超えておるの」

と、呆れたように溜息を吐く少女とどこか嬉しそうなゴジラ。と、その時周囲のシャドウが襲いかかってくる。

「邪魔だ」

が、ゴジラが足から手を離し横回転。少女は落下しながらの縦回転で尾を振るい吹き飛ばした。

「ゴジラ、もう平気なの?」

「おお、アギラか。迷惑かけたな、もう大丈夫だ」

「……………?」

そう言っただけで笑うゴジラに、違和感を覚える。何というか、何時もより大人っぽいというか、何というか。

「……………雰囲気、変わった?」

「前世全部思い出せたからな。そのせいかもしれないね……………と、それより偽ガッツは、と……………」

見ればガッツが追い詰められていた。シャドウガッツがとどめを刺そうと黒いオーラを手に進ませガッツに迫る。が……………

「よつと……………」

「ぐっ!?!」

ゴジラが偽ガッツを蹴り飛ばす。

「……………ゴジラ……………」

「よおガッツ、手を貸してやろうか?」

「……………大丈夫、一人でやれる」

「…………………………」

「あいた!?!」

フラフラと立ち上がったガッツだったがゴジラの無言のデコピンを喰らい涙目になって額を押さえた。

「……………?……………?……………」

「阿呆。支えるって言ったろ？お前の敵は俺の敵。それが仲間だ」
「……………仲間？」

「ああ。GIRLSは仲間だ。もちろんお前もな……………んで、他の皆だっけそうだ」
「……………」

ガッツはその言葉に周囲を見回す。この場に来ていた怪獣娘達と目が合う。

「……………そっか」

「それにこれはリベンジマッチでもあるからな。おいこら偽ガッツ、俺はあの時シャドウミストに犯されてて調子が出なくて逃がしただけだ。決して負けた訳じゃねー」

「……………負けず嫌い」

ゴジラの言葉にガッツがボソリと呟く。

「邪魔を、するな！」

と、シャドウガッツが迫ってくる。

「ゴジラ……………手伝って」

「おうよ……………」

「があああああ！」

雄叫びをあげ迫ってくるシャドウガッツ。ゴジラはゴキリと指を鳴らす。

「大人しくしな！」

「が——っ!？」

「……………ありゃ？」

ゴジラの拳がシャドウガッツの腹にめり込み吹き飛ばされる。何というか、ゴジラ一人で十分なのでは？

「ぐっ……………まだ、だあ！」

と、シャドウガッツはフラフラと起き上がる。

「いいや。終わりだよ……………戻っておいで、もう一人の私！」
「があああ!？」

しかしガッツが放った光線に撃たれ、ドサツと倒れる。

黒い靄がガッツの分身から離れ、さらにシャドウ達が靄になり一つ

の場所に集まっていく。

やがて黒い球体になり、それは巨大な人型になる。

「シャドウビースト!」

「に、しちや反応が妙だな……」

アギラの言葉にゴジラは首を傾げる。

『ガ——アガアアアア!』

「こ、今度は何?!」

と、シャドウビースト(?)は突然苦しみだした。メキメキと音を立て形が変わっていく。

背鰭が生え、尻尾が伸び、爪や牙が現れる。

「……………ふむ。おいファイリウス、奴から主の気配がするのだが?」

「ああ。多分俺に憑いてたシャドウミストも吸収したんだろうな……………俺のエネルギーを帯びたシャドウミストを……………」

「シャドウジェネラルを汚染するなんてさすがゴジラのエネルギーですネ」

と、キングジョーが呆れたような感心したような声を出した。

「シャドウジェネラル?」

「シャドウやシャドウビーストより上の、シャドウミストの大元なのデス」

『グオオオオオオオオンツツ!!』

「……………まあ、あれはもはや別物ですが……………名付けるならシャドウG——1ですカネ」

みんなで！怪獣娘！

『ゴアアアアアアア！』

ビリビリと空気を震わせながら吠えるシャドウG-1。人型ではあるが百足の様な触手と言い、大きさと言い、人とは完全に異なる。オマケにゴジラの力を吸収しようとして尾が生え背鰭も出ており、怪物じみてきている。

そして、両手を広げると四体のシャドウビーストが現れた。

蝶型にクワガタ、生物とは異なるロボットの様な形態が二体。それぞれが怪獣娘達に敵意を向ける。

「おい母さん、行けるか？」

「誰にモノを尋ねている。行く行かないではなく、行くぞ。あれはワシ等の一族の力を吸って変異した……我等が片を付ける」

ドン！と地面を蹴り同時に蹴りを放つ。

『グウウ!』

「む？」

「お？」

それに対してシャドウG-1は自ら後ろに飛び威力を殺す。そして百足の様な部位を二人に向かって放つ。

「ふん。甘いわ」

「出直せ」

それを尾で弾くゴジラと少女。と、弾いた百足の影から別の影が現れる。が、それはガッツと分身のガッツが弾く。

「うむ。別段援護は必要無かったが良くやった」

「母さん、あんま素直な感想言うなって……ん？」

と、シャドウG-1は曲刀の様なモノを生み出し投げ付けてきた。ゴジラはそれを蹴りで跳ね返す。

『ガア——！』

シャドウG-1の腕を切り落とし地面に突き刺さる曲刀。何時の間にかそこに移動していたのか、少女が引っこ抜き振るう。

『ゴア!?!グ……コ、ノ………偽りノ怪獣ドモガアアア！』

「ほう、喋れるのか？しかし、理性を持つているなら身に余る力に手を出すべきではなかったな。既に使命も忘れ、目に付くモノを破壊したいだけだろう？大人しくしている……………セルヴアム！」

と、少女が自らの腕の皮膚を爪で引き裂くと黒髪の頭に赤い球の髪飾りを付けた少女達が現れシャドウG―1を押さえ付けた。

「……………何あれ？」

「何って、前世でお前の姉妹達だったセルヴアムだろうが……………」

「俺のは怪獣娘化してないからなあ……………してるのはシンだけ……………そう考えると分裂に関しては母さんが上か」

押さえ付けられもがくシャドウG―1。膂力では勝っていようが数で押さえ込まれている。

『グ、オオオオオオオ!!』

と、シャドウG―1の背鰭がどす黒く発光し口内にも同様の光が灯る。

「ふん、セルヴアム共！放り投げろ！」

少女の叫びにセルヴアム達が『えーい！』とシャドウG―1を空高く放り投げる。

「フィリウス、ケリを付けろ」

「おうよ……………」

『ガァー！』

『ゴアァー！』

シャドウG―1が黒い熱線を吐くと同時にゴジラも回転して背鰭の発光による軌跡を描きながら赤い熱線を放つ。

『グ、ガ……………ガァァァァ!!』

それはシャドウG―1の熱線を押返し、シャドウG―1を遥か上空まで吹き飛ばし爆発させた。

「ううむ、射程距離はワシより上か？」

「俺は大气圏外の隕石を狙い撃ち出来る男だ」

「にーちやすごーい！」

「アニキー！」

「……………此奴等どうにかならんのか？」

「お前に懐いているんだ。可愛いものじゃないか」

引つ付いてくる妹(?) 達にゴジラが振り払えず去れるがままになっ
ていると少女はカラカラと笑った。

「終わったようね」

「エレキング、来てたのか。ん、其奴等は?」

何時の間にか来ていたらしいエレキングが話し掛けてきて、その後ろに居る見た事が無い怪獣娘達が居た。

「後輩よ。名前は——」

「あ、マガジャ——はわ!」

「自分はマガバ——はへ!」

「……………ん?」

「何をしてるの、ゴジラ?」

「いや、何か頭撫でたくなった……………」

ナデナデと二人の頭を撫でながら首を傾げるゴジラ。しかし撫でるの
は止めない。

「にーに、私も!」

「ボクも、ボクもにーちや!」

「アタシもー!」

「パパ、ボクも…………」

「解った解った、きちんと並べ……………ん?」
「ん?」

妹(?) 達の頭を撫でていると明らかに呼び方が異なる声が聞こえた。
見ると眠そうな顔の灰色の髪の少女が居た。

「……………ミニニラ?」

「久しぶり、パパ♪」

母親？・怪獣王!?

「ふむ。やはり貴様の子だったか。隅に置けんな」

「こつちの世界で作った訳じゃねーよ。つか、元の世界でもどうやって作ったつけ……?」

いや、本当に思い出せない。番なんて居なかったはずだ。何時の間にか有った卵から生まれた。

リトルと同じ様に拾ってきたんだっけ? いや、実の子だった気もするし……。ホラー?

「……………」

「ま、子である事には変わりないか」

頭を撫でてやる。前世以来で、互いに人間の姿になっているので感覚も異なるが、懐かしいと感じた。ミニラも同じなのか目を細めてされるがままになっている。

「あの一、親子の再会を喜んでるところ悪いんですが、そろそろ説明お願いして良いですか?」

と、ゴジラがミニラの頭を撫でているとピグモンが申し訳無さそうにやってくる。家族の邪魔をしたくはないのだろうが、事が事だ。

「……娘のミニラだ」

「よろしくね」

「またですか……………そちらの子も?」

「いや、母さんだ……」

「……………母さん?」

「母さん」

首を傾げるピグモンにうん、と頷くゴジラ。ピグモンはジツと少女を見る。

「お母さん?」

「うむ、お母さんだ」

と、小柄な体に比べて豊満な胸を張る少女。

「まあ人として生まれる時季が遅れ、息子より年下だがな」

「……………な、成る程………ついでに年齢は? あ、人としての、ですが」

「今年で15だ」

「……15……」

ピグモンはある部分を見る。

「ボク11歳!」

「じゅ、11……」

ミニラの言葉に同じ様にある部分を見て、ズーンと落ち込むピグモン。

「私もペガちゃんの計画に一枚噛ませてもらいましょうかね……なくんて。と……ピグモンはピグモンです。ゴジゴジの上司をさせてもらっているのですよ。お二人とも記憶が有るみたいですし、ここでは何なのでGIRLS本部までお越しいただけますか?」

「解った」

「わかったー……」

後、ゴジラにも付いてきて貰おうと思ったのだがゴジラは申し訳無さそうな顔をして断った。

「ちよつと、用事が残ってるから……後で良いか?」

「……はい。ちゃんと、謝ってくるですよー」

「ああ……」

先程赤い熱線が雲の向こうへと消えていき、爆発した。間違いなく、あれは兄の力だ。向こうに兄が入る。

正気とは限らない。暴走したままかもしれない。またやられるかもしれない。だが、心配なのだ。前世を知っているから。彼の力を得ようとして、呑まれた過去が有る。

シャドウミストが心の透き間に取り付くと言うなら、あれを暴走させるのではないか、それは本人であろうと耐えられないのではないか、と……

「よお、何急いでんだ?」

「え?あ……兄様!」

不意に声を掛けられ、ゴジラが現れる。どうやら正気の様だ。シャ

ドウミストが離れたのだろう。

「来ると思ってた。お前は離れた細胞じゃなく、直接俺から新鮮な細胞を取ったせいで妹の中で一番俺の記憶に触れてるからな。悪い、暴走して、心配を掛けた」

「え、あ……そ、そんな……」

確かに心配はしたが、謝られる様な事ではない、と思っていると目の前に手が伸びてきた。

びくりと体を震わせるが、その手は額に巻かれた包帯に向かい親指でそつと撫でる。

「悪かったな、怪我をさせて……」

「!?……いいいや！ほら、私は兄様の力の一端を持っているからこの程度の傷……！」

何だろう、兄が何時になく優しい。普段は、前世も有ってかなりツンツンしているのにデレ期の到来だろうか？だとしたら姉の一人、ビオランテに合わせる訳には行かない。

まあ理由としては前世の記憶が完全に蘇り仲間を失った時の事を鮮明に思い出したので、多少変則的とは言え同様の系譜に当たるオルガに優しくしている訳だが……これはビオランテにも当て嵌まるはずなので、確かに会わせない方が良くかもしれない。

「……………はふう」

恥ずか死と言う造語が有るが、もし本当に恥ずかしさで人が死ぬなら致死量レベルの羞恥を味わったオルガはパタリと気絶した。その顔は幸せそうだった。

「次はキングシーサーに謝りに行かなきゃな。何処まで吹っ飛ばされてんだろう、あいつ……………」

子供達は砂場から生えた足をつんつん弄っている。時折ピクリと動くから生きているのだろう。最初は動く度に距離を取っていたがもう馴れた。

クソガキが犬の糞を付けた枝を近付けようとした時人影が現れる。振り向くと長身の男が居た。

ジロリと睨まれ蜘蛛の子を散らす様に逃げる子供達。

長身の男、ゴジラが足を掴み引っこ抜くとキングシーサーが出て来た。

「気絶……………いや、これは寝てんな」

「むにやむにや……………」

「おい起きろ」

「んー？ナー ヒテイミチ ？」

「寝ぼけてんなキングシーサー」

その言葉にコシコシと目を擦るキングシーサー。だが逆さまだ。

「お、ゴジラ。ナー 平気ー？」

「ああ。悪かったな。詫びがしたい。何か俺に出来る事は有るか？」

この優しさは今世において自称親友に嫌と言うほど叩き込まれた対応だ。するとキングシーサーはんー、と考え込む。

「ワンをサイキョーにして——」

「いや、それは無理だ。俺の出来る事の範疇に無い」

入隊？・怪獣母!?

「それで、えっと……………あの、何とお呼びすれば？・ゴジラ、ではゴジゴジと被ってしまいますし」

「名、か……………そうだな。ではゴジラ・アース……………アースと呼ぶが良い」
ゴジラの母だという少女、ゴジラ・アースはそう名乗る。ゴジラの同族でゴジラの名を持つのは、それだけ前世でゴジラに近い形をしていたと言う事なのだろう。

「アース……………さんは前世でゴジゴジの母親だったんですよね？」
「うむ。まあ、一般的な生物の親子とは違うが……………あれは、フィリウスは本来ワシの完全なる写し身、分身の様なものだ。まあ、この世界では多くが混じっている様だが」

「んー、ゴジゴジは幾つもの世界線の記憶を持ってるみたいですからね。その内の一つの母親って事ですか？」

ゴジラの家族は基本的に全て失ったと聞いていたが、生き残りが居た世界も有ったのか。と、そこまで考え彼女の言葉の違和感に気付く。

「……………分身？」

それは異常な再生能力を得た、怪獣化した後の特権では？

「母さんは生まれながらの怪獣だよ。他の世界線、恐竜のなり損ないの水中生物だった時代も、現代まで生き残れた恐竜としての過去も無い」

「あ、ゴジゴジ……………」

と、そこへゴジラが帰ってきた。

「む、お主、他の世界線では妙な生い立ちをしているのだな」

「まあな……………」

「アースさんは違うんですか？」

「全然違うぞ。母さんは人間を滅ぼす為に地球に生み出された存在だ」

「……………人間を、滅ぼす？」

とんでもない単語を聞いた様な気がするが、気のせいだろうか？い

や、気のせいではないな。間違いない『人間を滅ぼす為』にと言っていた。

「安心しろ。それは前の世界の、前の星での話だ。此方の星はワシと繋がっておらぬからなあ。この星の為に人類を滅ぼす事は無い……………ワシはな」

「他の何かが世界を滅ぼす可能性が有ると?」

「星が望めばな。もつとも、この世界ではそんなモノが無くても危ない様だが……………光の巨人共が居なければ何度滅んだのであろうな?」

「その辺は知っているんだな……………」

「ミニラが教えてくれたよ。この世界では有名な事なのであろう?」

確かに、調べようと思わなくてもテレビで普通に見れる。しかしだとすると、ミニラは暫く人間の世界に住んでいた事になるが、まさか……………

「ミニラは心中しようとした家族の中から拾った子だ。富士の樹海に住んでいたのだが、ある日家族でやってきた幸薄そうな奴等が毒を飲んでな……………ミニラは、その時には力を覚醒していたので毒が効かなかった」

「心中、ね……………首を括ろうが頭を破壊しようが毒を飲もうが好きにすりゃ良いが、周りを巻き込むなよクソが……………」

ゴジラがツチと舌打ちするとゴジラ・アースは全くだ、と同意する。親子だけあり、似ている。

「ま、まあ……………取り敢えずアースさんは人類を滅ぼす存在だったんですね……………今はそのつもりは無いみたいですけど」

「うむ。2万年生きていたしな……………この世では俗世を楽しむつもりだ」

「なのに富士の樹海で隠居してたのか……………実は迷ってたとか?」

「ははは。富士の樹海が脱出不可能など俗説だ。迷い易いからと言ってそこから出れぬモノか……………寝過ぎただけだ」

「お前、前世でも戻ってきた人類の対応、俺が殺されるまで起きなかったよな……………?」

「……………お、お主なら問題なく勝てると思っておったからなく」

「目を合わせろやクソ婆」

「く、くそ!?お主、前世とは言え母親に向かって何たる暴言!」

「がー!とキレ気味に立ち上がるゴジラ・アースにゴジラも同様に構える。

「上等だ、射程距離が俺より下の、雑魚狩りしか経験のねー母さんより今の俺のが強いって証明してやる」

「ほう……?上等だ……親の偉大さを思い出させてやろう。表に出ろ」

「ふん、行くぞ……」

「あのく、お二人共……少し落ち着きましょうね?」

ゴジラとゴジラ・アースはコキコキ肩を鳴らしながら退室しようとする。が、ピグモンがニツコリと笑みを浮かべると大人しく席に戻った。

「おい、何だお前の上司は……戦えば勝てるはずなのに、逆らう気が起きん」

「さあ……何なんだろうなこの謎の威圧感……」

「うふふ」

怯える二人にピグモンはニツコリと笑顔を浮かべ続けた。

「さて、それじゃあ次はミニミニちゃんですが……」

「ミニラは俺の子だよ」

「……拾ったんですか?」

「いや、血は繋がってる……筈なんだが相手が思い出せない」

残念ながらこれっぽっちも相手に関しては思い出せない。シャドウミストが記憶の檻に閉じ込めてきた際に全てを思い出したかと思っただが……

「まあ、細かい事は良いでしょう。私はGIRLSの職員として、皆さんの仲間入りを歓迎しますよ」

「そうか、ありがとう……ほら、お前達も挨拶しろ」

「「はいー」」

「……その子達は?」

「さつき生まれた私の娘達だ。ファイリウスと違って私の力を受け継いでいる訳ではないがな」

「ちっきゅ。」

「さつきだ……」

「……………」

集合？・G一家!?

「と、言う訳で……此奴等が俺の同族達だ」

G細胞を持つ者達を前にゴジラ・アースはほう、と呟き眺める。

厳密に言えばG細胞を取り込んだ者としてはデストロイアが居るがあれは進化の方法として取り込んだので除外。

「こうして見ると中々奇妙な感覚だな。覚えの無い娘達が居ると言うのは……………これが不倫ばかりして子持ちに心当たりが有り過ぎる父親の心境か？」

「どういう心境だよ……………」

「ワシはこの世界で、二歳の頃前世の記憶を思い出した。母が昼ドラ好きでな、その頃には見せられていた」

「そういや、何であんた富士の樹海に居たんか？俺と違って、別段人間が嫌いと言う訳でもないだろ？」

と、ゴジラの何気ない言葉にゴジラ・アースはむ、と俯き瞼を閉じる。聞いてはいけない類の話だったのだろうか？

「いや、良い……………実は、ワシが6歳になる年の正月、家族で富士の頂上から初日の出を見る事にしたんだ。その時ワシは、懐かしい深い森の気配に惹かれ、両親から離れてしまった。そして、樹海の性質に身を預けている内に眠くなり……………気が付いたら二年経って帰るに帰れなくなった」

「……………お前、本当に寝坊助だな。人間達が帰ってきた後、ちゃんと起きたのか？実は寝てる間にやられたとか……………」

こうして目の前に居るのだから原因は何であれ死んだのだろう。だから、まあ人間達とは戦ってはいるのだろうか？と勝手に予想していたがこれでは……………

「ぬ。おい、失礼な……………ワシとてキチンと起きたぞ。お主が死んだ後に、じゃが……………その後寝起きの深呼吸とストレッチしていたら何時の間にか沢山死んでおったがな」

「……………」

普通に動いただけでも大体のモノを破壊出来るのだから相変わら

ず質量チートな母だ。

「それより、早く紹介してくれ」

「おう。じゃあまずは長女から……………」

ゴジラの言葉に三式機龍が一步前が出る。

「私は三式機龍。元々は骨になったゴジラの骨に機械の筋肉、鉄の皮膚を付けた兵器だ」

「ほう？ワシを模した兵器はワシの所にも有ったが、似た様なものか？。しかしお主は骨が有ったのか？」

「そーいや母さんはねーな」

続いて前に出たのはビオランテ。

「私はビオランテ。とある科学者が死んだ娘を生き長らえさせる為に細胞を移植した薔薇に、さらに枯れないように兄さんの細胞を植え付けた結果生まれた怪獣です」

「ふむ、ビオランテならワシの世界にも居たな。ワシと同じく植物怪獣か…………」

ちなみにゴジラ・アースは動物ではなく植物の突然変異らしい。

「オレはスペースゴジラ。宇宙に漂ってた兄貴の細胞が結晶生物食ってエネルギー吸収して怪獣化した…………その生物がゴミみたいな弱さだから姿はほとんど兄貴に似ちまったな」

「宇宙か…………となると宇宙空間を浮遊出来るのか？だとしたらワシも一々備えず追っていったのだが……………」

生憎と飛行能力の無いゴジラ・アースは羨ましそうに呟いた。

「私はオルガ。元は宇宙空間の永い旅に備える為に身体を気体化させてたんだけど永い年月の中で元の肉体に戻る術を失って、兄様の細胞を取り込んで戻ろうとしたけどそのまま怪獣化した」

姉妹はこれで全員。後は娘達。

「長女…………は、もうミニラか。次女のリトルだ」

「よろしくおばあちゃん！」

リトルは片手を上げて笑みを浮かべる。

「んでこっちはシン。関係としては俺と母さんに近いな。俺の細胞から生まれた分身だ…………」

「ほう……?」

「……………」

ジツと見詰められ首を傾げるシン・ゴジラ。成る程分身だけあつて、一番息子に近い気配を発している。が、やはり少し違う。随分と変わった進化をしたものだ。進化そのものが能力とでも言おうか?

「パパ、ボクお姉ちゃんになったの?」

「ん?ああ、今日から長女だ。仲良くな……」

「はーい!二人共よろしくね」

と、シン・ゴジラとリトルに駆け寄るミニラ。

「お姉ちゃん?」

首を傾げるリトル。

「お姉ちゃん!」

胸を張るミニラ。

「お姉ちゃん!」

笑みを浮かべ抱き付くりトル。

シン・ゴジラもそれに続く。体格差から、二人はむぎゆう、と唸つた。

「妹と言えばファイリウス、こやつ等も主と遊びたがっておるぞ」
「ん?」

と、その瞬間複数の影がゴジラに向かって飛び付く。

「にーに遊ぼー!」

「うぷ!」

「遊べー!」

「何して遊ぶ?」

「人間狩り!」

「それもう禁止」

「じゃー鬼(ごつ)っ!」

生前の世界線の一つのゴジラ同様にゴジラ・アースから生まれた怪獣、その怪獣娘達はゴジラに飛び付く。

「……………良いな」

それを羨ましそうに見詰めるのはビオランテ……………ではなくオ

ルガ。

しかし自分のキャラではないし……………。

「時にフィリウスよ、まさかまた妹や姉、娘が増えたりせんよな？」

「……………」

「おいどうした？こら、目を合わせんか……………」

人の気配が耐えない都会でも、人が寄り付かぬ場所は確かに存在する。その薄暗い路地裏を自身の庭として逃げる影が有った。

日中だと油断していた中年の女性からバックを奪い直ぐ様逃走した男は出来るだけ遠くへ逃げようとなお走り続ける。と、不意に何かぶつかると。

「……………つて!?!」

一体なんだと見ればそれは少女だった。いや、幼女と呼ぶべきか。こんな所で何を、と思う前に苛立ちが勝る。

「おいクソガキ！てめえどこ見てやがんだ！」

「……………」

自身の倍以上の男の恫喝に、しかし少女は笑みを浮かべる。

「遊ぼ！」

「は？何言つて……………」

「高い高い♪」

翌日、倉庫から物音が聞こえ覗いた住人に、窓を突き破って進入したと思われる血だらけの男が発見された。そこは五階で男は異様に子供を怖がったと言う。

料理？・怪獣蛾!?

「……………ん？」

ゴジラが廊下を歩いていると蛸足を生やした妙な物体が襲い掛かってきた。裏拳で壁に叩き付けるとグチャツと潰れ床に落ちピクピクともがいた。

「……………なんだこりゃ？」

「モスラの作ったたこ焼きだ。ついでに言うが、生きたタコは使っていない……………」

と、呆れた様子で現れるバトラ。たこ焼き(?)の死骸を袋に詰めていく。

「ここまで覚えが悪いと、アタシも料理が下手なんじゃないかと思えてくるな……………いつそ料理本だけ読ませてみるか？それに忠実にやってみやまず間違えないだろうし」

「まあ、そう落ち込むな……………モスラのあれは、まあ例外だ」

「……………あ、そうだ。ゴジラ、良かったらアタシの料理食ってみないか？」

「ん？」

「そうすりゃ、まあ自信が付きそうだしな……………」

次の日。バトラは鼻歌を歌いながらキッチンで料理をしていた。

「~~~~♪」

「……………やけに上機嫌だな」

そんなバトラを見ながらゴジラは出された菓子を食う。あのモスラの姉妹ではあるが、前に食ったチョコは普通だったしキッチンから漂ってくる匂いも普通だ。きつと大丈夫だろう。

「出来たぞ」

「お、生姜焼きか……………見た目は普通だな」

「失礼な……………とは言えんな。片割れの料理がアレでは」

ゴジラの言葉にモスラの料理(?)を思い出し、溜め息を吐くバト

ラ。昨日だったたこ焼きが逃げると言う訳の分からない現象を起こすし、食べた本人が子供を作ると言う訳の分からない現象を親が納得してしまう程だし。

「ほら、さっさと食べ」

「おう。いただきます」

まずはメインの生姜焼きから。

口に含むと生姜のスツとした味と豚の甘い油の味が口の中に広がる。今度は米と一緒に食う。

炊きたての、肉とは違った甘さに肉の味が絡む。

「うん。美味しいな……」

「だろ？」

と、笑うバトラ。嬉しそうだ。

「俺も料理にはそこそこ自信が有ったつもりだったんだがな……これ、何か隠し味とか入ってるのか？」

「教えたら隠し味にならないだろ……ん、いや……そうだな……」

ゴジラの言葉に笑うバトラは不意に何か思い付いた様にニヤリと笑い、次の瞬間赤くなる。見事な七変化である。

「い、いや……うん。そうだな……」つだけ教えてやる」

「お、マジか……」

「その……だな……あ……じょうを……」

「……？」

「だ、だから……あ、あい……う、と……特別な調味料を……」

と、赤くなり俯くバトラ。ゴジラとしてはその特別な調味料に付いて聞いたかったのだが……と、その時。

「ただいま帰りました。あ、ゴジラ、来てたんですね……」

「何してる。おばさん口説きにきたか……？」

「ちげーよ。昼飯作って貰ってただけだ」

と、空になった皿を見せるゴジラ。するとモスラがそうでした！と手を叩く。

「バトちゃんバトちゃん！やりましたよ、とうとう料理が逃げなかつ

たんです！」

嬉しそうに言うモスラだが料理は普通は逃げない。しかし動かないモノを作れるのは確かに大きな進歩だ。

「バトちゃんが見付けてくれた本のおかげですね」

「本？」

「はい。『最高の調味料は『愛』』って題名の本です」

「わー！わー！わー！」

「むぐ!？」

と、バトラが慌ててモスラの口を塞ぐ。確かにタイトルはバトラのイメージに合わないだろうがタイトルは何であれただの料理本だろうに何を慌てているのやら、と思っていると袖をクイクイ引かれた。見ると真つ黒な球を持ったレオとミドリが居た。

「ママの料理、食べ」

「……………え、料理？それが？」

艶々した表面に黒曜石の様な光沢。機械でも使ったかの様な歪みなき球体。それを料理だと言い張る二人。

ゴジラはゴクリと息を呑む受け取る。レオとミドリは監視する様にゴジラをじっと見る。覚悟を決め、ゴジラはそれを飲み込み……………意識を失った。

再開？ 怪獣蜘蛛！

子供も増え、なるべく広い公園を遊び場にするゴジラ。

水辺ではリトルヤシン・ゴジラが遊び、砂場ではミニラやセルヴァムシスターズ達が『お母さんごっこー！』等と言いながら砂場の中に潜ってその上に山を作ってから出るといいう遊びをしていた。

「……………平和だな」

「それが今の世だしな。特にこの世界じゃ俺みたいに環境破壊の末生まれた怪獣とか、出てきた怪獣とかが居たせいで自然になるべく優しくしてるし」

元の世界に比べると、と付くがこの世界はかなり平和だ。国同士の小さな戦争も有るには有るが過去怪獣対策の為、組んだりもした訳だろうし、ゴジラ達の生まれた世界程ではない。

もつともゴジラもゴジラ・アースもこの時代では人間達がどの程度争っていたのかは知らないが。

「時にフィリウスよ、気付いておるか？」

「ああ」

ゴジラ・アースの言葉にゴジラは目を細める。

先程から、子供達を見る目が有る。巧妙に姿を隠しているがこの二人には完全に気付かれている。とはいえ、普通の人間には気付けない程度の気配の殺し方。

視線に宿る飢えた獣の様な気配に加え、狩りに特化した肉食獣を思い起こす気配も感じる。

「対応は俺がする。そこまで強くないみたいだしな」

「ああ。と言うか、この視線の標的に明らかにワシも含まれているようだしな……………」

と、ゲンナリした様子のゴジラ・アース。この獣の様な視線を浴びていると、何故かドツと疲れる。

「はう、かあいよいよ…………お持ち帰りして食べちゃいたいよう……………」

と、そんな視線の正体の変態少女は木の上から双眼鏡を構え満面の笑みで遊ぶ子供達を眺める。と、その時――

「……………あれ?」

メキメキと音がして景色が下がる。慌てて双眼鏡を下に向けようとしたが木が激しく揺れ振り落とされた。

「あいた!? もう、誰よいきなり! 何すんの、馬鹿じゃない!」

「馬鹿はてめーだド変態」

誰が木を揺らしたのかと振り返れば揺らすどころか木を根っ子ごと引っこ抜き片手で持った男が居た。

「……………?」

当然、そんな光景を見ればまず混乱する。が、この女は追われる事に馴れた熟練の変態。即座に思考を切り替え、保護者と思われる人物から逃げようとする。

赤い玉のイヤリングが現れ金髪だった髪の色に茶が混じり左右それぞれに二つずつ赤い球が髪飾りとして現れ、背中からは四本の節足が現れる。

「……………」

その光景に目を見開く男。その隙に逃げようと糸を出し遠くの木に付け移動しようとするもガシリと足を捕まれる。尋常ではない力で。

「……………てめえかクモンガ……………まあ俺の子でも食う気だったか?」

「あ、あれ……………もしや貴方は……………ゴジラ?」

変態、クモンガはさあ、と顔を青くする。前世では結託した事も有ったが、子供を食おうとしたり宇宙人に操られていたとは言え敵対した事も有る。

「ま、待って! ほら、今私人間! 食べないよ!」

「それもそうか……………じゃあ何してたんだ?」

「いやー、前世での食欲がこっちでは何か小さい者を愛でたい庇護欲に代わっちゃって、ロリシヨタとか超尊い! 今の私は中学生までなら愛でられる!」

「……………此奴一番妙な変化だな」

「戻ったか。ん？何だ、その小娘は」

「取り敢えず気絶させといた変態だ。気を付けろ、狙われているぞ」

「ほう…………ワシを狙うとは、中々命知らずのようじゃな」

「……………そう言うのだったら良かったんだけどな」

対決?・怪獣王!?

「何々!?この子が上司!?!」

「始めましてですねクモクモ。私は……」

「あーん、かあいよいよ!小さな体とか赤い癖っ毛とか慎まじやかな胸とか子供なのに背伸びしてる所とか全部かあいよいよ!」

「……………」

「……………あ」

その時、ゴジラは確かにピグモンの額に青筋が浮かぶのを見た。

「ふふふ。クモクモ、ちよつとコツチニオイデ?」

「……………」

手招きするピグモンに大人しくついて行くクモンガ。パタンと扉が閉まる。

「あー……!?!」

「……………クモンガ、安らかに眠れ」

ゴジラは胸の前で十字を切るとその場を後にした。

所変わって、何故か都内に有る荒野。以前特訓の際にもGIRLS達が使用した場所だ。

そこに現在、二つの影が互いを前に体を解していた。ゴジラとゴジラ・アース。少し離れた岩山の上でセルヴァムシスターズやミニラ、三式機龍達G細胞の持ち主達、そして一応は天敵であるMUTO姉妹や、ゴジラ同士の対戦とシノムラやデストロイア、メガギラス達が観戦しにきていた。

「どつちが勝つと思う?」

「さあ?私は人の口の中にいきなり熱いのぶち込んできた方のゴジラしか知らないし……………」

膝の上ののつけた妹の言葉にそう返す姉。仮にもあのゴジラの母を名乗るのだ、少女とてただ者ではないのだろう。だが、生憎と強さは知らない。

「まあどちらにせよ、成熟した純正のG細胞持ちの戦いなどそう見れるものでもない。最近の暇を晴らす余興ぐらいにはなるだろうさ」

と、デストロイア。彼女も口では色々言っているが、ゴジラしか知らないものでどちらが勝つとは明言できない。

「では、来い……!」

「ああ、行くぞ!」

ドン!とゴジラの立っていた地面が吹き飛びゴジラがゴジラ・アースに迫る。その拳を、ゴジラ・アースは拳を以て迎え撃つ。

ドンツ——!

と大気が揺れる。地上で花火が爆発したかの様に爆風が吹き荒れ、音が腹の奥に響く。砂煙は一瞬で吹き飛んでしまい二人の姿が隠れる事は無かった。

「この程度か?ならば此方の番だ」

「ちい!」

下から顎を狙い伸びてきた拳を躲すもバランスを崩すゴジラ。が、戦闘経験にモノを言わせ即座に反応し蹴りを放つ。完全に攻撃に意識が向いていたゴジラ・アースの腹にめり込み互いの非対称透過フィールドが互いを打ち消しあいゴジラ・アースにダメージを与えながら吹き飛ばす。

「ぐ、この………馬鹿力があ!」

「……………!?!」

ゴジラ・アースが叫ぶとそれは指向性を持った振動となってゴジラを襲う。音故に非対称透過フィールドをすり抜け、更に隕石が落ちようともならないフィリウスではないゴジラとしての強靱な肌に無数の傷を付ける。

「てめえこそ、その馬鹿でけえ声何とかしろや!」

が、この程度の小さな傷なら即座に再生するゴジラ。地面を蹴ると無数の岩がゴジラ・アースに向かって飛ぶ。が、その程度の岩防御するまでもない。ただそこに立っているだけで岩の方から砕けていく。

が、一際巨大な岩がぶつかろうとした瞬間ゴジラ・アースに当たる前に砕ける。岩を貫く青い熱線によってだ。

「ぬ……………」

避けられる距離ではない。ゴジラ・アースは左手をつきだし左腕全細胞の発電を最大値に上げ非対称透過フィールドを全開にする。

「……………っ——」

実体を持たぬはずの熱線を掴むと言う奇妙な光景。ゴジラ・アース自身は耐えようとするも、それに対して地面が余りにも脆弱すぎる。ガリガリと足が地面を削りながら背後の岩山を破壊し、なお止まらない。

「……が、あー！」

ゴジラ・アースは力任せに腕を持ち上げる。熱線は空へと向かっていき雲を貫いた。

「はっ……………」

それと同時に突っ込んでくるゴジラ。ゴジラ・アースはその拳を首を掴み止める。

メキメキと音が鳴り、カ一杯ぶん投げた。

岩山を幾つも破壊しながら吹っ飛ばすゴジラ。地面に腕を突っ込み勢いを殺すと目の前に光の線が現れる。

「——ッ!?息子にプラズマブレード撃つとかマジかこの母親」

「マジだ」

と、ゴジラ・アースはゴジラの頭上で回転して尻尾を叩き付ける。両手を交差して防いだゴジラはニヤリと笑う。

「……………む?」

「投げ技は、母さんより俺の十八番だつての!」

「ぬあ!?!」

ゴジラ・アースを空高く投げ飛ばすゴジラ。逃げ場の無い空中で狙い撃ちしようとする熱線を吐くがゴジラ・アースも同様に熱線を吐く。

「——!!」

僅かずつゴジラが押される。射程距離は兎も角、威力はゴジラ・アースの方が上のようだ。

「こ、の……………があー！」

「ぐ!?!」

ゴジラが反抗する様に体を赤く発光させると青い熱線が赤く代わり、少しずつ威力を上げゴジラ・アースの熱線を押り返す。

「ツチー！」

力勝負でも負けると即座に判断したゴジラ・アースは回転し射線上から逸れる。地面に着地すると同時に先程のゴジラのように地面を蹴り上げた。

「効くかー！」

が、それはゴジラに触れるまでも無く溶けていく。

だが、やはり親子なのだろう。飛んできた岩はただの目隠し。本来身を守る為に張られる非対称透過フィールドに使う為のエネルギー全てを注ぎ込み、背鰭にどこるか全身を帯電させ熱線を放つ。ゴジラも即座に熱線を放つが威力で大きく上回られる。

「ぐああああ!？」

盛大な爆発の中心で熱に焼かれるゴジラ。煙が晴れると活性化した細胞が即座に傷を癒す。

「……………くっ……………」

が、細胞をこれ以上酷使すれば制御不能になる。バーニングモードを解除するゴジラ。

「……………は……………引き分け、だな……………」

しかしそれはゴジラ・アースも同じ。本来の使い方と違う使い方をしたせいで、細胞が混乱し、力が入らない。

「……………ん、そうだな」

「そうむくれるな。まあ子供達の前で勝ちたかったのは解らんでもないが……………ん？ミニラ達はどこへ消えた？」

「他の観客たちもいねーな。気配的に近くにはいねーみてえだが」

「なんだ、自分達で見学したいと言ったくせに行ってしまったのか……………」

「ま、俺は楽しめたから良いけどな」

「ワシは疲れた」

「……………収まったか」

帝王モードのキングギドラは空に向けていた右目を下ろす。
先程から物凄いエネルギー同士の間を感知していたのだが、アレは恐らくゴジラのモノだろう。

もう片方はゴジラの母とか言う奴。何をしていたんだ全く。

「……………ん？」

まあどちらの気配も消えていない事から、単なる模擬戦なのだろうが……………と考えて歩き出そうとすると誰かが服を掴みガクリとつんのめる。

「……………」

振り返るとニコニコ笑った子供が居た。

「おい、なんだ小娘、離せ」

「宇宙の王、子供に対して可哀想ですよ」

「知った事か。ほら、離せ……………む？」

力任せに振り払おうとしたキングギドラだが、ピクリとも動かない。

「おかあさん、遊ぼ！」

「は……………？」

接触？・怪獣王!?

「ギドラが襲われた?」

「……はいです」

「……またシャドウミストかシャドウビースト?」

「ううん。ギドラさんの体からはシャドウの反応は無い」

キングギドラが襲われたという報告にシャドウミストかシャドウビーストの存在を疑うゴジラ。が、未希曰わく違うらしい。

「となると、他の怪獣娘か? デストロイアみたいに野生の……」

「野生の……って言い方はどうかと思いますが、私達が把握していない怪獣娘の可能性も有りますね。でもギドギドが襲われた理由が……」

「んー……此奴に襲い掛かる理由が有る奴か……ここに居ないのとなると後はゴロサウルスかマンダとかか?」

「その二人にギドギドを倒す事は可能ですか?」

「不可能。ギドラは強いぞ、マジで……」

ゴジラは即答する。ゴジラの知るキングギドラを襲いそうな怪獣達では、単独ではまずキングギドラには勝てない。しかも統合されたキングギドラなら尚更……。

「強化した状態なら兎も角、通常時なら俺と互角だし、前世じやタイムンで勝てたの一度だけだったしな」

「そんなギドギドをいったい誰が……」

「……………」

ギドラを倒せる怪獣となると、思い付くのは既に所属しているモスラやゴジラ・アース、或いはギドラ種の頂点に立つ彼奴、ぐらいだろ

う。
この場合GIRLSのメンバーに含まれない彼奴が怪しいが……………」

「とりあえずギドラを倒せるほどとなると、警戒していた方が良いでしょう。他のメンバーにも言っておいてくれ」

「はいです。ゴジゴジはこれからどうするんですか?」

「ペガツサの所に新しい細胞渡してくる」

「はい、あーん」

「……あー……………なあ、口の粘膜で本当に細胞取れんの？」

口の中を綿棒で擦るといふ簡単な方法に、ゴジラは首を傾げる。

「え？あ、はい……………口内上皮と言つて……………確かに取れてますよ」

「ふーん。血液とか、髪の毛とかからの方が取れ易そうなイメージだな」

「ゴジラさんには針が刺さりませんし、髪が命の女性にとってこんなに綺麗な髪を切るのには抵抗が……………」

「俺の髪、綺麗なのか？」

「はい。とても……………髪の毛の細胞つて、本来は死んでるんですよ。血管から栄養も運ばれませんしね。先端に行けば完全に死滅しています。でもゴジラさんの髪の毛は多分、G細胞故なんでしょうね、全ての細胞が生きてるんですよ」

まあそんな馬鹿げた細胞だからこそ、怨霊が形を保ったりそこからシン・ゴジラが生まれたりする訳だ。

そんな訳でゴジラの髪はとても艶々している。トリートメントなど不要。ちなみにこれは娘や妹達にも言える。

「はあ、私もこんな綺麗な黒髪欲しいなあ」

「取り敢えず切つてやろうか？」

「い、いりません！」

机に置かれてた百円ショップで買えるような安物のハサミで髪を切ろうとするゴジラを慌てて止めるペガツサ。が、少し遅くハサミが髪に触れ……………パキンと折れた。

「……………」

無言で落ちた刃を見るゴジラとペガツサ。

「……………じゃあ、俺は帰るな」

「あ、はい……………」

ピグモンから警戒するように促されるも、独断で動く者も居た。

「キングギドラが襲われたのはこの辺か……」

周囲を鋭い視線で警戒しながら、周りの人間を怖がらせてしまっている黒と銀のスーツを着た金髪の少女。と、不意にその視線を更に鋭くし振り返る。

「……随分なご挨拶だな」

少女の取り出した光剣をあつきり止めるのは黒髪の長身の男。

「……………アナタは」

「ええつと……見た事有るけど……………お前、名前何？」

「アンジェ……………失礼、マグマ星人です」

ゴジラの言葉に光剣を収め敬礼を取るマグマ星人。ゴジラはふん、と興味無さそうに返す。聞いては見たが別段返事を期待していた訳でもないのだろう。

「警戒するのは勝手だが相手を見てからにしろ。俺じゃなかったらどうする気だ？」

「寸止めをするつもりでした。ですがこれは言い訳にしかありません聞き流してください」

真面目な性格をしているようだ。悪い言い方をすると面倒くさい性格。

「……………怪獣娘達には単独で街中を出歩かないように指示が出たと思うが？」

「貴方は？」

「俺は特例。許可が下りてる」

そう言っソウルライザーを取り出し『お任せします』と言うピグモンのスタンプが移った画面を見せる。

「どうせギドラがやられるような相手じゃお前が出る幕はねーよ」

「私が弱いと……………仰りたいのですか」

「ああ」

「……………確かに——」

「……………」

思いの外あつさり納得したマグマ星人に多少面食らうゴジラ。

「そうかもしれない。私は、キャップを守れなかった」

「キャップ?」

「私達の元上官です。シャドウビーストとの戦闘で怪我を負い、入院しています」

「へえ、そりや気の毒に……まあ怪獣娘なら多少の怪我ならしばらくすりゃ——」

「キャップは人間です」

「なんだ。なら気に病む必要も無いだろ。戦う力も無いくせにシャドウビーストに近付いたそいつが悪い」

「……………は?」

ギン!とマグマ星人が怒気の籠もった瞳をゴジラに向け周りの通行人がひっ!と声を上げ離れる。

「……キャップは、何時だって正しい判断を下し、私達三人を導いてくれました」

「そうか。で、その判断力はシャドウビースト戦の役に立ったのか?人間じゃ怪獣娘達の戦闘を目で追えるとは思えないが」

「そ、それ……………は……………」

ぐ、と唸るマグマ星人。まあ当然だろう。シャドウならいざ知らず、シャドウビーストとなれば話は代わる。並の怪獣娘は勿論レッドキングやゴモラでさえ単体では挑まないシャドウビーストと、人間を役立たず守りながら戦うと言うのがそもそも無理な話だ。

判断を下す立場だと言うならひとまず安全な場所に隠れ、戦闘が終わった後の行動でも考えてれば良い。

「……………すまん、言い過ぎた。どうにも人間が関わるだけで否定的になる。悪いな」

「いえ、一理有ります。あの時、ネストの中でキャップと離れると危険だなどと判断する前に、キャップをネスト内に入れない事を優先すべきでした。私と、キャップの不徳です」

と、お互い非を認め剣呑な雰囲気解く。気が付けば周囲から人が

だいぶ離れていた。二人の様子を見て近付かない方が良いと判断したのだろう。

「……取り敢えず俺は探索を続ける。お前は どうする?」

「……………帰れ、とは言わないんですか?」

「俺と居ればまあ、単独じゃないだろ」

「……………感謝します」

と、マグマ星人が頭を下げたその時だった。

「あ、おとうさんだ!」

『!?』

無邪気な声が聞こえてきて、ぎわ!とそちらに視線が集まる。そこには満面の笑みを浮かべた茶髪の少女が居た。

血管のようなものが張り巡らされた不気味なフードを被っている。

「……………貴方の子ですか?すごく見てますよ」

「……………」

マグマ星人の言葉にゴジラは少女をジッと見詰めていると少女がトテトテとやってくる。

「聞きました奥様?アレきつと妻子持ちなのに浮気してた男よ」

「やーねー。娘さんあんなに可愛いならきつと奥さんも美人でしょうに…………」

「……………」

何時の間か周囲の人間にゴジラの浮気相手にされたマグマ星人。早いところこの場から去ろうとゴジラに声を掛けようとした瞬間、ゴジラが少女に蹴りを放った。

「は!?!ちよ、いくら人間嫌いだからってそんな子供に——え?」

だが少女は吹き飛ばす事無くゴジラの蹴りを笑顔で受け止めていた。変身していないとは言え、ゴジラの蹴りをだ……………。

「マグマ、帰ってGIRLSに伝えろ。此奴が襲撃犯だ…………」

「遊ば♪」

直ぐ様変身するゴジラ。と、同時に少女も姿を変える。

左右の側頭部と額に生えた三本の角を持ち、肩辺りから突起物が生えた衣装を着込み長い尻尾を揺らす。そのままゴジラを地面に叩き

付けた。

「——がつ!?!」

「わーい!プロレスごっこ!」

そのまま道路に向かって無邪気な笑顔を浮かべたままゴジラを投げ付ける。丁度通り掛かった大型トラックごと何メートルも吹き飛ばした。

「ゴ、ゴジラ……!?!」

「聞こえなかったかマグマ、足手纏いだ。それより早くGIRLSに連絡してこい……」

「ペツ!と血を吐きながら立ち上がるゴジラ。少女はニコニコとゴジラを見ている。」

「……………命令だ。行け」

「——つ!?!は」

マグマ星人はその場から駆けていく。人混みも、先ほどの光景で蜘蛛の子を散らす様に逃げていく。

「……………久し振りだな、バガン。俺とギドラの遺伝子を持つ怪獣よ」

「ねえねえ次、何して遊ぶ?」

「……………鬼ごっこだ。追いついて見ろ」

超化？・怪獣王!?

「えい、タッチ！おとうさんが鬼！」

なるべく開けた公園に逃げれば追いつかれ叩かれる。それだけで池に吹っ飛び大きな水柱が立つ。

「……………あれ？」

バガンはゴジラが出てくるのを物陰で今か今かと待っていたが一向に出てこない。溺れてしまったのだろうか？と不安になり水面の上を浮遊し覗き込む。濁っていて良く見えない。と、その時

「……………わ！」

水面から伸びてきた手に触れられる。タッチされた。

しかも直ぐに手は引っ込み見失った。

「……………よし」

バツ！と両手をあげるとバチバチと3本の角が輝く。やがて3つのエネルギー体が現れる。

「えい！」

ドパアアアン！と池の水全てが吹き飛び雨の様に水滴が降ってくる。先程の水柱に驚いた公園の利用者達は既に逃げているのでそこまでの被害はないが…………。

「あれ、いない？」

池の底を見ると人工池故か、氾濫を防ぐ為の水門が幾つか有った。その扉が金網ごと全て破壊されている。

「……………あ、解った！…これのどこかだ！」

バガンは早速目を閉じる。そして、自身の中に宿る父と同じ遺伝子を意識し探る。

「……………これ！」

そして一つの排水溝の中に飛び込む。しばらく進むと赤く燃えピクリとも動かない黒いドラゴンのようなモノを見付けた。気配はこれから出ていた。

「……………行ったか」

泥中から現れるゴジラ。生み出したセルヴアムにバーニングモードを使わせ細胞の反応を強化したのは思い付きだが、上手くいった。まあ切り離されたセルヴアム程度では五秒も持たないだろう。直ぐに死体が発見される。直ぐ様別の排水溝に飛び込むゴジラ。壁を壊してくる可能性は、まだ低い。何せ向こうは遊びのつもりなのだ、水なら兎も角、壁を壊して突き進むなどと言うつまらない事はしないだろう。あくまで、まだ……………。

「むむむ！こっちは通った……………なら、右だ！」

案の定下水道の迷路を楽しんでいたバガン。と、不意に上を……………地上を見上げる。

「……………おかあさんだ！」

キングギドラは目が覚めると同時に病室から飛び出した。

「して劣兵、竜王、どちらも心当たりはないのだな？」

「劣兵は止めてって。うん、ない……………」

「同じく……………」

前世が洗脳されまくってたという理由で不名誉な呼び名を付けられた主人格は溜め息を吐きながら質問に肯定で返す。

自身を母親と呼んだあの少女について心当たりを確かめたが誰もないらしい。

「キングギドラ？」

「……………む？」

「……………何だ、帝王か……………面倒くさい」

と、そこにゴジラが現れる。が、今の主人格が帝王だと解ると眉をしかめた。

「てかお前、狙われてるかもしれないねーのに何怪我完治させずに出てきてんだ」

「ふん。知った事か……………あの小娘の寝言が気になって……………」

「ああ、バガンにおかあさんとでも言われたか？まあ、見た目はメカキンの前の状態だったが宇宙人が連れてきてたし、宇宙のギドラだと思
うし……」

「……バガン？貴様、あの小娘について何か知っているな!？」

と、ゴジラの胸ぐらを掴むキングギドラ。

「ああ、知ってる。てか離せ……疲れてんだ」

バーニングモードは細胞を暴走させる行為。一度使えば本来しばらく使えない。それを直ぐに切り離したとは言え一部をバーニングモードにしたのだからかなり疲れる。

それこそ、先程のバガンのエネルギー体のダメージを回復しきれないほどに。

「あれは俺とお前の遺伝子を引き継いだ怪獣娘だよ」

「は？」

「……ん？」

その言葉に帝王はボツ！と顔を赤くする。ゴジラはそんな反応に首を傾げる。

「ま、待て！何故俺とお前の子が居るんだ!?心当たりがないぞ！貴様、まさか我を倒した後意識が無いのを良い事に——!」

「するかバカ！」

さらりととんでもない発言をするキングギドラにゴジラが突っ込む。ケダモノでも見る目で何を口走っているんだこの女は。と、ゴジラが呆れた時……

「みーつけた♪」

マンホールが吹っ飛びバガンが現れる。

「おとうさんとおかあさん、みつけ！」

「ツチ！逃げるぞギドラ！」

「な!?!この我に逃げろだ!?!」

「代われ！」

ゴジラがスパン！と右側頭部を引っ叩くとキングギドラは両目を見開く。

「本当に代わるとは面白い体してんな……あ、待て！俺も連れてけ！」

一人飛ばうとする劣兵の足を掴むゴジラ。ヨタヨタと飛行する二人を見て楽しんでいるのか一定の距離から付かず離れず追ってくるバガン。

『連れてけ!』 ったって、これからどうするの!？」

「取り敢えず修行に使った何故か都内にある荒野に迎え!そこなら被害が少なくて済む……!」

何せ相手はその気になれば町一つ簡単に破壊できる怪獣だ。別に町の住人がどうなろうと知った事ではないがGIRLSに迷惑を掛ける訳にはいかない。ゴジラにとって優先するのは1に子供達で2にGIRLS……後はどうでもいい。

「被害って……そもそも勝てるの、あれ?」

「バーニングモードならまあ勝てる。エネルギーが彼奴を追い抜くまで多少時間が掛かるが絶対に……」

「なら……!」

「だが今は使えない……」

下手に使おうとすれば熱暴走を起こして星と共に死ぬ。と、言い合っている間にバガンが飽きたのか向かってきた。

「っちー! 投げろ、ギドラ!」

「えい!」

劣兵が迷いなくゴジラをバガンに向かって投げ付ける。と、ゴジラの体から金色の鱗粉が吹き出す。

「があ!」

「きゃん!」

顔面に赤色熱線を食らい仰け反るバガン。が、大したダメージは受けてないのかむう、と唸り角を発光させる。

「お返し!」

「ぐあ?」

ぶっ飛ばされ地面に落下するゴジラ。やはり霸王モードでは足りないらしい。

「ゴジラ!」

「ギドラか、逃げろよ……お前じゃ勝てねーよ」

降りてきたギドラに対してゴジラは悪態をはく。

「あれ、鬼ごっこ終わり？」

と、バガンが降りてきた。

「……あれ、勝てない？」

「……勝つ方法は、まあある……と、思いたい。ぶつちやけ賭けだ……」

ニコニコ笑うバガンを前に冷や汗を流しながら尋ねるキングギドラ。それにあまり答えたくなさそうに言うゴジラ。

「ねえねえ次なにして遊ぶ？ねえねえねえ……」

「………やった方が良いんじゃない？」

「私もそれに賛成です。出来る事はすべきかと……」

「我は同意せぬ！我一人で十分だ！」

同意する千年竜王と反対する帝王。

「……私は、任せる。勝てる気しないもん……あれ……」

これで二対一。ゴジラはキングギドラを後ろから抱き寄せる。

「少し痛いが悪く思うな」

「——っ！あ……う」

ザグリとゴジラの鋭い歯がキングギドラの首筋に突き刺さり赤い血がゴジラの口の中に流れる。

「おとうさん！おかあさん食べちゃめー！」

その光景を見て首を傾げたバガンだったが父と母の変わった喧嘩とでも思ったのか止めようと飛び込んでくる。が、突如発生した暴風に身体を取られバランスを崩す。

「………っふ、はあ……良いねえ、この感覚。体の中から力が漲る」

砂煙が晴れるとそこには首を抑えるキングギドラと、紫色のコートを着て、逆立った紫の髪に緑色のメッシュが混じったゴジラ。ペロリと唇に付いた血を舐め取る。

「ゴジラ……なのか？」

「ああ。お前のおかげで最高にハイな俺だよ……」

と、そこまで言うバガンが再び向かってきた。

「遊ばー！おとうさん！」

「ま、悪気はないんだろうな。けど、手加減を知らなさすぎる……」
ゴキリと指を鳴らし、きつく拳を握るゴジラ。その手が光を帯びていく。

「だから、一発拳骨だ」

ドゴオン！

と、ゴジラの拳がバガンの頭にぶち当たりバガンの上半身が地面に沈む。周囲が大きく揺れ地面がひび割れていく。

「……や、やりすぎなんじゃ」

「加減はしたぞ。ほら、気絶してるだけ」

「きゆう……」

「この子、どんだけチートなの……」

責任？・怪獣娘!?

「……きゆう」

気絶したバガンを背負いGIRLSに向かうゴジラ。キングギドラは自分とゴジラの遺伝子を持つと言う子供をジツと見詰める。

「……………抱きたいのか?」

「な!?そ、そんな——」

「ほら、起こすなよ?起こしたら噛むぞ」

勿論ゴジラが。とは言えそんな事を知らない周りは微笑ましげに三人を見詰めていた。

「……………」

取り敢えず受け取っておく。まだ気絶しているし、大丈夫だろう。

「軽……」

キングギドラが怪獣娘だと言うのもあるが、思っていたよりずっと軽かった。まあ子供など抱いた事が無いのだからそもそも重さなんて解らないが。

「……………軽い、けど何か重いですね」

と、千年竜王に代わりポツリと呟く。

怪獣娘たる彼女達からするとこの程度の重さのモノは何度も持ち上げた事が有る。だと言うのに、不思議とズシリと重みを感じた。

「……………む、確かに。何だ、この妙な感覚。この程度の重さなら持ったと言う実感すら湧かぬ事が有ると言うのに」

「そりゃ、バガンが生きてるからだろ。命の重みって奴だ……」

「……………お前、顔に似合わず時折臭い事を言うな」

「黙れもぐぞ……」

照れ隠しなのかギロリと睨んでくるゴジラ。未だスーパーモードとやらは解けていないのでその気になれば文字通り瞬殺されるだろうが不思議と怖くなく、むしろ笑えた。

「……………んう」

「ツ!」

不意にバガンが呻き思わず手を離し飛び退きそうになるキングギ

ドラ。が、落とせばそれこそ起きるのでギリギリで耐える。

「お前持ち方が下手なんだよ。もつと負担が掛からない様に、尻を持って。んで、支える為に背中に手を回せ」

「こ、ここうか……?」

ゴジラに言われた通りに抱き直すとバガンはすうすう寝息を立て始める。

「……は、はは……ちゃんと寝たな」

気持ち良さそうに寝るバガンに微笑みを浮かべる皇帝。

「わ、私も……」

「私にも抱かせてください」

帝王から劣兵、劣兵から千年竜王、千年竜王から帝王と代わる代わる主導権を代えバガンを抱くキングゴドラ。ゴジラはそんな光景を見て微笑ましそうに笑った。

「——って違う!」

「うお!? どうした急に、静かにしろよ。バガンが起きるだろ」

スーパーモードも解けた頃、GIRLSの門前にきて『がー!』と吼えるキングゴドラ。ゴジラが非難する様に睨み大声に驚き「うみゆう」と唸っていたバガンをキングゴドラから奪い背中をぽんぽん叩くゴジラ。

「す、すまん……って、違う! そうじゃない、何で我等は普通に可愛がっているのだ!」

「遺伝子引き継いでるしな。その辺を本能的な部分で理解してんじやねーの?」

「本能……?」

「てか、お前そんなに騒いで良いのか? 絶対病院から抜け出してるだろ」

「そうなんですよ。全く困ったものですよね」

「ふん。別に構わんだろ、傷などどつくに……」

振り返るとニコニコ笑ったピグモンが居た。

「確かに怪我はもう平気なんでしょうが、心配掛けてく。これはもうお説教ですよ……」

「ま、待てピグモン！我は……」

「言い訳は聞きませーん！ん？ゴジゴジ、その子は？」

と、キングギドラを連れて行こうとするピグモンだったがゴジラが抱き抱えているバガンに気付く。

「……まあた新しい子供ですか？」

「ああ。前世では俺とギドラ、両方の遺伝子を引いた怪獣、バガンだ……」

「……………ん？」

ピグモンが笑顔で固まる。

「ふあ……………おかあさん、おとうさん、おはよう……………ん？えつと……………誰？」

「ゴジゴジとギドギドの遺伝子を植え付けられた怪獣、ですか……………にしても随分と精神が幼いですね」

「器こそ年を取ってるが俺とギドラの細胞植え付けられた生物がまともでいられるとでも？全くのベツモンに変異してるよ。で、生まれて直ぐ操られて俺が殺してるから……………」

「精神年齢が群を抜いて幼い、と……………」

ゴジラの言葉にバガンを見詰めるピグモン。しかしまた前世で争っていたなど……………ゴジラは自分の細胞を持つものと戦う宿命にも有るのだろうか？いや、ミニラ達は違うらしいし、ゴジラの細胞によって変化した生物とか……………。

「……………それにしても、ギドギドの……………しかもラドラドと違って両者の遺伝子をちゃんと引いてる……………と、そういえばこの子がギドギドを襲ったんですね？バガンちゃん、どうしてギドギドを……………お母さんを襲ったんですか？」

「……………襲った？」

ピグモンの言葉に首をコテンと傾げるバガン。ピグモンはムツと

顔をしかめる。傷こそ治ったが、ギドラの怪我は酷いものだった。それを心当たりが無いなど……

「あー、ピグモン……バガンは悪気が無いんだ。てか、襲った自覚も無い」

「?どう言う事です……?」

「バガンは強いからな。遊んだつもりなんだよ……でも、強過ぎる」

「……それは、つまりバガンちゃんはギドギドを傷付けるつもりは……」

「無いだろうな」

「……」

蟻と遊ぶ子供が、蟻を殺したとしてそこに殺意が有るかと言われれば否だろう。

「……?」

バガンはピグモンの視線に気付き首を傾げる。

「?わたし、おこられてる?」

「まあそうだな……お前はお母さんを傷付けたからな……」

「……」

「お前は力が強いからな……まずは力の使い方覚えなきゃならない。そうじゃないと沢山、沢山人を傷付ける……人はどうでも良いか。お母さんやお父さんを傷付ける事になる」

「余計な一言を付け足さないでください」

ゴジラの言葉に呆れながらもピグモンはバガンと目を合わせる。

「良いですかバガンちゃん、バガンちゃんはとっても強いんです。誰かを傷付けるつもりが無くても、傷付けてしまうほど……だから、その力を使いこなせるようにならなければなりません。それは力を持つ者の責任……解りましたね?」

「……うん!解らないけど、解った!」

新入り？G一家!?

「というわけでお前から自己紹介。さんはい……」

「G族新家長ゴジラ・アースだ」

「姉の三式機龍だ」

「妹のビオランテです」

「同じく、オルガ」

「同じくスペースゴジラ」

「娘のミニラだよ！バガンちゃんのお姉ちゃんだよ！」

「ミニラの妹リトル。同じくお姉ちゃん！」

「……………シン……………お姉、ちゃん……………？」

と、それぞれG族の自己紹介をしていく。バガンは「おー」と一同を眺める。

「バガン、2歳！よろしく！」

「……………2、歳……………年上……………」↑0歳

妹が出来たと思ったたら年上だった。お姉ちゃんになれると思ったシン・ゴジラはしょんぼり落ち込む。

「おとうさん！わたしいつのかおねえちゃんがいて、おねえちゃんにもなってる！」

「良かったなバガン……………って待て！」

嬉しそうにするバガンの頭を撫でるゴジラ。早速甘えようと突っ込むバガンを慌てて止めようとすることも引き摺られる。

「……………ふむ……………バガン、落ち着け」

「にゅ!？」

が、ゴジラ・アースがバガンを止める。片手で。

「……………ぬ、意外と力が強いな」

「……………お、おお？」

ヒョイと持ち上げられ目を白黒させるバガン。どうやらバガンよりゴジラ・アースの方が強いらしい。

「……………おいフィリウス、この子……………見た目に反して力が強過ぎるぞ。力の扱いを学ばせよ」

「そのつもりだよ。バガンに勝てる怪獣なんて超化した俺か、あの三首ぐらいたろうし……」

「三首？ギドラか……？」

「いや。それよりつえーよ。人間共が妙な力で俺を強化して不意を突けたが、最初っから強化された状態で戦えばまず負けてた」

「……ほう」

ゴジラがそこまで言う相手に興味を持つゴジラ・アース。とはいえ嘘は吐いていない。あくまで、バーニングモードを使えない前提での話ではあるが、強化された状態でも不意を突かなければ勝てない相手だった。

「まあ当面は力の扱い方を学ばさせるさ。俺も取り敢えずはバーニングモードの維持時間を伸ばすのと、基礎スペックを上げる必要が有るな……」

「うむ。精進しろよ」

「それとギドラ、しばらくお前の部屋に住むからな」

「……………へ？」

「「「……………は？」」」」

ゴジラ・アースが誇らしげにゴジラの背中をトンと叩くとゴジラが思い出したかの様に言う。ギドラ自身ポカンとしたが、その場に居た三式機龍、ビオランテ、オルガ、スペースゴジラ、ラドンがグリーンと振り返る。

「……………は、はあ!?何故我が——」

「——あなたと同棲しなくちゃ——」

「——ならないのですか!?!」

が、そんな視線を無視してゴジラの言葉の意味を飲み込むキングギドラ。顔を赤くして人格を変えながらゴジラの胸ぐらを掴む。

「バガンが暴れた時の為だ。俺が何時でもお前を喰える位置に居なくちゃならないだろ?」

そう言ってゴジラはキングギドラの首がよく見える様に手を首に添え、親指で顎を持ち上げる。

「——ッ!?!」

首筋を噛まれる際、後ろから抱き竦められたのを思い出しかあ、と顔を赤くするキングギドラ。

「ふ、ふざけるな！お前、あれ痛いんだぞ！」

「悪いとは思ってるが有事だ。責任は取らねー……まあ方法としては他にキスとかも無くはないが……流石にそれはなあ……」

「私達の身体に牙を突き立てるのは良いんですか……いえ、確かに傷は残りませんが」

くっ、と項垂れる千年竜王。しかしゴジラの牙が皮膚を貫き肉を千切り血管を破り神経を傷付けるあれは、かなり痛いのだとゴジラの口元を睨む。

「……………」

あの牙が、ゴジラの牙が自分の中に入り、ゴジラが自分も知らない自分の味を口の中で味わう……………。

「——ッ!？」

「……………へえ」

顔が更に赤くなり咄嗟に帝王か劣兵に代わろうとする千年竜王。前世で何度も煮え湯を飲まされた相手の、その顔を見てゴジラはにと笑みを浮かべる。

「今の顔、なかなかどうしてそそられるな。骨の髄まで食い尽くしたくなる……」

「な、なんだと……………」

「そうすりゃ、一々食う必要も無くなるかもな……が、お前も食い尽くされるのは本意じゃないだろ？バガンが暴れなきや食うなんざしねーんだ。『噛まれる可能性』程度の心構えでしばらく暮らすだけ。簡単——だっ!？」

ドガガガガガ！

背中から蹴りを食らい吹き飛ぶゴジラ。壁に上半身がめり込む。

「お、おとうさん!？」

慌ててバガンが引っこ抜く。

「……我が子等の前で色に溺れるな愚息めが」

「いてて。悪かったよ……………ん？つか今……………五発だったよな？一人は母

さん、後はビオランテとして……残りの三つは？」

ゴジラの言葉にスペースゴジラとオルガ、ラドンはそつと顔を逸らした。

「まあそういう訳で、バガンの為にも暫くは一緒の部屋に過ごした方が良い。ミニラ、リトル、シン……我慢出来るか？お姉ちゃんなんだ、妹たちに譲ってくれないか？」

「……………うん」

「わかった」

「いい、よ……」

「いい子達だな……」

ゴジラはそう言って三人の頭を撫でる。

「ちよ、ちよつと待って！私は納得してないんだけど！」

「じゃあお前、一人でバガンの面倒見れるのか？なら任せるが」

「……………一緒に住んであげる」

「あげる？別に無理しなくて良いんだぞ？お前一人で面倒見れるなら俺は大助かりだからな……」

「……………」

ゴジラの言葉にキングギドラはぐぬぬ、と唸り、しかし声を絞り出す。

「一緒に……住んで……く、ください」

「心得た」

ゴジラとキングギドラ。この時二人の中に全く真逆で、しかし相性の良い性癖が生まれかけたのは内緒だ。

自覚？・怪獣娘!?

「……………」

寝苦しくなり目を覚ますとバガンに乗ってた。ものすごい力で引き剥がす事が出来ない。

「よう起きたか？」

「……………お前は掴まれてないのだな」

と、ゴジラが覗き込んできた。昨日は川の字で寝ていたが既に布団から出ている。

「おかあさんの方が好きなんだろう。と言うのは冗談で、小一時間掛けてお前に抱き付かせた。あのままじゃ飯作れないからな……………」

「……………我は腹が減ったぞ」

「今作ってる。バガンが起きないように見えてくれ……………」

ゴジラはそう言ってバガンの頭を撫でる。

「……………お前、今は満たされているんだな」

「ん……………」

キングギドラはゴジラの胸に触れながらそう言って、ゴジラは首を傾げる。

「お前、初めて会った時、ここが空っぽだったじゃないか。その穴を埋めようと暴れて暴れて、あの時小娘を助けたのだから、我の方が地球の敵だったのと、我の方が強かった、それだけの理由ではないか……………」

「……………」

「あの時のお前は器が満たされぬ事に苛立ち、暴れたかっただけであろう？だが、今お前は満たされているな。大方、子供等のお蔭だろう」

今話している人格は帝王。数多の星を滅ぼし永い時を生きた人格。永い時を眠っていた千年竜王や操られてばかりの劣兵とは違い、全てを見透かす様な瞳に吸い込まれる様な錯覚を覚える。

「まあ我にとってはお前が満たされていようと乾いていようとどちらでも良いがな……………」

「……………言ってくれる」

キングギドラの言葉にクククと笑うゴジラ。と、その時バガンが

ううん、と唸る。

「おふあようおとうさん、おかあさん……」

「おはよう。起こしちゃったか？」

「……んー……まだ、寝る」

そう言つてスヤスヤ眠るバガン。ゴジラはそんなバガンの頭を優しく撫でた。

「……………」

『そんな顔もするのか』と、体を共有しているキングギドラ達は思った。

と言うか今思えば自分はゴジラの顔をまともに見た事が無い。前世での関係はあれだったし、顔を合わせても特に話す様な事等無かつたし……ここまで近くで顔を見詰めるのは初めてかもしれない。

「……お前、よく見ると綺麗な顔しているな」

「ん？」

人として10と数年。そこまで生きれば人の顔の違いも解るようになるし、良し悪しも解ってくる。その点で言えば怪獣娘達は何故か整った容姿が多いし、ゴジラも男なので方向性は違うがやはり優れた容姿をしている。

「まあ、擬似的とは言え我が夫になる者の容姿が優れている事に不満は無いが……」

「な!?!何を勝手に言っているのですか!別に夫でなくとも良いでしょう!」

「まあ、確かに両親ってそんなもんだけどさ……」

帝王の言葉に千年竜王と劣兵が反応しうるさかったのかバガンが唸る。慌てて口を押さえるキングギドラ。突然の事で体の主導権を確立出来なかったのか自分の口を押さえながら逃げようとするという奇妙な行動を取っていた。

「いただきます」

「ますー……」

「おう、感謝しろ」

ゴジラはそう言うのと柳葉魚の尾を掴み頭から口の中に入れていく。「ゴジラー！バガンが真似をしたらどうするのですか！それにいただきますは何も貴方だけではなく食材となった國の恵みに向けてもです。貴方もキチンといただきますと言いなさい」

「……………ツチ」

「バガンの悪影響になる事をしないでください。全く……………あ、このお味噌汁……………出汁が丁度良い……………とここで、力の扱い方を学ばせるとは具体的にどうする気なんですか？」

千年竜王の言葉にゴジラは一枚のチラシを取り出した。

「デパートの新春大安売りか……………何買うの？」

バガンの右手を掴みながら尋ねる劣兵。バガンの左手を繋ぐゴジラはデパートの案内地図を見ながら目的の場所を探し指さす。

「……………」

「ぬいぐるみ？」

「わー！」

数多く取り揃えられた多種多様なぬいぐるみを見て目を輝かせるバガン。

「ぬいぐるみなんてどうするの？」

「一日一個買ってやる」

「……………親ばか？」

「ただし同じのは買わない。壊したらそれまでだ」

ゴジラはそう言うとお手頃なぬいぐるみを取る。

「良いかバガン。ここには同じぬいぐるみは沢山ある。だが、俺は同じのは買ってやらない。壊したらそれまで。欲しいモノがあつて、無くしたくないなら優しく扱う必要が有る。解ったな？」

「……………うん。でもわたし、そのぬいぐるみはぜったいいらない」
「……………そうか」

ゴジラは某マリモがモデルの何処がとは言わないがある部分もつこりしたマスコットそっくりな目をした熊のぬいぐるみをそつと戻した。

「と、すまん。電話だ」

ライオンのぬいぐるみを購入した後、ゴジラは不意に携帯が震えたので電波の入りが良い屋外に出てから電話に出る。

「もしもし？誰だ……」

『はじめまして親愛なる黒慈ユウラ君。私は〈荒野の狼〉の構成員の人だ』

「荒野……？ああ、環境保護を訴える割には標的となる企業に下手な破壊工作をして余計環境を壊すバカの集まりか。知ってるぞ。この前ヘドラがお前等の後始末しに初めての海外旅行にいけたって感謝してた」

『……聞けば黒慈ユウラ君、君は環境破壊の被害者と呼ばれる怪獣の生まれ変わりだそうだね？』

「大方手伝えとか言うんだろ？断る、何が悲しくててめーらみてーな正義に酔った屑を相手にしなきゃならねーんだ。正義に酔うなら俺の口に命引き替えにしても毒突っ込んだ彼奴みたいに、命の一つを賭けられるようになってからにしろ」

そうやってゴジラはさっさと電話を切ろうとする。

『良いのかな？我々の仲間が、今君の子の元に向かっているが？』

「ん？俺の子だと——ツ!!」

と、その時爆音が聞こえた。振り返るとデパートの壁の一部が吹き飛び手足を骨折した男が地上に向かって落ちていく光景が見えた。

「切るぞ。とりあえず死ね」

ゴジラは通話を切り壁に空いた穴から中に入る。そこには拳を突き出したバガンと咄嗟に止めようとしたのか背後から抱き締めるキングギドラが居た。

「あ、おとうさん！さっきね、わるいやつがいたの！」

「そうか……それは……無事で良かった……今回の件は表向きに

は荒野の……何だっけ、ポメラニアン？に被せるとして……………バガン、ちよつと周りを見てみる」

「……………？」

バガンはその言葉に周囲を見回す。そこには飛んできた瓦礫で怪我をした者や、腰を抜かした者。涙を流す子供達が居た。

「……………あ」

「俺としてはどーでも良いが、お前は違うだろ？この光景に、責任を感じちまうような良い子だ。だから目に焼き付けとけ」

「……………うん。ごめんなさい」

「……………」

「と言う事が有った」

「荒野の雑種犬種共ですから、まあ日本で活動する元気が有ったんですね。ゴキブリ並のしぶとさにピグモン脱帽ですよ」

ピグモンが何時にも増して笑顔で、しかし逆らい難いオーラを出していた。

「ゴジゴジ？オルオル、スーちゃん、メカゴジ、キリユキリユをお借りしても？個人情報盗んで脅してくる奴らは、個人情報を流出させてやるのです」

「ああ、俺からも頼んでみる。それとピグモン、バガンが結構落ち込んでてな……カウンセリングとか俺には無理だ。誰か心当たりないか？」

「心当たり……………あ」

と、ピグモンが思い出した様に手を叩く。

「一人居ます。バガンちゃんと同じく、過去人を傷付けてしまった怪獣娘が……………」

原点?・怪獣娘!?

怪獣娘による暴力事件、別に珍しい事ではない。

怪獣達には闘争本能が少なからず有り、それは怪獣娘になった今でも有るとされ、抑圧されると暴走を引き起こすと言われている。

それを無くす為に闘争本能の発散、怪獣ファイトが考案された訳だし。

そんな中わざわざ推薦された相手。大方、今回のバガンと同じく傷付けるつもりは無く、しかし故意に力を振るった事が有る相手なのだろう。

「お待たせ」

入ってきたのはライダースーツを着た褐色肌の美少女。ミディアムヘアが空調から出る風に当たりふわりと揺れる。

「はじめまして。私は淀川ミオ……怪獣娘としての呼び名はベムラー。黒慈さんは……ゴジラさんは前世の記憶持つてあんまり人間が好きじゃないんだよね? 怪獣ネームで呼んでくれて良いよ」

「呼び方なら別に構わねーよ。お前はどっちの名が好きなんだ?」

「……………ミオ」

「よろしくなミオ。で、早速この子なんだが……」

と、ゴジラは隣に座り俯いているバガンを見る。

元が神としての特性を持つバガンだ。ゴジラとギドラの細胞に塗り潰されたとは言え、無為な暴力は好まないのだろう。

「……………ふーん。えっと、バガンちゃんだっけ?」

「うん……………」

「すもも食べる?」

ミオが差し出してきたすもも漬けを受け取るバガン。キングギドラとゴジラにも渡し、自分の分が無い事に気付く「あ……………」と切なそうな声を上げる。

「……………食うか?」

「……………良いの?」

ぱあ、と顔を綻ばせるベムラー。何か可愛い生き物だな、見えない

尻尾が動いている様に見える。

「ゴホン……それで、バガンちゃんはその時の事を覚えてる？」

「うん……ナイフもったひとたちが、おそつてきて……えい、つて……」

「お母さんを守りたかったの？」

「うん。でも……」

「やりすぎちゃったんだ……」

ベムラーの言葉にバガンは無言で頷く

「私もね、昔……人を傷つけた事が有るの。お父さんを馬鹿にされて、カッとなつて変身して」

「……」

「でも、傷付けたけど、やりすぎたけどあの思いだけは間違つてないつもりだよ。バガンちゃんも、お母さんを守るなつて言われても怒るでしよっ。」

「うん……でも……」

「そうだね。やりすぎた……そこは反省しなくちゃいけない。でも、後悔しちや駄目だよ。それは貴女のお母さんの想いを嘘にしちやう」

「……」

「だから、悲しまない。まずは反省、それから……力を使いこなせるように頑張ろう？」

「……うん」

「ありがとな、俺はああ言うのに向かんから……」

キングギドラと手を繋ぎ部屋から出て行ったバガンの背中を見詰めるながらベムラーに礼を言う。

「別に、私もああ言う感情、覚えてるから……落ち込んでる時、叔父さんが言ってくれたんだ」

「へえ……そんな人間も居るのか……」

「……人間、か……ゴジラさんは私について聞いた？」

「ゴジラで良い。新興宗教の事か？ お前が現人神だった」

「うん」

ベムラーはゴジラの言葉に頷く。

「ある人は、お父さんは純粹過ぎただけって言ってた。私を、本当に地球の意志と思っただって……私に本当に人を救う力が有ると信じてたって……」

「俺は人間がそんなお綺麗だとは思えねーがな。人を救いたいなら、自分の生活も守りたいなら必要最低限の金を取れば良いし、そもそも娘の意志を無視してる。結果的に怪獣娘達に対する風当たりがマシになってるだけで、普通に欲深な人間だと思うな……」

「……………そっか」

その言葉に、ベムラーはしかし暴れなかった。過去父を侮辱された事で人を怪我させたのに。

「……………その人は、さ………全面的に味方してくれる人なの。でも、何年も経つとき……ゴジラの指摘したことにも気付いてくる。あの人は、どうしたって味方になっちゃうから………そう言う視点で、きちんと言って欲しくてさ」

「……………」

「別にそれだけでお父さんを嫌いにならないけど、きちんどう思われてるか知つときたかったんだ」

「まあ、他人の言葉で一々揺れるようならそりや最初っから好きじゃなかったって事だろうからな………けど、そう思えるんなら良い父親ではあったんだろうな………」

「……………ひよっとしてフォローしてくれてる？」

「何で俺が人間相手にフォローしなくちゃならねーんだ」

「怪獣娘である私が傷付いてるから………とか？」

「……………帰る」

外に出るとニュースで〈荒野の狼〉の非合法な行いから幹部達による規律を無視した自然食以外の食事や死にたくない故の臓器移植だのの情報がネットに晒されると大騒ぎになってた。

「……………容赦ねーなピグモン」

ゴジラは肩を竦めながら笑う。これではもう荒野の狼はどの国でもまともに活動出来ないだろう。

「おとうさん」

「バガン、ギドラ……待っててくれたのか？」

「うむ。バガンがお前を待とうと言ったからな」

「おかあさんがまとうっていったから」

「……………」

「……帰るか」

ゴジラがバガンの手を掴むとキングギドラも反対の手を掴む。

女子会？ 怪獣娘!?

ここ数日で部屋に大分人形が増えた。

幾つかは壊れてゴジラが持って行ってしまったが、それでも10数個残っている。

「おかあさん、あそぼうー!」

そう言っただけ熊のぬいぐるみを持ってくるバガン。今日、ゴジラは用事が有ると朝早く出て行った。

カレンダーを気にしていたし、仕事かと思ったがピグモンが知らない様だし違うのだろう。改めて自分はゴジラの事を何も知らないのだと思い知らされた。

「と言う訳でお前等、何か知らんか？」

と、アギラ、モスラ、ラドン、アンギラスを前に質問を一つするキングギドラ。

ちなみに集めた後の第一声がこれだ。つまり主語が無い。全員首を傾げる。

「おかあさんはおとうさんのことをきいてるの」

と、バガンが教えてくれる。ああ、と納得する一同。

「バカ親父」

と、モスラの膝に座ったミドリとレオが言う。迷い無く言った。モスラが「こら」と怒っていたが「ぶー」と唸り顔を逸らすだけで訂正はしなかった。

「全く……………そうですね、ゴジラは……………何時も独りでした。寂しがり屋で、そのくせ乱暴者で、自分から奪った者達が自分から奪った物を持っているのが許せなくて、悔しくて、暴れてばかり……………でも、そのくせ優しい所も有るんですよ。私が幼虫達この子だった頃、確かに殺されはしましたが、助けられもしました」

そう言っただけミドリ達の頭を撫でる。ミドリ達は助けられたと言う言葉を、特に否定しなかった。

「ああ、あの時我が甚振っていた時の話か？しかしアレは——」
「知ってますよ。私より、貴女の方が壊しがいが有っただけ。でも、助けて貰えて私は嬉しかった」

「……………私なんて毎度リンチされてるのにねえ」

帝王から劣兵に変わりのはあ、と溜め息を吐く。リンチに参加していたモスラとラドン、アングラスは慌てて謝る。

「……………ボク、場違いじゃない？」

アギラの言葉にアギラの肩に乗っていた猫が「にゃー」と鳴く。

「……………アギさん、さつきから気になっていたんですけどその猫は？」

「ああ、この子？ゴジラが初めて会った時、不良から助けてた猫でね、何度も餌あげたりしてたら飼おうと思って……………名前はナナだよ」

「なー」

猫はアギラの言葉を理解しているのか、自己紹介する様に一声鳴いた。

「あ、何その猫。可愛い！」

「あ、ガッツ……………」

と、そこへガッツがやってきてナナに気付く。ナナはさつとアギラの膝の上に隠れてしまった。

「あれ……………」

「ごめん。ナナはボクかゴジラ以外に懐かないんだ。元々、人間に苛められてた猫だから」

「そうなんだ……………」

見るからに落ち込むガッツ。撫でたかったのだろうか？

「……………ふむ、その猫。やはりこの世界で知り合った中で一番ゴジラと親しいのは貴様か？」

「あ、だから誘われたんだ」

「……………どーかな、私かもよ？」

キングギドラとアギラのやり取りにガッツがま「ふふん」と呟く。

「……………何で？」

「ゴジラの自称親友について知ってる？」

「「……………」」

「この前ゴジラ教えて貰ったんだ。中目黒って言うんだって、その人。私だけ、教えて貰ったの……私、だけ」

「……………」

と、自分で言っただけで照れたのか赤くなるガッツ。アギラが「むう」と唸る。

「……………」でも、じゃあ前世で人間嫌ってたゴジラが人間に優しく出来るのはその人のおかげなんだね」

「「……………」」

アギラの言葉に全員アギラを見て固まった。具体的には『何言ってるんのかいつ』と言いたげな顔をしている。

「え？あれ……ボク変な事言った？」

「やー、その……ゴジラは私達に優しいけど、普通の人には優しくくない？」

と、ガッツ。

「まあ、前世より大人しいのは認めますが……」

と、モスラ。

「容赦無く暴力を振るっておるしな」

と、キングギドラ。

三者三様に違う台詞だが、ゴジラが人間に優しいと言うのはあまり賛同出来ない様だ。

「まあ、確かに子供とかには寛容かもしれないけどさ」

「ううん。優しいよ……だってゴジラ、人を殺した事も無いし、手を出すのは悪い人だけだもん」

「あ、まあ言われてみれば……でもそういう人の方が嫌いってだけで」

「人間の中には肩がぶつかったから、だけでも酷いのに顔が気に入らない、暗いから、皆がやってるからって……そんな理由で平気で人を殴れる人が居るんだもん。ゴジラは十分優しいよ」

「……………」そう言われると、そうですね。私も人間社会に溶け込んだ

から解ります」

モスラは自分が何度か喧嘩やイジメの仲裁に入った学生時代を思い出した。理由を聞けば、「気に入らない」と言う理由だけの喧嘩も有れば「オタクだから」と言う理由で苛められてる者も居た。

「まあ……人間嫌いにしては確かに……そう考えると優しいのかも……」

そう考えるとそこらの不良の方がよっぽど人嫌いに見える。

「となるとその中目黒とやらはゴジラに取って特別なのかな？」

「女だったりして」

ミドリとレオの言葉にピシリと空気が凍り、子供組の視線が二人に集まる。二人は『しまった』と言う様にお互いの口を手で押さえる。

「へー、ここがユウラの働き先か」

「だから下の名前と呼んでんじやねーよ中目黒」

「「「「……………」」」」」

ゴジラと、聞き覚えの無い声を怪獣娘達の優れた聴覚が拾う。全員が無言で立ち上がり一階に向かう。

「……中目黒、南無……」

「シンちゃん、縁起悪いよ……」

「骨は埋めてやろう」

「ミドリちゃん達まで……」

「？」

残された子供達は首を傾げたバガンを除いた全員が中目黒に同情した。

「ん？なんだお前等、揃って出掛けんのか？」

ゴジラは本部に入ると同時に keluar わしたアギラ達を見て尋ねる。こんな大規模に動くとなると事前に連絡が有りそうだし、遊びにでも行くのだろうか？

「あ、ユウラの同僚だね？挨拶しなきゃね」

「だから何度も言わせんな」

そう言つてゴジラはドカ！と少年の背を蹴った。少年は「おとと」

とバランスを崩しながらも倒れる事無く笑みを浮かべる。
「はじめまして。ユウラの親友、中目黒透。孤児院の皆にはトトって
呼ばれてたよ♪よろしくね」

親友？・守護亀!?

ゴジラの自称親友だと言う中目黒透。人懐っこい笑みや小柄な体系が何と無く年齢以下に見せてくる。

「あれれ、皆さんこんな所で集まってどうしましたー?」

と、そこへピグモンがやってくる。ピグモンを見た中目黒は「おお」と軽く驚く。

「怪獣娘とは言えこんな小さな子も働いているんだ。こんにちは、お名前は?」

「……………」

「中目黒、ピグモンは俺等より年上だぞ」

「……………え?」

中目黒は頭を撫でる手を止めジツとピグモンを見る。ピグモンはにっこり笑っているが途轍もない威圧感が滲み出していた。

「…………、ごめんなさい」

「はい、良いですよ。それで、アナタがゴジゴジの言ってた記憶持ちの男性の怪獣娘ですか?」

「[[:]]」

ピグモンの言葉に目を見開く怪獣娘達。記憶持ちの怪獣娘達はそれなりに人数が居る。だが、記憶持ちでしかも『男』はゴジラ以来だ。しかもゴジラからの情報らしく、そしてゴジラの幼馴染みだと言う。

「はい。生前では人に飼われていてトトと言う名を貰い、怪獣名としてはガメラと言うのを持っています」

「ガメラ……ですか。ゴジゴジ、聞き覚えは?」

「無いな。デカイ亀なら殺した事は有るがこいつじゃない」

「そうですか。ところでガメガメとトトちゃんだとどちらで呼ばれたいですか?」

「トトちゃんをお願いします」

即答だった。前世で「人から名を貰った」と言っていたし、大切な名のかもしれない。まあ、それが人間関連だからかゴジラは不機嫌そうだが……。

「トトちゃんは今日、ゴジゴジに会ったのは偶然なんですか？」
「いえ」

「そうですか。ゴジゴジが突然電話してくるから驚きましたが、打ち合わせした訳じゃないんですね」

「まあ、ユウラは偶然会わない限り会えませんしね……避けられてるし」

「あはは」と笑うトトにゴジラは顔を逸らす。仲が悪い様には見えないが、そうでもないのだろうか？

そもそもこの二人はどういう関係なのだろうか？片や自称親友で、片や乱暴な対応をする割に態々連れてくる程度の仲らしい。本当に親友？

「何が『偶然』だ、あやめの所で待ち伏せしてやがった癖に」

「僕だって姉さんの世話になってたんだ。墓参りに行って偶々会っただけさ」

「お前何時も夕方から来るだろ。だから俺は何時も早朝に行ってるのによ……」

「ほら、この前ユウラがテレビに出てたでしょ？気になって話したいのに孤児院からの電話は着信拒否されるし綾香に頼んでも僕が電話に近付いただけで切るし」

実は仲が悪いのかもしれない。と言うかゴジラが一方的に苦手意識を持っていてトトが一方的に親しみを抱いている様に見える。

「ん？墓参り………？」

誰の？ゴジラは孤児院だから血の繋がった家族は居ないだろうし、同じ孤児院だからと言ってただの人間の為にゴジラが足を運ぶとは思えない……。

「あれ、話してないの？」

「一々話す様な事でもないだろ」

「ああ、恥ずかしいのか。そりやそうだ………」と

ギロリと睨まれ後退るトト。ゴジラはチツ、と舌打ちするとその場から去ろうとする。明らかに苛ついている。

「おい、待て」

「何だよ帝王」

「そんな顔で子供に会う気か？我は認めんぞ、頭を冷やしてこい」

「……………悪い、お前の言うとおりだ」

「ふふん。我も中々母が板に付いてきたろう？我、超偉い。誉めるが良い……………ふあ!？」

『えっへん』と胸を張るキングギドラはゴジラに『偉い偉い』と頭を撫でられ顔を真っ赤にする。誉め方が完全に子供にやるそれだ、ゴジラはいったい彼女を何だと思っているのだろう。

「……………中目黒、話すのは勝手だが俺の居ない所で話せ」

そう言つて今度こそ去るゴジラ。先程よりは苛立ちが消えている。

「……………なんか、ぐめんね。空気悪くしちゃった」

「い、いえ……………でも、彼処まで冷たく怒つたゴジゴジ見るのは初めてです」

「まー、ユウラ自身自分の中で整理が付いていない事柄だからね」

ゴジラが気持ちに整理を付けられない？

アギラは首を傾げた。気持ちの整理を付けられない事は、果たしてなんだろうか？

怒り？

ゴジラは直ぐ相手に吐き出す。勿論、壊しきらない様に。

それによつてた溜まった苛立ち？

『これはない』そういうのは、子を愛でて晴らしている。

悲しみ？

は、ないだろう。今のゴジラは満たされている。少なくとも初めて会つた時よりずっと。

「…………………………」

何だろう、本当はもう気付いている気がする。認めたくなくて、目を逸らしたい。しかしアギラの口は無意識に動いてしまう。自分の中に燻っている無自覚な想いに『早く気付け』とでも言う様に。

「ゴジラ、認めたくないんだね。怪獣娘でもないそのあやめさんって人の事が好きだったの」

「……………え?」

「あ……」

話を纏めると、ゴジラはあやめと言う人の墓参りに行ったらしい。そこでトトと再会した。

二人のやり取りから見ても、ゴジラの方から疎遠になっていたのだろう。なのに連れてきた。

そして、気持ちの整理。トトがカイジューソウル持ちと言う情報を合わせ推理すると、ゴジラは自分が他人と仲良くしているのを認めたくないのではないだろうか？より正確には自分が人間と……が、トトは純粋な人間ではなかった。

だから仲直りとは言わないまでも連れてくるぐらいは出来た。

そしてあやめと言う人物。墓参りと言うからには既に故人。墓参りに行くぐらいだから親しかったのだろう。その上であの苛立ち。恋愛、親愛、家族愛……そのどれにしる、ゴジラに取って特別だった。だが人間だ。それを認めたくなくて、苛立っている。

アギラのその推理はトトの驚愕した表情が当たっている事を物語る。

「……………」

ズキリ、と、自分で発した言葉が胸に深く刺さる。それが事実だとトトの表情で理解し、より深く。その奥に有る本心を取り出そうとする様に深く。

過去談? 守護亀!?

「えっと……聞く? 姉さんについて……」

ただの人間でありながらゴジラにとって特別だった存在、あやめ。気にならない者はここには居ないだろう。

「ううん……そう言うのは、ゴジラから聞きたい」

と、アギラはその場から去ってしまう。逃げる様に……。

「我は聞くぞ。夫の昔の女について知っておくのは今後の為にもなるう」

「いや、ですから夫じゃなくて……」

「言っても無駄ですよ」

「……面白いね」

一人ではあるが三人でもあるキングギドラを見てトトは目を白黒させた。

「まあ、今のゴジラを形成した人には興味有りますね。しかし本人の許可無く……」

真面目なモスラはゴジラを変えてくれた人物に興味を持つがゴジラの様子から聞くのには気後れしてしまう。

「ふむ……一理有るな。よし、ではそのあやめとやらがどのような人物かだけ話せ。どの様な関係だったかは聞かん」

と、キングギドラが言うのとトトは「そっか」と笑う。

「姉さんはね。変わった人だったよ……懐が広いと言うか広すぎて、当時目が合った、そこに居たっただけで人を殴ってたユウラに笑顔で近付いてくんだもん」

「へえ……じゃあアギの言う様にゴジラは優しい方だったんだ。少なくとも昔に比べれば」

と言うかそんな凶暴なゴジラによく近付けたものだ、そのあやめと言う人物は。

「それと、相手が何考えるのか直ぐ解る人だったよ」

「? ミキミキみたいな超能力者ですか?」

ピグモンは首をコテンと傾げる。

GIRLS所属の三枝美希のように超能力の持ち主なら、ゴジラが引かれた理由はそれだろうか？と考えたがトトはいよいよと手を振る。

「超能力なんてご大層なもんじゃないよ。姉さん曰わく単なる技術、他人の顔色を伺っている内に覚えたんだって……それで、嘘とか下心とか隠し事が直ぐ解つちやうからそう言うのが無いユウラを可愛がってた」

懐かしそうな顔をするトト。そ

「可愛がり方も変わってたね。由来は解んないけど、あのユウラを『子猫ちゃん』って呼んでは怒られてた」

「子猫ちゃん……？」

ゴジラに大凡似合わぬ渾名に引きつるラドン。子猫ちゃんと呼ばれた頃のゴジラが気になる。と言うか随分とキザな女性なのだろうか？

「ちなみにこれが当時のボクとユウラの写真」

「あ、可愛い……」

千年竜王が思わず呟く。その写真には黒髪を持つ少年が茶髪の小柄な少年を蹴り付けている姿が写っていた。

「そしてこれが孤児院に僕が来た時の集合写真。僕はユウラより後に入ってて、ちなみにこれがユウラ」

トトが指差したそこには先程の写真より幼い黒髪の少年が一人離れた場所で写っていた。とても暗い金色の瞳。世界の全てを憎んでいる様な、そんな瞳。

「初めて会った時のゴジラと同じ目ですね。周り全てを敵と知っている目です……」

「ああ、こんな目をしていたな」

「懐かしい。ギドラと戦った時もこうだったな」

と、ゴジラの前世からの知り合い組は懐かしそうな顔をする。逆に知らないガッツとピグモンはそんな一同を見て「うぬぬ」と唸る。

「……………!?!」

その様子を見てトトは『はっ』と気が付く。

「彼奴、何時の間にかハーレムを？人間嫌いだから一生、番に恵まれな
いと思ってたのに……良かったなあ」

『よよよ』と態とらしく泣くトト。確かにこの写真のゴジラを見る
限り人間関係を構築出来そうにない。こんな警戒心の強い野良猫ど
ころか牙を剥き出しの恐竜の渾名が『子猫ちゃん』ますますそのあや
めと言う人物が気になる。

「まあ、話はここまでで良い」

「え？良いの……」

「これ以降は奴が話す気になったら聞く。話す気が無ければ、我は奴
にとつて全てを曝け出すには至らなかつたと言うだけだ」

キングギドラはやけに男前な台詞を言つてその場から去つた。

「何やってんだかなあ、俺……」

自分が人間相手に複雑な思いを抱いていた事を思い出し、苛立つて
周りに当たつて、本当に何をしているんだろう。

あやめへの思いは恋愛ではない。近いのは親愛だろう。だが、人間
に親しみを覚えると言うのがそもそもゴジラからすれば冗談の様な
話だ。

何故あやめに敵意を向け続けられなかつたかと言えば、あやめがあ
まりに人間らしくない人間だつたからだろう。

自分と同じ様に、経緯は違えど世界全てを憎んでも、壊してもおか
しくない目に遭いながら笑つていた。

『不幸なものか、この先が幸せじゃないなんて決まつてないじゃん』
そう常に笑つていた。

そして何より、恐れてこなかつた。

あの未希でさえ、リトルを保護するその時まで、嫌々ながらも此方
を殺そうとしてきた。それは偏にゴジラを恐れていたから。

当時、前世程の力は無いとは言え大人でも手が付けられず警察すら
敬遠したゴジラに本心からの笑みを浮かべ近付き、抱き付き、頭を撫
でてくるあやめ。

最期の最期まで、態度が変わらず最初は諦めて、何時しか居るのが楽しくなった。

まあ子猫ちゃん呼びは本気で止めて欲しかったが……。

——子猫ちゃんは嘘も下心も隠し事もしない良い子だね。あんま人らしくないけど、そう言うの好きだよ。ま、だからと言って他の子達より理解出来る訳じゃないけどさ。嘘じゃないのは解るのに本心は少しも見えてこない。

いっつも怒って、叫んで……泣いてばかりだからね。何にも教えてくれないやお巡りさん困っちゃう——

「……………迷子の迷子の子猫ちゃん、貴方のお家はどこですか……………か……………」

少なくともあの孤児院を家と思った事は無い。今は、寮に帰れば子供達が居る、仲間が居る。

「会いたいなあ……………せっかくお家も、名前も、答えられるようになったのに」

名前?・三首竜!?

「戻った……」

「あ、おかえりおとうさん!」

(キングギドラの) 部屋に帰ってくるとバガンが迎えてくれた。

「ん、この匂い……」

バガンを抱き止め奥に行こうとするとキッチンから何か匂う。行ってみると料理本片手に首を傾げるキングギドラが居た。

「て、適量……? 適量とはどのぐらいだ……大匙、これか?」

「帝王、それはスプーンです。これですよ」

「それ小匙だよ……」

三人仲良くポンコツぶりを発揮している。

「何してんだお前等」

「料理だ。見て解らんのか?」

やれやれと肩をすくめる帝王。ムカつく。

「料理か、手伝うぞ」

「そうか?……いや。我等三人で十分だ……」

「……?」

明らかに助かったと言いたげな顔をして撤回するキングギドラ。キングギドラらしくないその対応に首を傾げるゴジラ。隠し事だろうか? しかし悪意らしきモノは感じない。ならば放置するべきか?

「……あやめ、と言っただったな。お前の女」

「俺の女じゃないが……聞いたのか?」

「お前を可愛がっていた事、どの様な人物だったかはな……それ以上は、聞かんさ。聞かれたくないのだろう?」

「まあな……」

しかしそれと料理がどう繋がるのだろうか? それについてはさっぱり解らない。

「嫉妬だ。お前にとって特別な女が居たのだぞ? 嫉妬しない理由が何処に有る」

「嫉妬? お前が……? 形だけの夫婦だろ、こんな……モスラやラド

ンも居る……」

ズダン!と包丁がまな板を切る。

「そうだな、その通りだ。だが一つ思い違いをしている」

「思い違い?」

「大方お前は我がお前に惚れる理由など無いと思っっているのだろうな。だがな、違うぞ。初めて会った時から、恋慕ではないが惹かれていた。壊す事しか知らん、我と同じお前にな」

「……………」

「まあその時は興味を持ったただけだ。その後、散々痛め付けられたし……………」

「リンチは酷いと思う」

「まあ、私の時は此方が多で貴方の方が一でしたが……」

と、苦笑するキングギドラ達。

「だがこうして今世では我はお前を知った」

「ただの恨みの固まりであった貴方が、誰かを思い、大切にしている姿を見た」

「前世じゃ戦ってばかりで知る事も無かった一面をね」

そう言って笑う。今度は苦笑ではない、本物の笑みを浮かべて。

「子供には甘過ぎるお前を知っちゃった」

「人間には相変わらず冷たいけど、殺そうとしない貴方を知った」

「仲間は随分と大切にしてお前を知った。中々楽しかったぞ、ここ最近のお前を見るのは」

「……………」

「ま、だからと言って惚れるかどうかと言われれば別だが、番になってやっても良いと思うぐらいには気に入った」

そう言ってゴジラの頬に手を添え顔を近づけるキングギドラ。その上からの物言いにゴジラが顔をしかめるとクククと笑う。

「なんだその顔は?混乱しているのか?」

「……………」

無表情で固まっているゴジラを見てクスクス笑うキングギドラ。

ふと、キングギドラも無表情になりゴジラをジッと見詰める。

「……………」

「って、何をしているんですか!？」

「ツチ……………」

呆けているゴジラに唇を近付けようとするが左手が勝手に動き止める。

「劣兵も何か言ってください……………って、貴女何か期待してませんか?」

「その呼び方止めてって……………」

「……………そう言やお前等って名前無いのか?」

「へ?」

不意にゴジラが言った言葉に首を傾げる。

「まあ親には知られてるからそれぞれ名付けられてますが……………」

「じゃあその名前で呼んでやれよ。流石に劣兵は可哀想だろ」

「おお!言ってやれ言ってやれ!」

ゴジラの提案にヨシヤー!と反応する劣兵。そうとう堪えていたらしい。

「そうは言いますが、既に長年の癖になってますし……………今更変えると言うのも」

「それにGIRLSでは怪獣名で呼び合うのだろう?我等の様な者達は前世での境遇に合わせた渾名を付けるのが一番だと思うが」

「それもそうか」

「え!？」

「おとうさん、おかあさん、ごはんまだー?」

と、バガンがやってきた。少し話し過ぎていたらしい。

「よし、じゃあ皆で作るか。良いよな、ギドラ」

「え?あ、うん……………」

「戻ってきた……………」

「わーい!」

「……………」

ラドンの部屋に行くとシン・ゴジラとリトルが抱き付いてくる。

「もう良いのか？」

「ああ、バガンはもう大丈夫だろう。ま、日替わりで寝る場所変えるがな。良いか？シン、リトル」

「んー……良いよ。パパと寝たい気持ち、解るから」

「うん……」

「良い子だ。まあ、寝るのは少し待ってくれ。やる事が有る」

「やる事？」

「おはよう、おかあさん……」

クシクシと目を擦りながら起きるバガン。隣の母を見て、反対に温もりが無いのを思い出す。そこに父親が居ないと解りながらついでてしまう。

「……………あ」

するとそこにはぬいぐるみが有った。全部壊してしまった奴だ。

よくよく見ると縫われた痕が有る。

「わあ……！わあ！」

言葉が思い付かずぬいぐるみを壊れぬ様に抱き止め満面の笑みを浮かべるバガン。キングゴドラは薄目をあげその光景を眺めていた。

——ぬいぐるみ、同じのは買ってやらないんじや無かったの？——

——買ってない。直したただけだ——

「……………本当、向き合えば色んな顔見せてくれるよねゴジラは…………」

温もり？機械娘!?

「にーにー！今日私たちと寝よー！」

「にーちやねんねー！」

「ねるー」

「よるまだー？」

「待てないー！」

「だー！もう、わかったわかった！しつけーぞ！」

「「「きゃああああ」」」

ゴジラがガーツと叫ぶとキヤツキヤツと笑いながら飛んで逃げるセルヴアムシスターズ。

「……………じー」

「ん？」

「さっ」

そんなゴジラをジッと見詰める影が有ったがゴジラが振り返るとサッと隠れる。

「じー」

「……………ん？」

「さっ」

そんな影を見る影が有ったが振り返ると隠れる。

「……………メカゴジちゃんとサンサン、何してるんでしょ？」

そんなメカゴジラと三式機龍を見てピグモン首を傾げるのだった。

「……………家族」

ジツとゴジラを見詰めながらポツリと呟くメカゴジラ。

『家族』と言うのは、前世が機械だった彼女は家族と言うものが解らない。今世では疎遠になっていったし、力に覚醒した時点で一人で生きられたからその時点で関わりを絶っていた。

だから、解らない。あの怒りの化身があんなに優しい顔を見せる家族と言うのが、どんなものか……………。

「じー……………」

よって、観察し続けている。だが、やはり解らない。

「ふふふふ。悩んでいるようね」

「……………三式機龍？」

その声に振り返ると壁に寄り掛かりドヤ顔をした三式機龍が居た。

「おいひひ」

「……………？」

両手を広げ満面の笑みを浮かべる三式機龍に首を傾げるメカゴジラ。

「家族に憧れているんだろ？私がお姉ちゃんになつてあげよう」

「必要ない。私は別に家族が欲しい訳じゃ——」

「じゃあ何で態々観察していたんだい？」

「それは……………——」

三式機龍の言葉にフリーズするメカゴジラ。見てたのは、あの怒りの化身が浮かべていた笑みに興味を持ったからだ。だが、何故興味を持った？

態々、時間を割いてまで……………

「ERROR、ERROR…………」

「あ、わわ!?ごめん、答えられないよね!」

プシューと煙を出し頭をグワングワン揺らすメカゴジラ。慌てて頭を煽ぐ三式機龍。

「……………何してんだ彼奴等？」

セルヴァムシスターズを肩や背中にはつつけたゴジラはそんな光景を見て首を傾げた。

「興味が出てきたんだろ？ゴジラさえ変えた家族と言うものには、自分も変わりたいって思ってる」

「何故？私はその様な事を思う…………」

「ゴジラが楽しそうだから。君は初期のゴジラを知っているんだろ？だから、あの変わり様を見て、自分も変わるんじゃないかって思った」

「何故、私が変わろうと思う…………」

「彼処は温かそうだからね。海の底とは大違い、君にとっては何処か違うんだろ？」

「……………」

その言葉に思い起こすのは洞窟の中。自分より小さな自分の創造主達が居た。地球人を見下してる癖に自分の修理に地球人の科学者を呼ぶ変な連中。彼等は決して自分に話し掛けてこなかった。当然だろう、その時の自分は機械だったのだ。

人工知能は有れどそれは戦闘用AI、態々話し掛ける者など居ない。

「前世から、一人は寂しいんだろ？」

「……………さみ、しい？」

寂しいとは何だ？それは解らない。

「そうだね……………暗くて、寒い事かな」

「？前世の私はそんなもの感じない」

「んー？じゃあ、周りの皆が居なくなった時を考えてみようか。確かアギラと仲が良かったな」

「……………」

想像し、胸に手を当てる。何だろうこの感覚は、胸の中に穴が空いた様な……………喪失感は……………。

「…………？」

「それが寂しいって気持ちだよ」

「これ、が…………？」

「そう。私も覚えている。暗く冷たい海の底を、誰もいないあの場所を……………」

三式機龍はそう言うのとメカゴジラを抱き締める。押し付けられた胸からトクントクンと心音が聞こえてきた。不思議と安心する、眠くなる。

「これは大抵の生物が聞いている音だからな。哺乳類なら腹の中で、鳥類なら温められる卵の中で……………」

「……………うん」

かなり昔の事だが、自分もこの音に包まれていた記憶が有る。彼処

は暗かったが、温かかった。とても安心した。

ああ、そうだ。あの顔、ゴジラの顔を見ると、ゴジラに懐く子供達の顔を見ているとあの時の事を思い出す。だから、見ていたんだ。

「……ありがとう、お姉ちゃん」

「カフ！」

「……………」

『お姉ちゃんになつてあげよう』とか言っていたから、てっきりゴジラに何時も言っている様にそう呼んで欲しいのだと判断し呼んであげたら胸を押さえて蹲った。

「ど、どうした？私何かしてしまった？呼ばない方が良かったか？」

「い、いや大丈夫。ちよつと興奮しただけ。むしろこれからどんどん呼んで」

「……………何をしているんだあやつ等？」

そんな光景を見てゴジラ・アースは首を傾げた。

「よおピグモン、名前、特殊能力、身体測定、体力測定全部記入したぞ。これで良いのか？」

と、ゴジラはピグモンに書類を渡す。ピグモンは「ふむふむ」とその書類を確認して、判子を押した。

「はい。これでゴジゴジも参加資格を得ました。今日からゴジゴジも大怪獣ファイターです。でも何でいきなり？前々から面倒だつて言つてたじゃないですか」

「バガンが来たからな、俺とギドラの子だけあつて相当強い。だから俺も強くならねーとつて思ったんだよ。俺は戦えば戦った分だけ強くなれる怪獣だしな」

「なるほどー。公平な立場として勝つてとは言えませんが、強くなれるよう頑張ってくださいね♪」

特訓？・怪獣娘!?

大怪獣フアイトに参加する事にしたゴジラは取り敢えず体を動かす事にした。

取り敢えず反射神経と腕力を鍛えるために一人キャッチボールをやる事にした。

やり方は簡単。手頃な岩を全力で投げ、追い越し、受け止める。それを投げ、追い越す、これを繰り返すただそれだけ。

とは言えゴジラは元来速度が主体の怪獣ではない、強力な脚力と軽くなった体重を利用して誤魔化しているが狙った場所にピッタリ止まれる訳ではないので地面がかなりボロボロになった。

「……………止めるか」

そもそも自分は防御力にモノを任せて迫る戦い方を得意としていたんだ。反射神経を鍛える必要はあまりない。

「ん？ピグモン…………？」

と、不意にソウルライザーが震える。

『ゴジゴジ、言い忘れてましたが大怪獣フアイトー専用の特訓ルームが有りますよ?』

「……………そうか」

「あ、ゴジラー!聞いたよ、大怪獣フアイトに出るんだってね!」

特訓ルームに着くとミクラスが駆け寄ってきた。

「ミクラス、怪我はもう平気か?」

「へーきへーき。もう元気!やー、にしても残念。まだ先輩にも勝てないのに」

「ん?オレがどうしたって?」

と、話聞いていたのかレッドキングが振り返った。持っていたダンベルを置くとやってくる。

「いや、以前誘われてな。その時はあんま興味無かったんだが、レッドキングに勝てたら参加してやるって言ったんだ。レッドキングに勝てなきゃ俺に勝つなんて夢のまた夢だしな」

「む……」

暗にレッドキングより強いと断言されレッドキングが反応する。

「丁度良い、俺だってあれから強くなってるんだ。どっちが強いかな勝負しよーぜ？」

そう言つてレッドキングが指差すのは中央に有る肘あたりの高さの台だ。

「何すんだ？」

「アームレスリングだ！」

「ああ、腕相撲か」

膝を台に乗せ構えるレッドキング。ゴジラも肘を乗せて手を掴む。ついでにどちらも既に変身している。

「じゃあじゃあ、スタートの合図するね！シーボーズちゃんか！」

「……………へ？私!？」

と、見学していたゴモラが不意にゲッツのポーズで同じく見学していた少女を指差す。ゴジラに取つて初めて見る顔だ。黒いドレスを覆う様な骨の様な外殻、額には三本の角が生え、同じ様に角が三本有る恐竜の骨の様なお面を側頭部に付けている。

「……………シーボーズ……………ああ、資料で見掛けた事有るな。確か、あの迷子の子犬みてーな」

「あう…………」

ゴジラの何気ない言葉にガツンと殴られた様に蹲るシーボーズ。どうやら禁句だったらしい。

「まあまあゴジラ、そんな事言わないで。シーボーズ先輩は結構人気のファイター何だよ。ゴモたんが決勝まで取つておくつもりだった必殺技使わせちゃうんだからー」

「へー…………ゴモラが……………」

戦い馴れしているゴモラに隠すつもりだった奥の手を使わせるとは、なるほど中々やるようだ。迷子の子犬は言い過ぎた。

まあゴジラも嘗ては迷子の子猫扱いされてたし決して悪口ではないが。

「一応愛嬌が有るって意味で言ったんだ。気分悪くさせたなら謝る」

「い、いえ大丈夫です……じゃ、二人ともセット」

「……………」

その言葉に構えるレッドキングとゴジラ。ミシリと台が軋む。

「レディ……………フアイト！」

「うお——お？」

ズドオン！と爆音が響き台が砕け散りレッドキングがクルリとひっくり返る。

「……………」

何だろうか、今一瞬、黒い巨大な怪獣が見えた。あれがゴジラの前世の姿なのだろうか？

「……………なあレッドキング、お前今手を抜いたか？」

「ぬ、抜いてねーよ！」

「ゴジラあ……………いくら圧勝したからってその言い方は無いと思うなあ……………」

「……………？ああ、もしかしてお前等気付いてないのか？」

ゴモラ達の非難する様な言葉にようやく納得したゴジラ。「ほい」とゴモラとミクラスに手を、シーボーズには尻尾の先端を差し出してきたので掴む。

「……………!?おも!!」

瞬間ズン、と重りでも持ったかのような感覚に陥る。

「体重操作。踏み込みの瞬間とかにやりやかなりの威力になるぞ」

「体重操作？でもそれスカイドンちゃんみたいな怪獣の技じゃ……………」

「その怪獣娘のスカイドンが体重操作出来るとして、怪獣のスカイドンに似た能力は有ったのか？」

「んー……………確か無かったよ。単純に重いだけ、後を火を吹ける。水素入れて浮かせた後自衛隊に落とされて落下する前にウルトラマンに倒されたの」

「……………すごく、哀れな怪獣だな。まあ、その怪獣自体はそう言う力を持ってないんだろ？多分、前世が重さを強みにしていた怪獣だから

そう言う力に目覚めたんだろ。ちなみに家の娘達も全員出来るぞ」

「マジですか」

「マジだ。慣れるとトン単位の踏み込みで地面を蹴ってその瞬間体重を戻す高速移動が出来る様になる。制御効かないから真っ直ぐにしか進めねーし地面がボロボロになるけど」

と、ゴジラが先程の特訓を思い出しながら言う。

「おおーじゃあこれ覚えればオレもゼットンに勝てるかもしれねーのか！」

「え？あ、ああ……かもな」

「オレにも教えてくれ！」

頼み込んでくるレッドキングを見て、ゴジラはキングジョーやゼットンに既に使えている事は黙っておこうと誓ったのだった。

デート？放浪宇宙人!?

「きゃああああ!!」

「……ん？」

廊下を歩いていると黒い巨大な蜥蜴擬きがペガッサを追い掛けている。

「た、助け——」

「よつと」

ゴジラが蹴りを放つと蜥蜴擬きはバラバラに碎け散る。

碎け散った肉片に触れるとピクピク動きゴジラに引き寄せられる。

「これは、俺の細胞か？何か混じってるけど」

「あうう……ご、ごめんなさいゴジラさん。天井からヤモリが落ちてきて、吃驚してる間にゴジラさんの細胞を浸してた溶液を飲んじゃったらしくて」

それで怪獣化したのか。これも何時か怪獣娘になるのだろうか？

「気を付けて扱えよ。俺の細胞ガチで危険なんだから」

現地の人間が知ったら間違いなくGIRLSを襲いに來るほど。

実際、ゴジラが知る由も無いが前世の世界に於いてゴジラの細胞を盗みに來た者達がビオランテのご飯になった。

「気を付けます」

「ん、気を付けろよ」

そう言つて頭を撫でるゴジラ。

『………ん？』と手を離し自分の手を見る。最近娘や妹が増えたせいで撫で癖がついてきてしまったらしい。

「あ、あのゴジラさん………」

「ん？」

と、ペガッサがもじもじと話し掛ける。

「その、何かお詫びがしたいんですが………明日時間は有りますか？」

「や、別に詫びなんて良いけど」

「私が良くありません！」

「ん、んー……………そこまで言うなら……………明日は暇だよ」
「は、はい！では、明日の九時に……………！」

ペガツサがルンルンと嬉しそうに町中を歩く。待ち合わせの駅の場所はもう直ぐそこ。と、何やら待ち合わせ場所に人が集まっているのが見えた。

「あ、あの……………通してください」

人を掻き分けながらなんとか進んでいると、人垣が無くなり、人が飛んでくる。

「……………へ？」

「く、くそ！覚えてやがれ！」

「ふん」

ゴジラが居た。コキリと首を鳴らす。

「あ、あのゴジラさん……………」

「ん？ああ、ペガツサか」

「何してたんですか？」

「知らん女が軟派してきたから無視してやったらそいつの恋人っぽい奴とその友人みてーのがやってきてな。美人局だったんだろ」

ペガツサは改めてゴジラの格好を見る。ゴジラ自身服装に拘りは無いので、彼の服は妹達を選んでいるらしい。完全にブランド物だ。確かに金を持っていると思われるだろう。

しかしゴジラが軟派に引っ掛かると思ったのだろうか？

「んじや、行こーぜ。何処に行くんだ？」

「あ、はい。実は美味しいレストランを見付けたんです……………ですけどその、遊園地の中に有って」

「へえ、ならついでに遊ぼうぜ。ミニラ達も連れてくりや良かった」

「あ、ごめんなさい。昨日の内に言っておけば……………」

「まあ良いって。今から誘ってもな……………」

遊園地に移動したゴジラ達。

「……………デカイな」

「?ああ、観覧車ですね。ここのは日本でもベスト20に入る大きさですから」

「それってデカイのか?」

「はい。天辺から見た景色はきつと綺麗でしょうね……はあ、見てみたいなあ」

「ふーん。なら乗るか」

と、ゴジラが観覧車に向かって歩き出す。

「つて、ゴジラさん!?綺麗な景色が見れるのは夜です」

「そうか」

ペガツサの言葉に立ち止まったゴジラは『なら何に乗るか』と辺りを見回す。

「……………お、ペガツサ!あれなんだ」

「あ、あれはフリーホールですね。上級者向けです、行きましょう」

ゴジラの手を掴み歩き出そうとしたペガツサだったが電柱でも掴んでしまったかの様にガツクンと仰け反る。

「あれ乗ろう」

「い——」

「いやああああ!」

「はははは!」

下から吹く猛烈な風、上へと上っていく景色、体重が無くなる浮遊感。流した涙は宙を舞う。

「楽しいなこれ、気に入った!」

「……………」

そんな涙も隣で笑うゴジラの顔を眺めていたら不思議と引っ込んだが……………。

「お、確かに美味しい。混ぜられた香辛料が肉の味引き立ててんな」

「気に入ってくれて何よりです」

モグモグと肉を食うゴジラを見て微笑ましげに笑うペガツサ。そ

んなペガツサの笑みを見て、ゴジラはふと訪ねる。

「なあペガツサ、お前……………俺と誰を重ねて見てんだ？」

「……………へ？」

「お前、俺を見る時俺じゃない誰かも同時に見てるよな？誰だ？」

「え……………あ、へ？」

ゴジラの言葉にペガツサは持っていたカップをカシャンと落とす。その音に周囲の視線が集まり、ペガツサは顔を蒼白にさせ、立ち上がり駆け出した。

「あ、おい！ペガツサ!？」

後ろから聞こえる声を無視して、全力で走る。この場から離れたくて、ゴジラの顔を見続けられなくて……………。

気が付くと人気の無い場所に来ていた。

遊園地にもこんな場所が有るのかと思えばシートにくるまれたアトラクションも有った。何時の間にか開発中の場所にまで来てしまっていたらしい。

「……………はあ」

何しているんだろうか自分は。

ゴジラの言葉に、ようやく理解した。前にピグモンにも指摘されていたと言うのに。

甘えていた。あの優しさに、怪獣娘や家族にだけ向けられるゴジラの優しさに。

ペガツサが好きだった男、恋していた男。多岐沢マコト、ひよろりとした青年で、物腰も穏やかで誰に対しても敬語を使うゴジラとは似ても似つかぬ男。

ただ、良く誉めてくれた。ゴジラも初めて会った時、誉めてくれた。そこから勝手に多岐沢に重ねてしまい、その後の言葉一つ一つに惹かれてしまった。

「……………私はヒロミさんじゃないんだから、ヒロミさんにはなれない」
そう言われて嬉しかった。他人と比べて勝手に落ち込んでいた自

分だが、その言葉に救われた。なのに、自分はゴジラを多岐沢と同じ様に見ていた。

「……………戻らなきゃ、お金、払ってなかった」

と、立ち上がった時――

「ここに居たか」

「え？わわ！ゴジラさん……………！ど、どうして……………」

「俺は怪獣の気配を追えんだよ……………」

「そ、そうなんですか……………あ、そう言えばお金……………もしかして、払わせちゃいました？」

「いや、他の客達が『自分達が払っておくからさっさと追い掛ける』と……………」

どうやら色んな人に迷惑を掛けてしまったらしい。

「ごめんなさいゴジラさん。私……………ひゃあ!」

「動くな、じっとしてろ」

不意にゴジラはペガツサは肩に担ぐと歩き出した。ゴジラ力ならペガツサがどれだけ暴れようと無駄なので抵抗は直ぐに諦めた。周りの視線が痛い。

「着いたぞ」

「え？あ、観覧車……………」

ゴジラはペガツサを下ろすと向かいの席に座り頬杖を付き外を眺めだした。ゴンドラはゆっくり上り始める。お互い無言。その沈黙をゴジラが破る。

「ん……………」

くい、と顎で外を見るように促す。外に目を向ければ日が繰れ、アトラクションを飾るイルミネーションや街の灯りがよく見えた。

「……………はあ」

思わず吐息が漏れる。星の海を眺めている様な、そんな光景。

「あれが見たかったんだろ？」

「え？あ、はい……………一応」

「確かにまあ、綺麗だな」

「……………はい」

「じゃあ笑え、その涙の跡もさつきと拭いて」

「あ……………」

もうしかして元気付けようとしてくれたのだろうか？

「悪かったな。どうも無神経な事を言ったらしい。俺は、そう言うのは良く解らん。中目ぐ……………トトに言われてる事は覚えてるが、教わってない事に関してはこちらからつきしだ」

「そんな、悪いのは私です……………私が、博士の事が諦めきれなくて」

「ああ、辞めた奴だったか？別に良いんじゃないの？」

「結婚してるんです。その人」

「そうか……………で、お前は何かアプローチしてたのか？」

「……………いえ」

「ならそれはお前が悪い」

「……………」

ここで多岐沢なら、きっと『気付けなくてすみません』と言ってくるのだろう。やはり、彼とゴジラは違う。そんな事やつと気付き、自嘲する様に笑う。

「お、やつと笑ったな」

「え？」

「それで良い。そうしてくれた方が、気が楽だし、何よりお前の顔は笑顔の方が、俺は好きだ」

「……………」

たぶん、このお前と言うのは怪獣娘全体を指しているのだろう。決して自分の事ではない筈だ。それは解ってる。解っているが、頬が熱くなる。ゴジラをまともに見ていられず外を見る。冷たく冷えたガラスに額を押し付ける。

全然違う、多岐沢とは、最早重なりもしない。なのに、それなのに……………あれほど愛しかった重なる優しさより、重ならない部分の方が気になって仕方ない。

頂点を越え降りていくゴンドラが酷く恨めしくて、時間が止まれば良いのにと願った。

「聞きましたよペガちゃん。ゴジゴジとデートしたんですってね〜」
『ぷー』とむくれたピグモンの言葉にペガツサはタラタラと汗を流す。

「でもその後帰り、別れたみたいですね〜？帰り遅かったし、何処行つてたんですか〜？」

「博士に告白して振られてきました」

「……………へ？」

「何にもせず、しないまま振られてお終い、じゃ……………何か違う気がして。きちんと告白して、きちんと振られてきました」

「……………その割には清々しそうな顔してますね？」

「え、そ、そう……………ですかね？」

頬を赤くしてもじもじするペガツサを見てピグモンは頭を抱えた。

「何時の間にかペガちゃん本気になってますね〜。これ、ピグモンむしろ出遅れてる？」

温泉？・怪獣王!?

「温泉に行こー!」

「……………は？」

わーいと両手を広げるミクラスの言葉にゴジラは首を傾げる。

「あれ、聞いてないのゴジラ？今週の土日、大怪獣ファイター達の交流会で一泊二日の温泉旅行が有るんだよ」

「ああ、そう言やそんな紙貰ったな……………ん？待て、その言い方」

「あ、うん。僕も大怪獣ファイターに参加するよ。モスラさんやバトラさん、デストロイアさんやスペゴジさん達も出るみたい」

「へえ…………」

それは、丁度良い。鍛える為には実力の拮抗した相手の方が丁度良い。

「で、ゴジラは来るの？」

「……………家族は誘えんのか？」

「法律上ゴジラは結婚してないから、子供達だけかな。あの子達は養子にしているから法律上もゴジラの子らしいし」

「そうか」

移動はバス。ゴジラは膝の上に乗ったりトルとミニラの頭を撫で肩に頭を乗せスヤスヤ寝息を立てるシン・ゴジラを起こさぬように窓の外を眺める。

「……………ん？」

山の景色を見て、ふと違和感を感じる。もう立春、植物達が葉を茂らせる時期だと言うのにまるで冬のように葉が一つも無い。

こう言う環境に関して一番鋭いのはモスラだろう。次点でトト。

チラリと二人を見ると神妙な面持ちで山々を眺めていた。

「……………枯れてんな」

軽くふれればパキリと砕ける。枯れて数日は絶っているのか、すべ

ての細胞が完全に死んでいる。不自然に一角だけ。まあ、これはゴジラが気にしても仕方ない事だ。ゴジラ・アースなら元の元気な状態どころか鉄分を吸い上げ超巨大な木にでも出来るだろうがやらないだろうし、ゴジラとしてもやる気は無い。と、その時――

「凄い生命力、とつても美味しそう」

「!？」

絡み付く様な甘ったるい声に振り向き様に拳を放つ。咄嗟の怪獣化により拳圧が枯れた木々を吹き飛ばす。

「ふふ。怖い怖い……」

砂煙が舞う中、影しか見えぬその人物はクスクス笑いながら離れていく。ゴジラが蹴りを放つと砂煙が二つに割れるが既に影は奴無かった。

「逃げた……いや、見逃された、か？」

少なくとも向こうは、此方を恐れていなかった。逃げたつもり等無いのだろう。嘗められたものだ、苛付く。

探すか？いや、面倒だし良いかと切り捨て旅館に戻る事にした。

「何処、行つてたの？」

「雉を撃ちに」

「……………長かったけど、体調悪い？酔った？」

ゼットンは心配そうに覗き込んできたので甘ったるいもの食い過ぎたと言っておく。取り敢えず納得してくれたのか、気を付けてと注意された。

「じゃあ、温泉に入ろう。上がった頃が、丁度良い時間になるはず」

「ああ、夕飯か。ちなみにモスラやトトは」

「？ちゃんと居る」

となるとあの異変に気付いてない……………は、無いな。恐らく皆が寝静まった辺りで行動する気だろう。まあゴジラには関係ない事だが。

「十歳以下はどちらも利用可能、か。悪いなミニラ、女子組と入ってて

くれ。リトル達はどうする?」

「パパと入るー!」

「ん」

「おとーさんとはいる」

「よし、じゃあ行くか」

ゴジラはそう言ってリトル、シン・ゴジラ、バガンを連れて風呂に向かい……………

「ってちよつと待てえ!」

レッドキングが先回りする。

「……………何だ?」

「リトルやバガンは兎も角、何でシンまで!」

「何の問題が?シンはこんな見た目だが0歳だ。問題は無いだろ」

「いや有るに決まってんだろ!?!お前、娘が厭らしい目で見られても良いのか!」

「む……………」

確かに、シン・ゴジラは見た目は美しい女性だ。当然、裸になったら多くの目が集まるだろう。

「悪いなシン、レッドキング達と入ってくれ」

「え……………」

「そんな顔するな。今日は寝る時にお腹トントンしてやるから。な?」

「……………約束」

シン・ゴジラはそう言って大人しく女湯に向かっていった。

「わあ、ゼットン先輩胸大きい!」

「そう?」

「アタシなんかまだまだだなく、アギちゃんよりちっちゃいし」

ゼットンの胸を見て羨ましそうにするミクラス。ミクラスも平均的に見れば多少有るが、多少でしかない。やはり女としては胸が有る方が憧れる。

「ふん、下らん。胸の大きさなど何の意味が有る」

「まーね。結構じゃまだよね」

ミ ク ラ ス に G細胞を取り込んだ怪獣 と
ゴジラのエネルギーを吸収した怪獣が吐き捨てるが嫌みにしか聞こえない。

「まあまあミクちゃん。大事なものはバランスだよ。その点私なんか背丈に合ったバランスの良い体型してるんじゃない？」

そう言ったのはゴモラだ。幼児体型のゴモラが言うと言説力が違う。

「んー、でもなあ……………シーボーズちゃんは思う？」

「へ？えっと……………バランスならあの人とか……………」

そうやってシーボーズが指差すのはシン・ゴジラ。髪が湯に付かぬように括られ、胸を地熱で暖められた温泉の縁に押し付けぐでーと蕩けている。

陶器の様に滑らかで、白いながらも虚弱さを感じさせない美しい肌。スラリと伸びた体型に、豊満ながら形の整った胸。どれを取っても一級品だ。思わずゴクリと唾を飲んでしまう。

と、その時怪獣娘達の優れた聴覚が話し声を拾う。

『ここだ、この木登れば中が見れる！』

『ほ、本当にやるのか？』

『来ねーなら俺らだけで行くぞ』

『い、行くー！』

どうやら覗きのようだ。こここそ話しながら木を上るカサカサと言う音が聞こえてくる。桶を掴み、お湯を入れる一同。メキメキという音を聞きながら……………メキメキ？

「パパ、やっぱり……………一緒に入る？」

振り返るとシン・ゴジラが境に寄り掛かっていた。メキメキという音は今にも倒れそうな境の音。

「回避！」

「あう……………」

レッドキングが叫ぶや否や迅速に風呂場から抜け出す怪獣娘達。レッドキングはシン・ゴジラを羽交い締めにして脱衣所に入り扉を閉

める。入れ替わる様に境が倒れる音がした。

『何だ今の音?!』

『さて、これはチャンス!今なら覗ける!』

と、そんな声が聞こえてきた。生憎今見れるのは男湯だけだろうが
.....

『馬!?!』

『マンモス!?!』

『すげえ!?!』

『あ?んだてめえらさては覗きか?』

そんな声が聞こえてきた。怪獣娘達の中でゼットンだけが頬を赤くしていたという。

「——ツフ!」

カツ!

「——と」

コッ!

カコカコカコココココココココツ!!

「球が見えない!線だけしか見えないよ!?!」

風呂上がり、卓球台で球を打ち合うゼットンとゴジラ。互いに怪獣娘としても上位の実力者。それはつまり普段の力も高い事を意味しておりプロの卓球選手顔負けの試合をしていた。

「あー、こりやししばらく動かな」

「そうなんですか?」

「ゼットンちゃん卓球好きだから、しばらく止めないと思うよー」

「再会？・宇宙超魔獣!？」

ゴジラが腹をトントン叩いてシン・ゴジラを寝かしつけると、背中に張り付いたミニラとリトルを起こさない様にそっと布団から出る。目を閉じ気配を探る。

宿の中に複数。宿の外、少し離れた森に五つ。

「……………行くか」

窓を開け、少し寒そうにしたりトル達を抱き合わせてから外に出て窓を閉める。向かうのは山。

「やはり、生命力が吸い取られています」

「生命力を吸う、か。厄介な…………つかあの亀はどうした？」

「寝てる」

バトラの言葉にミドリとレオが言うと「はあ」と呆れた様に頭を押さえる。

「あのガキは、全く」

「仕方ありませんよ。トト君はまだ子供なんですから」

「戦闘経験も一度だけ。場合によっては足手纏い」

「……………中々言うなお前ら」

二人の言葉に顔を引きつらせるバトラ。あれでも一応、地球の守護神なのだが。

まあ、温泉から上がった後ゼットンに延々と卓球につき合わされていたから仕方ない。

「んで、こんな事が出来る奴に心当たりは有るのか？アタシにや無いが……………」

「有る」

「ええ。私は恐らく知っている。でも、有り得ない…………有り得るはずが無い、だって……………」

「死ねないもんね、私」

「……………ツ!？」

唐突に聞こえた声に振り向くと其処には何時の間にか黒髪の少女が居た。赤い瞳で旧知に再会した様な笑みを浮かべる少女に対しモスラは瞳や着物を緑に染め、ミドリとレオも最大限の敵意を持って身構えた。

「デスギドラー！」

「久しぶりモスラちゃん。元気？」

「どうして、貴女がここに……………」

「さあ？私も色々調べたんだよ？怪獣娘って言うんだってね…………死後怪獣のエネルギーが宿った人間。でも、私って正確には生命では無かったよね？宇宙のエントロピーが増える過程で偶然生まれた存在。死と言う概念が無いから——」

「封印した……………」

そう、彼女は死なない。元来本当の形を持たず、過去交戦した者の中で最も強かったギドラの姿を取り生物の様な見た目こそしているが、死なないのだ。

「この辺りの植物を枯らしたのは貴女ですね？」

「うん。キチンと理想の娘を演じてたはずなのに捨てられてしまつてね。この姿なら普通の食事でも十分なんだけど、お金が無いから生命力を貰ったの」

「？捨てられた？ガキなら兎も角、お前ほどの年齢…………いや、精神年齢的に考えりゃ前世の記憶思い出した次点で戻れば良いだろ？」

「え？やだなあ、私は捨てられたんだよ？本来産まれてくる子を押し退けて宿って、その上生命にまでさせて貰ったんだから感謝してる。これ以上迷惑掛けるつもりは無いよ」

そう言つて微笑むデスギドラにバトラは薄ら寒いモノを感じた。

目の前の少女は今世に於いて出来た家族に、十数年は共に過ごした両親に何も感じていない。嫌悪も好感も…………産んでくれた事に感謝はしている様だが、文字通りそれだけ。

感情があるのか？

「生命にさせてもらった…………それが貴女の、数多の星を滅ぼした理由ですか？」

「うん。だって私だけ意志が有るのに、生命じゃないんだよ？他の意志を持つ奴らは皆命を持つてるのに……良いよね、命って。取り込み続けられれば私も何時かそれになれるかと思った、生命の真似までした。生まれ変わるだけで良いなんて簡単な方法が有ったんだねえ」

うんうんと頷くデスギドラ。生命を得たと言う事だけで満足したのだろうか？

「この体は良いよ？夜になれば眠って、食べなければお腹が減る。後は恋でもして、子供でも残せば満足だよ」

「……………デスギドラ」

前世のやり取りで、凶悪なイメージを持っていたが話してみれば、普通の女の子だ。

「それにね、私今日運命の出会いが有ったんだあ……」

「き、今日？一目惚れって奴ですか？」

頬に手を当ていやんいやんと体をくねらせるデスギドラ。不覚ながら可愛いと思ってしまった。

「すっごい美味しそうな生命力でね……私、普通に食事出来るんだけど少し分けて欲しくなっちゃった」

「……………」

生命力に味などあるのか。と言うかそれは恋ではなく食欲なのでは？

「それに、あの目は私と同じだ。孤独を知る目……………あの人なら私を解ってくれる」

良かった、きちんとそう言う好意も有ったらしい。二人で並んで歩いている光景でも想像してるのか頬を赤らめるデスギドラ。モスラも微笑ましげに見ていたが、不意にデスギドラの目に狂気が宿る

「欲しいなあ、あの人……………全部欲しい。やっぱり子供なんていない、あの人だけで良いや。子供生まれて愛情が取られたら、きっとその子供殺しちゃう」

「……………」

ゾクリと背筋に悪寒が走る。

解り合えるかと思ったが、無理だ。考えてみれば、死ぬはずのない

彼女。どうして転生したか解らないが、恐らくこの世界に於いても不死。そんな存在が、命を理解出来るはずがない。『負の固まり』とは良く言ったものだ。

「ん？どうしたの、急にまた敵意を向けて」

「その彼が何者であれ、貴女を会わせる訳には行かなくなりました」
「？どうして……」

ムツとするデスギドラ。それはまるで玩具を取り上げられた子供の様で、怒りながらも、此方の意見を聞こうとする構え。本当に純粹だ、恐ろしいほどに。

「貴女のその想いは、正しいでしょう。相手の事を良く知らないのに、と言う点を除けば応援したくなります。ただ、その想いを成就する為なら他者を蔑ろにすると言うなら、その人物に会わせる事は出来ない」

「……………何で？」

今度は拗ねた様な顔をするデスギドラ。が、その体から黒い黒雲の様なモノが流れ出る。

「持つてたくせに。家族を、命を、仲間を……私が欲しかったもの全部持つて行くせに。何で私にただ一つ欲しいと願ったモノを奪おうとするの？いやだ、渡さない。ずっと独りだったんだ、ずっと孤独だったんだ、ずっと寂しかったんだ。漸く会えたんだ、同じ孤独を知る人に……………あれはもう私の物だ。邪魔、するな……………」

赤黒い光りと共にデスギドラの姿が変わる。

キングギドラやメカギドラの様に、ギドラ族の象徴たる龍の首。前世に於いて真似た形が背中から二本生え人としての頭には角が生える。

全身を覆うのは黒く、不気味で美しいドレス。デスギドラの、怪獣としての力を十全に使う為の、怪獣娘としての姿。

「ミドリ、レオー！」

モスラは慌てて二人を呼び抱き抱えたと空を飛ぶ。バトラはデスギドラの能力を知らないが相方の行動を見て即座に地面から離れる。

同時にデスギドラが地面に向かって手を振り下ろし、地面が爆ぜ

た。何らかのエネルギー派、ではない。地面の下から圧力が加えられ起きた爆発。その正体は、マグマ。

「噴火だ?!」

地が裂け血飛沫の様に飛び散る灼熱のマグマ。それが地面から飛び出る現象を、噴火と言う。

長い年月を経て地面の中に溜まった熱が噴き出る現象。数多の間、動物、植物を、命を焼き払う災害。時には地形すら変え環境を激変させる災禍。

ギロリと赤い瞳が空へと逃げたバトラ達を見据える。

その目を見てバトラは真っ先にゴジラを思い出した。出会った当初の、世界全てを憎み、孤独の中叫ぶ目。

『自分はこんなに孤独なのに、どうしてお前等は持っている。死んでしまえ消えてしまえ動くな生きるな』そんな声が聞こえてきそうな目。

黒い攻撃的な手袋に包まれた手をクン、と指揮者の様に持ち上げる。モスラ達の眼下で再び噴火が起き巨大な火柱が向かってきた。

「ツチー！」

「くっー！」

噴火の射程外の高度に上昇する二人。と、そこで気付く。火砕流とマグマが人里に向かって流れていった。突然の噴火に困惑するばかりで避難など出来る筈がない。

「いけないー！」

慌てて向かおうとするモスラ。が、火砕流とマグマは不意に現れた半透明の壁に防がれた。

「あれは、ゼットンさんの……?」

どうやら先程の噴火に真っ先に起きて直ぐに対処してくれたようだ。助かった。兎も角、今はデスギドラを止めなくては。

「何処に……」

地上は煙でまともに見えない。前世のサイズだったなら兎も角、人間のサイズになるとこんなにも厄介な副次効果が生まれるなんて……。

「——ッ!?!」

と、黒煙の中から赤い炎が飛んでくる。それに対してミドリとレオが胸辺りで溜めた緑色のエネルギーを放ち相殺する。

「おいモスラ、お前昔彼奴倒したんだろ!?!どうやった!」

「……………倒してませんよ。封印したんです。でも、今はエリアスの盾も無い…………」

彼女は殺せない。永遠に生き続ける。だから止める手段は封印しかないが、封印に必要なエリアスの盾が無い。

「つち、また来たか!」

再び迫ってくる先程より大きな火炎。回転を加えられたそれに対して熱に強いバトラが盾になる。

「ぐっ!?!」

しかし予想以上の熱と威力に顔をしかめるバトラ。仕返しとばかりに暴風を起こし黒煙を吹き飛ばす。

デスギドラが見えた。龍の口と本人の口に赤い光が見える。

「があ!」

同時に放たれた炎弾は途中で一つになり回転しながら迫る。発射の瞬間が見えていたので今回は避けるモスラ達。モスラがエネルギーを込めた鱗粉を撒くと解放されたエネルギーが光りの柱を無数に生み出しデスギドラを飲み込む。

「っ、はあ!」

が、高熱エネルギーのバリアーを纏って無効化するデスギドラ。地面を蹴り飛び上がってモスラ達の前にやってくる。

「くう!」

「あは——!」

「な!?!」

振るわれた手を避けたが突如デスギドラの体の一部が爆発して有り得ない方向転換をしてバトラの顔を掴む。

「爆ぜろ」

「——!?!」

その手が発光し爆発する。

「か——」

口から煙を吐いて白目を剥くバトラをマグマの海に投げ捨てるデスギドラ。

「バトちゃん！この……！」

モスラは振袖から稲妻を放つ。

「……………無駄」

「ぐっ！」

爆発によって威力を底上げされたデスギドラの拳にゼットンの張った壁まで吹き飛ぶモスラ。

「モスラ!?何が起きてる……まさか、シャドウ?」

「ゼットンさん、この子たち預かってください」

「お母さん！」

ミドリとレオをゼットンに預けようとするモスラだが二人の声にハツとするとデスギドラが迫っていた。蹴りを放たれ灼熱の溶岩に落とされる。

「っう……！」

「くう……！」

バトラ程熱に強くないモスラとミドリ達。熱に焼かれ息をすれば肺が焼かれそうになる。

「死ね」

「させない」

「ッ!？」

と、ゼットンが放った火球に仰け反るデスギドラ。熱に強くとも流石に一兆度の炎には耐えられなかったらしい。

「潰れろ」

「ぐー！」

ゼットンがパンと手を叩くと左右から半透明な壁が現れデスギドラを押さえ付ける。先程の様に高熱のバリアーを張り、抑える両掌を爆ぜさせる。が、ゼットンの拘束を振り解けない。

「が、ああー！」

手そのものを爆発させて拘束を破壊するデスギドラ。両手を振り

上げると大量のマグマが噴き出す。慌てて防御に専念するゼットン。デスギドラはゼットンから顔を逸らすとモスラ達を見る。

「……………」

そう言えば昔こんな事が有ったな。あの時はデスギドラではなくキングギドラだったが、絶体絶命だったのは間違いない。

幼虫の頃だったのでミドリ達も覚えているのかキュツとモスラの服の裾を掴む。そう言えばあの時、どうやって助かったのだったか？自分一人ではキングギドラには勝てないのに……………」

「おい……………」

と、不意にデスギドラが青い光りに飲まれる。既視感。

「てめえ、人ん家の子供と仲間は何してやがる」

ああ、そうだ。思い出した。あの時もこうだった……………」

「お父さん……………」

「ゴジラ……………」

不快気に眉をしかめるゴジラ。マグマの上を平然と歩きながら肩にはバトラを抱えていた。

「そいつ頼む」

「あ、はい……………」

バトラを受け取ったモスラ。既視感を覚えながら、あの時は感じた事の無い胸の温もりを感じる。熱さが気にならないし、別の何かで胸が熱い。

「後は俺がやる」

そう言つてデスギドラに向き直るゴジラ。と、モスラはデスギドラの様子が可笑しいのに気付く。赤くなつて俯きチラチラとゴジラを見ている。

そして、態々降りてくる。彼女にとってマグマは大して熱くないのだろう。

「あ、あの……………私の事覚えてる?」

「?ああ、森で会ったな」

森で?

ゼットンに保護されながらどこか引つ掛かりを覚える。

「覚えていてくれたんだ！」

「お、おお……」

満面の笑みを浮かべるデスギドラに困惑するゴジラ。そして――

「その、えっと……私と、お付き合いしてください！」

「え、断る」

決着？・宇宙超魔獣!?

「逃げる！おいどけよ！」

「押すな！こつちが先だ！」

「お母さ〜ん！」

大混乱だ。突然の爆音に加え、赤く光るマグマの津波を見れば仕方ない事とは言え我先に逃げ出そうとして逆に足を引っ張り合ってる。

「ちよつとちよつと！皆落ち着いてー！」

「慌てて避難するな！怪我人が出てる！」

一般人達より落ち着いている怪獣娘達が叫ぶが聞く耳持たず。人並みに飲まれまともに声を上げる事すら難しくなってきた。と、その時……

「クアアアアアアアツ!!」

「——!?!」

突如聞こえた咆哮にビクリと身を固める人々。音の発生源を見ると巨大な亀の甲羅を背負い胸から腹にかけて刺青をした少年が立っていた。

「落ち着いて避難してください。それと、足元……」

その言葉に何名かが漸く気付いたかの様に踏み付けていた者を見る。幸いまだ息はしている。

「老人、子供、怪我人を運んでください。人を突き飛ばす元気が有るなら出来るはずです」

その言葉に罪悪感を消す為動き出す。先程よりゆっくりと、しかしスムーズに避難を再開した。

少年、トトはその光景を眺めた後

「……駄目、なの？」

と、今にも泣きそうな顔になるデスギドラだが生憎ゴジラの良心はその程度では罪悪感を覚えない。

が、不意に違和感に気付く。

見捨てられた子犬の様な目と同時に、困惑の色を浮かべモスラを見

ていた。

「……………」

取り敢えず、モスラを守る様に移動すると困惑の色が強くなる。

「……………何で、守るの?」

「あ?」

「可笑しい、だって……貴方は違う。そんなんじや……独りで、寂しそうで、仲間なんて居るはずない……」

覚束ない足取りでゴジラから距離をとるデスギドラ。目の前の光景から逃げるように、信じられないというように後ずさる。

「独り?寂しい?ああ、成る程……確かに俺はその感情を知ってる。けど、もう寂しくない。俺には仲間が居るからな」

「仲、間……?そいつ等は、貴方を理解してくれるの?貴方の孤独を知って、解って、接してくれるの?」

「……………成る程確かに。スpegジヤオルガは少しなら解ってくれるだろうけどスpegジヤは直ぐに俺と言う同族が居るのを知っていたし、オルガは元々宇宙の何処かに仲間が居るのを知っていた。ヘドラやシノムラ、デストロイアは群体だしな……ミニラやリトルは直ぐに俺が居た。アンギラスは出会った当初は本能のまま動く獣だったし、知能が付いた頃には舎弟だったからなあ……確かに俺の思いを理解してくれる奴なんて居ないな」

「でも……でも私なら、その思いを理解出来る……貴方の事を、誰よりも解ってあげられるよ……?だから、こっちに来てよ……」

縋る様に再びゴジラに歩み寄るデスギドラ。が、ゴジラの応えは変わらない。

「断る。確かに、まあ理解してくれねーだろうけど別に理解を求めた覚えは無いしな。此奴等はもう俺の仲間で、お前はそれを傷付けた。それだけだ」

「やだ!」

「……………はあ?」

子供の癩癩の様な言葉にゴジラが顔をしかめる。

「イヤだ、イヤだ!何で私だけ……同じなのに、貴方も、私も、孤独だっ

た。独りだった！理解し合えるのはお互いしか居ないのに……」

「……………」

「何で？貴方は生命だったから？私も生命になったのに、どうして私だけ愛されないの……？ずるい、そんなのずるい！一人だけ愛されるなんてずるい！」

「おま——ツチイ！」

ゴジラが何か言い掛けるがそれより早くマグマの海が脈動し火柱がゴジラを飲み込む。ただのマグマなどゴジラにとっては目隠しにしかならないが言葉を中断されるには十分だ。

「私のモノにならないなら、お前なんて消えてしまえ！」

「こ、の……駄々捏ねてんじゃねーぞクソガキがあ！」

ガチン！と歯を噛み合わせる音が響くと同時にゴジラの体からエネルギーが溢れ出し周囲のマグマが吹き飛ばされ赤く黒く変色した地面が曝される。

「——!？」

足場になっていた粘度の高いマグマが吹き飛びバランスを崩すデスギドラ。ゴジラは地面を尾で弾きデスギドラに向かって飛ぶ。

「頭冷やせー！」

「ぐ!？」

そう言つて地面の裂け目にデスギドラを叩き落とす。『其処に入れたは逆に熱くなるだけでは？』と思つたモスラは悪くない。

「どうして、どうして私を受け入れてくれないの!？何時も、何時もそう！皆私を否定する、私はただ同じになりたいだけなのに！」

マグマが蠢き蛇の様な形のなつてゴジラを飲み込む。デスギドラの前世では使われなかった、使えなかった技。人の知能を手に入れ行われた攻撃。

濁流の様な流れに飲まれ地面に何度もぶつけられるゴジラだが地面に手を突き刺し流れから解放される。

「じゃあ、俺とお前は違うな。俺は孤独だった時、理解を求めようなんてしなかった……」

「……………」

ゴジラの言葉に出会った当初を思い出したのか悲しそうな顔をするモスラ。ゴジラは地面を蹴り碎くと瓦礫をデスギドラに向かって投げ付ける。

「嘘を、つくな！」

「嘘じゃねーよ」

デスギドラは拳を爆発させて岩を砕き、ゴジラに迫る。ゴジラとデスギドラの両掌が互いに掴み合い、デスギドラは龍の顎をゴジラ的首と脇腹に噛み付かせる。

「あれが、あの孤独が……独りで耐えられる訳ない！寂しくて、苦しくて……理解者が欲しくて堪らなかつたはずだ……！」

暗い暗い空間で、ソレは意志を持った。

自分が何者か解らず、何を求めているのか解らずさ迷い続けた。初めて意志を持つ者に出会おうと、何かをする前に攻撃された。やり返すとあっさり死んだ。同じ力で返したのに。

相手は死があつて、ソレには死がなかった。

永い時の中ソレは思考し続けた。自分が何者なのか、ソレ以外が何なのか。

自分以外は何時も傍に何かをおいていた。同族であつたり異種族であつたり、果ては機械であつたり。同じ様に独りかと思えば遠くに同族が居る奴も居た。

それを見て同族を探した。見付からず、ならば彼等に混じりたいと姿を真似た。それでもなお、恐れられた。姿の元にした種族にも拒絶された。

彼等と自分は違うから、彼等の様になりたいと願つた。

なり方が解らず、彼等から彼等をそうたらしめる力を奪い続けた。何時かそうなれると信じて。

「生憎、俺は寂しさと無縁でな！」

暗い冷たい海の底で、そいつは目を覚ました。

自分が何になったのか解らず、仲間を求めて彷徨つた。同族の大人達より巨大になった体、面影を僅かに残しただけの本来成長すべき姿とは違った形。

仲間は死に絶え、そいつが生き残った。

自分がそうなった原因を考えた。仲間を殺した奴らを捜して、見付けた。

そいつ等は自分が失ったモノを持っていた。家族を、友を、群を持っていた。

だから殺した。

だから壊した。

だから奪った。

二つの存在は繰り返す果てに奇しくも同じ事を思った。虚しいと。

その後、片方は孤独のまま、止まる事も出来ずに繰り返した。

その後、片方は同族ではないが仲間を手に入れ、後に同族に出会った。

ゴジラは思う。『自分もこうなっていたかもしれない』

デスギドラは思う。『自分もこうなりたかった』

「私だって、欲しかったのに……私の方が永く苦しんだのに。たった一人でも傍に居てくれる人が居れば良かったのに、どうして私には何も無い！どうしてお前に有る!？」

ゴジラに噛み付いた龍の顎が爆ぜ首と脇腹の一部を炭化させ砕く。死滅した細胞が邪魔をして再生を阻害するので引き千切り無事な細胞で再生する。

「あの戦い方では、いけない……」

モスラはフラフラと立ち上がり、しかしバランスを崩しへたり込む。

「どう言う事？」

ゼットンの問い掛けにモスラはゴジラとデスギドラを見る。

「二つ、違和感が有りました。デスギドラが、明らかに前回より力を増している。嘗て圧倒したはずの私が追い込まれている……です。が、半分間違いました。デスギドラが強くなっているだけでなく、私が弱くなっている。力を吸われて……」

デスギドラが植物の生命エネルギーを好むのは効率が良いから。別に動物から吸えない訳ではないのだ。動物からも吸えるし、怪獣からでも。

「持久戦になれば、有利なのはデスギドラです……如何にゴジラと言えど——」

と、その時ゼットンが張った壁にデスギドラが激突した。直ぐ様翼を広げるデスギドラ。入れ替わる様にゴジラが壁に飛び付き、蹴り付け空中のデスギドラに迫る。

「つう——！」

「——ッ!？」

デスギドラが涙を流し、ゴジラを睨む。幼い子供が約束を破られ悲しんでいる様な顔。ゴジラの動きが、初めて止まる。

「があー！」

「ぐっ!」

デスギドラが口から放った火炎弾を諸に食らい落下するゴジラ。押し退けられたマグマは既に戻っておりマグマの海に沈む。

欲しい……欲しい。

何かが欲しい。満たしてくれる何かが。

家族は満たしてくれなかった。理想の子供を演じたはずだ。我が儘を言わず、言われる前にやり、いじめにも荷担せず愛されようとした。なのに愛してくれなかった。捨てていった。

それでも、漸く見つけた気がした。自分と同じ目をした彼を見つけて、彼となら孤独を癒し合えると思った。それなのに、どうしてこんなにも虚しい。

「う、あ……ああ……——！」

涙が止まらない。嗚咽が口から勝手に漏れる。

何がいけない？自分が不死だからか？それは家族にバレていないはずだ。彼もまだ知らないはず。

彼の仲間を傷付けたから？それなら彼は仕方ない。でも家族は？家族の前で、誰かを傷付けたりなんてしてない。

「何で、どうして……皆私を遠ざけ………愛されたいだけなのに、傍

に居て欲しいだけなのに……………?」

と、不意に違和感に気付く。

下はマグマの海、故に上空もかなりの高熱。熱に強いが熱は感じる、筈なのにその熱が消えた。いや、弱くなった。

見ればマグマが固まって岩になっていく。『雨でもないのに、急速に冷えた様に』と、固まった岩を蹴破りゴジラが出てきた。

「ぶは……………ああ、くそ。全然足りね……………」

背鰭を赤く発光させたゴジラが言う。ゴジラは周囲のエネルギーを吸収する事が出来る。だから千年竜王の力を奪い利用したし、別の世界線に於いても放射能を発さないプラズマ発電所を態々襲った。

今回は溢れ出たマグマの熱エネルギーを吸い尽くしたらしい。

「……………!?!」

ゾクリとデスギドラは覚えの無い何かを感じる。と、同時にゴジラの口からマグマの様に赤い熱線が放たれ、デスギドラの横を通過した。

「……………」

空へと消えていき雲を風払った光景を見る事なく、デスギドラは地面に降りペタリと地面に腰を落とす。

全身から球の様な汗を流し、焦点の定まらない瞳で何処かを見詰める。

不死と不滅は違う。デスギドラに死と言う概念は無いが、器が有って初めて存在出来る。今の攻撃は、その器を完全に破壊しかねない威力だったのだ。

初めて覚える恐怖に、デスギドラの思考と体は止まった。

「……………」

「ゴジラ……………」

そんなデスギドラに近付いてくゴジラを見てモスラは思わず声を掛ける。まだ、ゴジラにはデスギドラを消滅させるだけの力が残っている。そんな事をするとは思いたくないが……………と、背鰭から赤い光りが失われていく。

取り込んだ過剰なエネルギーを排出しているのを見て、モスラは

ホツと息を吐いた。

「おい……」

「ヒッー」

デスギドラは初めて感じる恐怖に、恐怖を与えたゴジラに怯えきり後退ろうとするも腰が抜けて動けない。

「最初に言っておく。俺は、お前を愛する事が出来るかどうか解らん」

「……………へ？」

「ただ、お前が俺を愛したいと言うなら止めはしない」

「……………」

「一つ教えてやろう。お前が愛されなかったのは、孤独だったのは、誰も愛そうとしなかったからだ」

ゴジラは思い出す。前世を、孤独だった時を。

心の中には誰も住んでいなかった。空っぽだった。

「世界線の一つで俺は愛する家族を見付けた。最初は怯えられたがな……だから一度引いた。その子が俺を愛さなくても、その子が居ると言うだけで俺は満足だった」

「その子が……………貴方を愛さなくても？」

「ああ……………だから、お前も誰かを愛してみろ。求めてばかりじゃなく、受け入れてみる。それで世界はガラリと変わる」

「私は……………独占欲が強い。きつと嫉妬する」

「そうか」

「ひよつとしたら、またこうやって暴れるかもしれない」

「ならまたこうやって止める」

「私は、貴方を愛して良いの……………？」

「応えられるかは解らねーけど、それで良いならな」

「……………身勝手」

「知ってる。まあ俺みたいな男なんてきつと直ぐに飽きるさ。愛し方が解ったらまた誰かを愛せば良い。それまで、気が済むまで付き合っ
てやるから」

その言葉にデスギドラは再び涙を流す。頬を濡らす涙は、不思議と暖かく感じた。

「その後モスモスが自然を復活させたんですか。すごい力ですね……で、何時までそうしてるんですか？」

と、報告書を読み終えたピグモンはゴジラの膝に座り、抱き付き頬擦りするデスギドラを見て黒い笑みを浮かべていて。

「私の気が済むまで」

「ゴジゴジも迷惑がってますよ？は・な・れ・る・です！」

「私は別にゴジラに嫌われても構わない。嘘、それは辛いけど、ゴジラを愛するのは変わらないしそれでも満足。もっと欲しくはなるだろうけど、今も十分満ちている」

「……………」

「それに私は想いを告げている。想いを告げた女の前で好き勝手やられたら、文句を言う資格は有ると思うけど、何もしてない奴にはとやかく言う資格は無い」

「……………」

デスギドラの言葉に気圧されるピグモン。そして、はあ……と溜め息を吐いた。

「兎に角、GIRLSへの入隊、歓迎します。よろしくですデスギちゃん」

退化？・怪獣王!?

「きゃあああ！可愛いいいいい!!」

「——!?!」

「うぐ!?!」

クモンガは薄黒い髪をした少年に抱き付き頬擦りする。混乱する少年はクモンガの腹を蹴る。怪獣娘であるはずの彼女が吹っ飛ばされた。

「なんだお前!?!誰だ、近付くな！どうせ俺を虐める気だろ！彼奴等みたいにい！」

「そこでもう一度彼奴等みたいにと……」

「!?!うお！」

後ろから近付いていたヘドラに蹴りを放つ少年。足がズブリと沈み込む。

「まあまあ落ち着いてえ。ボク達は敵じゃないよおゴジラ」

さて、何が起きたか話さなくてはならないだろう。

それはデストロイアのほんの少し、軽い気持ちの嫌がらせから始まった。

ペガツサが前回の教訓を生かしG細胞抑制剤——正確にはギドラの細胞を使って作ったエネルギーの器を拡張してエネルギー不足にする薬——を作ったのだが、それを知ったデストロイアがヌカ・コーラに混ぜゴジラに飲ませた。

そしたら何故か子供になった。トト曰く、黒慈ユウラとしての幼少期とは少し異なる姿をしているとのこと。ピグモンがデストロイアを涙目にして戻ってみるとクモンガが発狂していた。デスギドラ？怖がらせないように離れて見てる。

「それでペガちゃん、どのくらいで戻りますか？」

「解りません。今のゴジラさんはエネルギー不足になったと体が誤認してG細胞を休眠させている状態なんです。記憶がきちんとあれば、或いは自分の意志で戻れたのかもしれませんが」

「細胞が休眠？その場合、ゴジゴジは眠るだけじゃ」

「そう、ですよね……………何ででしょう？」

「あれはゴジラがG細胞を手に入れる以前の姿、ゴジラザウルスです」と、そこへやってきた未希がゴジラの姿を見ながら呟く。

「ゴジラザウルス？」

「はい。ゴジラになる前の恐竜です。G細胞が休眠した結果、あの姿になったのかと……………」

「なる程……………でも何で記憶まで？」

「ゴジラは本来全ての細胞がG細胞ですから、それが普通の細胞レベルに落ちてゴジラとして過ごした時の記憶が封印されたんですかね……………」

つまり今のゴジラはラゴス島に居た恐竜としての記憶しかない。意味記憶は無事だからか会話には問題ないようだが。

「けど、変ですね。ゴジラザウルスって、あんなに凶暴でしたっけ？」

未希の知るゴジラザウルスは寧ろ大人しい部類に入ると思う。ラゴス島に滞在して居た新堂達に特に手出しをし無かったし、姿を現したのは縄張りを荒らされてからだ。

あんな風に目に付くもの全て敵と思っっている様はまるで当初のゴジラだ。

「まあまあゴジラ、落ち着いてく。ほーら良い子いいごお!」

「——!」
ゴモラが両手を押さえ落ち着かせようと笑みを浮かべるが頭突きが顎に向かって放たれた。

「いたー。力は弱くなってるけど凶暴過ぎるよあの子」

ゴモラは赤くなつた顎を擦りながら涙目で逃げてきて。自販機を勝手に動かし壁を作りクルルルと威嚇するゴジラザウルス。

「唸り声も高くて可愛い……………♡」

デスギドラはうっとりとしてゴジラザウルスを見詰めている。ゴジラザウルスがビクリと震え周囲をキョロキョロ見回す。悪寒を感じたようだ。

「応援に来たよー。あれがゴジラ？」

「本当に小さくなってますね……」

「……………」

と、アギラ達がやってきた。ミクラスは早速小さくなったゴジラに抱き付こうとするが何かが首に巻き付く。

「あばばば!?!」

「ミクサーン!!」

それは自販機を動かした際に千切れた自販機のコード。感電したミクラスがガクガク震える。

「くっ、ミクサーン……ゴジラさん、落ち着いてください!」

「クアアアア!」

落ち着けようとするウインダムに威嚇の叫び声をあげるゴジラザウルス。取り付く島もない。と、不意にナナがゴジラザウルスに近付いていく。

「……………!?!」

ビクリとゴジラザウルスが震えるが攻撃しない。

「なおん♪」

「わ、わわ——!?!」

肩に乘りスリスリ額を擦り付けるナナ。ゴジラザウルスは尻餅を付き困惑する。

クモンガが鼻血を出して倒れ德斯ギドドラが胸を押さえて蹲った。

「……………」

「く、来るな!」

アギラが近付こうとすると再び叫ぶゴジラザウルス。アギラは少し距離を置いて止まるとしやがみ込む。

「泣いてばかりじゃ何にも解んないよ、子猫ちゃん」

「……………」

「……………!?!」

アギラとしては猫を飼っていて、今のゴジラを見ていたら思い出した歌から何気なく言った言葉にゴジラザウルスが固まりトトやキングギドラ達が驚いた様にアギラを見る。あの時確かに、アギラは聞いていなかったはずのに。

「……？」

そんな周りの反応に首を傾げながらゴジラザウルスから敵意が薄れたのに気付いき近付く。

「ほら、出てきて……」

「……………」

伸ばされた手を見て、その手を恐る恐る掴むゴジラザウルス。アギラは満足げに微笑んだ。

「……………ゴジゴジのお世話は、アギアギに任せますね」

「えっ？」

過去？・怪獣王!?

「……………」

「……………」

「——ッ！」

人が離れていって、何とも歩きやすい。と、現実逃避するアギラ。人が離れる理由は怯えているからだ。アギラではなく、アギラの服の裾をつかみ付いて来るゴジラザウルスにだ。

人が近づく度にギロリと睨み付けている。ゴジラも基本的に人が寄せ付けない目を普通の人間に向けるが、逃げ出すほどではない。子供の見た目で人が逃げ出すほどの目をするゴジラザウルスに何度か注意したが直る気配は無かった。

「……………おとと」

取り敢えず日用品を買おうとショッピングモールを歩いていたが不意にガクリとバランスを崩す。原因は言うまでもなくゴジラザウルスが立ち止まったからだ。

「……………」

「……………」

視線の先を追うとどうやらココナッツの販売をしているらしい。外国人の売り子がナイフで割ったり、錐で穴を開けたりして渡している。

「……………食べたいの？」

「ああ」

ココリと頷くココナッツを持った店員は一度客に触らせていた。『こんなに堅いんだよ』というアピールだろう。ゴジラザウルスも目の前にココナッツを差し出され、引つ手繰った。

ゴリイ

「……………へ？」

店員が目の前の光景に固まる。何とゴジラザウルスはココナッツを皮ごと噛み砕いたのだ。

溢れるココナッツミルクをゴクゴク飲み干し果肉をやはり皮ごと

食っていく。と、アギラの視線に気付き首を傾げる。

「……………食べる？」

「ボクは、良い…………」

「……………美味しいのに」

文字通り残さずココナッツを食べ切ったゴジラザウルス。未希やモスラ曰く、食性は雑食らしい。

「じゃ、ゴジラ。変身解いて」

「ん」

ゴジラの体が光り、次の瞬間にはダボダボのGIRLSの制服を着ていた。合う服が無かったので変身していたのだ。そうすれば合った服が現れるから。

「どう？」

『おばあちゃんが初孫と初めて服を買いにいった選んだみたいなセンスですわ』

テレビ通話でゴジラの格好をピグモンに見せると老人臭いと言われた。結局店員に服を選んで貰った。

「……………」

「……………」

現在ゴジラの子供達とゴジラザウルスが見詰め合っている。

「パパ、小さい…………」

「私よりおつきい！」

「ボクより小さい」

「おとーさん縮んだ！」

「ちっこい」

「!!？」

子供達に囲まれたゴジラは混乱していた。しかし攻撃しない所を見るに何と無く記憶の断片が残っているのかもしれない。

「可愛い…………」

「むぐぐ！」

シン・ゴジラの豊富な胸に顔が埋まりジタバタ暴れるゴジラザウルスだが振り解けずミニラやリトル、バガンも抱き付いてくる。

四人まとめて抱き締めるシン・ゴジラ。ミニラ達もシン・ゴジラに向かつて抱き付くので余計に逃げ出せない。

「……………」

ミドリとレオはそつと服の裾を掴む。

「むぐぐ！」

「……………」皆、そろそろ離れて。ゴジラが窒息しちゃう」

「——!!」

アギラがゴジラザウルスを救出すると直ぐにアギラの後ろに隠れる。

「ふうん。本当に童になつておるのか……ほれ、良く見せてみる」

と、ゴジラ・アースが頭撫でようと手を伸ばすとゴジラ・アースの位置から隠れる様に移動した。

「……………」

「ママ落ち込んでる？」

「おかしさん落ち込んでる！」

「元気出して？」

「いいこいいこー」

「落ち込んでない」

そんなゴジラザウルスの態度に苦笑するゴジラ・アース。セルヴァム達が駆け寄り慰めていた。

【帰還】……………何を騒いでいるの？」

「……………」

ピグモンは帰ってきたスーパーメカゴジラを見てハツとする。集まり過ぎて目立ってしまった。よりによってスーパーメカゴジラに……………。

【捕か——】

「させんわ」

ドゴオ！と音が響き渡りスーパーメカゴジラが壁にめり込む。

「ふん。ワシの世界の奴とは大違いじゃな」

「きゆう……」

「助かりましたアースさん。やっぱりメカキンちゃんやビオビオには知らせない方が良かったですね」

ピグモンはホッと一息付く。日頃から愛情表現が行き過ぎているあの三人が今の抵抗する力が無いゴジラを見てどんな事をするか。

「安心してくれ。ゴジラは私が守るから」

「サンサン何時の間に……?」

何時の間にかゴジラを抱き締めていた三式機龍にもはや驚くのも止めたピグモン。ゴジラザウルスは不思議そうな顔で三式機龍を見ていた。彼女は自分の死後の可能性らしいし、感じるものでも有るのかもしれない。

「安心してくれ。君は私が何に代えても守ってみせる」

「離せ……」

「あ、ごめんね……」

「ふあ……」

夜九時、ゴジラザウルスは眠そうに目を擦る。

「もう、こんな時間か……寝よつか。上と下、どっちで寝る?」

「……一緒に寝て良い?」

「……え」

子供特有の暖かい体温を感じながら、アギラはゴジラザウルスの頭を撫でる。

何と言うか、本当に子供になってしまっているのだなと思う。気持ちの制御が仕切れず感情を吐き散らす。でもそれは、そう言う感情が有る前提だ。

「……ゴジラは、人間が嫌いななの?」

「大嫌い」

即答だった。余程嫌いなのだろう。

「理由、聞いて良い?」

「……………俺、昔は一人島に住んでた」

教えてくれるらしい。

「仲間はもう居なくて、親も直ぐに死んだ……………大して広くもない島で、俺はずっと一人だった。でも彼奴等が突然やってきた」

「彼奴等？」

「人間。別に、住むぶんにはどうでも良かった。騒がしくしたから、騒がしい方の群を追い出してやった……………んで暫くしたら、俺は海の中に居た」

「海……………？」

脈絡がない、と思ったが以前話してた過去にあった。確か、未来人にテレポートさせられたんだったか……………。

「あんな事出来る生物は居ない。でも人間は、何かを飛ばす棒や爆発させるものも持ってた……………彼奴等ならきつと出来る筈だ……………」

実際、未来とは言え人間の仕業だった。

「その後、海の底を移動していると、人間の気配がした。そして何かが落ちてきた……………」

「何か？」

「そう、何か……………それで……………それで俺はどうなったんだっけ……………」

そこから先は、きつとゴジラになったのだろう。だからゴジラザウルスの彼は覚えていない。

「……………いや、そうだ……………思い出した。その後俺の姿は変わってた。別物になってた……………もう仲間に会えても、きつと仲間だと思つてもらえない」

「……………ゴジラ」

「だから殺したんだ。彼奴等を、殺して殺して……………そしたら彼奴が居た」

「彼奴って？」

「俺の島に来た人間達の群の、片方のリーダー……………俺は其奴を殺した……………」

「……………憎かったの？」

アギラの質問にゴジラザウルスは目を伏せて黙り込んだ。そしてゆっくり目を開く。

「……………憎くなかったよ、彼奴は」

「どうして？」

「覚えてたから。動けなくなってた俺の為に取ってきてくれた木の味の味を、傷口に集ってた虫を取ってくれた事を、水で洗ってくれた事を……………」

「そっか……………ゴジラは、昔は大好きだったんだね。人間が……………」

「好き……………？俺が彼奴を？」

「だから裏切られて、苦しかった。憎かった……………違う？」

「……………解らない……………でも、寂しかった。とても……………」

「……………良かった」

アギラはそう言つてゴジラザウルスを抱き締める。憎んでいるだけじゃない。人を好きになる事が出来る人だ。誰かを大切に思える人だ。

そういうゴジラだから、好きになれた。好きになった人が、そうやって人の痛みを解つてあげられる人で良かった。

「大丈夫だよ、ゴジラ……………誰も彼もが、君を傷付ける訳じゃない。もし傷付けられそうになっても、ボクが守るから」

「……………うん、お姉ちゃん」

ゴジラザウルスはそう言つて目を閉じ、スウスウ寝息を立て始めた。

「おーい、おーい起きなよ……………」

「……………」

ゆっくり目を開くと見知らぬ少女が居た。悪戯っぽい笑みを浮かべた少女。ゴジラザウルスの顔を覗き込んでいる。

「……………誰だ？」

「そっちこそ誰だ！」

「……………」

「なあんてね。私は貴方の事知ってるよ。思い出しかけた貴方が見て

る夢だからね」

クスクス笑う少女にゴジラザウルスは懐かしさを覚える。

「いっつも泣いてばかりで、名前も居場所も教えて貰えなかったから出て来ちゃった」

「……………」

「今度はちゃんと答えてほしいなー子猫ちゃん。君の名前は？お家は何処？」

「……………俺は」

「……………ん」

アギラが目を覚ますと目の前にゴジラの顔が有った。

「……………!?!」

ビクリと目を見開きベッドから落ちるアギラ。その音にゴジラを眉をしかめ唸ると状態を起こして額に手を当てる。

金色の瞳が眠たげに開き周囲を見回す。

「……………アギラ？何してんだ」

「も、戻ったんだ……………」

「戻った……………」

どうやらゴジラザウルスになっている間の記憶が無いらしい。

「ううん。何でも無い……………お帰り、ゴジラ……………」

「？良く解んねーけど、ただいま。んな安心しきった顔しなくても帰って来るさ。俺はゴジラで、GIRLSは俺の家なんだから……………」

「そっか……………あの、ところでそれ……………」

「ん？うわ、何だこりゃ!?!」

ゴジラの黒い髪の毛が子供から大人に成長した事に合わせたかのように伸びていた。

「いやー、一日で戻れて良かったですねー。しかし髪まで伸びてしまいましたねー」

「鋏を何本か駄目にした。悪いな……………」

「じゃあその髪、ずっとそのままですか？」

「まさか。怪獣娘なら或いは切れる奴が居るかもしれないし、心当たりがあるんで探す」

「そうですか」

「ヤッホーゴジラ。うわ、本当に長くなつたねえ……切るの勿体ないかも」

「ガッツか……そうは言っても鬱陶しいんだよ。頭重いし」

「……………それはその子達のせいじゃない？」

「あ？」

ガッツの言葉に振り返ると髪の上にセルヴアム達がぶら下がっていた。

「かみー！」

「ながなが！」

「真っ黒くろー！」

「くろすけ！」

「……………」

重いのは彼女達が原因らしい。

「て言うか引つ張んな！ぶら下がるだけなら兎も角何で引つ張る！」

「ビオ姉が髪の手欲しいって」

「スー姉も言ってた！」

「メカメカキンキンも！」

「……………そうか」

ゴジラは疲れた様に溜め息を吐く。

「で、その髪の手どうするの？普通の鋏じゃ切れないんでしょ？」

「ああ。だから、ガイガンを探す」

スカウト？・怪獣王!？」

「うし……こんなもんか………どうした？」

長く延びた髪の毛を項辺りで結んだゴジラはブーツとしているラドンに気付いた。

「あ、ああーいや、何でもない……」

「？そうか……」

首を傾げながらも部屋から出ていくゴジラ。昨日のモスラとバトラと言い、一昨日のアギラと言い、そんなに変わらうか？

「……ん？」

「どうしたのお姉ちゃん」

とあるカフェで、仁科エミリはピクリと顔を上げ、首を傾げた。そんな姉に妹のカレンは不思議そうに訪ねる。

「今、この店に怪獣娘の反応が有ったんだけど……」

「て事は今入ってきた人が怪獣娘？別に、GIRLS本部に近いんだから可笑しくないんじゃない？」

と、入ってきた人物を見たカレンは姉同様に首を傾げる。

『男』だった。怪獣娘と名が付く事から解る様に、女しか確認されていない筈なのに……いや。

「そう言えば前にそんな連絡ピグモンさんから来たかも」

「何それ、私聞いてないわよ？」

「お姉ちゃんによろしくって言われてたの忘れてた」

「………はあ」

妹のマイペースっぷりに思わず溜め息が漏れた。

しかし成る程、男の怪獣娘か……娘で良いのかは置いて、怪獣娘の例に漏れず整った顔立ちをしている。

「あれお姉ちゃん、もしかして年下がタイプ？だから告白されてもずっと振ってたの？」

「………」

取り敢えずこの妹を黙らせたい、と思ったが不意に少年の金の瞳と目が合う。

「探る様な瞳、恐らく此方の視線に気付いたのだろう。が、特に興味を持たれなかったのか直ぐに目を逸らされた。ふう、と知らず知らず溜め息が漏れる。」

驚いた、あんな目をする人間が居るのか。人間というか、少年か。途轍もない膨大な時間を過ごしたかの様な瞳だ。その奥に、燻る憎悪も見えた。あれは自分に向けられたものじゃないし、燃え滓の様にあくまで燻っているだけだが何が有ったのだろうか？怪獣娘と言う事が原因で差別でもされていたのだろうか？

「あ、そう言えばあの人やあの人の世界の怪獣娘って全員記憶持ちなんだって。あ、あの人の世界って言うのはね、あの人達こつちの世界の歴史には居ない怪獣で……」

「そう言うのは全部報告して欲しかったわ……」

この妹は一々言葉数が少ない。しかし成る程、だからこそ年に合わない老齡な雰囲気と、前世由縁のあのほの暗い輝きを持っているのか。それに加え、どこか子供が抜けきらない様な気もする。精神年齢は高くとも、人としての精神年齢は見た目通りか、前世の記憶故に育ち辛く少し下なのかもしれない。

「……………良いわね」

「え？やっぱり年下が——!?あいたー！お姉ちゃんがぶったー！」

いい加減実力行使に出た。

カレンの叫び声に少年は再び此方に興味を向けたのでニコリと笑みを浮かべ歩み寄る。

「初めまして男の怪獣娘さん。私は仁科エミリ。デザイナーよ」

「……………仁科……………《NISHINA》か？」

「あら知ってるの？意外。うち、基本的には女性向けだと思ったんだけど」

「娘の一人の普段着が《NISHINA》デザインなんだよ。ファッションは良く解らねーが、取り敢えず可愛くなるの着せてる」

『うち、女兒服まで作ってたっけ?』と疑問に思うが知ってくれているのなら好都合だ。

「良ければウチでモデルをやらないかしら?」

「女装なら中目ぐ——トトに頼め」

「まず話を聞いてくれないかしら?」

星江カナはカロリーを気にしながらお菓子を食べる。

菓子を口に運ぶのを止めると指を拭きダンボールにギツシリ詰まった手紙を一枚一枚読んでいく。嬉しそうな顔をする事も有れば、悲しそうに顔をしかめたりもする。と、その時トントンとドアがノックされる。

「はい」

『カナ、私よ』

「あ、エミリさん。どうぞ入ってください」

ガチャリと扉が開き自分の専属デザイナーにして雇い主のエミリ、その妹のカレンが入ってくる。此処までは何時も通りだ。が、見知らぬ男が一人居た。

黒髪金眼の整った顔立ちの男。背はかなり高いが年は自分とそう変わらないだろう。

「エミリさん、そちらの方は?」

「GIRLS所属の怪獣娘、ゴジラよ。本名黒慈ユウラ」

「怪獣……?え、でもその人……」

どう見ても男だが……。あ、ひよつとして——

「男だけど怪獣娘なのよ。名前が思い付かないからそのまんま使われているそうよ。ちなみに後一人男の怪獣娘が居るそうよ」

「あ、そうなんですか。てつきり髪の毛の子かと……」

「髪の毛?」

と、カナの言葉にゴジラが振り向くと髪の毛を体に巻き付けた女の子が居た。

「サラツヤー」

「セルヴアム!?!お前、何時の間?!」

「「気付いてなかったの!?!」」

これには3人揃って驚いた。カフェ辺りから当たり前の様に居たし、てつきり変わった親子の習慣なのかと思ってた。エミリがゴジラの見た目で娘が居る事を驚かなかったのは彼女が居たからだ。

「にーちや髪の毛サーラサラ」

「離れる!クソ、何か頭が重いと思ったら……」

「いや気付こうよ」

「まあ私達怪獣娘って普段から少なからず怪獣としての力が有るし、元々怪力の怪獣だったら気付かない……かしら?」

それにしたってゴジラは鈍すぎやしないだろうか?彼女達に大して全く警戒していないのだろうか?

「それでこの人はどうしてここに?」

「二人で撮影をして貰おうと思っ」

撮影?・怪獣王!?

「二人でつてのは解ったが、そもそもどんな服着るんだ?」

エミリの言葉にさっさとすませろと言いたげな雰囲気を出すゴジラ。怪獣娘故に取り敢えず大人しくついて行ったがゴジラは基本的に面倒ごとを嫌う。話はさっさと済ませて欲しい。

「メインはその女だろ?俺はその引き立て役つてどこか?」

「そうね。男が女を最高に引き立てる衣装、どんなのだと思う?」

エミリの言葉にゴジラは顎に手を当て考える。

そして、ふとキャツキャツと笑いながらゴジラの髪の毛にぶら下がるセルヴアムを見る。

「……………家族?」

「それは老若男女全てを引き立てられると思うけど……………」

「違うよユウラっち。まあ惜しい、かな?家族になるのは合ってるけど」

「……………養父か?」

家族になるでゴジラが思い出したのは娘達。この世界で血の繋がりが有るのはシン・ゴジラだけだから、他の子達は養子で良いのだから。

「あー、うん。それも家族だけどさく」

「わかったー!およめさーん!」

「お、セルちゃん大正解!」

「せーかいせーかい!」

ぴよんぴよん跳ねるセルヴアムと手を合わせるカレン。子供の扱いに慣れているのかセルヴアムも良く懐いている。

「精神年齢が近いのよ」

「そりやまた、面倒そうな性格で」

「ええ、本当に……………まあ、兎に角これで解ったわね?」

「エプロンか?」

「……………そうきたか」

ゴジラにだつて嫁とはどう言うものか知識は有る。要するに既婚

者だ。で、大抵は主婦になるという知識も有る。が、一般的に思い浮かぶお嫁さんとはその前行程だろう。

「花嫁よ」

「花嫁？ああー、あれか……………結婚式の」

「そう。見ての通りカナは家の看板娘。並大抵の男じゃ花嫁姿のカナの引き立て役になる事すら出来ずに存在感が消える。だから見合う男を捜してたのよ…………おまけに怪獣娘…………違和感あるわね…………まあカイジューソウル持ちでしょ？丁度良いかなって」

「花嫁衣装ねえ……………そもそも売れんの？」

「売れるに決まってるじゃない」

「結婚なんて役所に提出すりゃ終わりだろ？金かけてやる奴なんて…………まあ、居るか」

少なくともたまに見かけるし。だがまあ、金を払ってまでやる必要をゴジラは解らない。そんなゴジラにカレンが呆れた、と言うように肩を竦めてため息を吐いた。

「解ってないなーゴジラは、花嫁衣装は女の夢だよ？」

「ならレンタルすりゃ良いだろ。人にもよるだろうが人生で一度しか着ない服の為に金払って信じててもねー神に永遠の愛を誓うなんざ俺には理解出来ねーな」

「うわ駄目だコイツ女心を微塵も理解してない」

「にーちゃんダメダメー！」

「……………」

カレンまでなら兎も角流石に懐いている妹にまで言われれば流石に傷付くゴジラ。とはいえそれで急に女心を理解出来るはずもない。

「そもそも結婚式って何ですんの？」

「そりゃ……………何でだろ？おねーちゃん、は…………無理か。結婚出来そうにないし」

「ぶん殴るわよ。そうね……………結婚した事を周囲に知らしめて、キチンと愛するって決意を固める為、とか？」

「はあ？愛する決意に周りの目が必要か？愛してやるのに他人の言葉が必要ならはなから愛するなんて口にするなっつての」

「うわあ、男らしい」

カレンは半眼になりながらゴジラの清々しさにいつそ呆れる。

「まあ約束を守ってくれんならどんな格好でもするけどよ」

「約束？お姉ちゃん何か約束してたっけ？」

「撮影代と、娘さんや妹さん達にオーダーメイドで服を作るのよ」

それがゴジラとエミリの約束。

「娘さんや妹さんバカ？」

「否定はしないがな」

「それじゃ、撮影場所に移動しましょうか……………」

「お前何で俺から距離取ってんだ？」

車に乗り移動中、端によるカナを見て尋ねるゴジラ。ゴジラの言葉にビクリと震えるカナ。

「……………すいません、私男の人が苦手で」

「ふーん」

「だいじよーぶ、にーちゃんこわくないよ」

と、カナに話し掛けるセルヴァム。

「わ、解っているんですけど……………怖い訳じゃなくて、私、ローランの怪獣娘ですから……………」

「私って人を惹き付けるフェロモンを出しちゃってるみたいで……………名前も知らない人に告白されたり、つけられたりして……………」

「俺もお前に魅了されてるってか？」

と、笑うゴジラはこれと言ってローランに惹かれている様子はない。

「怪獣娘と自覚してからは、制御出来るようになったんですがまだあの時の事を覚えていて……………」

「気にするな。嫌われるのは慣れてる」

そう言っって肩を竦めるゴジラ。基本的に人間が嫌いなゴジラは『自分から嫌ってるくせに嫌うな』などと吠える気は一切無い。よって悪

意も無いローランに苦手意識にはこれっぽちも応えない。

「人に嫌われているんですか？」

「と言うか俺が人間を嫌いなんだよ——」

——ゴジラは、昔は好きだったんだね。人間が——

「……………ん？」

不意に聞き覚えの有る声色で聞いた記憶の無い言葉を言われた気がした。周囲を見回すが助手席に座るカレンも運転席のエミリも端によるカナも全員特に言葉を発した様子はない。セルヴァムならあんな長い台詞言えないだろうし。気のせいだろうか？

「着いたわ」

「本物の教会で撮るのか、本格的な事で」

「撮影は後10分後ね、今は他の会社が使ってるはずだから、見学させてもらう？」

「別に、ただ突っ立て撮るだけだろ？良いよ別に」

そう言っつてセルヴァムをちよいちよい招き寄せ髪を櫛で梳くゴジラ。セルヴァムも「おれいー」と笑いながらゴジラの伸びた髪を指で梳く。

「……………そう言えばゴジラさん、髪切らないんですか？」

「切るためにはサイボーグかエビの協力がある……………あれ、あいつザリガニだっけ？」

「……………？」

ゴジラの言葉に首を傾げるカナ。と、教会が開き中から複数の男女が出てきた。

「あ、仁科さんこんにちは。これから撮影でしたっけ……………入れ違いですか、残念だなあ。少しお話がしたかったんですけど」

「ええ、私も。今日は予期してない出会いがありました。おかげで花嫁一人の写真を撮らずに済みました」

大手の会社だけありやはり知り合いが多いのだろう。知り合いと話しているエミリを置いて先に行こうとするカレンについて行くゴジラ達。と、不意に向こうの専属モデルと思わしき女性達が口を開いた。

「あれが、ほら……噂の」

「あー……フェロモンとかで人を誑かしてるって奴？ズルいよね、それで一位なんだもん」

「……っ」

ビクリと震えたカナがカレンの後ろに隠れるとあからさまにクスクスと笑うモデル達。それに対してゴジラは……

「なき——」

「にーちゃんあいつらなさけけー！ださい！」

「情けない、な……なさけけって何だ」

思わず眩こうとした言葉は肩車していたセルヴァムに取られた。が、まあ子供にそんな事を言われて受け流せる器量のある者ならそもそも態と聞こえる様に言っておきながら逃げられる位置に居るなどしないだろう。堂々と言う。ゴジラのように

「情けねーよなお前等。単純に自分が星江よりブスツて事実を認めねーで相手がズルしてるって決め付けなきや自信を保てねー。写真にフェロモンなんざ付いてるわけねーだろ。バカじゃねーの？」

「バーカ！」

「な、なによいきなり！」

「こらこらセルヴァム、あんまきたねー言葉覚えんな。俺が母さんに叱られる……んで、何だっけ？いきなり？悪いな、いきなり訳解んねー事言うから。そうだな、明らかに一位取れる顔じゃないのに何星江がいなけりゃ一位取れたのについて対応して言い返せない奴に八つ当たりしてんだ情けねー」

「はあ!?なにこいつ！」

「うぎー！」

「んじやー一つ聞くけどお前等二位なのか？お世辞にもそうは見えねーけど」

確かにまあ、モデルをやるだけはあるのだろう。が、正直に言ってしまうばクラスに一人はいる少し顔の良い女子レベルだ。

「そ、それは……」

「それともアレか？星江がいなけりゃ星江のファンは全部自分達の方

に来るとでも思ってたのか？」

「……………」

ギリイと女がしては良い顔ではない顔をしたモデル達。何か叫ぼうとした時エミリと話し終えた男が呼ぶ。女は舌打ちをして去っていった。

「やなやつらー！」

「ありや、高校時代周りからチャホヤされてたタイプだな。んで世間に出て自分がその他大勢の一人に組み込まれたのに納得が行かず上を扱き下ろして満足する奴だ」

彼奴が自分より上なのは何かズルをしているからだ、そう決め付け見下さないと己を保てない。なるほどゴジラやセルヴアムが嫌うはずだ。

「……………」

「何だその目？」

「えっと……………その……………」

と、ゴジラは申し訳なさそうに見てくるカナに気づき尋ねるが目を逸らされた。ゴジラはああ、と納得した。

「俺がお前に優しくしてるのはフェロモンで惹かれたからとも思ってるのか？」

「……………はい」

「はん。迫られれば怖くて優しく扱われれば引け目を感じるとか面倒な性格だな」

「す、すいません……………」

「なんだ？ 乱暴にしてやれば喜ぶのかお前は」

「そ、そんな性癖ありません！」

ゴジラの言葉に赤くなつて否定するカナ。ニヤリと笑うゴジラにからかわれたと言う事と近付いた事実になくなり慌ててカレンの後ろに隠れるカナ。

「ごらごらユウラっち、カナちゃんを苛めちゃダメでしょ！」

「俺もひよつとしたらフェロモンに影響されてんのかもな。泣き顔が見たくなってきた」

「ひいん！」

「冗談だ。それと、一つ言つとくが俺はああいう奴らが嫌いなんだよ」
「そ、そうなんですか？」

「ああ。だから安心しろよ、俺はお前に対してこれっぽっちも特別な感情なんて抱いてないから」

それはそれで傷付く気もするが、まあ聞き流しておこう。

「何してるの二人とも、早く着替えて撮影に移るわよ」

と、エミリが呼ぶので二人は着替える為の衣装部屋に向かつていった。

「こういうきちつとした服着るのは苦手だ……………」

ゴジラは襟を緩めながら嫌そうに言う。

「にーちゃんかつこいいいよー？タキシードかめんみたい」

「タキ…………何？仮面ライダーの亜種か？」

「ナルシスト！」

「…………俺ナルシストに見えるか？」

「みえない！」

「良かった。いや、まじで…………」

礼拝堂に入ると撮影の機材が置かれていて、エミリがデザインしたウエディングドレスを着たカナが居た。

「…………へえ」

「な、何ですか？」

「いや、結婚式なんて金が掛かるだけで面倒かと思ってたが。自分のものになる女がこんなに綺麗なんだって周囲に言えるから、ありかもな」

「……………」

「まあその為には相手を見付けなきゃならねーけどな」

「…………ユウラさん、天然ってよく言われませんか？」

「？いや、特に…………それよりさっさと写真撮ろうぜ」

「良い写真撮れたわ。今度から男物も作ってみようかしら……」
と、満足したように言うエミリ。ゴジラは「約束忘れんなよ」とメアドを交換する。

「じゃ、時間が有ったら娘連れてくわ。そんな時によろしくな」
「ええ」

「ゴジラー、目当ての子は見付かつタ？」
「まだだ」

キングジョーの言葉にスヤスヤ眠るセルヴァムを起こさないようにしーと指を立てながら返すゴジラ。キングジョーは口を押さえた後、ゴジラの耳にそっと口を近づける。

「その怪獣娘さんってどんな子デスカー？」

「確か、機械……」

「機械……じゃあ、電気街とか行ってみませんか？」

「まあ、前世の記憶持ってるしな、そう言う所に向かっている可能性も有るが……で、電気街って？」

「秋葉原デス！」

「秋葉原？」

「私が案内してあげますヨ？」

「そうか、なら頼む」

秋葉原？・怪獣王!?

「ここが秋葉原の電気街通りデス！」

「人が多い、電磁波も多い……………帰って良いか？」

「来たばかりデスヨ？」

まあ電磁波の方は感覚を切り替えれば良いのだが、人混みというのは苦手だ。

ただでさえ人嫌いのゴジラが人の欲を煮詰めたような秋葉原、相性最悪だ。

呼び込みのメイドにアニメグッズを大量に購入した男、パソコンのパーツを見て仲間達とテンションを上げて騒ぐ一段、キングジョーを見てヒソヒソ好奇の視線を向ける男達。

「そっぴいやお前有名人だったな」

「まあ握手会で列が出来る程度にハ」

握手会、と其処まで考えゴジラはあることを思い出した。

「すまんキングジョー、手を繋いでくれ」

「え？」

「お前は落ち着く」

「……………へ？」

「核の気配がするからな。触れ合ってれば食欲に集中できる」

「絶対嫌デス」

「……………そうか」

そこまで拒絶されれば傷つくが無理強いをするつもりはない。ゴジラは歩き出すキングジョーに続くように歩き出した。

「おお！まさか裏通りのジャンク屋でこんな掘り出し物があるなんて！」

キングジョーはジャンク屋で見つけた電子盤に満面の笑みを浮かべていたがゴジラの存在を思い出しハッ！と顔を赤らめる。

「そ、それで、見つかりましたか？」

「いや、機械屋にはいねーみたいだな」

「まあ考えてみれば宇宙のスーパー技術の塊ですしネ、わざわざ地球の機械なんて見に来ませんか」

「いや、メカゴジラなんかも頭脳コンピュータを地球人に修理させてたんだぜ？あの時代でそれだ、この時代なら良いの揃ってるだろう。そもそもアポロだつてファミコンスペックつて話しだし」

「そう言われるとここの機械で宇宙船のメインコンピュータ作れそうな気がしてきました。そういえば私の前世、キングジョーも地球で改造されたらしいデス」

そして何故か別々の怪獣娘として転生しているらしい。ゴジラ達は統合されているが此方の世界では基本的に同じ存在を改造したり、進化させたりすると別々に生まれる。

ちなみに先日あった仁科エミリと仁科カレンはメファイラス星人とメファイラス星人二代目らしく、メファイラス星人は地球を諦め帰ったのに転生してるとか。

「ゴジラはこういうのに興味ありませんか？」

「コンピューターね……プログラミング系のバイトはした経験がねーな」

「カスタムは中々楽しいデスヨ？」

「楽しい奴には楽しいだろうよ……それより腹減った」

「さつきケバブ食べたばっかりじゃないデスカ……」

因みにケバブとはトルコ料理だ。ゴジラは塊丸ごと買おうとしたがキングジョーに止められていた。

「お帰りなさいませご主人様にお嬢様ー！」

ミニスカートのメイドに出迎えられゴジラは固まる。

「ほらほら早く席に座るデス。あ、ポイントカードお願いしマス」

「ここハアデリーナ、ペギラ達と最初にお出かけしたお店なんです。その縁で良く……あ、ゴジラ。ここに呼んで欲しい呼び方を書くデス。ちなみに私はクラランデスー！」

「ご主人様は此方に久し振りのお帰りですよね？」

「あ？」

「そう言うやり方なんですヨ」

キングジョーの言葉にゴジラは紙に文字を書く。それを受け取ったミニスカメイドは笑顔のまま固まる。キングジョーがチラリと覗くと『気安く話しかけるな』とだけ書かれていた。

「ゴジラく、こう言うの良くないデス」

「ちつ、じゃあ『黒慈さん』で……」

「ワオ、他人行儀……」

こういう店に来てここまでこんな対応できるのむしろ勇気があると思う。

『お絵かきオムライス』に『目を見ながら混ぜ混ぜスパゲティ』……『萌え萌えステーキ』『にゃんにゃんハンバーガー』……『キュンキュンカルボナーラ』？……駄目だ、何一つ想像できねー。モスラ見たいな料理でねーよな？」

「前半はメイドさんがしてくれるんデス」

「じゃあオプション無しで全部もってこい」

「……………」

メイドカフェのキッチンは荒れる荒れる。作っても作っても催促される。追いつかない。

客も一つの席に注目していた。やってきた料理があつと言う間に無くなり皿がつまれる。まるで大食い選手だ。

「ガイちゃん！オプションは良いから『あーんオムライス』運んで！」

「は、はいー！」

と、藍色の髪のメイドがオムライスを運んでくる。新人なのか机の位置を把握仕切れておらずワタワタと進みながら、自分の足を絡めずっこけた。

「チツ」

ゴジラが立ち上がり避けると、ゴジラの座っていた椅子が半熟卵とケチャップライスで汚れる。

「あ、す……すいませー……………あー！」

「？あ……………」

突然ゴジラの顔を見て叫んだ少女に一瞬何事かと顔をしかめたが、アホ毛が似合う少女を見た瞬間ゴジラも気付く。顔見知りだ、現世の。

「店長！早退します！」

言うが早いか少女は窓から飛び出した。店の所有物であろうメイド服で。

「キングジョー、それ好きに使え！」

ゴジラは諭吉の詰まった財布をキングジョーに投げ渡すと同じく窓から飛び出す。外から悲鳴が聞こえてきた。そりやそうだ、ここ三階だもん。

残されたキングジョーは財布を見る。次にゴジラが自分をほっぴりだして女を追いかけるために出て行った窓を見る。

「……………」

キングジョーはぶく、と頬を膨らませる。

「……………あのー、注文が残ってるんですがどうしましょう？」

「今の分で会計お願いシマース。私はこれからゴジラを追うノデ」

「……………この近くに、おジョーさんの気配がする。何処だ？あそこか！」
と、スーツ姿の男がとあるビルの窓を見た瞬間ミニスカメイドが降ってきて顔を踏んづけられる。

「あ、ごめん！」

メイドはそれだけ言うとは人間とは思えない身体能力で電柱や街灯、壁を蹴りパルクール選手さながらの動きで人を避けて走り去る。

「待てこら！」

気絶した男の顔の直ぐ横に着地した長身の男は地面を蹴り高く跳ぶ。その時の衝撃で立ち上がろうとしていたスーツ姿の男は再び尻餅をつく。

「何だ、撮影？あ、おジョーさん……………」

ビルの向こうへと消えていった二つの影を見ながら首を傾げる男。と、その時ビルの入り口から彼が探していた気配の持ち主が現れる。「アナタは、握手会に来てくれる……………あの、女の子とそれを追いか

る男を見ませんでした?」

「あつちに行きましたよ。それより、こうして会えたのも何かの縁。良ければ私とコーヒー……あれ?おジョーさん……?」

男は周囲を見回すがキングジョーは何処にも居なかった。

散髪？・怪獣王!?

逃げる逃げる。後ろから追ってくる黒い影から必死に。

「何で追いかけて来るんだよおお!?」

涙目になり逃げる少女。

やばい、捕まったらきつと熱線食らわせられたり熱線食らわせられたり熱線食らわせられたりする。複数の記憶を所有するもんだからトラウマは倍増だ。特に残酷な記憶では両腕を吹っ飛ばされ目を吹き飛ばされ、最終的には増殖する機械部分に飲み込まれながらも挑んだが消し飛ばされたし。

「くそう、恨むぞ御主人様達!」

前世の勝利を確信したような笑みを毎回浮かべてるくせに基本的に先に死ぬ元主達の顔をイメージで殴りつけながら走る。

もちろん自分が先に死んだこともあったが……………

「あ、そうだ……………」

少女がハッと気付くと全身銀色と藍色が混じった光で覆われ、次の瞬間には藍色の体のラインが良く出たスーツ姿に変わる。

チャームポイントのアホ毛が銀色に変わり目元にはレンズが一体化した特徴的な赤いサングラスをかける。腹にはチェーン状の鋸がありお臍辺りで二つに別れ背中を回り、肩を通って胸の間で一つに戻っている。それは彼女の前世で特徴的な武器だったが人の身で再現した結果少し仕様が変わっているらしい。

「さあ、かかって——!」

振り返ると黒い尾を生やす男の姿。少女は無言で踵を返した。

「オー!ニンジャー!」

「ノークノイチ!」

観光客の外国人の声が聞こえてくる。パフォーマンスとも思っているのだろう。

「ブラッディ・スライサー!」

「スリケン!」

黙ってる外野。

鉄だろうと切り裂くそれは男の長い髪の毛を切断する。しかし切ったのは髪の毛だけ、避けられた。しかしブラッディ・スライサーは操れる。再び男に向かって飛ぶが次の瞬間男の背鰭から雷が迸り周囲の電子機器に影響が及ぶ。男に迫っていたブラッディ・スライサーの受信機部分には特に。

「何で!？」

そして操作を失ったブラッディ・スライサーは何故か少女の首に向かって飛んできた。咄嗟にかわすがチャームポイントのアホ毛が切られた。

「ふー、危うくまた首を切るところだった……………」

「捕まえた」

「あ——」

「この子がゴジラの世界の怪獣娘ちゃんデスカ。かわいい子ですネー♪」

「あ、何かこの人落ち着く……………」

同じ機械だからかキングジョーに安心感を感じるらしい少女、ガイガン。

「まあお前を縛ってるそれはキングジョーのだけだな」

「おう……………」

「それでゴジラ、この子は?」

「最初はキングギドラと一緒にゴキブリに操られながら来て逃げ出して、次はゴキブリと水の底に住んでる人間に操られていたが逃げ出して、今度こそ殺したと思ったら『ガイガン忍法生き返りの術』とかいう術で復活して逃げ出して、南極の氷から出たら襲ってきたので頭を消し飛ばした。その後復活したけどモスラが対応してくれた」

「いや、私後機械に浸食されながら戦いもしたよ?」

「それは母さんだな」

「母さんか……………」

ガイガンは一応先ほどからガイガン忍法縄抜けの術を試そうと思っているのだが、狭い路地だ。地上なら追い付かれるだろうし飛べ

る方向は一方向。十分な高度に達する前に捕まる。仮に距離を稼げても熱線の餌食。逃げるのは諦めた。

「それで、何で私追いかけてたの？」

「逃げるから。俺はお前に用があっただけなのによ」
「用？」

「怪獣娘ってよ、人間の状態でも前世の影響受けるだろ？俺そのせいで伸びた毛が切れねーんだよ。散髪係探しててよ」

「えー……」

そんな理由で追いかけて回されたのか。いや、話聞かなかったのは自分だけど、とドツと疲れが来るガイガン。

「そーいやお前何でメイド喫茶で働いてたんだ？お前なら、殺し屋とかやってそーなもんだが」

「んー……前世では結局、誰かに仕え続けてたから。そっちの方が安心する。自分で決めなくて良いから……あ、じゃあ髪切るから私の御主人様になってよ。どうせあの店にいられないし」

「ピグモンに頼め……って、言いたいけどなあ。メカゴジラにも言ったが、自分の意志を持って。それが約束できんなら暫くは自分で考えたくねーてめーに、やることを与えてやる」

「自分で考えるのは面倒くさい」

と、心底面倒くさそうに言うガイガン。究極の指示待ち人間だ。

ギューイイイーン！

「……ピグモンさん、このチェーンソーみたいな音何？」

「ゴジゴジの散髪です」

「え？」

「ふー、さっぱりした……」

何で散髪の音でこんな音がするのかと唾然としていたアギラだが、扉が開き髪が項辺りまで短くなったゴジラが出てきた。

「……………」

秋葉原では昼のパフォーマンスが話題になっていた。ネットにも映像が上げられており、一人の少女がその映像を眺める。

「……………これがこの世界の怪獣達の戦闘か。この黒い方が圧倒しておるが」

パクリとケバブを食いながら少女は呟く。

「あれ知らないのお嬢ちゃん、そう言うのは『シユワシユワ動画』で見れるよ?」

「……………そんなのがあるのか?」

二人の？ 怪獣王!?

高速で回転しながら飛行するトト。

十分に勢いを付けてゴジラに向かって迫る。ゴジラはそれを片手で受け止める。ギャリギャリと掌から音が鳴るがやがてトトの回転が遅くなり、完全に止まる。

「……お前、さっきまでどんな姿勢で飛んでたんだ？」

明らかに甲羅の中に入らなければ出来ない飛行方法。実際、手足は出ていなかった。しかしトトの服装は構造上不可能なはずの回転を実行していたのでゴジラは首を傾げる。

それだけの余裕があった。

「——!!」

「おっ？」

と、トトの腹の文様が光り甲羅を伝わり熱を感じる。その熱はトトの口内に集まりゴジラに向かって炎弾となって吐き出された。

「……………やるな」

が、無傷。ニヤリと笑ったゴジラはトトを力一杯投げつけた。

「流石強いねー」

「まー前世から経験が違うからな」

「僕は一体としか戦ってないもんね……」

はあ、とため息を吐くトト。ゴジラとの模擬戦は、惨敗に終わった。前世を合わせて年期が違うからまあ仕方ないと言えば仕方ないが。

「お前俺の世界や母さんの世界に生まれなくて良かったな。素質はあるだろうが、目覚めさせなきゃ死ぬぞ」

「善処するよ」

コキコキ身体を鳴らしながら応えるトト。実際このゴジラが人間にも苦戦するような科学力を持つ時間軸もあったのだ。確かに今のままでは——

「水をどうぞ」

「……………ガイガン、時間通りだな」

トトが考えごとしていると何時の間にか現れたガイガンがゴジラに水を差しだしてきた。

「てかお前朝部屋から出たら居たが……待ってたのか？だとしたら悪いな」

「まあ私は待機を命じられれば何万年だって待ち続けるよ。それこそ化石化しても」

「……………重いな」

重すぎる忠誠度に呆れるゴジラ。ふと、あることを思い出した。

「そう言やお前、母さんと戦ったんだよな？」

「え？あ、うん。こっちの世界じゃまだあったこと無いから本人か解んないけど……………どうして？」

「母さんの戦い方ってどんな感じだ？今日、この後母さんと模擬戦だからさ……………」

「へえ。まあ多少苦戦はさせても、毎回逃げてたかな……………他の人には聞かないの？」

「母さん自身は戦った記憶があるみたいだが、向こうが持つてないらしくてな。別々に転生してんのかもしれん。お前は違うみたいだけど」

「へー。つつても私は人間と協力してようやく誘導できただけだしねえ……………」

しかもそれだけで毎回死にかけた。あ、思い出したら震えが。「それじゃご主人様、消し飛ばされないように気をつけてね」

赤色の熱線と青い熱線がぶつかり周囲の岩が一瞬で蒸発する。

そんな馬鹿げた温度の中で無傷のゴジラと顔をしかめるゴジラ・アース。耐熱は、ゴジラの方が上だ。ゴジラ・アースとてマグマの中を遊泳し、自らを高熱源に変えることも可能だが、その場合動けない。何せ其方にエネルギーを割くのだから。

高熱を発しながら熱源を吐けるゴジラのエネルギー量こそ可笑しいのだ。人のことは言えないが。

「らあ！」

「ふん！」

ゴジラの蹴りとゴジラ・アースの拳がぶつかる。溶けたマグマが周囲に飛び散り彼方此方でジュウジュウと音を立てる。

「貴様、1200度を超えたら終わりじゃ無かったのか？」

「昔はな。だが今は違う……現存する元素に耐えられて俺に耐えられない道理はないからな」

「ふん。吠えておれ」

ゴジラとゴジラ・アースはニヤリと笑い距離を取る。

「強化形態が貴様の十八番と思うな」

「あ？」

カツ！と青い光がゴジラ・アースを包み込み。光が晴れるとそこには背が伸びたゴジラ・アースが居た。

ダボダボの着物故に余計に大きく見える。

「――！」

変わったのは見た目だけではない。押しつぶされそうな程の重圧に、ゴジラはとっさに距離を取る。

「おい、何処へ行く？」

「!?」

そのゴジラの顔をゴジラ・アースの手が掴む。ゴジラが高速移動する際多用していた体重操作の応用。それをゴジラ・アースが行ったのだ。

「沈め」

地面に向かって投げつけられるとゴジラは自身の熱で地面を溶かしながら地中深く沈んでいく。

「む……いかん」

マントルまで突き抜けたのか地底から噴き出そうとしてくる圧力を感じた。ゴジラ・アースは片足を上げる。

「ふんー！」

ズドン！と地面と大気が震え噴き出そうとしていた圧力は地面に向かって押し返される。と、不意に雨が降ってきた。周囲一体がマグ

マになったため発生した上昇気流が雨を呼んだのだろう。
「……………よし」

「あ、おかえりなさいゴジラ……………何でびしょ濡れ？」

アギラがゴジラを出迎えるとゴジラは何故か濡れていた。

「上からの圧力で流れが変わってな。新しい海底火山作ってきた」
「へ？」

「これお土産」

「あ、ありが……………何これ怖!?!」

「アンコウ。地元の人に調理法聞いた……………皆で鍋にしようぜ」

トトは拳を突き出す。続いて足、さらに反対の足、拳と交互に前に向かって振るいながら、飛び退き火球を放つ。

「……………駄目か」

仮想敵であるゴジラは、この程度では倒せない。

そもそもトトは怪獣との戦闘経験も一度だけだし、未だ成熟しきった姿での転生ではなかった。仕方ないかもしれないが、やはり悔しい。

そんなトトを観察する影が二つ。

その影は前が尖り、後方は二つに分かれた帽子を被っていた。顔は双子のようにそっくりで、着ている服も似たようなものだが片方は赤茶色でもう片方は青紫。

「カメラ……………」

「みーつけた♪」

二人はそう言ってニヤリと笑った。

その頃とある駅で。

「ほれ、もう離れるでないぞ」

背丈の小さな少女が幼い少女の頭を撫でながら笑う。母親が頭を下げ、少女は仲良く手を繋ぐ親子を見て微笑む。

「さて、そろそろGIRLS本部とやらに……………」

「うえーん！お母さーん」

「……………また迷子か？」

「うわーん！」

「……………ああ、もう。どうした、泣くでない！」